
新魔法戦記リリカルAngels ～The Rule of Gods～

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新魔法戦記リリカルAngels ～The Rule of Gods～

【Nコード】

N0688P

【作者名】

神崎はやて

【あらすじ】

ミッドチルダ全体を震撼させた、恐怖の事件。
後にL・P (Lost Paradise) 事件と呼ばれるその戦いから、早くも3年が経った。

戦いの爪痕を癒す、緩やかな時間が流れる中、闇はその根を確実に広げていた。

消えていく人々。

現れる、？神？を名乗る者達。

誰もが不可解な事態に戦慄する中、1人の男が現れる。

「俺が……………神を殺す」

魔法少女リリカルなのはStrikerS　　氷翼の天使の続編。
VividやForceとは全く違う、神崎の新たなのはの物語。

※本作品は、同作者の作品『魔法少女リリカルなのはStrike
rS　　氷翼の天使の』の続編です。

そちらを読まずとも楽しめる内容となるよう努力するつもりでは
ありますが、先に前作を見ていただいてからの方が、より楽しめると
思われます。

Prologue ?無限?が目覚めた日

その世界は、血塗られていた。

炎と血の臭い、腐臭に塗れた赤と茶だけが支配する、荒廃した世界。
廃墟と化した、町の一角。

その中に転がる1つの円柱状のガラス容器が、発光を始めていた。
空気の抜けるような音が響き、ガラス容器がゆっくりと開いていく。
その中からむくり、と起き上がり、?何か?が辺りをきよろきよろ
と見回す。

それは、1人の男だった。

炎のように紅く、跳ねまくった髪を揺らし、男はゆっくりとガラス
容器から這い出した。

「僕は、どれくらい眠っていた……………ッ!?!」

起き上がり、周囲の惨状に男は瞠目する。

「どういう、ことだ……………!?!? これはっ……………」

おそらくは、愛した世界の惨状を目の当たりにして呆然とする男。

だが、それでも男にはそう時間は与えられなかった。

「お前か……………」

地響きを立てて現れた、自分の何十倍も大きな巨軀を睨みつけ、男は静かに手を、ワインレッドの暗い空へ翳した。

途端、指に嵌められていた指輪が発光を始める。

悪魔のような巨軀はその光に耐えられず、顔を覆った。

その隙に、男の姿は僅かに天に開いた扉のような構造物へと消えていく。

扉が閉まると、そこには地獄のような世界と、悪魔のような巨軀が残されるのみ。

だが、男は気がついていなかった。

自分がいた他にも、蓋の開いたガラス容器が数個、周囲に転がっていたことに――――。

「僕は……………何をしているのだろうか？　何を……………求めていたのだろうか？」

別の世界————木の生い茂る森林地帯へ転移した男は、荒い息と虚ろな目で、そう呟く。

目覚めたばかりの力では、移動するだけが精一杯だったのだろう。

力なく膝をつき、ただ目だけが空を射抜いている。

「僕は……………」

右手で、空を仰ぐ。

求めるように————渴望するように。

「僕は……………俺は」

真紅の眼が、静かに金色に変化した、次の瞬間————。

男の身体は、冷たい地に沈んだ。

P r o l o g u e ? 無限? が目覚めた日 (後書き)

どうも皆様、お久しぶりです。初めましての方は初めまして。神崎です。

この度は新作『新魔法戦記リリカル Angels ～The Rule of Gods～』をお読みいただき、まず心より御礼申し上げます。

さて、早速ですが、キャンペーンのお知らせ。

この作品、『新魔法戦記リリカル Angels ～The Rule of Gods～』に登場するオリジナルキャラクターを、読者の皆様より公募したいと思います！

男・女、人・人外問いません！

当選キャラは、本作品にて実際に登場致します！

以下、キャラクターに記載していただきたい詳細です。

名前

種族 (人間、ユニゾンデバイス、etc.)

性別

年齢

髪 (髪型、髪の色)

目 (目の形、瞳の色)

性格

一人称

台詞例 (簡単なもので可)

デバイス（武器）

魔力光

魔力変換資質

魔法（技）

希少技能

その他概要

以上です。

募集は、数が集まり次第終了とさせていただきます。

では、多数のご応募お待ちしております♪

※記念すべき新作第1回は、本日18時に更新予定です。

Episode 1 異変の始まり

近未来的なビルが建ち並ぶ町並み。

町中にアーチのように張り巡らされた車道やそこを走る様々な車達。それら全てが、ここが地球以外の別世界であることを象徴している。

第一管理世界ミッドチルダ。

様々な意味で魔法と呼ばれる技術の粋が集められたこの都市のリニアの駅に、1人の女性が降り立った。

オレンジの流れるような長髪が、黒い制服の上に映える。

時空管理局———数多ある時空の世界を管理、秩序を守る組織において、執務官の地位を持つ者のみ着ることが許される制服である。

だが今、彼女は今？それ？を纏ってはいない。

今の彼女は私服姿。制服は、かけた鞆の中から覗いている。

今日彼女は、休暇でここを訪れたのだ。

上官である、フェイトⅡⅡハラOWN執務官の補佐としての活動を経て、漸く受験することが出来た執務官試験。

彼女の努力のかいもあり、試験は合格。まだまだ執務官としてはルーキーではあるが、見事夢を叶えた彼女は、現在多忙な日々を送っている。

今日はそんな中、漸く取れた休みなのである。

「ふう……………」

一息つき、中型のトランクを引いて女性は歩く。

仕事でも幾度となく潜った改札だが、久々の気兼ねない気分にならず顔も綻んだ。

駅を出ると、賑やかな町の雑踏に目をやりながら道なりに歩いている。

ここ、クラナガンは、さすがにミッドチルダの首都だけあってか、人が多い。

つい先日まで彼女が任務に出向いていた、管理外世界———その存在は確認されているが、管理局による積極的管理が行われていない世界———とは、まさしく雲泥の差であった。

暫くそのギャップに浸っていると、いつの間にか目的の場所へ着いたらしく、女性は足を踏み入れる。

そこは公園だった。

中央には噴水がこんこんと水を吐き出し続け、一角には時計台が悠然と立つ、ごく普通の公園だ。

その傍らのベンチに腰掛け、待つこと数分。

青い短髪を揺らし、息を切らせた別の女が1人、女性のところへ駆け寄ってきた。

「えい、ごめんっ、ティア……………お、遅れ、たっ……………はあ、はあ……………」

荒くなった息を必死に整え、謝罪を述べるこの青髪の女性の名は、スバルⅡナカジマ。

オレンジ髪の女性、ティアナⅡランスターとは同期で、3年前までは同じ部署で働く仲間であり、良き相棒パートナーであった。

「……………このように、ポカをかますこともしょっちゅうであったが。」

「……………31分の遅刻ね」

「あ、あはは……………その、道路が混んで……………」

「馬鹿、私が来た時は空き空きしてたわよ。大方、大量の朝ご飯の前に時間を忘れて、気がついたら……………っていうオチじゃないの？」

「ううっ!?!」

苦しい言い訳をあっさり看破され、あまつさえ見事に理由を言い当てられ、スバルはびくりと肩を震わせる。

「どうやら、凶星のようだ。」

「……………まさか、本当にそうだとは思わなかったわ」

「う……………仕方ないじゃん。秋は食べ物美味しい季節なんだよ?」

「限度があるって言ってんのは馬鹿スバル」

相変わらずの相棒の大食いに、疲れたように頭を抱えるティアナ。

ややそうしていたが、やがてどちらからともなく笑った。

「こうやって馬鹿みたいに話すのも、3年ぶりかしらね」

「はは、そうだね。私もティアも、なかなか休みが合わなかったし。前に会った時だって、たまたま救助隊とティアの仕事が重なった時くらいだしね」

笑いながらそう言って、スバルもティアナの隣へ腰掛ける。

「そういえば、今日は貴重な休みね。どうする？」

「そうだなー。いっぱい行きたいところあるよ？」

「せっかくだし、付き合うわよ。で、どこ？」

「うーん、そうだなあ。アイスでしょ、ゲームセンターでしょ。それから……………」

指を折りながら数えていたスバルはそこで言葉を切り、ティアナへと向き直って、

「なのはさんとリオスの喫茶店にも行ってみたいな！」

「……………そうね」

ティアナはスバルの言った2人のことを思い出し、目を細める。

3年前、ミッドチルダを震撼させたとある大事件があった。

ルシアスⅡコーネルド、そしてジェイルⅡスカリエッティという2人の男を主犯とした、大規模騒乱。

後にLost Paradise——通称、L・P事件と呼ばれるこの騒乱において活躍した英雄達の中に、リオスⅡコーネルドと高町なのという2人の名があった。

2人は今、ミッドチルダ市内のとある通りに喫茶店を開店し、1人の養子とともに、管理局員との二束のわらじを実現している。

民間協力者だったリオスは、特別に管理局からデバイス所持を認められた上で、喫茶店の店長として、養子とともに頑張っていると風の噂で耳にした。

最近仕事が忙しく、休みもあまりとれていなかった彼女らにしてみれば、たまには顔くらい出しておきたいものなのだ。尤も大食い且つ大のアイス好きであるスバルにしてみれば、リオスの作る絶品アイスの方が目当てかもしれないが。

しかし————。

「私、あのピンク色の甘ったるい空間の中に入っていく勇氣はないわ……………」

「あはは、大丈夫だよ、ティア……………たぶん」

リオスとなのははL・P事件以来、晴れて恋人同士となった。

それ自身は非常に喜ばしいことであるし、2人としても彼らの恋路を応援していききたい思いは大いにある。

だが、何を隠そうこの2人、放っておけば人目もはばからずいちやつき始めるのだ。

そればかりか、この前など喫茶店の店内で軽く触れ合っていた（とはいっても、躓きかけたなのはをリオスが受け止めたというだけで、本人達にしてみればやましいことなど何1つないのだが）ところを雑誌の記者に隠し撮りされ、大騒ぎになったこともあった。

なのははいまや、ミッドチルダを代表するほどの有名人。

さらにL・P事件での活躍も手伝ってか、それ以来知名度が鰻上りに上昇し、ファンクラブなども立ち上がるほどだという。

それ故に、雑誌の記事が齎した破壊力は尋常ではない。事件を収束した主要人物、つまり英雄同士の恋愛ともなれば、大スクープともなろう。

憶測が憶測を呼び、次々に根も葉もない噂が飛び交うほどだった。

2人で喫茶店をやっている時点でただならぬ関係なのではないかという憶測は何処からでも出そうなものだが、ファンというのは時に、？そうであって欲しくない？という願望が働くもの。

おそらくその雑誌を見たおかげで現実を思い知らされ、憶測として心にしまっていたものが堰を切って溢れ出たのだろう。

無論2人のことを応援する市民も多数いたのだが、ファンの方の盛

り上がりぶりの印象があまりにも強すぎた。

あの時、噂の真偽を確かめようと次々に押し寄せるなのはファンを前にした時の2人の居心地の悪そうな苦笑いは、今でも忘れない。

「あの時は苦勞したわよ。八神捜査官に呼ばれて、鎮圧するのにどれほどかかったことか……………」

「ラブラブだもんね、あの2人。羨ましいなあ……………」

「あそこまではいきたくないけど。さて……………」

苦笑し、ティアナは立ち上がった。それに習い、スバルもまた立ち上がってバッグを掴む。

「そろそろ行く？」

「そうだね。せっかくのお休みなんだし♪」

そう言い交わし、2人が歩き出そうとした、その時————。

「きゃあああああああああ——————」

悲鳴が、天を衝く勢いで響き渡った。

「……………残念だけど、休日を楽しむのは後回しになりそうね」

「ティアッ！」

「ええ！ 行くわよ、スバル！」

2人は悲鳴の聞こえてきた方角へ向けて、駆け出した。

「うーん……………」

一方ミッドチルダから離れ、とある管理世界。

その森林地帯で、金髪の長髪をツインテールにした女性が1人、上空を飛行していた。

彼女こそがティアナの元上官である執務官、フェイトⅡTⅡハラオウン。

彼女は今、上層部から命を受け、この森林地帯の搜索任務の真つ最

中だ。

「報告では、この辺りのはずなんだけどな……。ね、バルディツシュ?」

『Yes, sir.』

フェイトの問いかけに、彼女の右手に収まる漆黒の戦斧、バルディツシュが金色の核を点滅させ、簡潔にそう答える。

その、短くも信頼できる相棒の返事を受け、フェイトは再び辺りを見回した。

?微小な次元震、及び魔力反応を確認した?。

そう彼女が報告を受けたのが、この日の朝。

その後すぐさま搜索の任が下り、今こうして調査を進めていると。

「フェイト執務官……ま、待って……待ってくださいよ……」

彼女の後ろから、弱々しい声が届いてきて、フェイトは苦笑しながら段々と速度を緩め、やがて止まる。

振り返ると、少女が1人、疲れきった様子で項垂れていた。

「大丈夫、ソフィア?」

「は、はい……………なんとか大丈夫でっす……………」

深緑色のポニーテールを振りかざしながら、そう言ってサムズアップして見せるが、どう見ても大丈夫そうには見えない。

彼女の名は、ソフィアールジュリーストン。

珍しく、扱いの難しい飛行魔法において16歳という早熟さを見せる期待の新人だ。

ティアナが執務官試験に合格した後、フェイトの友人である八神はやてから紹介を受け、現在の彼女の執務官補佐として共に任にっている。

「む、無理しない方がいいよ。いくらソフィアが飛行魔法得意だっていっても、今日はずっと飛びっ放しだし。ちよっと下降りて、休憩しよっか」

「うう……………面目ないです」

肩を降ろし、そう力なく俯く彼女に再び苦笑しつつも、フェイトは少しずつ、降りられそうな場所を目指して降りていった。

「ふう、少しここで休憩しよう」

ちょうどいい岩を見つけたフェイトは、腰を降ろして、荷物から昼食を取り出した。

ナプキンを広げた中から現れたのは……………。

「わー、美味しそうなサンドウィッチですねー！」

「朝任務を受けてすぐだったから、これくらいしか作れなかったんだけど。よかったら食べて？」

「いいんですか！？ わーい、いただきますー♪」

幸せそうにサンドウィッチにかぶりつくソフィアを横目に、フェイトは水筒の水を飲みながら周囲の探索を開始する。

すると――――。

『Sir, I catch a little magic power. (サー。微弱な魔力反応を感知しました)』

「本当、バルディッシュ？」

『Yes. (はい)』

魔力反応ありとあっては、見逃すわけにもいかない。

フェイトは一度ソフィアへ視線をやると、徐に立ち上がった。

「ソフィア。私ちょっとその魔力反応を確かめてくるから、ここで休んでいてね」

「了解ですー！」

元氣よく返事をする彼女の手には、既に3つ目のサンドウィッチが

握られていた。

「これは……………」

一方、悲鳴を聞きつけて駆けつけたスバルとティアナの2人は、その現場の光景を目の当たりにして言葉を失っていた。

目に見えるのは、荒れた周囲の様子。

道端に設置されたゴミ箱は倒れて中身が散乱し、木のベンチはあらゆる方向へ飛んでいっている。

まるで、台風かなにかでも通ったかのような有様だ。

そして、何より—————。

「どういうこと、ティア？ 人の気配が全くないよ!？」

「変ね。大通りほどじゃないけど、結構この時間は通行人で溢れるはずなんだけど……………」

ティアナがスバルの言葉にそう答えていると――――。

「…………っ！ スバル、伏せて！」

「え…………わあっ!？」

ティアナが咄嗟にスバルを押し倒し、その直後、先程まで彼女の身体があつた空間を、何かが通り抜けていく。

「スバル、大丈夫!？」

「う、うん……………」

2人は立ち上がると、自分達に襲いかかった?何か?を見た。

その?何か?はどろどろとした液状をしていて、まるで生きているようにうねっている。

「何、あれ……………!？」

それはどちらの眩きだったか、そんな言葉と同時に、それがまた2人へ襲い掛かった。

「くっ……………!」

咄嗟に一瞬にして、戦装束を身にまとう。

バリアジャケット。

見た目はただの服だが、その実体は魔力による防御鎧で、最も軽装なものでも手榴弾をも防ぎきる防御性能を発揮する。

そしてそれは、デバイスと呼ばれる演算処理装置から齎される。

普段はデバイスの中に内包されていて、セットアップと呼ばれる行為と同時に出現する。

ティアナのデバイスは、双銃クロスミラーージュだ。

その銃の1つから魔力によって生み出したオレンジ色の光弾、魔力弾を、謎の液状の物体へ向けて放つ。

魔力弾はその液化化した体を捉え、飛び散らさせる。

「スバル！　ぼやっとしない！」

「ティアッ！……………マッハキャリバー！」

『Yes.』

スバルもまた、ペンダント型で待機していた自身のデバイス、マッハキャリバーをセットアップする。

ローラースケート型に変形したマッハキャリバーが足に装着され、それに連動して、メタリックなフォルムのナックル、リボルバーナックルが右手に装着された。

すると、それを待っていたかのように、物影からわらわらと、先ほ
どと同じ白銀の液状物体が姿を現す。

「スバル、久々のコンビよ。準備はいい？」

「いつでもいいよ、ティア！」

2人が構えると同時に、スバルのリボルバーナックルが唸る。

謎の物体が、一斉に2人へと襲い掛かった。

「こっちで合ってるんだね、バルディッシュ？」

『Yes, sir.』

僅かな魔力反応を頼りに、フェイトは森の中を進んでいた。

ソフィアのいる場所からは大分離れてしまったが、幸いにも彼女の魔力は感知出来るほどの大きさはあるため、迷うことはないだろうと思う。

木々を避けて低空で、ゆっくりと飛行していく。

そうやって、暫く進んでいくと――――。

「ここは……………!」

開けた場所に出たフェイトは、着地して辺りを見回した。

石造りの建物が、自然の中に違和感なく鎮座している。
どうやら、遺跡か何かのようである。

フェイトは建物に近づき、古くなりつつも未だその原形を失わない
外壁を手で撫でた。

蔦が絡みつき、苔が張り付いていても、その当時の面影を全く消す
ことなく、存在し続ける。

この遺跡を造った文明が、高度な技術を誇っていた証拠だ。
考古学者でもないフェイトにも、それくらいは理解できた。

「……………今、何か……………!?!」

ふと、何かが聞こえたような気がして、フェイトは耳を澄ます。

「この中から……………」

やがて物音が遺跡の中から聞こえてきているのであろうことを突き止めたフェイトは、遺跡の中の暗闇を覗き込む。

遺跡という先入観もあつてか、中に得体の知れない魔物が潜んでいるような錯覚を覚え、フェイトの足が止まった。

しかし。

「……………行こう、バルディッシュ」

フェイトは意を決し、遺跡の中へと足を踏み入れていく。

中は、意外にも明るかった。

というのも、壁伝いに設置された燭台が全て点灯しており、明かりに事欠かなかったからである。

もう気が遠くなるほどに使われていないはずの遺跡で、何故火が灯っているのだろう。

それがますます、フェイトの警戒心を煽っていく。

そうしてしばらく進んでいくと、彼女の目の前に大広間が現れた。

壁際に何対もの巨大な巨像が配置され、まるで王の歩く道を造る従者のように立っている。

そして。

部屋の最奥に置かれし玉座の上には、本来あるべきでないものの姿。

「ひ、人……………?」

フェイトの眩きに、青年とも言うべき男の真紅の目が、ゆっくりと開かれた。

Episode 1 異変の始まり（後書き）

く神の黄昏く

神崎「はい、というわけで第1話の投稿です！」

ソフィア「はーい！ 今のところは唯一のオリキャラ！ ソフィアちゃんだよー♪」

神崎「生憎主人公がまだまともに出てないので、今回は彼女に来ていただきました」

ソフィア「宜しくねー！」

神崎「さて、初めましての読者様もおられるかもしれませんが、軽く説明をさせていただきます。この後書きショート座談会、神の黄昏では、私、作者の神崎 はやとと作品のキャラ達とで、対談形式で、その回のおさらいや次回の軽い予告、アンケートなどの告知等々を、お喋りしながらやっていこうというコーナーです。基本的には毎回やっていこうと考えてます」

ソフィア「こんな感じに、だよね」

神崎「そういうこと。『この後書きに自分の作品のキャラを出してほしい！』や、『本編でコラボしてほしい！』といった依頼も大募集ですので、どんどんメッセージ等で教えてくださいね！」

ソフィア「待ってまーす！」

神崎「さてさて、今回は第1話でございますが」

ソフィア「早速事件だねー。スバルさんとティアナさんの方では謎の液状物体。フェイト執務官は謎の男と接触、かぁ。うーん、謎ばかりで全然解んないや♪」

神崎「いや、そこそんな楽しそうなテンションで言われましても……」

ソフィア「ぶーっ、だってしょうがないじゃん！ まだ全然解んないのは事実でしょおーっ！」

神崎「ま、そうなんだけどね。さて、今回はスバルとティアナの戦いが収束しますね」

ソフィア「フェイト執務官は？」

神崎「男と会話。その後は………まあ、次回で」

ソフィア「えーっ、けちー」

神崎「ネタバレ防止のためです。では次回、『未知の襲来、未知との遭遇』」

ソフィア「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 2 未知の襲撃、未知との出会い

—————ここは、どこだ……………？

まどろみの中、男の意識が僅かに覚醒する。

力の残り少ない体を叱咤して、感覚を研ぎ澄まさせた。

すると、目の前にぼんやりと現れたのは、人を模った金色の光。

まるで暗黒の世界に灯る一筋の光のようなそれを、男ははっきりと捉えていた。

目ではなく—————感覚として。

—————何だ、この強大な魔力は……………！？……………ふっ、ちようどいい……………。

その力、貰い受けよう。

そう小さな声で呟く男は、真っ直ぐにその唇へと—————。

「ふ……………ふええええええええっ！？」

次の瞬間。

色を取り戻した世界で男が最初に見たものは、顔を真っ赤に紅潮させた、金の髪をした女性の姿。

これが—————運命の出会いだった。

Episode 2 未知の襲撃、未知との出会い

遺跡の奥深く、玉座の間のように部屋之最奥に鎮座した椅子に座った男に、フェイトはしばし見入っていた。

まるで、本物のこの遺跡の主が蘇ったような、妖しく、それでいて神秘すら感じられる、その情景へ。

しかし、すぐさま我に返ると、バルディッシュを構えながらじりじりと近寄っていく。

報告にあった次元震が彼によるものなら、話を聞いて————場合によっては、捕縛もやむを得ない。

慎重に、少しずつ、少しずつ接近していく。

もう目の前まで迫ったところで、フェイトは改めて、男の容姿を見つめた。

歳は、18程。

全身を黒服で包み、更にその上から黒いコートを着込んでいる黒づくめの格好。そこへ、燃えるような赤く跳ねた髪が、アクセントを加えている。

万人が見れば万人が美男子であろう男の容姿に、フェイトはしばし見入っていた。

『……………S i r?』

「ふえっ!?!……………あ、ああ。ごめん、バルディッシュ」

愛機の声に我に返ったフェイトは、バインドの術式の構成に入る。

見知らぬ人相手に無礼であるのは解っているが、目を覚ました時に暴れられないための善後策である。

————と。

「……………その力、貰い受けよう」

「……………え?」

フェイトにはその全てを聞き取ることは出来なかったが、それでも男が何言かを発したのは事実である。

もつとよく聞き取ろうと、フェイトが男へ顔を寄せた、次の瞬間――。

ちゅっ。

「はむっ……………?」

男の唇が、フェイトのそれと重なった。

男は更に、吸引装置が如くフェイトの口に吸い付き、水音を立てて吸い上げた。

そして、数秒。

漸く男は離れたが、フェイトは一瞬、何が起こったのか解らなかった。

だが次第に、自分がこの男に口づけされたのだと頭が理解していき――。

「ふ……………ふええええええええええっ!??」

羞恥は絶叫となって、部屋中に響き渡った。

一方の男は唇を離してからも、素知らぬ顔で舌なめずりをする。

「御馳走様。中々に美味だったぞ、女」

「ふああああ……………!!」

男の満足げな台詞も、今のフェイトの耳には入らない。

紅潮した顔で幾度も譫言を呟くその様子は、初心そのものだった。今まで男性経験はおろか、キスすらろくにしたことのないのだから、当然とも言えようが。

そんな彼女の様子に気づいてか否か、男は尚も上機嫌に口を開く。

「ここに飛んだ時はどうしようかと思ったが……。どうやら運は、僕に向いているようだ。改めて礼を言わせてもらおう。感謝する」

「あ、貴方一体……。！？」

「僕は………」

未だ顔を羞恥に染め、口元を押さえながらもそうたずねるフェイトへ、男は答えようとして――――。

「……………っ！ 危ないっ！！」

「えっ？」

男が訝しむ声を上げた、次の瞬間。

突然側面に立っていた石像が動き始め、男へと襲い掛かった。

岩形状のボディの隙間隙間から、機械の内部構造が見え隠れしたその巨軀は、気付かれぬ内に2人へと近付くと、その拳を男へ向けてたたき付ける！

しかし男は石像へ背を向けており、その存在に気が付いていない。

「危ないっ！！」

ドンッ……………

「なっ……………」

鈍い打撃音が、暗い室内に木霊した。

「はぁぁっ！」

ティアナのクロスミラージュが火を吹き、魔力の弾丸が液状物体を捉える。

攻撃を受けた液状物体は、その身体を四散させ、動くことはなかった。

「どうやら、攻撃は効くみたいね……………」

この手の敵にありがちな、再生能力をそれらが持たないことに安堵しつつ、ティアナは呟く。

「なら、打撃で一気に蹴散らすよ！」

「あ、馬鹿不用意に突っ込んだら！」

ウイングロードを展開したスバルが、液状物体へと果敢にも突っ込む。

だがティアナが言うように、まだ完全に敵の特性も解っていない状況での突撃は、あまりにも無策であり、無謀。

「はあああああああつ！」

リボルバーナックルをはめた右腕が唸る。

液状物体はその拳から逃れることは出来ず、耳障りな水音を上げて貫かれた。

「やった！」

倒した、とスバルは勝利を確信した。

が、しかし。

『Emergency!』

「えっ!？」

唐突な愛機の警告に、スバルは咄嗟に身を引いた。

ズブリ、と、拳を当てた時と同じ耳障りな音が響き渡り、リボルバーナックルが物体から抜ける。

だが、その形状は――――。

「嘘っ!？」

「と、溶けてる………!？」

リボルバーナックルの外装が、まるで強力な酸の中に浸されたように溶け落ちていたのである。

「………どうやら、あれに打撃は禁物のようね……」

「て、ティア、どうしよう!？」

「落ち着きなさい! あれに触れずに、魔力砲撃で対応! やれるでしょ?」

「……………おうっ!」

返事に頷くと、ティアナは即座に魔力弾を発生させる。

「クロスファイアー……………シュートッ!」

橙の魔力弾が、銀色の液状物体を次々に捉えていく。

光弾に貫かれたそれらは、やはり飛び散ったきりその動きを止めている。

（思ったとおり、魔力攻撃なら効果がある。このまま押し切れれば………！）

そう目算したティアナの考えは見事的中していた。

伊達に、機動六課時代はフォワードリーダーを務めていたわけではないということか、頭の切れは抜群のようだ。

「やあああああああつ！」

一方のスバルもまた、魔力弾の攻撃に切り替えて敵を圧倒する。

元々の機動力が高いスバルには液状物体も追いつくことは出来ず、ただひたすらに魔力弾に屠られ、蹂躪される。

そうしてあらかたの敵を倒し終えた後、彼女の元へティアナが駆け寄ろうとする。

「スバルッ！」

「ティア！ こっち終わったよ！」

笑顔で相棒を迎えると、スバルは飛び散った液状物体の欠片を見下ろす。

もうすっかり動きはしないが、それでも警戒しながら少しずつ近づいていく。

「マッハキャリバー、ロストログア反応は？」

『I i d e n t i f i e d . (確認できました)』

「じゃあ、ロストログアなの……………」

そういえば、以前機動六課にて地球での任務にあたった際も、このようなスライム状のロストログアを封印する任務があった。

だが、打撃が効かないといった共通点はあっても、それでもそちらは人間には無害なものであったし、厄介なところといえば、精々偽^{ミミ}物を生み出す程度のものであった。

今回のように、直接的被害を齎すものではない。

「……………でも、ロストログアなら封印しなきゃだね」

「そうね。でもとりあえず、現地の局員と連絡をとって、後はその人達に任せましょう」

「そうだね」

そうして、ティアナがクロスミラージュでモニターを開き、付近の局員に連絡を取ろうとした、その時。

『! S i g n a l f r o m u n d e r u s ! (! 下より反応!) 』

「っ！！？」

クロスミラージュの警告が入った————が、僅かに遅い。

下水溝の蓋を押し開けて、先程よりも圧倒的に大きい液状物体が、2人へ急速に襲い掛かる！

「くっ！！？」

ティアナが魔力弾を飛ばす。

しかし、何分突然現れたため、その魔力弾も所詮は急ごしらえの代物だ。

それは攻撃を止めるに至らず、うねるように、銀色の鈍い輝きを放つ身体が、2人を尽く覆い隠した。

万事休す。

そう思われた、次の瞬間。

「行けっ、アサルトビット！」

声が聞こえたかと思えば、いくつもの光条が液状物体の身体を貫き————粉砕、沈黙させる。

それにより、今度こそ辺りに敵の姿は見えなくなった。

『All signal lost. (シグナル、全て消失)』

「あ、えと……………」

突然のことに何が起こったのか解らず、スバルとティアナはしばし呆然とする。

しかし、何が起こったのか。それはすぐに理解することとなった。

「スバル、ティアナ！」

頭上から聞こえてきた声に、2人ははっとして上を見上げる。

そこには————自分のよく知る、嘗ての上官の姿があった。

「八神捜査官！」

「お、お久しぶりです！」

ゆっくりと下降してくる、女性、八神 はやてへ向けて、スバルとティアナは敬礼する。

「堅苦しい挨拶は抜きや、2人共。それより、怪我はないか？」

「は、はい」

「大丈夫です……………」

「そか」

2人の返事に満足げに笑みを零すはやてへ、ティアナが礼を述べる。

「先程は、助けていただいてありがとうございます」

「あー、いやいや。あれやったんは私とちゃうよ。さっきんはな……」

「八神捜査官。アルブの封印、完了しました！」

ティアナの言葉に説明を加えようとするはやての下へ、1人の男性が駆け寄ってくる。

年齢は、はやてと同年齢ほど。

髪は肩までの黒で、見た目だけなら充分に好青年だ。

「おお、ちょうどよかったわ。紹介するな。今、私の補佐をしてくれとる、レヴィンⅡクレスヴェルグ君や」

「初めまして。レヴィンと申します」

敬礼し、ニヒルな笑みを浮かべて挨拶する彼に面食らったような顔をしつつも、こちらこそ、と返すスバルとティアナ。

嫌いとはまではいらないが、なんとなく好きにはなれそうにない。スバルとティアナが考えていたことは、奇しくも同じだった。

「それで、捜査官。その、アルブとは何なのですか？」

封印、ということはやはり、ロストログアなのだろう。だが、それでも彼女らは何も知らない。情報が少なすぎるのだ。

管轄ではなくともこうして出くわしてしまった当事者として、聞かないわけにはいかなかった。

はやてはその問いに対し、ふむ、としばし逡巡したが、やがてわかった、と言って話し始める。

「いいタイミングかもしれへんな。本当なら、もう少し経った後で正式に通達するつもりやったんやけど」

「どういふ……ことですか？」

訝しげに訊くスバルに、はやては真剣な表情を浮かべて――――。

「……………機動六課を設立することが、正式に決定した」

「君！　おい、しっかりしろ！！」

「……………よ、よかった。無事で……………」

「……………全く、無茶をする」

自分を庇って代わりに石像の攻撃を受けたフェイトに、男は安堵を多大に含んだ嘆息を漏らす。

「ゴーレム……………！？」

「これは……………大きいな」

男はそう呟く。

再び照準をこちらへ定めてくる巨軀に、フェイトは起き上がり迎撃しようとするが、先程の攻撃で肋をやられてしまったらしい。

たかが拳、されど拳。

たったの1発でも、固く、人ならざるものによって放たれたそれは、バリアジャケットの衝撃軽減の許容量を上回るのに十分な威力を誇っていたようだ。

やむなく、シールドを張ってやり過ごす。

だがフェイトは元々、守りより高速戦闘による速攻を得手とした魔導師だ。

次第にシールドにはひびが入り、最後には砕け散る。

もうだめか。

そう思った、その時だった。

「…………ハヴオック。セットアップ」

『All right. Stand by ready.』

男の身体が、紅の光に包まれる。

そして、やがてそれが収まった時————そこには、紅のロングコートを纏った、男の姿があった。

右手には、銃。

黒を基調とし、紅いラインの刻まれたライフルだ。

そして銃を握っていない左手はゴーレムへと向けられていて、炎のような輝きを放つ真紅のシールドが、その拳を受け止めていた。

「くっ……………」

男の表情が僅かに歪む。

それと同時に、彼の銃に少しずつ亀裂が生じ始めた。

「くっ……………やはり試験もなしのぶっつけ本番では、君を扱うにも無理があったか……………」

『Don't care. (気にするな)』

「……………すまない。はあああああああつ！」

シールドの輝きが一層激しさを増し、ゴーレムの拳をその巨軀ごと弾き飛ばす。

だが、無論それで終わりではない。

ライフルの先に真紅の燃え滾る魔力が集束し……………。

「クリムゾン、バスタアアアアア……………砲撃が、ゴーレムへ直撃する。」

真紅の魔力の奔流……………砲撃が、ゴーレムへ直撃する。

その凄まじい破壊力にゴーレムはなす術なく胴を貫かれ、さらには

その後ろにある壁までも粉々に粉碎され、真紅の光が外の日の光を、暗い遺跡の中へと齎した。

「くっ、力を、使いすぎたか……………」

よろける足を必死に奮い立たせ、男は尚も毅然と立つ。

「貴方は……………一体誰なの？」

おそらくは2度目となる問いを、フェイトは男へ放った。

暖かな陽光と、暗い闇を照らす妖しげな炎の輝き。

その対照的な光を一心に受ける男は、振り向き、答えた。

「僕か。僕の名は……………」

……………エルト。

自身の名を明かした男……………エルトの意識は、そこで途絶えた。

Episode 2 未知の襲撃、未知との出会い（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい、というわけで第2話の投稿ですー！」

レヴィン「オリキャラ2人目、レヴィンです」

神崎「皆様応募のキャラの当選は、もう少しお待ちくださいね。さて、今回は液状物体……アルブとの戦闘と、新主人公エルトの登場！」

レヴィン「私の出番もありましたしねえ。いきなりアサルトビットですか」

神崎「まあ、？そういうキャラ？にするつもりで設定作ったしね」

レヴィン「しかし、ハラウオン執務官もそうでしたが、過去の隊長達には1人ずつ補佐がいるようですね。ということは、高町教導官にもおられるのですか？」

神崎「その予定ではいますね。男にするか女にするか、未だに迷ってるけど」

レヴィン「男にした場合は、リオスさんが思いっきり嫉妬しそうですかねえ……」

神崎「……………うーん、確かにそんな気がするなあ。まあリオス自身好青年なわけだし、逆に快く認めそうな気もするけど」

レヴィン「それもそうですか。さて、次回はいよいよ皆さんが一同に会するのでしょうか？」

神崎「そうなるかもですね。部隊設立の話や、アルブについての話でもしようかと思っていますので」

レヴィン「そうですか」

神崎「そして更に、あの人もちよっぴり登場！」

レヴィン「あの人……誰でしょう？」

神崎「それは、皆様に想像していただきましょう。それでは次回、『動き出す物語』」

レヴィン「無限の力、その身に宿せ」

Episode 3 動き出す物語

「まずは、落ち着いて話そか」

とある管理局施設のオフィスの一室で、はやてがそう口火を切ると、一同は肩の力を抜きつつも、はやての言葉に耳を傾ける。

そこに揃っているのは、嘗ての機動六課の精鋭達。

エースオブエースこと高町なのははスケジュールが合わず、エリオとキャロ、管理局奉仕活動中のレーネのいる辺境警備隊からは遠すぎるため、彼女ら3人抜きでの会合になったが、メンバーは充分に揃っている。

事の詳細を知る八神はやてを始めとし、彼女の補佐であるレヴィンⅡクレスヴェルグ1等空尉。

金色の閃光の異名を持つ、フェイトⅡTⅡハラOWN執務官に、その助手にして補助魔法の名手、ソフィアⅡジュリーストン2等陸尉。そして、嘗てのスターズ分隊所属、スバルⅡナカジマ3等陸尉に、ティアナⅡランスター執務官。

これほどのメンバーが揃っていれば、むしろ充分すぎるほどだろう。

「まず、このロストログアについて話そか」

そう言うてはやてがモニターを弄ると、そこにスバルとティアナの2人を襲った、異形の姿が映し出される。

「この液状物体の呼称は、Unknown Liquid Bod

Y。頭文字をとってULB。即ち、アルブや」

「アルブはここ最近、ミッドチルダやその近隣世界に出現している謎の液状物体です。それぞれに動性を持ち、触れたものを溶解。強いロストログリア反応も確認されています」

「ロストログリア、ってことなの？」

アルブに遭遇していないフェイトは、そう訊ねる。

実際に遭遇したことのない分、いまいち実感が持てないのだろう。

「信じられへんのも無理ない。私かて、この目で見ても未だ信じられへんからな」

「このアルブというロストログリアが、最近ミッド周辺で話題になっている行方不明事件を起こしているのでしょうか？」

「まだこれの詳細が解らん限り、推測に過ぎへんのやけど……おそらく、な」

ティアナが言うとおりに、ここ最近、ミッドチルダやその周辺世界では、突然に人が消えるという不可解な出来事が起きていた。

通りにいたはずの人々が忽然と消えたり。

そんな不可解な現象が、何回か報告されているのだ。

それをはやては、アルブの線と見ている。

アルブの性質がわからない以上断言は出来ないが、妥当な推論だろうと誰もが思った。

「八神捜査官と私は、このアルブを先のL・P事件におけるレリック同様、第1級ロストログアと認定し、調査を続けていたのです」

「んで、その調査の最中に2人を見つけたんで、ああして助けたっちゅうわけや」

「そうだったんですか……………」

スバルが肩を落として言うが、すぐさま決意の表情と共に顔を上げた。

そんな未知なる脅威が迫っていたというのに、知らなかったとはいえこれまで何もすることが出来なかった。

だが、これからは違うと。

「……………ごほん。そんなわけで、や」

咳払いし、はやてはしれつと言い放つ。

「機動六課。もう1度、正式に設立することになったさかい、皆、またよろしくな」

……………。

「ええええええええええー！……………！？」

一瞬の静寂の後、フェイトは驚きに絶叫する。

予想していたはやてとレヴィン、ティアナは手で耳栓をしていて無

事だったが、予測していなかった上にフェイトの真横にいたソフィアとスバルは間に合わず、涙目で耳を押さえていた。

「なんや、予想以上の反応やな」

「ちょ、はやて、初耳だよ!？」

「そりゃそうや。言ってへんもん。あ、ソフィアもフェイトちゃんの補佐やし、六課に出向な」

「ええっ!？」

口々に驚きの声を口にするフェイト、そして思わぬとぼちちりを喰らい素っ頓狂な声を上げるソフィアにはやてはしれっと笑う。

この人は相変わらず大物だなあと、我が身ながらもティアナは思った。

そういうティアナも初めて聞かされた時は、スバルと共に彼女らと共に似たような反応を返したものだ。

「さて。そんなわけで、これからの方針に関しては粗方話し終わったんやけど……フェイトちゃん。あの男の人、もう目覚ましたんか？」

「あ、うん。今は医務室の隣の部屋のベッドでぐっすり眠ってるよ」
はやての言う?あの男の人?というのは無論、エルトと名乗ったあの男のことである。

あの後フェイトは気絶した彼の身体を抱えて遺跡を出、ソフィアにも手伝ってもらうことで漸くミッドチルダまで搬送したのだ。

病院は遠く、見たところ大した外傷もなさそうだったので、この管理局施設に運ぶと、ちょうどそこで詳しい話をするべく立ち寄ったはやて達一行に出くわした、というわけなのである。

「一体、何者なんでしょう？」

「解らない。でも、遺跡のゴーレムの……それも、あんな巨大なものを一撃で倒したんだ。きっと、只者じゃないよ」

せやな、と短く返事を返し、はやては今度はモニターにエルトのデータを映し出す。

「勝手に即席で計らせてもらったデータに因れば、彼の魔力量はおそらくEX。魔力量だけなら、あのリオス君にも匹敵するレベルや」

「リオスに!？」

驚愕するフェイト達。

「さらに、回収されたデバイスも最高クラス。おそらく、嘗てのグロリアスタイプと同型と思われます」

レヴィンの報告に、更に驚愕する旧六課メンバー。

リオスと同等の魔力量と、彼のデバイスと同型のデバイス。

これでは、まるで――――。

「氷翼の天使の、再来……………」

ソフィアの言葉に、その場が静まり返る。

いかにリオスと似通っている部分が多いとはいえ、まだ彼が敵か味方かも解らないのだ。

もし彼と同等のその強大な力で、敵に回られたら————。

「心配ないよ」

空気を払拭するかのように、フェイトは呟く。

彼女とて、彼とは最初の出会いで少し話しただけに過ぎない。

だがそれでも、彼からは嘗てのリオスに似た雰囲気を感じられた。何の根拠もないが、フェイトには確信にも似た思いだった。

「……………彼なら、大丈夫。きっと」

「……………ほほう。そか」

なんだかにやにやと笑みを浮かべながら、こちらへ生暖かい視線を浴びせてくる。

「な、何かな、はやて。その顔……………」

「べーつに〜？　ただ、妙にあの子の肩持つやないかと思てな〜？」

片手を口元に当てて尚もにやけ顔でそう詰め寄るはやてに、あらぬ方向へ視線を泳がせながら対照的に後ろに反るフェイト。

それをスバルとソフィアはにやと見つめ、ティアナとレヴィンは「ああ、また始まったか」という様子で溜め息をつく。

「……………ちょ、ちょっと彼の様子見てくるねっ！」

三者三様の反応に耐えかねたフェイトは後ろで呼び止める声も無視して、いそいそと部屋を後にしていった。

「……は……………」

何もない仮眠室の一室で、エルトは目を覚ました。

眼を擦りながらゆっくりと起き上がり、まずは状況を確認する。五体は満足。他に身体にも異常はない。

「眠っていたのか……………」

起き上がり、身体以外の機能も確認していく。

まず、魔力。

軽く、周囲に害のない程度に魔力球を発生させてみる。

みるみる内に形成されていく紅蓮の魔力球は、彼の魔力の回復が順調であることを物語っていた。

「ふむ、魔力は問題なし。これならば、戦闘にも耐えられそうだ」

呟きながら、様々な形に魔力球を変形させていくエルト。これだけ出来れば、魔力の量と制御には問題ないだろう。

そして……………。

「システム……………これも、異常なしか」

エルトの瞳が、金色の輝きを発する。

エルトは更に一層、大きく眼を発光させるが……………。

コン、コン。

「……………む」

ドアをノックする音が響き、エルトは再び横になった。

「あ。目、覚めたんだ」

「君か」

ドアを閉めると、ドアの向こうから現れた女性フェイトは、ベッドの傍にある椅子を引き寄せて腰掛ける。

そのときには、エルトの金色の瞳は既に下の紅に戻っていた。

「具合はどう？」

「魔力の使いすぎによる一過性のものだ。大したことはない」

「……………そう」

それだけ口にしただけで、2人の間で早くも会話が途切れる。

エルトの方は単に話すことがないというだけだが———。

（ど、どうしよう……………あんなことがあったせいで……………き、気まずい…）

フェイト自身そこまで顔見知りというわけではないし、むしろ相手がたとえ初対面でもどんどん話しかけていくタイプの人間である。

そんな彼女が何故会話に悩んでいるかといえば、無論、？あのこと

？が未だに彼女の頭から離れないためだ。

「あ、あの……………」

「何だ？」

「あの……………あ、あの時、どうして、その……………私に、き、き……………キス、したの……………？」

顔を真っ赤にして問うフェイトに、エルトは何のことかと最初は考えていたが、やがて、

「ああ、アレか。アレは、君の魔力を少し拝借させてもらったただだ」

「え、魔力を？」

思わぬ答えに、フェイトは意外そうに顔を上げる。

「そうだ。訳あって魔力が枯渇していな。転移魔法を使い、あの遺跡になんとか居座った方がいいが、動けなくなってしまった。……………そしてそこへ、君が来た」

「あ……………」

今の彼の話で、様々な辻褄が合った。

あの遺跡で感知された魔力反応というのは、おそらく彼の転移魔法によるものだろう。

そして彼はその魔法の行使を最後に魔力が枯渇してしまい、動けな

くなった。

そこへ、フェイトが来た。

S＋ランクを叩き出す彼女ほどの魔力なら、この男の魔力枯渇を癒すのにうってつけに違いない。

しかし、それにしても――――。

「それにしたって、もうちょっと方法ってものがあるでしょ？　いくら困ってたからって、その……き、キスだなんて……」

「ふむ、あの方法はお気に召さなかったか。口から吸い出すのが効率の上で一番よかったのだが」

「ちなみに、他にはどんな方法が……あぁ、うん。やっぱりいいや」

訊きかけ、しかしエルトが複雑な表情を浮かべたのを見て、続きを促すのをやめた。

触らぬ神に祟りなし、である。

「それで、どうしてあんなところにいたの？」

「む、それはだな。あるものを追っていたのだ」

「あるもの？」

あるものを追ってきて、その結果あの遺跡に転移、そして魔力枯渇。

話の辻褄は合うし矛盾もないが、それならばリオス並の魔力が枯渇した理由が説明できない。

普通に魔法を使っているだけで、果たしてそこまで消耗するものだろうか。

更に追及すべく、フェイトが口を開こうとするが――――。

「……おい。ハヴオツクはどうした？」

「貴方のデバイスのこと？
それなら、この施設のデバイスルームで修理中だけど」

「……そうか」

言うと、エルトは不意にベッドから降り立ち――

「伏せていろ」

「……………」

訳の解らない様子で立ち上がったエルトをじっと見つめるフェイト。

それに舌打ちし、エルトの手がフェイトへ伸びる。

「えっ……ええええええええええええええ！？」

あろうことが、なんと自分のもとへフエイトをそのまま抱き締めるエルト。

突然の暴挙に真っ赤になって嬌声を上げるしかないフェイトに目を向けることもなく、エルトは極めて真剣な眼差しでドアへ掌を向けた。

「ハヴォックなしでどこまでやれるか解らないが……」

そう呟くエルトの掌の先に、灼熱の魔力が集中していく。

膨大な魔力は滾り、凝縮され、1つの魔力球の形を模った。

「クリムゾン……バスタアアアアーーーーーッ！」

圧縮された魔力が、一気に開放される。

灼熱に滾る砲撃はドアを破る。

更にそれだけでは済まず、ドアの後ろにいた更なる異形をも焼き尽くす。

「えっ!？」

慌ててフェイトが懷からバルディッシュを取り出し、セットアップする。

鎌状に変形したそれを片手に持ち、フェイトは廊下を見回した。特に、廊下に何かがいる気配はもはやない。

しかしその足元には、確実に先程までドアに迫っていた銀色の液状物体が飛び散っていた。

「これ、アルブ……………!!?」

管理局の施設へこうも簡単にここまで侵入を許したことに驚愕するフェイト。

その横で、いつの間にか歩み寄ってきていたエルトが呟く。

「こいつは……………ほう。随分と、古典的な手を使ってくれる」

どういうこと、そうフェイトが問いかける間もなく、エルトはきつ、と廊下の先を見据え—————。

「いるのだろうか? アルテミス」

よく響く声で、そう言い放った。

すると。

《フツ…………フッフッフツ…………》

嘲笑が響き、エルトとフェイトの視線の先で空間がぐにやりと歪む。

そうして、何もない空間から突然現れたのは—————。

「さすがエルト。何でもお見通しなのね」

「お、女の……………人?」

「ただの女と侮って掛かると、痛い目を見るぞ」

言いつつ、しかし視線は現れた妖艶な雰囲気さえ纏う女性から外さずに、エルトは掌に光球を出現させる。

年齢は、おそらくフェイトやはやと同程度。

真っ白なドレスに身を包む身体は、締まるところは締め、出るところは出る無駄のない、艶かしいボディラインを強調しており、腰まで届くであろう程の青みがかった銀の流れるような長髪が、彼女が動く度にさらさらと揺れる。

「……私はただ、ゼロに貴方を迎えに来るよう言われたただけなのだけど。素直に来てはいただけないのかしら？」

「生憎だが、もう僕はゼロの思想には共感出来ない。僕は僕なりのやり方で、この世界を変えてみせる」

「そう。あくまでも対立を選ぶのね。貴方のそういうところ、嫌いじゃないけど……今回ばかりは、相手が悪すぎる」

エルトのはっきりとした答えに、アルテミスと呼ばれた彼女は大きく溜め息をつき、踵を返す。

「……いいわ。実を言うと、私も今の段階では決めかねてる。足掻いてみなさい。……生きていたら、また会いましょう」

言い残し、アルテミスは再び空間を捻じ曲げ、魔法陣の中へ消えていく。

「！ 待てっ！！」

フェイトがその後を追撃しようと、バルディッシュを手に駆け出す

が――――。

「な、何!？」

突如頭上の排気口から落ちてきた何かに、その脚は止まった。

見れば目の前には、幾つもの銀色のドロドロとした物体。

「アルブ……………!」

身構え、フェイトは先ほどの会談ではやて達が言っていたことを思い出す。

「確か、物理攻撃は効かない……………だったらっ!」

一瞬で魔力球を数個作り出す。

さすがはオーバーSランクの魔導師、手並みも見事である。

「フォトンランサー……………!」

『Fire.』

複数の槍の如き魔力攻撃がアルブを貫き、辺りにその白銀の身体を飛び散らせる。

「中々やるじゃないか」

いつの間にか隣に来ていたエルトが、魔力弾を放ちながら話しかける。

いつしか2人は、背中合わせになって、それぞれの目の前で蠢くアルブを見つめていた。

「……………この戦いが終わったら、詳しいことを聞かせてもらおうからね」

「お手柔らかに願おう」

それは確約できないかな、と冗談めかしくフェイトが言うと、2人はくすりと笑った。

もはやフェイトにも、先ほどエルトに接した時のような気まずさはない。

その凜とした表情は、確かにエリート執務官に相応しい、頼もしいものだった。

「部屋に残ってるはやて達が気になる。早く戻ろう」

「了解。エルト＝クリーバー、アルブを殲滅する！」

金色の閃光と、紅蓮の戦士。

2人が真っ直ぐにその眼光でアルブを見据えると、次の瞬間――
――轟音と閃光が、その周囲を貫いた。

「な、何や!？」

一方、はやて達部屋に残ったメンバーもまた、突然のアルブ達の襲撃に驚きを隠せないでいた。

フェイトが部屋を出てから、はやて達は機動六課が正式に設立されてからのスバルやティアナ達元スターズ分隊メンバーとソフィア、更に自らの副官たるレヴィンのポジションについて話し合っていた。

しかし突如何か大きな物音がしたかと思えば、ドアが破られ、そこから大量のアルブが出現してきたのである。

「これは、アルブ………!？」

「ふえええええ、これがですかあ!？」

ティアナの呆然とした眩きに、ソフィアが緊張に似つかわしくない間延びした声でそう、彼女なりに驚きを示す。

すぐさま全員がセットアップを済ませるが、次の瞬間、アルブが第一撃を放った。

自らの身体が全身武器であることを生かし、触手のように変形させた身体を鞭の如く撓らせてきた。

「わわっ！ フォーレスト・シールド！」

咄嗟にソフィアが張った、彼女ら全員を覆い隠せるほどの大きな半透明の黄緑色をしたシールドが、アルブの触手の鞭を防ぐ。

そして、

「やれやれですね……………消し飛べえっ！」

レヴィンのバリアジャケットの背部に円形に配置されたスロットから、板状のアサルトビットが次々に放出され、それから放出される魔力光線が、アルブの身体を貫いては爆散させていった。

「す、凄い……………」

「自分で選んどいてなんやけど……………これほどとはな……………」

戦場に似つかわしくないテンションながら、見事に無駄のない魔力配分でアルブの攻撃を尽く防ぐソフィアと、扱いが難しく、完璧に操れる人間はごく僅かとされているアサルトビットをまるで手足のように扱うレヴィンに、スバルは感嘆の声を上げ、はやてもまた冷や汗を拭おうともせず、遊撃砲台の乱舞とシールドの壮麗さに見惚れていた。

だが。

「ぐっ!？」

突如レヴィンが、顔を顰める。

彼の視線の先を見れば、一体のアルブが彼の放ったアサルトビットの1つを飲み込み、溶解させていた。

「レヴィン、どないした!？」

「……………なんでもありません。申し訳ありません、八神捜査官。ビットを1基、失いました」

「……………ええよ。レヴィンが無事ならそれで」

はやての安堵した言葉に頷き、レヴィンはアサルトビットの制御に戻ろうと顔を前に戻す。

だが。

「なっ!？」

その先に見える光景を見て、レヴィンは驚愕に目を見開く。

否、彼だけではない。

その場の誰もが、目の前で形を変えていくアルブから、目を離せず
にいた。

「何が、起こって……………!?!」

ティアナが呆然と呟く先で、尚形を変えていくアルブ。

その姿が、やがて明らかな形を模った時――――。

「え……………」

「あれって……………」

そこには、異形ではないモノが立っていた。

「ひ、人……………!?!」

スバル達の目の前で、人間の形を模ったアルブが――――その虚ろな目を開いた。

Episode 3 動き出す物語（後書き）

「神の黄昏」

神崎「神の黄昏、始まるよー」

エルト「今回は僕か。漸く主人公として、このコーナーに出ることが出来たな」

神崎「ごめんねー。今までは名前すら出てなかったから。前は君、最後に気絶しちゃったしね」

エルト「気にはしていない。それはともかく、更新しないのではなかったのか？」

神崎「まあ、ね。あの条例可決のニュース聞いたらどうもやる気が……」

エルト「では何故、今回最新話を投稿した」

神崎「まあ、やる気のない中一番筆が乗りそうなこの作品を書いたら、たまたま今日1話完成していただけさ」

エルト「………なんという」

神崎「ただ、いいような悪いようなおかしなテンションで書いたから、駄文になっていないか凄く心配だ。読者の皆様、ごめんなさい」

エルト「まあ、更新できただけでもよくやったというべきか」

神崎「そう言ってくれるか。……さて、今回は説明回………だけかと思いきや、急展開です」

エルト「管理局の施設をアルブが強襲。そしてアルテミスの登場か」

神崎「ここで1つ断っておきますが、神崎は神々の名を表面的な情報でしか使わないため、あまり神話での詳しい話とか持ち出されると解らない場合があります」

エルト「少しずつ調べていきながら物語に反映していくつもりですよだから、許してやってほしい」

神崎「さて、今回は各所でのバトル。人に変身したアルブとの戦闘に入ります」

エルト「ハヴオックを早く取り戻したいところだが————」

神崎「原作キャラたちの活躍にもご期待あれ。それでは次回、『迎撃戦』」

エルト「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 4 迎撃戦

「ど、どうなってるの……………?」

誰が声を漏らしたか、呆けたようなその声に反応するように、見紛う程精巧に人間へと変身したアルブが、ゆっくりとした足取りで迫る。

その仕草に人型としての違和感はなく————むしろ、違和感のないこと自体が不自然に、一同の目に怪しく映る。

「くっ……………ソフィア! 呆けていないで、シールドの強度を上げなさい!」

「……………ふえっ!? ひゃ、ひゃい! 了解しました!」

呆気にとられていたソフィアはレヴィンの言葉に我に返り、シールドへ魔力を注ぎ始めた。

アルブの1体、女性の形をしたそれがシールドに触れ、弾き飛ばされる。

「ふええええっ、ごめんなさあーい!」

「お、落ち着いてソフィア! あれ、アルブやから!」

「でも捜査官! あのアルブ、受付にいた人そっくりですよ!!」
「?」

涙目でそう訴えるソフィアの言っているとおり、今シールドに弾かれたアルブの姿は、この管理局施設の受付にいた女性にそっくりな姿をしているのだ。落ち着けという方が無理かもしれない。

身体にぴっちりとしたボディースーツを着用している以外では、全く本人に違いがないのだから。

その間にも、ソフィアがシールドで侵攻を食い止めている間に、レヴィンのアサルトビットから放たれる熱線が、アルブをたちどころに貫いていく。

そうして、後少しで全てのアルブが殲滅できるかというところで、アルブたちに更なる変化が起きた。

「ちょ、ちょっと………!!」

「もしかして、あれって………!!?」

スバルとティアナが引き攣った声をあげる視線の先にあるのは――
――手甲をはめた格好をした、アルブの姿。

しかも、ただの手甲ではない。

そう。それはまさに――――。

「まさか、マツハキヤリバーを真似したんか!？」

スバルのマツハキヤリバーに、非常に酷似していた。

「来るぞ!」

レヴィンが叫び、同時にスバルのリボルバーナックルによく似た手甲（以下、擬似リボルバーナックルと呼称）をアルブがシールドへ打ち付けてくる。

「はわっ!?!」

突然明らかに強まった衝撃に、ソフィアが吹き飛ばされそうになりながらもなんとか堪えた。

その横から、再び同じ様にレヴィンがアサルトビットでアルブを打ち抜いていく。

シールドの内側にいて何も出来ないはやてやスバル、ティアナは、その目まぐるしい乱舞を緊張の面持ちで見つめていた。

「これで……………最後!」

擬似リボルバーナックルを振り被っていた最後の一体を返り討ちに沈め、崩れ落ちるのを確認すると、ソフィアはシールドを解除した。

「はふうー、疲れた……………」

さすがに長時間シールドを張っているのは疲れるのか、そう言っソフィアは項垂れる。

「お疲れ様や、ソフィア」

「八神捜査官。ここにアルブが現れたということは……………」

「せやね。フェイト執務官の方にも、向かってる可能性がある」

この建物にアルブが侵入したということは、襲われているのが自分達だけとは限らない。

仮眠室へ向かったフェイトと、そこで寝ているエルトにも危険が及ぶ可能性は充分に考えられた。

だが。

「八神捜査官。彼女らも気付いていれば、脱出すべく外を目指すはず。とりあえずは、ロビーを目指しましょう」

「妥当やな。よし。総員！ これより、アルブを掃討しつつフェイト執務官と保護中の少年を確保。この施設を脱出します！」

「「「了解！」「」」」

一瞬にしてセットアップを済ませ、5人は駆ける。

フェイトとエルト、2人の無事を祈りながら。

Episode 4
迎撃戦

「クリームゾン、バスタアアアアアー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「サンダースマッシュャー！」

真紅と黄金の閃光が爆ぜ、射線上にいるアルブ達が消し飛んでいく。

仮眠室を離れたフェイトとエルトは、アルブを蹴散らしながらはやて達のいる部屋を目指していた。

室内であることも考えて大技の連発は避け、小技の魔力弾で確実に一体一体を消し飛ばしながら前へ、前へと進んでいく。

今互いに砲撃を放ったのは、周囲を囲んでいたアルブを一掃するためにはやむを得ない行動だった。

事実砲撃はアルブを巻き込んだだけでなくその先にあつた壁をも貫通している。

これ以上撃つては、この建物自体が崩れかねない。

「……………きりがないな」

「そうだね……………」

背中を合わせながら、エルトとフェイトは毒づく。

排気口から、通路の先から、アルブはまるで大量発生した蟲のように次から次へと湧いてくる。

エルトは病み上がりな上に魔力が完全には戻っておらず、それをフオローしながらのフェイトもまた長期戦は難しい。

一刻も早く彼のデバイスであるハヴォックを回収、はやて達と合流して脱出したいところではあるのだが――――。

「こう数が多くては、進むのも一苦労だ、な！」

魔力弾を素早く人差し指の先へ形成し、新たに物影から襲い掛かるうとしていたアルブを打ち抜く。

「そうだ、ね！」

今度はフェイトが、エルトの言葉に返事を返しながらフォトンランサーを形成し、槍のような一撃が、エルトを背後から狙っていたアルブを蜂の巣にした。

「急ごう。もう少し行った先に、デバイスルームがあるはずだから」

「了解した」

アルブを正確に、1撃で吹き飛ばしながら進み、フェイトは訝しげ

に顔を顰める。

ここまで来る道中、アルブには嫌という程遭遇したが、この施設に常駐しているはずの管理局員には1人として出くわすことがない。

皆やられてしまったのだろうか。そんな嫌な予感がフェイトの頭を過ぎる。

信じたくはないが、ここまで閑散としていっていると、それも頭に入れて行動しなくてはならない。

戦力に考えられる頭数があるのといないのでは、取るべき行動も変わってきてしまうのだから。

「ここか」

ぼうっと考え込んでいると、いつの間にかついていたらしい。

立ち止まり上を見上げるエルトの視線の先を辿ると、デバイスルームと書かれたボードが張られていた。

しかし。

「……………邪魔者がいるか」

デバイスルームの前にいたのは、中型アルブの群れだった。

「ここは私が……………」

「いや、君には余力を残しておいて貰いたい。……………僕が行こう」

あ、ちよつと、と声を発するフェイトも無視して、エルトは威嚇の一撃を床へ発射した。

衝撃にアルブもエルトに気付き、デバイスルームへの攻撃を取りやめてエルトの方を向く。

その隙にフェイトがデバイスルームの扉を開け、中へと押し入った。すると。

「た、助けが来たぞ！」

「え？」

中には、数人の局員が残っていた。

奥の方では女性局員数人が固まって震えており、フェイトの正面には屈強な男性局員が立ったまま目をぱちくりとさせている。

どうやらこの男達が、アルブの攻撃から扉を守っていたらしい。

「フェイトⅡTⅡハラOWN執務官でいらっしゃいますか？」

その内の1人がそう訊ねるので、フェイトは頷いて答えると、男達はほっと肩を下ろし、女性局員達も揃って胸を撫で下ろしていた。

「急ぎましょう。ここを早く脱出しないと」

「は、はい！」

男性局員は敬礼すると、数人で腰が抜けて歩けない女性職員を担いで歩いていく。

その隙に、ポッドに浮かんでいる待機モードである指輪型になったハヴォックを掴み、フェイトが最後に外へ出た。

「フェイト！」

廊下へ出ると、見えたのはアルブ数体の残骸と、未だ健在な2体のアルブと対峙するエルト。

「エルト、逃げよう！」

「ああ！」

目晦ましに魔力弾数発をアルブの足元へ投げつけ、その隙に局員達を連れてさっと逃げ去っていく。

完璧なコンビネーションを見せる2人は、いつの間にか互いを名前で呼んでいることに気付かなかった。

一方、はやて達も善戦していた。

こちらにも建物が崩れないよう配慮して、なるべく威力の高い砲撃の使用は避けながら進む。

しかし、戦力的に不足しているエルトとフェイトの側と違い、はやて達の側には嘗ての機動六課スターズの2人に加え、はやてとフェイトが選んだ精鋭であるレヴィンとソフィアの4人がいる。

人型に変形し、進化したアルブといえど敵ではなかった。

擬似リボルバーナックルを装着した？人間？が、無機質な瞳を向けて襲い掛かってくる。

「アサルトビット！」

「クロスファイアー……シュートッ！」

アサルトビットがあらゆるアングルからアルブへ風穴を開け、正面からティアナのクロスファイアが吹き飛ばす。

襲い掛かってきた人型アルブ達は、擬似リボルバーナックルを振り被った体勢のまま、白銀の欠片となって崩れ落ちた。

その間を風のように走り抜けて、はやて達は一路、ロビーを目指す。

「くっ、数が多い……………」

毒づくティアナに、はやては自らの無力を噛締める。

彼女の得意な広域殲滅魔法は、開けた空間でのみ効果を充分に発揮する。

建物の中のような閉鎖空間では、敵だけでなく味方まで巻き込んでしまう可能性が高いのだ。

戦闘に参加できない無力さは、相当のものだろう。

「あと少しでロビーや。皆、頑張ってな！」

「「「はい！」「」」

返事をし、最後に現れた中型のアルブへ向けて、魔力弾の雨を降らせ一気に走りぬける。

そうしていいよ、出口のある正面ロビーへ辿り着いたが――――

「なっ!？」

「これは……………」

そこで一行が目にしたものは、想像を絶するものだった。

大きさは、優に人間の遙か3，4倍。

まるでロボットのような金属質の人型の背には、数個の板状の物体。まさにアルブの巨人と呼ぶべき存在が、そこに鎮座していた。

「お、親玉登場ってわけ……………」

「お、おおお大き過ぎですよ！！？」

呆然と呟くスバルの声に、ソフィアが完全に冷静さを見失った声で叫ぶ。

声にこそ出ていないが、はやてとティアナも言葉を失い、レヴィンは憎しみすら宿っていそうな目で睨みつけていた。

「と、とにかくこいつをなんとかせな、ここから脱出するんは難しそうやな……………」

漸く我に返ったはやては、苦虫を噛み潰したような顔で毒づく。

ここまで来る道中、非常口も大量のアルブで固められていた。ここを突破するしか、現状の戦力で打てる手立てはない。

それにしても、大きい。

これまでも人間より少し大きい程度の中型アルブや、子供程度の大さきの小型アルブと幾度も遭遇してきた一行であったが、このレベルの——————呼称するなら、大型アルブとも呼ぶべき巨体を前にするのは初めての体験だ。

はやてですら、これまでの捜査で数回お目にかかった程度である。しかもそのいずれもが、広域殲滅魔法で尽く消し去ることの出来るような状況下であったため、これほどの閉所でこの巨軀と対峙するのは、こちらもまた初。

全くの未知の存在を前に、はやて達は一瞬呆然と固まっていた。

その隙に、大型アルブがその人を軽々掴み上げることの出来る巨大な拳を繰り出した。

「うわわっ!？」

間一髪、ソフィアのシールドが間に合い、半透明の障壁とアルブの拳とかせめぎ合い、振動が大気を揺るがす。

「あ、うう……………」

衝撃のフィードバックに、呻くソフィア。

さすがにこれほどの巨体ともなれば、その膂力は計り知れないものがあったらしい。

1回、また1回と打ち付けられると、アルブ達にも傷1つ付けられなかったソフィアのシールドが軋み始めた。

「くっ…………行けっ!」

シールドを单身抜け、アサルトビットを展開し反撃する。シャープな動きでアルブを取り囲んだアサルトビットが、一斉に火を吹いた。

「やった！」

「…………いや、効いてない！」

歓声を上げたティアナが「え!？」と声を上げる前に、アサルトビットから放たれた光条に貫かれたはずのアルバの巨軀が動く。

風穴を開けながらもその拳を———今度は擬似リボルバーナックルのはまった方のそれを、シールドへ向けて振り下ろした。

「なっ…………ちいっ！」

呆氣にとられたのも一瞬。レヴィンはビットを拳の向かう先に割り込むようにして、数個を円形になるようにして展開すると、その内側に半透明のシールドが出現した。

アルバの拳はビットの作り出したシールドとせめぎ合うと、やがてそれを打ち破り、ソフィアのシールドへ当たって漸く弾かれる。

「ぐうっ!? くっ、これほどとはっ……………！」

「レヴィン、無茶せんでええ！」

はやての叫びに、舌打ちを残しながらもアサルトビットを回収し、レヴィンはシールドの内側に下がる。

その直後ティアナがフェイクシルエットを展開して、ソフィアを休ませた。

「はあ、はあ……………」

ここまで強固なシールドを展開させ、敵の攻撃に耐え続けたソフィアは肩で息をしながら、幻影に惑わされているアルブを見上げ息をつく。

他にも常に最前線でアルブの盾になっていたスバルや、幻影でそのフォローをしていたティアナにも、疲労が溜まっている。

実質消耗が少ないのは、ブラッディダガーを主に使っていたはやてくらいのものか。

「ティアナ、下がって！ 私が代わる！」

「解りました！」

各自の消耗具合を把握したはやてが叫び、ティアナが下がる。

同時にフェイクシルエットが消え、アルブに位置が気付かれた。

その前に、ティアナと入れ替わるようにはやてが前へ出て、デバイス、シュベルトクロイツへ命じた。

「シュベルトクロイツ、エクストラドライブ！」

『Extra drive, get set.』

はやての身体が光に包まれ、より法衣に近いバリアジャケットへと変化する。

八神はやてのエクストラドライブと呼ばれる最強形態、ルシフェル

フォームだ。

「でえいっ！」

掛け声と共に振りかざされる錫杖が、白濁色のシールドを作り出す。ソフィアの使うフォーレストシールドより範囲は狭いが、その分強固な硬さを誇るそのシールドが、一行を包み込みアルブの拳から守った。

「ふう、これで一安心やな」

さすがにはやてのシールドはアルブも簡単には抜くことが出来ないようだが、振動が未だ伝わってくる。

「でもこのままじゃジリ貧や。かといって魔力弾クラスの弱攻撃じゃ太刀打ち出来ひん。せめて、砲撃クラスの攻撃でないと……………」

しかし、それが出来ないからこそ今まで魔力弾で対応してきたのだ。入り口へ向かって放てば施設倒壊の危険性は低いかもしれないが、外に市民がいた場合それをも巻き込んでしまう恐れがある。

「応援呼んどるから、もう少し耐えることができれば、外の市民を避難させた上で砲撃で薙ぎ払える。後少し耐えよか」

「でも……………！」

スバルが不安げにシールドを見上げる。

はやてのエクストラドライブほどのシールドであるから、そう簡単に抜かれない。
それは解っていても、はやての体力が持つかがやはり不安になってくる。

消耗が一番少ないとはいえ、彼女も全く消耗していないわけではないのだから。

それでも、はやては首を振る。

大丈夫だ、と。

「今きついんは皆一緒や。大丈夫、守ってみせる」

はやてはそう言って、毅然と前を見る。

相変わらずアルブが拳を打ち付けるが、はやての張ったシールドを抜くには至らない。

このまま持ちこたえられるか。
そう思った一同だったが――――。

「！ あれはっ!？」

「…………おのれえっ……………!」

驚くティアナと怒るレヴィンの視線の先で、アルブの背後に浮かんだ板状の構造物がひとりでに動き出し、こちらへ狙いを定める。

「アサルトビット!？」

「まさか……………!」

驚愕する一同を他所に、アルブの両拳に加え、ビット、更にその口元までも光が集っていく。

「まさか、砲撃……………!?!」

「……………くっ!」

呆然と呟くように絞り出すスバルの声にはやての焦りが混じり、途端……………。

「ウオオオオオオオオ!」

……………掃射が始まった。

アサルトビットから魔力ビームが、口からは砲撃が。

そして両拳からは、先程から驚く程の臂力を見せ付けてきた一撃が放たれる。

シールドはその全てを受け止め、防ぎ、霧散させ、弾く。

だが……………全てを受けている内に、シールドに段々と罅が入り始める。

元々管理局随一の硬さを誇る高町なのはや、補助魔法のエキスパートである魔導師、シャル程のシールドであれば防ぎきれたかもしれないが、いくらエクストラドライブといえど、はやての得意なバトルスタイルは広域殲滅。

これほどの攻撃とまともに打ち合えるほどの打たれ強さはない。

「ふお、フォーレストシールド！」

さすがに危ないと判断したか、ソフィアが2重にシールドを張って応戦する。

しかしそれに反し、罅は段々と蜘蛛の巣状に広がっていき―――
―――ついに、砕け散った。

（もう、駄目……………）

諦めかけ、誰もが来るであろう攻撃に目を閉じかけた、その時―――
―――。

ドガアアアアアアアアアン！

「えっ!？」

爆炎の上がる音が耳に入り、驚いたように顔を上げると、そこには
―――。

「ふう。間に合ったね」

白い裾をマントのようにはためかせ、金の髪を靡かせた、フェイトの姿があった。

彼女の周囲には黄金の魔力球が浮かんでおり、アルブのアサルトビットからは煙が上がっていて、それらの状況が、フェイトがフォトランサーでアサルトビットを撃ち落したのであることを示していた。

「フェイトちゃん！」

「はやて、お待たせ」

舞い降りたフェイトははやてへ駆け寄り、軽い治癒魔法をかける。

その隙に、体勢を立て直したアルブが両腕を振り上げ――――。

「危ないっ！」

ティアナが叫びを上げるが、しかしフェイトは動かない。

「大丈夫」

そう凜と言い放つ彼女の声音には、

「彼が、一緒だから」

信頼が、はっきりと現れていた。

突如現れた2つ目の影。

紅い流れるような軌跡を描きながら現れたそれは、ライフルの銃口を前へと突き出し――――その力を解き放つ！

「あああああああああつ！」

放たれた真紅の砲撃は、アルブの両腕を焼き尽くす灼熱の劫火。

まるで元からそこには何もなかったかのように綺麗さっぱりと腕が吹き飛び、アルブの体勢が前のめりに崩れた。

「建物に影響なし。上出来だ、ハヴォック」

『Yes！（おうよ！）』

「あ、あの……………」

突然の見知らぬ乱入者に、スバルがおそるおそる話しかけようとするが。

「君達が、フェイトの言っていた協力者か。僕の名はエルト＝クリーバーだ。よろしく」

「あ、ええ……………こちらこそ」

そちらも見ずに行われた自己紹介に、はやてはスバルに負けないほど呆然としつつ、そう返事を返す。

エルトの視線は、ずっとアルブへと向いたままだった。

だが唐突にアルブが動き出したのを契機に、エルトはさて、と声をあげ、ライフル形態のハヴォックを構える。

黒地にレッドのラインが入ったダークなデザインの銃の銃口が、まるで腕を失った苦しみに呻くようにくねるアルブの身体を捉えた。

「ハヴォック。砲撃を使わずにこの巨体を吹き飛ばす方法は？」

『I think it is ? Crimson prisoner. (クリムゾンプリズナー、だろうな)』

「やはりそれしかないか……………」

だがやむを得まい、とエルトはハヴォックをアルブへ向けたまま、左手を頭上へ突き出す。

膨大な真紅の魔力の奔流が、渦を巻きながらたった1つの魔力球へと凝縮していく。

ハヴォックと共に膨大ともいえる演算をこなしながら、エルトは背後のフェイト達へ叫んだ。

「その君達！ 消し炭になりたくなければ、シールドを展開しておけ！！」

「え、それってどういう……………？」

困惑するスバル、ティアナ、ソフィアの3人だったが、意図に気付いたフェイトと、それに気付かずとも何かするのだと察したはやて、レヴィンの3人は、それぞれの持てる出力を振り絞ってシールドを張った。

それを見届けると、エルトは小さく、誰にも聞こえないような声で、手に握る相棒へと告げる。

「すまない、ハヴォック」

『Don't care. (気にするな)』

軽く、相棒を諭すかの如く言うハヴォックへエルトは珍しくも申し訳なさそうに苦笑し、きつとアルブを見上げると、吠えた。

「全てを灰にしてやる……………クリムゾン、プリズナアアアア
—————ッ！」

投げつけられる、膨大な炎のエネルギーを孕んだ魔力弾。

魔力弾はアルブの巨軀に直撃すると、その力を一気に爆発させた。

まるで空気の入り切らなくなった風船が破裂するように一気に膨張すると、アルブの身体全体を灼熱の焔で包み込む！

「アア、アアアアアアアア……………」

声とも言えない悲鳴を上げて、アルブが段々とその身体を崩壊させていく。

永遠に燃えつつける錯覚すら与える、灼熱の焔。

その蹂躪は、アルブが完全に形を失うまで続いたという—————。

「全く、無茶するやっちなあ」

脱出後、応援に駆けつけた近隣の管理局員によって、施設内の全てのアルブは掃討された。

今彼らはその外に出て、束の間の休息をとっている。

今の言葉は、遠くで揃って談笑しているスバルやティアナ、ソフィアの姿を遠目に見ながら、呆れたように、しかしどこか面白そうに苦笑していたはやてが発したものであった。

フェイトとレヴィンは、この場を引き継いでくれる局員への報告を行っており、忙しなく動き回っている。

はやての言葉に、エルトは返事を返さない。

その視線は、じっと、半壊した指輪——彼の相棒であったはずのものへ向けられていた。

コアはその輝くのをやめ、そこからあの軽い声が飛び出すこともない。

「……………すまんかったな。まさか、そうなるとは思ってもみいひんかったし……………」

「……………いや、構わない。あれは、ハヴォックと僕が2人で決めたことだ。それに、AI部分が無事な以上、修復が不可能なわけではない」

「まあ、そうなんやろうけど……………」

無機質にそう喋るエルトに、またも苦笑しながらはやては言う。

「それで……………エルト君、やったよね？」

「ああ、そうだが」

「あんな？　よければ……………本当に、エルト君がよければなんやけど……………」

それまでの苦笑も形を潜め、真顔で話すはやてに、エルトもまた相應の態度で話に聞き入った。

「エルト君、機動六課に……………私達の部隊に、入る気あらへん？」

「……………何？」

怪訝そうに眉根を寄せるエルトに、はやては刺激しないように心がけながら尚も続ける。

「エルト君の戦闘能力は、大したものやと思う。あれなら、六課に

入っても十分過ぎるほどやっていけるし、状況判断能力も確かや。それに六課に入ってくれさえすれば、エルト君の身の安全、衣食住、可能な限り援助したる。フェイトちゃんに聞いたんやけど、行き場も路銀もないそうやないか」

はやての言葉にはっとエルトがフェイトの方を見やると、申し訳なさそうに手を合わせてくる。

どうやら彼女が喋ったことは間違いなさそうだが、気にはならない。元より彼女は信頼に足る人物であろうことはこの施設での戦いではつきりしたし、初めて出会った遺跡では見ず知らずの自分を助けてくれたのだから。

だから、彼女が情報を話した目の前の女性もまた、信頼に足る人物なのだろうと、楽観的にも考えたのだ。

———少々楽観的過ぎる気もするが、衣食住に困っているのもまた事実。

細かいことを考えている余裕はないし、背に腹は変えられない。

だから、エルトの答えも決まっていた。

「……………いいだろう。エルト＝クリーバー、機動六課とやらに協力させてもらおう」

「ほんまか！？　ありがとう！」

先程までの真剣な眼差しはどこへやら、ころっと態度を変え、ぱあっと顔を輝かせて手など握ってくるはやてに、エルトは複雑な表情

を浮かべるしかなかった。

Episode 4 迎撃戦（後書き）

く神の黄昏く

神崎「難産でした！」

エルト「のっけから何を叫んでいる、この駄作者は。読者の皆様、エルトⅡクリーバーです」

神崎「元旦に更新すると言ったのに、ここまで時間がかかってしまいました……なんとお詫びを申し上げればよいやら」

エルト「まあ、君の？予定は未定？は今に始まったことではないから、別にどうとも思わないが。今回遅れた理由は、本編の難産具合だけではないのだろうか？」

神崎「そうなんです！ えー……ごほん。読者の皆様、お待たせしました。ついに今回！ オリジナルキャラクター当選者を発表いたします！」

エルト「漸くか。待ちくたびれたぞ」

神崎「それを選定してて遅くなったのもあるんだよねえ。えーとですね、今回はレギュラー出演3名、準レギュラー出演4名、非公開のゲスト出演枠1名の方向で考えさせていただきました！ 細かい口上とかいちいちいらなと思うので、早々に当選者の発表に参りたいと思います！」

エルト「当選者は……以下のとおりです」

○ レギュラー出演

マリサⅡネティアス ご提供…秋風先生

クロガネⅡアオイ（ミッド名称、アオイⅡクロガネ） ご提供…綾崎先生

ハイドⅡクリューゲル ご提供…黒衣を纏う執行者先生

○準レギュラー出演

カガミチⅡジェントラル ご提供…ヴィランズ先生

ヴェルグⅡアーマライト ご提供…デフォルト先生

イディアⅡファルス ご提供…U，T先生

アクティⅡボレアス ご提供…イツキ先生

神崎「……………」と、なりました！」

エルト「レギュラー出演は常に六課と共に。準レギュラー出演は、常にとりより時々参戦してくる扱いになる。StrikerS本編で言えば、前者はフォワード、後者は108部隊や聖王教会辺り

の位置づけになるだろうな。…………まあ、出番はそれ以上に多いと思うが」

神崎「実質六課とは別行動というだけで、結構接点は多くなるしね。後ゲスト出演は一度きりの出演となりますが、これはその時まで非公開とさせていただきます。…………というわけで。相当迷いましたが、こんな感じで纏まりましたので、ここにご報告させていただきます」

エルト「次回から、レギュラー組はいよいよ本格的に登場することになる。期待していてくれ」

神崎「それでは、また次回にご期待あれ♪ 次回、『集いし勇士』」

エルト「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 5 集いし勇士

その日は、よく晴れていた。

雲1つない晴天で日頃もよく、暑くもなく寒くもないぽかぽかとした陽気と、強すぎない程度の暖かな日差しが、心地よい眠気を誘う。

そんな絶好の日和の下、1人の女性がコンクリートの道を歩いていた。

彼女が纏うは、茶の色をした制服。

管理局局員の証たるその制服を身に纏ったその女性は、1つの建物の前で立ち止まり、聳え立つその建物を見上げた。

「ここね、ドラウプニル。私達の、新しい部隊」

『Yes, mum.』

見上げるその目に映りしは、憧憬か、それとも。

新たな舞台の幕開けに、女は何を思い、何を望むのだろうか――――。

Episode 5 集いし勇士

「マリサ||ネティアス二等空尉。訓練校を卒業後、様々な部隊を転々としつともひとところに留まることなく、しかしそれぞれの部隊で着実に戦果を上げる。使用デバイスは、インテリジェントタイプの二丁拳銃。希少技能あり……と。これで、間違いないか？」

「はっ。間違いありません」

機動六課の部隊長室。

3年前に旧機動六課が解散した後も解体されることなくそのまま保存されていた隊舎は、戦闘機人の襲撃を受けた際の傷痕も綺麗さっぱり修繕された上に、ここ数日の間で清掃や整備が施され、新築同然の様相を呈していた。

その、ピカピカに磨かれた部隊長室にて対峙しているのは、旧機動六課に引き続いて部隊長を務める八神はやて二等空佐と、この度新

生機動六課において六課に出向することになった女性、マリサ・ネティアス二等空尉だ。

はやての目の前にあるモニターには、今日の前にいる、ウェーブのかかった金のロングヘアに、若干釣った黄色の目をした女性の顔写真と個人情報映し出されている。

そのモニターを消し、はやてはマリサへ向き直った。

「よし、ほんなら他の？ウイング？のメンバーにも確認したいんやけど……他のメンバーは？」

「解りません。全く、時間をなんだと思っているのか……」

「遅くなってすまなかった」

後ろから聞こえてきた声に、マリサは振り向き、はやてはそちらへ視線を移す。

そこにいたのは、紅い短髪の青年と、その手につながれた1人の少女。

「本当に遅かったな。一体どこ行ってたん？」

「……この状態を見れば、大体は想像はつくのではないかと思うが」

言って、溜め息をつきながら青年、エルトが歩み寄ると、その手を握っていた少女がつかつかと2人の下へ歩いて行って、敬礼した。

「本日付で機動六課に出向となった、アオイⅡクロガネじゃ。宜しく頼む」

「は……………」

「こんな、子供が……………」

自分より1周りも2周りも小さく、可愛い少女がそんなことを舌足らずに述べるものだから、はやては固まり、マリサも訝しげに少女を見やる。

「何じゃ、その目は？」

「いや……………あんな？ どこから来たん？ ちょう考えて思い出してみ？」

「うちは迷子じゃなーーーーーい！」

「ここは保育園じゃないわよ？」

「僕はベビーシッターじゃない」

はやてとマリサが放ったボケに、アオイは激しく、エルトは丁寧に反論を返す。

ボケとは言ったが2人は半分本気であり、ここに何故このような子供がいるのか甚だ疑問だったのだ。

しかし、そこではやてが、先ほど彼女が言った言葉を思い出して、はっとした。

「ちょお待ち。今、アオイⅡクロガネ言うた？」

「じゃから、さっきからそう言うておろう」

不思議そうにきよんとする、アオイとマリサが―――否、アオイの方は少しばかりの怒りを込めた引き攣った顔で―――首を傾げるその先で、はやてはいそいそとモニターを弄り―――そして、冷や汗などだらだらとかき始めた。

そして。

「し、失礼しましたあああああ―――！
」

そう大声で叫びながら土下座した。

―――デスクの上で、だが。

「うむ、解ればよいのじゃ」

漸く解って貰えた嬉しさの反動か、得意げに小さな胸を反らしたアオイに、要領を得ないマリサは未だ首を傾げるのみ。

その隣にいつの間にか立っていたエルトが、そっと捕捉した。

「彼女の名はアオイⅡクロガネ。神殺しの神官の家系だそうだ。階級だけで言えば、君よりも上のはずだ」

「嘘っ!？」

短い驚愕の叫びを上げ、マリサは信じられない様子のオーバリアクションでアオイを見ると、彼女の方もそれに気付き、はやての方へ向けて反っていた胸をマリサへと向けた。

「はぁ。ほんま済んませんでした。まさかこんな子供やとは思わず……」

「うちはこどもじゃなーいーぞー！」

「わわっ、すいません！」

「……………八神二佐、案外学習しませんね……………」

ついまた？子供？と口を滑らせてしまって、怒るアオイに慌てて謝るはやて。

それにマリサは呆れたように溜め息をつくが、これではいつまで経っても話が進まない。

自分も溜め息をつきたくなるのを抑え、エルトはアオイへ言う。

「アオイ。君の気持ちは解らなくはないが、これではいつまで経っても話が進まない。ここは堪えてくれ」

「う、うむ。そうじゃな。済まなかった」

アオイも話の腰を折っているのは自覚していたのか、怒りを収めて聞く体勢に入る。

そんなアオイの姿を見てほっと息をつき、はやては心の中で密かにエルトに感謝しながら、話を切り出した。

「ふう。さて、そういうわけで、これでウイングの隊員は皆揃ったわけやな」

「そうですね。ですが、他の隊は5名はいるというのに、3人だけですか？」

「それに、僕は民間協力者だから常にウイングのためにいられるわけじゃないぞ？ 実質、隊員は2人ということになってしまう」

「それについては……まあ、目をつけとる子がいないこともないんやけどな……」

「何か問題でもあるのかの？」

なんとなく歯切れの悪いはやての様子を不思議に思う一同だが、はやては首を横に振って、

「まあ、その辺りは追々な。……さて、そろそろ式の時間や。皆、行くで」

「ああ」

「了解なのじゃ」

「了解」

三者三様の返事を返す新分隊？ウイング？のメンバーに、新たな戦

いの始まりを感じ、身の引き締まる思いのするはやてであった。

「始まったね……新しい機動六課」

式は、滞りなく終了した。

今、先ほどまでウイングのメンバーを集めていた部隊長室には、はやて、フェイトに加え、教導隊からの移籍の決まった高町なのはの姿があった。

上記の感慨深げな言葉も、彼女が発したものである。

「せやな。いろいろと問題もあったけど、上層部も前回のL・P事件の教訓とか、アルブの危険性とかちらつかせたら、多少無茶な詰め込みでも大目に見てくれたわ」

「前以上にインフレが凄いもんね、今回の六課は」

はやてとフェイトの言うように、新生機動六課は前回以上にパワーインフレが激しかった。

マリサ、アオイ、エルトを抱える新たな分隊、ウイング分隊を始めとして、旧機動六課から引き継いだスターズ、ライトニングの両部隊には、それぞれ隊長補佐としてレヴィン、ソフィアが就くことになった。

隊長・副隊長は旧機動六課に引き続き、スターズはなのはにヴィータ、ライトニングはフェイトにシグナムが務める。

ちなみに、ウイング分隊では副隊長をマリサが務め、隊長ははやてが部隊長やロングアーチと兼任することとなった。

とはいえはやて本人が現場に出ることはあまりないから、副隊長に相応しい人員が見つかるまでは、現場指揮官はマリサということになるが。

とにかく、これほどの戦力を抱え、明らかに部隊の保有できる魔導師ランクの制限を越えている今回の部隊が上層部に容認されたのは、はやての言ったとおり、過去のL・P事件の恐怖と現在のアルブの脅威が、半ば強引に上層部を動かしたからに他ならない。

無論、もし未曾有の脅威が訪れた場合、全てを六課に押し付けなければならないという安易な考えによるものであろうことは、言うまでもないことだが。

それは彼女らにも解っていたが、むしろ部隊を成立させるいい口実となったため、都合がいいことこの上ない。

どの道、アルブやその他の脅威に対抗するべく設立したことは間違いないのだから。

「それで、今回も訓練はするの？」

「勿論や。まあ、私としては何もしないでほわ〜んとするのも楽でええけどな」

「もう、はやてったら」

呆れたように苦笑するフェイトに、3人に笑いが起こる。

久しぶりに出会った乙女3人、会話も弾んでいるようだ。

「そういえば、フェイトちゃんが保護したっていう子なんだけど……」

「エルト？」

「うん、そうそう。エルト君」

エルトに関しては、はやての方から六課再結成の通知と共になのにも知らせておいた。

だから、彼女が彼の存在を早くも知っていることは別段不思議なことではない。

「何者なんだろうねー……………」

「うーん、本人に直接訊くんが一番手っ取り早いんやろけど………すんなり教えてくれるとも思えへんしなあ………」

「デバイスもまだデバイスルームで修理中だしね。かなりの傷みたいで、フレーム全部変えなきゃいけないんだって。幸い部品は古いけど手に入らないこともないから、追々修理していく感じになるみたいだけど」

「フェイトちゃん………やけに詳しいやないか」

彼の現状をすらすらと述べてみせたフェイトに、はやてが意地の悪いニヤニヤとした笑みを浮かべてフェイトへ問う。

びくっ、と身を震わせてなのはを見ると、何やら彼女の方もはやてに負けず劣らずニヤニヤとした笑みをこちらへ向けてきた。

明らかに、弄る者の目だ。

「へーえ、フェイトちゃんがあの子にねえ………」

「そうなんよなのはちゃん。もうフェイトちゃんあの子にゾッコンでな？　もうあの子がいないと駄目やそうやで」

「ちよっ、違うよなのは！？　はやても！　そんな出鱈目言わないでよっ！」

なのはの面白いものを見つけたような視線に耐え切れなかったのか、それともはやての出鱈目な説明が恥ずかしかったのか、フェイトは顔を真っ赤にして弁明を図る。

が、それが一層2人の親友を煽ってしまっていることに彼女は気付かず、あたふたとするのみ。

まあ、気付いていたところでどうにかなるものでもないのだが。

「な、なのはだって！ 家にいる時はずっと四六時中リオスとイチヤイチヤしてるって聞いているよ！？」

「ふにゃああっ！？ 誰！？ 誰から聞いたのそんなことっ！！？」

「なのはちゃん……そんなの皆知ってるで？」

思わぬところから反撃をくらい、今度はなのはの顔が真っ赤になった。

はやてはそれを冷静にツツコンでいるが――――。

「はやてだって！ もう相手いないんじゃないかって皆噂してるよ！！？」

「ちょおっ！？ そんなこと誰が言ってたん！！？ それにそんなの余計なお世話やっ！！」

こちらも予想の斜め上な場所からの反撃をくらい、素っ頓狂な声を上げた。

そうして暫くぎゃあぎゃああと喚いて賑やかであった部隊長室のドアの外では。

「……………何を騒いでいるんだ、彼女達は……………」

呆れ顔をしながら、入りづらそうに戸口に立つ、エルトの姿があったそう。

「ごめんねエルト。なのはもはやても悪気があったわけじゃないんだけど……………」

エルトと2人の道すがら、フェイトは申し訳なさにそう謝った。

だが、エルトはそ知らぬ顔で溜め息をついて口を開く。

「別に、気にしてはいないさ。そんなことより、僕に新しいデバイスをくれるというのは本当なのか？」

そう。今2人が向かっているのは、デバイスルーム。

エルトが六課の民間協力者としてやっていくために必要な新たなデバイス、そこで受け取る手はずになっているのだ。

エルトとしては使い慣れたハヴォックの方がよかったが、ない物強請りをしてもし方がないし、修理が終わるまでは代わりのデバイスで済ませなければならぬ。

「本当だよ。ちょっと時間はなかったけど、シャーリーが頑張ってくれたんだ」

「デバイスマスターだという者か。無理をさせてしまったようだな」

「ううん、久しぶりに腕が鳴る！って喜んだ」

そうフェイトが言うと、エルトはそつと微笑を浮かべた。

相棒がまだ戻ってこないとはいえ、やはり新しいデバイスともなれば嬉しくないわけがない。

いや、それだけではない。

まだ会って間もない自分のためにそこまでしてくれたということが、嬉しかったのだ。

これなら、信用できるかもしれない。

エルトの彼女らに対する信頼は、固まりつつあった。

「さあ、ここだよ」

フェイトがノックをして入っていくのに、我に返ったエルトも後に続く。

2人が入っていくと、茶の長いストレートの髪に、眼鏡をかけた女性時計器から視線を外して振り返った。

「シャーリー」

「あ、フェイトさん。お久しぶりです！」

振り返った彼女は、嬉しそうに微笑んで立ち上がり、フェイトの手を包むように握る。

おそらく、この女性が件のデバイスマスター、シャーリーなのだろうとエルトは推測した。

「貴方がエルトさんですね？ 私はシャリオ||フィニーノ。皆にはシャーリーって呼ばれてますから、エルトさんもそう呼んで下さい」

「了解した。よろしく頼む、シャーリー」

握手を交わした後、用を察したシャーリーはメンテナンスポッドの前まで移動する。

エルトとフェイトもその後が続くと、そこには2つのポッドが置かれていた。

1つは、修復中のハヴォックの入ったもの。相変わらず、痛々しい傷痕が残ったままだ。

そして、もう1つにはハヴォックに似た形状をした待機状態のデバイスが1つ。

「まず、ハヴォックというこのデバイスですが、コアは無事でした。しかし、大破した影響でフレームが全て破損してしまっていて、修復にはかなりの時間がかかると思います」

「仕方がないな。あの状態であればどの技を使えば、こうなることは目に見えていた。それを承知で使ったんだ。反論はしまい」

目を瞑り、自らの行動を思い返すエルト。

あそこでもしクリムゾンプリズナーを使わなければ、ハヴォックは大破に至らなかったかもしれない。

だが使っていなければ、増援が到着する前に彼らはアルブの餌食になっていたところだろう。

現場を見ていたフェイトにはそれが解っているから、別段彼を責める気にはならなかった。

事情を聞いていたシャーリーもそれを汲み取り、そして、とうとう1つのポッドに向き直る。

「これが、エルトさんの新デバイス。今出しますからね」

そう言って計器を操作すると、メンテナンスポッドから取り出された指輪を見つめた。

「ハヴォックは銃タイプのデバイスだということでしたので、その方が戦い易いと思ってこの子も銃タイプで設計しました。モードチェンジはアサルトライフル型、スナイパーライフル型、自律兵装型

の3種類用意してあります」

「凄いな……………この短期間でそこまでをこなすとは」

「しかも、自律兵装ってリオスのアサルトビットを改良したアレでしょ？ そんなものまで組み込んだじゃうなんて……………」

シャーリーの掌にふわふわと浮かんでいるデバイスの説明に、エルトとフェイトは舌を巻く。

彼のデバイスが大破した旨を伝え、修理とその間の新デバイスの調達を頼んだのはそう遠くない過去だというのに、よくもまあ、ここまで大層なものを用意できたものである。

「デバイスのためなら、たとえ火の中水の中！ 徹夜だって平気です♪」

「いや、ちゃんと寝ようよ……………」

フェイトが呆れたように呟く横で、エルトも呆れたように彼女を見る。

そして理解した。

ああ、？そういう人間？なのか、と。

見れば彼女の目の下には、薄らと隈が出来ていた。

「大丈夫ですよー。マリエル技官も手伝ってくださいましたし」

「マリーさん……………貴女まで」

そう呆れたように言いながら、フェイトの視線は反対方向の壁際のデスクで眠気眼を擦っている、緑色の髪をした女性へ向けられる。

なんというか————ワーカーホリックの多い部隊だな、とエルトは心の中で呟いた。

「さて、そういうわけでエルトさん。今、このデバイスには名称が登録されていません。せつかくですから、エルトさんが決めていただけませんか？」

「僕が？」

言いながらシャーリーが自らの掌に乗せた指輪に視線を移すと、エルトの問いに答えるかのように指輪の紅い宝石部分が明滅する。

それが、なんとなく彼には頷いているように思えて、エルトは思考を巡らせた。

そして————。

「……………そうだな。では……………決めた。バレル。今日からお前の名は、バレルだ」

『I confirmed your naming? Bartel? My master's name is Elt. Nice to meet you, my master. (名称?バレル?承認。マスターの名はエルト。初めまして、マスター)』

「ああ、これからよろしく頼む」

『All right. (仰せのままに)』

彼のデバイス——バレルと挨拶を交わしながら、微笑むエルトを横目に、彼らの間で信頼関係が芽生えるのを感じ、フェイトもつられたように微笑んだ。

「さて。それじゃあデバイスも受け取ったことだし、訓練場へ行こっか」

「それは構わないが……何かあるのか？」

「うーん、何があるかは私も聞かされてないんだけど、なのはが終わったら連れて来て、って」

「……バレル。早速だが、嫌な予感がするのだが」

『……Me too. (……私です)』

早くも冷や汗などかきながら嫌な顔をする1人と1機に、苦笑しつつも心の中で同意するしかないフェイトだった。

「エリオ！ キャロも！ 久しぶりだねー！」

「はい！」

「スバルさんも、お変わりないようで！」

式が終わった後、なのはに来るように言われていた訓練場で、旧フォワードメンバーは久しぶりの再会にわいていた。

スバルとティアナはこの前会ったばかりだが、エリオとキャロは辺境世界へ行っていたから、なかなか会う機会がなかったのだから、再会の喜びも一入だろう。

「それで、そちらのお2人も今回からフォワードの一員。そういうことね？」

「あ、はいです！」

ティアナの問いに元気よく返事をするソフィアの横で、腕を組んだまま黙って目を閉じているレヴィン。

頷いているということは、肯定しているのは間違いなさそうだが――

――。

「貴方も。そういうことなのかしら？」

「…………まあ、一応そういうことになりますかね」

嫌味を含んで肩を竦めるレヴィンに、スターズとライトニングだけでなく、傍にいたウイングの2人も、苦笑したり、顔を引き攣らせたりと三者三様の反応を返す。

しかしそれでも、一行が思っていたことは奇しくも同じだった。

この男とは、あまり仲良くなれそうにない、と。

仲良くなれないこともないが、あまり親密になれそうなのでもない、そんな印象だった。

「さて、そんなわけで今なのはさんを待っているわけなんだけど………」

「遅いわね。何やってるのかしら」

その場に降りた微妙な空気を払拭するべくティアナとマリサがそう呟くと、そこへタイミングよくお声がかかった。

「はい、皆揃ってる？」

「あ、なのはさん！ お久しぶりです！」

「うん、久しぶりだねスバル」

以前の教導官の制服に身を包んだなのは、スバルが嬉しそうにそう言う、なのも微笑んでそれに答えた。

「さてと。六課での訓練は始めての人もいると思うから、軽く説明した後、今日の訓練を始めるよ」

そう前置いて、なのははざっと六課での訓練メニューを説明する。

その間にも、フォワード達はストレッチを行い、いつ訓練が始まってもいいように体をほぐす。

そして、粗方説明が終わった後、じゃあ、と前置いてなのははバリアジャケットを装着する。

「そろそろ訓練に行こうか。……と、言いたいところなんだけど……」

言いながら、きよろきよろと辺りを見回すなのは。

その彼女の様子を不思議に思ったか、スバルがおずおずと訊ねた。

「あ、あの、なのはさん？ どなたかお探しですか？」

「うー……ん、まあ、ね……あ、来た来た！ おくくいい！！」

なのはが手を振った先を見ると、フェイトと並んでこちらへ歩いてくる男が1人。

エルトIIクリーバーだ。

「フェイトに聞いた。デバイスルームへ行ったら、訓練場へ行くよ
うにと」

「うん、そうだよ。うんうん、よく来てくれたねえ」

そう、妙に機嫌の良さそうな笑みを浮かべ、なのははエルトに笑い
かける。

それがなんだか不吉を告げているような気がして、エルトは数歩後
ずさる。

しかし、彼が後ろに下がるたびになのはがずいっと前に踏み出し、
両者の距離は縮まることこそあれ、開くことはなかった。

そして、ついに一気に距離を詰めたなのはがエルトの腕を掴み、宣
誓する。

「皆！ 今からエルト君の新デバイスの性能テストを兼ねて、エル
ト君とフェイトちゃんとの模擬戦をやるから、よく見ておくように
ね♪」

「「はあああああつ!?!」」

エルトと————まさか自分にもとばかりが来るとは思ってい
なかったフェイトは、同時に驚愕の声を上げる。

その声に振り向いたなのはのウインクに、先程デバイスルームで感
じた嫌な予感というのが的中したのを悟ったエルトであった。

Episode 5 集いし勇士（後書き）

く神の黄昏く

神崎「いやー、お待たせして申し訳ありません！ 難産でした！」

ソフィア「今回は私だよー♪ ふんふん、今回は説明回みたいなものののかなあ？」

神崎「そういうことになるね。まあ、次回は模擬戦という形でエルト&バレルの初戦闘なわけだけど」

ソフィア「きつと激しい戦いになるんだろうねー。どっちが勝つんだろー？」

神崎「まあ、そこは想像にお任せしますよ。そんなことより！ 今回は皆様から募集したキャラの内、秋風先生のマリサⅡネティアス、綾崎先生のアオイⅡクロガネの登場でした！」

ソフィア「アオイちゃんは可愛かったよねー？ マリサさんはなんだか怖そうだったけどおー」

神崎「まあ、そういうキャラだしね。仕方ないんですよ、うん」

ソフィア「慣れていくしかないんですかぁー……………？」

神崎「そういうことになりますね」

ソフィア「ぶーっ……………」

神崎「まあ、そうむくれないの（苦笑） さて、今回は読者の皆様に募集があります。ずばり、キャラクターCV！」

ソフィア「むむっ！ いよいよその時が来たんですね！ 私の声のイメージを可愛くしてもらおうこの時がつ！」

神崎「まあ、可愛くなるかは読者様の采配に任せるとして…………募集させていただくのは以下のキャラです」

- ・ エルトⅡクリーバー
- ・ ソフィアⅡジュリーストン
- ・ レヴィンⅡクレスヴェルグ
- ・ マリサⅡネティアス
- ・ アオイⅡクロガネ

神崎「お待ちしています！」

ソフィア「読者の皆さん！ どうか、可愛い声にしてくださいね♪」

神崎「どうか宜しくお願いします。さて、それでは次回予告。次回は、いよいよエルトとフェイトさんが模擬戦！ 高速戦闘 対 銃撃戦闘の戦いになりますね」

ソフィア「一見するとフェイト執務官…………じゃなかった、フェイトさんが有利に見えますけど……………」

神崎「まあ、そうなんだけどね。そこはホラ、いろいろとエルト自

身的能力で、ね？」

ソフィア「むーっ、またハンソク能力ですかあ……………」

神崎「だからむくれるなってば。ええと、そんなわけで次回、『力の証明』」

ソフィア「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 6 力の証明

「はぁ…………嫌な予感が当たってしまったな」

「あはは…………そうだね」

訓練場へ移動したエルトとフェイトの2人は、デバイスを手に向かい合っていた。

面倒そうに溜め息をつくエルトに、苦笑しつつもフェイトは同意する。

まさかとは思っていたが、よもや初日からこのような模擬戦をすることになるうとは思ってもよらない。

そんな2人の下に、なのはの声が響き渡る。

『それじゃ、模擬戦始めよっか』

「うん」

「了解した。バレル、セットアップ」

なのはの言葉に頷くフェイトは既にバルディッシュをセットアップしていたが、バレルは未だ待機状態のままであった。

『All right. Stand by ready.』

バレルのコアが発光し、エルトの身体に戦装束を、自らの姿をその得物へと変形させる。

「ほう……………」

その姿を見て、エルトは感嘆の声を漏らした。

黒のズボンに、黒のシャツ、そしてその上にはさらに黒のコート。

黒一色でありながら、その中にただ1色加えられた赤のラインがアクセントを加えている。

そんなバリアジャケットを身に纏う彼が持つのは、1丁のアサルトライフル型の銃。

外見はどこかハヴォックに似ているが、グリップの外部にはまるで手を保護するかのように装甲が加えられている。

バレル、ベークシックモード。多種多様なモード変更を可能にした、バレルの基本フォルムである。

エルトが関心した様子でいると、今度はシャーリーの声が響いた。

『どうかな、エルト君。気に入ってくれた?』

「そうだな。さすがだと言っておこう」

『ふふっ、ありがと。じゃ、バレル。データを採らせてもらってから、データチップの記録機能を起動させてくれるかな?』

『All right. (了解)』

バレルが反応し、データチップを起動させる。準備は整った。

「さて。あまり気は進まないが……………」

「私も。いきなりこんなことになるなんて、思ってもみなかったよ」
仕方がないな、といった様子で、2人は目を閉じる。

しかし……………。

「だが……………」

「うん……………」

2人共、生憎譲る気はない。

フェイトにもオーバーSランク魔導師としての意地というものがあ
るし、エルトも、初めてのデバイスでどこまでやれるのか、それを
試すいい機会でもある。

おそろくなのはも、それを考えてくれたのだろうと、無理矢理自分
を納得させた。

……………腕試しだけなら、ガジェットを出現させるだけで事足り
ることにはあくまでも気付かずに。

そうして無理矢理にでも自身のやる気を高めた2人は、各々の得物
を構え……………。

「負けないよ」

「こちらの台詞だ」

一挙に、衝突した。

○Episode 6 力の証明

「バレル！」

『All right.』

先に仕掛けたのはエルトだった。

魔力をバレルの中で練り上げ、魔力弾ではなく、光線として打ち出す。

「くっ、バルディッシュ！」

『S o n i c m o v e .』

瞬間的に加速し、真紅の魔力光線を回避するフェイト。

そして、その加速が活きているまま真っ直ぐにエルトへ肉迫し、バルディッシュを振り下ろした。

「はああああああああっ！」

「なんのっ！」

バルディッシュの魔力刃を、バレルの側面に展開された装甲で受け止めるエルト。

吃驚するフェイトの目の前で、自らの振るった刃と少年の銃の装甲とが、火花を上げながら激しくせめぎ合う。

そして、エルトの頭上には真紅の魔力弾。

「くっ！」

寸前で飛び退り、魔力弾を回避するフェイト。

先程まで彼女がいた空間を真紅の魔力弾が通り過ぎていき、その眼下にあった地面に着弾して焼き尽くした。

「ちっ。さすがに一筋縄ではいかないな、あのスピードは」

『Yes.（そうですね）』

エルトから離れたところで再び滞空し、距離を維持するフェイトに、舌打ちするエルト。

さすがの彼も、フェイトの高機動を捉えることは並大抵のことではないと見える。

「だが………攻略法は必ずある！」

言い、エルトは再びバレルを構えた。

誘導弾を数個形成し、フェイトを取り囲むように誘導する。

そして。それを注意深く見渡すフェイトへ向けて、

「いけっ！」

広げていた両腕を、一気に閉じる。同時に、フェイトの周囲に展開していた魔力弾が、一斉に彼女へ殺到した！

「上手いね。……でも甘い！」

叫び、フェイトは一気に前へと踏み出す。

加速を利用して自らの前面の魔力弾の隙間を縫うように避けて通り、

その勢いで再びエルトへ肉迫する！

「何っ！？」

予想以上の動きをした彼女へ、エルトの対応が一瞬遅れる。

だが、彼もそれしきで斬られるほど弱者ではなかったのだろう。
すぐ様跳躍し、大きなバックステップで距離を取る。

しかし――――。

「プラズマランサー！」

『Fire.』

フェイトは、読んでいた。

斬りかかる直前に形成していた魔力弾が、空中で身動きの取れない
エルトへ真っ直ぐに向かう。

「ぐうつ……………！」

バレルの盾で針のような魔力弾を防ぎ、その勢いで吹き飛ばされそ
うになる身体を、飛行魔法で姿勢を維持することでなんとか持ちこ
たえる。

（いける！）

完全に、自分が押している。

このまま押し切る。そう決めて、フェイトは大地を強く蹴った。

「うん、序盤はフェイトちゃんが優勢かあ……………」

訓練場から少し離れた屋上から、フォワードと共に模擬戦を見学しながらエルトのデータをとっていたのは、叩いていたコンソールから顔を上げて、どこか嬉しそうに微笑みながら言った。

眼下ではまさに今両者による模擬戦の光がぶつかり合う真っ最中であり、その光に違わぬ衝撃と音が飛びかっている。

「結構なこと。あのエルトという人も、只者じゃないわね……………」

「そうじゃな。魔力の量もさることながら、かの金色の閃光に勝る

とも劣らぬ身のこなし。そんじよそこらの雑魚とは一線を画しておるの」

彼の戦いを初めて見たマリサとアオイがそう素直な感想を述べ、同じく初見であったエリオにキャラも、言葉には出さないが自分達がよく知るフェイトに喰らいつくエルトの動きに見入っていた。

「それでも、フェイト隊長に及ぶことはなかったようね」

マリサの言葉が示すとおり、眼下の戦いの形勢は今、彼女と先程のなのはの言葉をも裏付けるようにフェイトへ傾いている。

しかし。

「ううん。それはどうかな」

「え?」

なのはは、それを否定した。

思いも抛らぬ答えを受け、思わず声を上げるマリサになのはは確りとした視線をエルトへ送る。

そこにあるのは、彼なら何かを起こしてくれるという、信頼だ。

「私は、そうは思わないな。勝負はまだ終わっていないし………それにね」

視線の先で、フェイトのプラズマランサーがエルトのシールドを弾き、彼をノーガードへ追い込む。

だが、それでもなのは視線は変わりはない。

「彼はきつと強いよ。彼と同じ目をした男の子を……私、知っているから」

そう彼女がはっきりと言った、次の瞬間———両者の間で、再び光が沸き起こった。

「えっ………?」

フェイトは見た。

彼の———エルトの体勢を崩し、確実に追い込んでいた筈の自分をオールレンジから取り囲んでいる、無数の砲塔を。

そして、一瞬遅れて、それらの意味を理解する。

「しまっ……………!?!」

「遅い!……ファイアッ!」

360°。全ての射角から、アサルトビットがその砲口から光を迸らせる。

瞬間、巻き起こる爆煙。

辺りを覆う煙は目晦ましとなってエルトの視界を塞ぐ。
が。

「そこっ!」

「!?!」

手元に戻ってきたばかりのアサルトビットを再び盾つきのアサルトライフルへ戻し、エルトはまだ少しも晴れていない煙の中へ向けて抜き打ちの砲撃を放つ。

丸い円筒のように煙を貫き、到達した砲撃は、その中でシールドを展開し驚愕するフェイトの姿を曝け出した。

煙が晴れていくにつれ、悲鳴を上げてシールドがその身に生まれた罅を広げていく。

「ぐ……………うう……………」

表情に苦悶の色を浮かべ、その末に防ぎきれないという結論に至ったか、シールドを犠牲にフェイトは横へ飛んだ。

そしてそこへ降り注ぐ、無数の魔力弾。

それをフェイトは高速移動魔法——ソニックムーヴを発動させ、それを1つずつ確実に避けていく。

「くっ……」

魔力弾を避け切ったフェイト。

ほっとしたのも束の間、今度はアサルトビットが飛んできた。

不規則な軌道を描きながら、フェイトを四方八方からつけ狙う。

「はっ！」

アサルトビットの1つを自らの手に掴み、自らも射撃を行って追い詰めるエルトにも気を配りながら、フェイトは瞬時にプラズマランサーの魔力球を形成してアサルトビットを狙った。

しかし、ビットは彼女の魔力弾が着弾する前に真横へ滑るように移動し、その射撃の尽くを避けていく。

「よけた!？」

アサルトビットが、まるで意志を持つかのような動きで彼女の攻撃をかわしたことに驚いたフェイトはしかし、別方向から紅蓮の魔力

光線を発射したビットに、思考を中断せざるを得ない。

そして飛び退る彼女へ向けて、ダメ押しとばかりにエルト本体とビット達からの射撃がすぐに追いついてきた。

それを、仕方なくシールドを展開して再び防ぐ。

（いつの間にか、追い詰められてるっ！？）

先程までは自分が押していた筈なのにと、エルトの突然の逆転に驚愕するフェイト。

それまで押されていた彼の方が嘘であるかのような、無駄のない、そして尋常ならざるほどの猛攻。

事実、エルトは試していた。

このバレルで、どこまでやることが出来るのか。

それを確かめるために、前半はわざとアサルトライフルモード1つで彼女と渡り合おうとした。

そして今は、アサルトビット。

彼にとってはそれが存外使い易かったらしく、ビットの1つを手に撃ちまくる彼の顔には僅かに笑みが浮かんでいた。

「仕上げに入るぞ、バレルッ！」

『All right. (了解)』

「ば、バルディッシュッ！」

『Yes sir.』

が、フェイトとてここでむざむざ敗退する気はない。

トドメを宣言したエルトに反抗するように、バルディッシュへ叫ぶように命じた。

エルトの目の前に、手に持っていた分も含めた全てのアサルトビツトが円を描くように集中した中心には紅の魔力が、またバルディッシュの先端には黄金の魔力がそれぞれ集中し、巨大な魔力球を作り上げる。

そして、一時の沈黙。

誰もが戦いの決着を固唾を吞んで見守る中で――――。

「クリムゾン………」

「トライデント………」

――――？それ？は、同時に放たれた。

「ブレイカー………ッ！」

「スマッシュ………ッ！」

片や、燃え盛る紅蓮の炎のように滾る真紅の砲撃。
片や、三楹の檣のような黄金の巨大砲撃。

2人の砲撃は激しくせめぎ合い——しかし、決着は唐突に訪れた。

「う、嘘っ……………!?!」

フェイトの目の前で起こる、信じられない光景。

それは、自らの砲撃がまるで有機物のように彼の砲撃に？燃やされていく？光景だった。

あまりのことにますます魔力を多く込めるが、それでも侵食は止まらない。

焼き尽くされた金色の魔力は、魔力素レベルにまで分解されて空気中へ霧散していく。

「これは、リオスのっ……………!?!」

「これで……………終わりだっ!」

言うと同時に、クリムゾン・ブレイカーの魔力が一層膨れ上がる。

それに気付いたフェイトは更に魔力を強く込めるが——しかし、遅い。

次の瞬間。

ごう、と自分を砲撃が飲み込む音を最後に、フェイトは意識を失った。

「あ、あれは………!？」

「魔力を焼き尽くす、砲撃………!？」

あまりの怒涛の結末に呆気にとられながら、マリサ、続いてソフィアが辛うじて言葉を絞り出す。

他の面々も皆呆気にとられながら、気絶したフェイトを抱きかかえて訓練場出口まで飛翔するエルトを呆然と見つめていた。

ありえない———いや、それは否。

1人だけ———彼女らが知っている仲間の中に1人だけ、彼と同じ事をやってのける男がいた。

「リオス君……………」

1人、家を守っている愛する人の名を呟き、なのははエルトを出迎えるべく、フワード達と共に訓練場へと降りていった。

「パパー……！」

一方、数時間前。

こちらは機動六課隊舎から離れた、クラナガンのある住宅地だ。その一角にある、とある小洒落た喫茶店。そこに、少女の無邪気な声が響き渡る。

父親を呼んでいるのだろう。

はい、という返事がすぐに響き、同時にぱたぱたと駆けていく音が追従した。

「準備できた？」

「うん！ 大丈夫だよ！」

戸口に立つ少女に、エプロンをした青年が駆け寄って話しかける。

それに少女は満面の笑みでそう答え、くるりとその場で一回転した。彼女の肩にかかった、その背丈に合った小さめの鞆がそれに従ってくるりと回る。

「ね？」

「そっか。じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい！」

「うん、行ってきまーす♪」

手を振って、ててと駆けていく少女へ、青年の脇から出てきた女性————おそらくは、ヘルパーか何かであろう————が、青年へ微笑みながら一礼して彼女の後へ続いた。

「ふう……………」

息をつき、抜けるような青空を見上げる青年のプラチナブロンドのセミロングが、ふわりと揺れる。

「……………さ。仕事しよっと」

仕上げに大きく伸びをして、青年は喫茶店の中へと入っていった。

看板が、降り注ぐ日を反射して光り輝いている。

そこに描かれている名は————ヴァルハラ。

喫茶ヴァルハラの日が、今日も始まる。

Episode 6 力の証明（後書き）

く神の黄昏く

神崎「はい！ そんなわけで最新話脱稿です！」

エルト「今日は僕か。どうも、読者の皆様。エルトⅡクリーバーと申します」

神崎「さて、これで君とフェイトの模擬戦は終わったわけでありますが」

エルト「アサルトビット、あれはいいものだな。常に敵の死角から攻撃を加えられる」

神崎「気にいってくれたかな？」

エルト「そうだな、感謝しよう。…………シャーリーとマリーに」

神崎「コラ」

エルト「そして、最後に出てきたシーンだが……………あれは、？そういうこと？として理解して間違いないのだな？」

神崎「そう……………ですね。ほら、前作のキャラが顔も名前も出てこないんだけど明らかに前作のキャラだと解る感じでちょこつと登場したりするとテンション上がるじゃないですか」

エルト「まあ……………確かに」

神崎「そんな感じを狙ってみたのですが、いかがでしょうか」

エルト「それは読者様次第だろう。僕には解らない」

神崎「それはそうなんですけどね。さて、そんなわけで次回はいよいよ新生機動六課最初の任務！新キャラを加えたフォワード達が大活躍致します♪」

エルト「漸くか。……さて、どんな敵が出るか……」

神崎「期待して下さい。そして、前回募集したキャラクターCVもいよいよ決定致しました！」

エルト「以下、その概要だ」

エルトⅡクリーバー…神谷 浩史 緑川光

ソフィアⅡジュリストン…丹下桜 加藤英美理 阿澄佳奈 戸松遥

レヴィンⅡクレスヴェルグ…水島大宙

マリサⅡネティアス…小清水亜美

アオイⅡクロガネ…植田佳奈 井口裕香

神崎「…………と、なりました!」

エルト「いや、ちょっと待て。何故、名前が複数あるキャラが存在している?」

神崎「だってー、決められなかったんだもん。『これは……ないな』と思った方は、迷いを振り切るべくさっと落としたからいいんだけど、この方々は特に迷う。特にソフィア! 上げてくれた殆どがもうイメージどおりで悩む悩む…………!」

エルト「それで。どうするのだ?」

神崎「仕方ないので、もう1度皆様にアンケートをとろうと思います。ずばり、上記で複数名前のあるキャラで、どの声優様が一番相応しいか、ということで、感想やメッセージにてお答え下さい」

エルト「ご応募、お待ちしております」

神崎「それでは次回、『ファーストミッション』」

エルト「無限の力、その身に宿せ!」

Episode 7 ファーストミッション／前編

「はい、皆集まってー！」

ぱんぱん、と両手を叩き、なのはが言うと、「はい！」という威勢のいい声が重なり、一時散っていたスターズ小隊のメンバーが集まってくる。

青空の下、朝から訓練に耽っていた一同の顔には汗と共に僅かに疲労の色が見えたが、そのどれもが活力に満ちていて、順調に自らの教導が彼女らという形で実っていく様になのはは歓喜で笑みを浮かべた。

「皆、切れが出てきたね。動きに現れてるよ」

「本当ですか！？ やったね、ティア！」

「ええ、そうね」

なのはの好評価に喜ぶスバルは、隣に並ぶ相棒に笑みを向けた。

当のティアナも、スバルほど感情を面へ出してはいないが、心なしか嬉しそうだ。

「レヴィン君も。さすが、八神部隊長が連れてきただけのことはあるね」

「どうも」

一方のこちらは、褒められたというのに妙な笑みを浮かべたまま変わらぬ表情。

さすがにこれにはまだ慣れないのか、苦笑いで対応しながらなのは言った。

「じゃあ今日はもう終わるけど、午後はちゃんと書類を纏めて提出してね」

「はい！」

「うん！　じゃ、これで解散っ！」

最後に笑顔でそう締めくくると、3人はそれぞれ訓練場を後にしていく。

スバルとティアナは、おそらくシャワー室でシャワーだろう。

レヴィンは————何だろうか。

よくよく考えてみれば、自分の補佐をしている人物であるというのに、なのはから見ても謎だらけな人物であった。

（目下のところ、それが課題かな………）

傍でフォローしてくれる副官のことを碌に知らぬというのは、隊長として問題だろう。

だがただでさえ相手が相手だ。簡単に自分のことを話すとも思えない。

「じっくりいこうかな。………そういえばフェイトちゃん、張り切っ

てたけど大丈夫かな……………」

なのははそう言って、スターズに割り当てられた訓練スペースから少し離れた場所の、ライトニングとウイングの合同訓練が行われているスペースがある方を見た。

「人数も増えるし、頑張らないとね！」などと張り切っていた親友の顔が頭に浮かぶが、今向こう側から聞こえてくる数多くの爆音を思うと、それをどう捉えていいのか、判断に困るところだ。

「……………私も、シャワー浴びに行こうかな」

また1つ、空気を揺るがす振動を肌で感じながら、そそくさと逃げるように訓練場を後にする彼女を、責められる者は誰もいなかった。

○Episode 7 ファーストミッション／前編

「はああああああああつ！」

「やああああああああつ！」

訓練場に木霊する、2つの掛け声。

それらが衝突する周囲では、数人の男女が取り囲むようにしてその様子を見守っていた。

現在行われているのは、エリオとマリサの戦い。

ストラーダのブースターを扱い巧みにマリサの銃撃を回避するエリオは、隙を見てマリサの懐へ飛び込んで槍を振るう。

言うなれば、フロントアタッカーとセンターガードの戦い。

エリオのポジションはガードウイングだが、ソフィアという新たな人員も加わり人数が増えた以上、L・P事件の時とは違い、スターズと分かれての任務も増えてくる。

そうなれば、ライティングで接近戦を行えるのはエリオだけなのだから、擬似的にフロントアタッカーを兼任しなければならなくなるだろう。

ライティングが前衛攻撃型が少ない一方で、キャロのいない分、フルバックのサポートが得られないスターズ。そう考えると、バラン

スの悪い配置としか思えない。

が、ソフィアは元来フェイトの副官であり、故にあまり面識のないレヴィンと組ませるよりかは連携が取り易く、いざという時のサポートもし易い。はやての判断は、そういうことだった。

「やあっ！」

「甘いわよっ！」

そして、今はそのエリオのフロントアタッカーとしての訓練の真っ最中。

とはいえ現時点で彼になのはやスバルほどの耐久力を望むのは酷だから、専ら回避に重点を置いた訓練ということになっているが。

マリサが相手をしているのは、ちょうど彼女も前衛型との訓練を所望していたからである。

とはいっても本当ならばマリサのランクはSに届いていてもおかしくはなく、彼女ほどの実力があれば隊長に相応しい活躍をしてくれるはずなのだが、彼女曰く、本来の戦闘スタイルとかけ離れた動きというのはこうして時々訓練を行わないとすぐに失われてしまうのだとか。

だからこそ、こうしてエリオとの模擬戦の相手に自ら志願した。

「2人共、よくやっているな」

「あ、エルト」

と、隊長として模擬戦の行方を見守っていたフェイトの元へ、バリ
アジャケット姿のエルトが歩み寄ってきた。

以前の模擬戦から数日。

既にすっかり着こなした感のある漆黒のバリアジャケットは、蒼天
の下にあっても違和感を醸すことなく、むしろ1つのアクセントと
して映えて見えた。

「そうだね。エリオも随分強くなったと思うんだけど、マリサも強
いね」

「ああ。彼女への評価が、嘘でないと実感することが出来た」

書類上、彼女のランクはAほど。

実際彼女にもAランクだった時期はあるが、それは今現在からはか
なり前の話である。

となれば、書類を信じるならば彼女はその時より何も成長していな
いということになるが、実際は彼女は元フォワード陣の前衛のエー
スたるエリオを相手にここまで善戦して見せている。

数日前にスバルと模擬戦をした際にも彼女の強さを目の当たりにし
たのはがはやてへ問うたところ、それには彼女の今までの経歴に
理由があった。

彼女はこれまで、どことして1つ所に留まることなく、様々な部隊
を点々としていた。

それには本人の希望から命令無視のような左遷の形まで様々な経緯
があったようだが、そんなこともあって彼女は本人自身も興味がな

いのもあつてか、自らのランクを計ることは今までなかったのである。

唯一、陸士学校を卒業する際に測定した時にたたき出したランクが、書類に記載されたAランクだった。

そんな事情もあつて、此度、久方ぶりに彼女の書類の魔導師ランクの欄が書き換えられることとなったのだが、それは余談だろう。

ともかく、それほどの実力を持つ彼女が隊長となることに異論はなく、ウイング分隊はマリサを隊長、アオイを副隊長として動き始めたのだった。

「エルトはどう？ バレル、慣れてきた？」

「ああ。こいつはいい機体だ。ハヴォックと全く同じというわけにはいかないが、それに勝るとも劣らぬ性能を発揮してくれる」

『Your praise is more than I deserve. (恐縮です)』

エルトの満足げな回答に、バレルがコアを発光させながらそう答える。

早くもいいコンビになりつつあることを感じ、嬉しさにフェイトは微笑んだ。

「……………アルブの動きは？」

「まだ、解らない。はやてやロングアーチが警戒してくれてるから、

動きがあつたらすぐにわかると思うけど……」

「……………そうか」

そのままを答えると、エルトはほっとしたような残念なような複雑な表情で俯いた。

そんな、彼が珍しく不安げな表情をするものだから、何か拙いことでも言ったかと慌てるフェイト。

そうして、意を決して励ましの言葉をかけようとした、その時――
――。

ヴー、ヴー、ヴー……………。

「！」

「アラート!？」

紅い光は外である訓練場にまで届いてはいないが、そのけたたましい音からそうだと理解する。

それにはエルトとフェイトだけではない、模擬戦をやっていたエリオとマリサ、そしてその周りで並んで模擬戦を観戦していたキャロやソフィアも気付き、きつ、と表情を引き締めた。

——ソフィアだけは、突然聞こえた音に驚いてあたふたしていたが。

続いて、少し遅れてモニターが空中に現れて、はやての姿が映し出される。

『皆！ ミッド郊外の森林地域に多数のロストログリア反応。おそろくアルブや！』

「…………噂をすればなんとやら、だな」

「……………だね」

気を引き締める2人の視線の先のはやてがヘリポートへ集まるように支持しているのを見ながら、2人は気を引き締めた。

幾度か奇襲を経験しているとはいえ、まともな任務としてアルブの掃討にあたるのはこれが初めてだ。

更に言えば今回は、新人達がアルブに対して戦力になるのかを計る好機ともなろう。

いろいろな意味で、重要な任務となることは間違いなかった。

「……………行こうか」

「……………うん！」

頷き、フェイトはライトニングとウイング両隊に声をかけた。

「皆、今の通信は聞いたね？ これより、ライトニング、ウイング、

共にアルブの迎撃任務へ移ります！」

「はい！」

景気よい返事を返す一同に「じゃあ、出動！」と声を上げながら、フェイトは隊舎へと走っていく。

目指すはヘリポート。

空を飛べぬ陸戦魔導師を抱えている以上、ヘリは重要な空の移動手段となる。

しかし、昔こそスターズとライトニングそれぞれを合わせても4人しかいなかったフォワードも、今ではこの大所帯。

全員を連れていくなど、出来ないかに思われたが――――。

「どうも、皆さん！」

「準備、出来てますよ！」

「あれ、アルト？」

件のヘリポートへついてみれば、そこで待っていたのは元々のヘリパイロットであるヴァイスⅡグランセニック陸曹だけではなく、アルトⅡクラエッタ二等陸士の姿もあった。

ヘリも、今までヴァイスが操縦していたJF704式の他に、もう1つ同型機と思われるものも見られる。

「はい。今回から、ウイングの移送は私が担当することになりました。宜しく願います!」

「ええ、こちらこそ宜しくね」

敬礼するアルトに、マリサが手を差し出して握手を交わす。

そうして挨拶を済ませると、早々に皆ヘリへ乗り込んだ。

スターズとライトニングがヴァイスのヘリに、ウイングがアルトのヘリへそれぞれ乗り込み終えんと、ヘリは段々と高度を上げていった。

市街地を抜け、暫く飛んでいくと————見えてくるのは、深緑の森林地帯。

「反応があったのは、ちょうどこの辺りですね」

「レーダーでロストログリア反応、探れない?」

アルトの声に、素早くそう問いかけるマリサに、「やってみます」と短く返事を返して、アルトはヘリの計器を弄った。

「ロストログリア反応、ありました! ちょうどこの下です!」

『こっちも確認したぜ!』

アルトから少し遅れて、もう1つのヘリから同様にロストログリア反応を探したらしいヴァイスから通信が届く。

「どうします? このまま降ります?」

「ううん、このままいつもみたいに飛び降りたら、空中で身動き取れないところを奇襲される可能性がある」

ヴァイスの問いに、なのはが即座に首を振って否定した。

確かに、こちらは陸戦魔導師を何人も抱えており、空中で受ける手段のない彼らを不用意に飛び込ませるのはいただけない。

「シールドを張りながら、しかないかな？」

「そうだね。幸いアルブが、魔力変換体を吸収できないのは共通しているみたいだし。それしかなさそう」

フェイトの提案に、なのはも頷いた。

どんなアルブも、こちらの魔力攻撃には爆散するしかなかったところを見ると、アルブが魔力攻撃に弱く、魔力体は吸収できないという面のみで見れば、その全てに共通していると見てほぼ間違いなさそうである。

なのはは意を決し、別のヘリのマリサへ向けて問いかけた。

「というわけなんだけど。ネティアス二等空尉の意見はどうか？」

『はっ！ 異論、ありません』

敬礼し、はきはきと答えるマリサに「堅い子だなあ」と半ば場違いなことを考えながら、なのはは頷いた。

「うん、じゃあ皆、全身に全方位シールドを展開して飛び降ります。」

デバイスを起動して、指示があるまで待機！」

「「「了解！」「」」」

「「「了解」「」」」

すぐにレヴィンを除くスターズ・ライトニングが、その後送れてウイングとレヴィンが返事を返し、各々のデバイスへセットアップを指示した。

忽ちヘリの中が光に包まれ、各々のバリアジャケットに身を包んだ善戦メンバー達は、全方位ヘシールドを展開した。

出撃準備は完了。後は、隊長陣の支持を待つのみである。

「では……新生機動六課、ファーストミッション……」

「開始！」

なのはとマリサの声に続き、ヘリから幾つもの光が飛び出て、地面へと吸い込まれるように落ちていった。

下へ降りると、一行の前にまず現れたのは世にも奇妙な光景だった。

「……………あれは…………動物？」

無事の確認をする間もなく、地面へ降り立ったフォワード達は目に飛び込んできた情景に一瞬我を忘れた。

目の前にいるのは、熊や鹿など、地球にも多く生息しているであろ

う動物達によく似たモノ達だった。

しかし。

「何か、様子が変ね……………」

マリサの言うとおり、動物達の様子は目に見えておかしかった。

目からは生氣というものが微塵も感じられず、身体のところどころから結晶のような構造物を突出させている。

熊のような2足歩行の動物が、一步を踏み出す。

その踏み出した地面が、瞬く間に白銀の液状物質に侵食されていくのを、エルトは見逃さなかった。

「まさか……………アルブが原生生物を取り込んだのか!？」

エルトの言葉に、一同はその可能性に思い至り戦慄した。

確かに、人間を吸収していた時点で彼らが有機物、とりわけ生物を吸収できるであろうことは想像がつく。

しかし、こうして知らぬ内に自分達の身の回りで実際にその侵食の形を目の当たりにしてしまうと、言い知れぬ恐怖を感じずにはいられなかった。

「ゴアアアアアアアアアッ!」

元となった動物の鳴き声だろうか、雄叫びを上げながら、動物を取

り込んだアルブ達が一斉に、恐怖の抜けきっていないフォワード陣を襲った。

「くっ、クリムゾン・シューター！」

いち早く我に返ったエルトは、構築した魔力弾で熊型のアルブを撃ち抜く。

異形と化した哀れな命は魔力弾に胸部を貫かれ、爆散。粉々に吹き飛んだ。

「エルト！」

「呆けている場合か！ こいつは僕達を狙っているんだぞ！」

叫ぶティアナへ怒鳴り返ししながら、もう1発、エルトはバレルから魔力光線を発射する。

寸分違わぬ照準により撃ち出された紅の魔力は、鹿型のアルブの頭部から尾まで貫通し、爆散させた。

それに、他のメンバーも漸く我に返ったらしい。

「そうね……よし。皆、アルブを殲滅！ なんとかしても、ここで食い止めるわよ！」

「」「はい！」「」

「「了解」」

マリサの指示に景気よく頷いたフォワード陣に続き、エルト、レヴィンの無機質な応答が追従する———獣系のアルブ達が、一斉に牙を剥いた。

「うん、フォワード陣はよくやっているみたいだね」

「そうだね」

眼下に見える戦いの光を眺めながら、バリアジャケットを装着したなのはとフェイトは、周囲を警戒しながら滞空していた。

アルブは解ってきたことあるとはいえ、まだまだ未知数の敵だ。

いかにフォワード陣が強くとも、ヘリの護衛と、いざという時に動けるようにと、こうして待機していたのだ。

「このまま、何も起こらないといいんだけど……」

そう呟きたくなるなのは気持ちも、フェイトには理解できた。

だが、ことはそう簡単に運んではくれないようで――――。

『I found signal of enemies. (エネミーの反応を感知しました)』

「！　なのはっ！」

「うん！」

バルディッシュの言葉に、2人はやや緩んでいた気を引き締め、反応のあった方角を見やる。

見えたのは、鳥の一群。

それもただの鳥ではない。

そのどれもが、今まさにフォワード陣が地上で戦っている獣系アルブに酷似した特徴を呈していた。

「あれが、アルブ………」

「うん。近接攻撃は危険だよ………って言っても、なのはの戦闘スタイルなら大丈夫だろうけど」

「うん。私の本分は撃ちぬくことだもん。ここからだって………！」

頷き合い、鳥型アルブの元へ一直線に飛んでいく2つの閃光。

次の瞬間――――空に爆炎の齎すオレンジ色の光が、幾つも弾けた。

Episode 7 ファーストミッション／前編（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい。そんなわけで最新話、脱稿でございます」

エルト「氷翼の天使ではあのような出来事があったが、こちらでは明るくいこうと考えている。よろしく頼む」

神崎「さて、今回は漸く第1回目の任務。アルブの掃討任務です」

エルト「おい、アオイがあまり喋っていないぞ。大丈夫なのか？」

神崎「ご、ごめんなさい。今回は出すタイミングがなかなかなくてね。次回出せると思うので、どうか許してください（汗）」

エルト「全く……マリサに喋らせすぎだ。いくら動かし易いとはいえ……」

神崎「次回、フォローさせていただきます。さて、今回はそんなわけでファーストミッションに加え、新たなアルブの可能性をお見せしたわけですが」

エルト「原生生物を、アルブが取り込んだところだな。まさか動物に擬態するとは……」

神崎「テイルズオブザワールド、レディアントマイソロジー3からヒントを得ましたw」

エルト「取り込まれ、変異する生物。恐怖を煽ることは出来ようが……これから、どんな種が生まれるのやら」

神崎「期待しててください！ さて、そして前回のCVアンケートですが。結果は、このようになりました！」

エルトⅡクリーバー…神谷 浩史

ソフィアⅡジュリーストン…戸松 遥

アオイⅡクロガネ…植田 佳奈

神崎「…………と、なりました！」

エルト「やれやれ、漸く決まったか」

神崎「そして、決まって早々次のアンケート！ 次は、OP・EDを募集いたします！」

エルト「何？…………はあ、忙しいことだ」

神崎「OPやEDに相応しい曲がありましたら、ぜひ教えていただきます。後ほど活動報告にて曲の候補を挙げますので、その中から選んでくださっても結構ですw」

エルト「だ、そうだ。皆様、応募してくれると助かる」

神崎「そんなわけで、次回はいいいよミッション後半！ 新たな敵キャラも1人出す予定です！……………エルトとフェイトも、ちよつとだけ……（ニヤリ）」

エルト「……なんだろうな。今、猛烈に君を全力でぶち抜きたくなつたのだが」

神崎「気のせいでしょ。それでは次回、『ファーストミッション／後編』」

エルト「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 7 ファーストミッション／中編

「クリムゾン・シューター！」

「スパーク・バレット！」

飛び交う真紅と金色の光弾。

流星の如き軌跡を描き、魔の砲弾は寸分変わらずアルブにより異形と化した動物達の身体を貫いた。

結晶と化し爆散する屍を、エルトは一瞥し早くも次の獲物へ移った。

「バレル！ 砲撃を！」

『Crimson buster.』

エルトの命に即座に答えるバレルの銃口に、真紅の魔力球が形成される。

そこから放たれた速射式の砲撃は、アルブ数体を飲み込んだ。

「くう……きりがないのう」

「そうです……ね！」

己が得物である双剣に装備された銃でアルブを貫きながら毒づくアオイに、クロスファイアで吹き飛ばしたティアナがそちらを振り返ることなく応じた。

アオイの言うとおり、アルブ達はどこから沸いて出ているのかと思える程際限なく出現してきており、殲滅への見通しは立たない。

心なしか、当初より多くなっている気すらした。

「マリサ隊長。なんか、臭いませんか？」

「奇遇ねティアナ。私もちょうど、違和感を感じていたところよ」

ティアナの提言に、彼女と同様この状況に違和感を感じていたらしいマリサは頷くと、愛機へ命じた。

「ドラウプニル」

『Yes, mum.』

ティアナの相棒たるクロスミラージュよりも一回り大きな漆黒の双銃型デバイス、ドラウプニル。

主の命と共に素早い手際で球形の偵察機、サーチャーを複数現出し、方々へ散らせた。

「これで、からくりがどうなってるのか解ればいいんだけどね……
……」

「そうですね……」

そう言っている間にも、熊のような二足歩行の動物に擬態したアルブが、その腕と爪で襲い掛かる。

しかし。

「「はあっ！」」

橙と金色の魔力弾が、即座にその体躯を貫き爆散させた。

「……………探索はサーチャーに任せて、まずはこの場を切り抜けましょう」

「はいっ」

背を合わせるようにしてそれぞれ眼前の敵を見据えた2人は――
――弾かれるように別れ、それぞれの隊員達へ指示を出した。

「持ちこたえろ、か」

「うっ……初戦でいきなり無茶な話ですう……」

「全くじゃ」

隊長マリサからの通達を受けたエルトの言葉に、ソフィアとアオイは苦い顔をしながら眼前の敵を見据える。

3人のいる場所でも、敵の数は未だ減る様子を見せない。

対し3人はまだまだ疲れは見せていないものの、いずれ疲弊し、力尽きるであろうことは必然。

であるならば、それなりに厳しい戦いとなることは覚悟しなければならぬ。

尤も――――。

「両副隊長、きつくなったら言え。援護してやる」

「あ、ありがとうございますっ！」

「むうっ！ こ、子供と思って侮れば、痛い目を見るのはおぬしじやぞ！？」

「ふっ、それは恐い」

エルト、アオイの両名共、ここでむぎむぎやられる気は毛頭ない。挑発し合うと同時に放たれた2色の光弾は狙いを逸れることなく、ただひたすらに獲物を屠った。

「なあに、いくらでも持ちこたえて見せよう。なあ、アオイっ！」

「うむ！ アルベルトッ！」

『Yes, ma'am. (はい、お嬢様)』

アオイの銃を内蔵した双剣————アルベルトの銃口が光り、漆黒の魔力弾がバチバチと帯電して放出された。

1体のアルブへ着弾した魔力弾がスパークを周囲に広げ、付近にいたアルブを巻き込んで爆散させる。

爆発や電撃の余波は、ソフィアがシールドを張って回避するため、彼らには1つとしてそれが降りかかることはなかった。

「ふふん、どうじゃっ♪」

「さすがだ」

得意げに胸を反るアオイ。

それにすかさず賛辞を送るエルトだが、彼もまた負けてはいない。

「バレル！ ビットモード！」

『B i t m o d e . 』

ベーシックモードのバレルがバラバラに分かれ、アサルトビットへと変形していく。

同時に腰には、それを収めるバインダーがベルトのように展開し、彼を取り囲むようにビットが規則正しく並んで滞空した。

「行けっ！」

手が振り下れると同時に、アサルトビットが一斉に飛び出し踊り狂う。

動物型のアルブはそれを目で追おうとするが、元々動きの鈍いその体でまともに捉えきることなど出来ない。

目で追う前に後ろに回りこまれ、魔力線が背後からアルブを撃破した。

他のアルブもまた、同様にあっさり撃破すると、エルトはビットを引き戻した。

複数のビットが彼の腰のバインダーに固定されて、それを通してエルト本体からの魔力を供給される。

「むう、お主もなかなかの手際じやのう」

「お褒めに預かり、光栄だな」

アルブの影も形もなくなり、ただの森林地帯と化したそこへ2人の
余裕の会話が響く。

それでも、彼らが殲滅できたというわけではない。
木々の合間を潜り抜け、また新たなアルブ達とその不気味な姿を曝
け出した。

「やれやれ……まだまだ終わりそうにないな」

「何、これくらいでないと面白くなかう」

「ふっ、言ってくれる……」

「わ、私はもう少しお手柔らかにお願いしたいなあ……なんて」

早くも弱音を上げながらもしっかりと死角から襲い掛かろうとして
いたアルブに対しシールドを発生させるソフィアの手際に舌を巻い
たエルトは、再びビットをバインダーから射出すると、アルブとの
間に割り込ませるように滞空させる。

一方のアオイもまた、アルベルトを両手に身構えた。

「行くぞ。遅れを取るなよ？」

「はいっ！」

「こちらの台詞じゃっ！」

いつまで続くか解らぬサバイバルゲームが今、幕を開けた。

一方で、こちらはちょうど戦闘エリアの中心に位置する平野。

そこでは、それ以外の場所以上に厳しく熾烈な戦いを強いられていた。

「行きなさい、アサルトビット！」

レヴィンの命のまま、バレル以上の数を誇るビットが乱舞を演じる。

その不規則且つ無駄のない動きは動きの遅いアルブ達を翻弄し、瞬間に減らしていく。

その中で、さらに――――。

「リボルバー……シュートッ！」

「紫電……龍閃破っ！」

「リフレクション・バーストッ！」

スバル、エリオ、キャロの遠隔攻撃が、残ったアルブをたちどころに屠っていった。

スバルはともかく、エリオとキャロの2人は遠隔攻撃の有効打がなかった。

しかし2人共、伊達に3年間を辺境自然保護隊で過ごしていたわけではない。

エリオの紫電龍閃破は彼が辺境自然保護隊の任務に就いていた頃に修行で編み出した自己流の技であり、彼の槍型インテリジェントデバイス、ストラーダに纏わせた魔力を龍の形に練り上げて放出するというものだ。

砲撃ほどの威力はないが、速射力と操作性に優れたなかなか使いやすい勝手のいい技である。

一方のキャロは、拘束する鎖を召喚するアルケミック・チェーンでは吸収されてしまうと考えたのか、魔力で形成したリフレクトシールドを自ら炸裂させ、その余波で吹き飛ばしていた。

「なかなかやりますね」

「貴女方も……なかなか」

褒めた後、何やら含みありげに笑うレヴィンに苦笑しつつ、またリボルバーナックルから魔力弾を射出して、別のアルブの腹に風穴を

開けた。

これまでは、とにかく殴りつけて打撃戦を展開してきた彼女だったが、いざ砲撃戦となるとやりづらくて仕方がなかった。

——まあ、それでも手段があるだけましなのだろうが。

そしてそれは、エリオやキャロも同じこと。

これまでより戦闘スタイルを変えられなければ、アルブを倒すどころか戦うことすらままならなかった。

この中で戦闘スタイルの向き不向きを気にせず戦えるのは、レヴィンくらいのものだろう。

そんなことを考えながら戦っていると、ふとレヴィンが動きを止めた。

「？ どうしたんですか？」

「……………ほう。これはこれは」

いつもの飄々とした笑みとは違う、獰猛な肉食獣のような嗤いとともに目の前に向けられた彼の視線をスバル達も追った。

そこにいたのは、少年だった。

髪は青く逆立っており、手には三叉の槍のようなものが握られている。

「へえ。僕が作った可愛いペットに対抗できるんだ、この時代の人

間は？」

「……………何者っ！」

可憐な外見には騙されない。——否、騙されるわけもない。

彼の言っていた、？自分が造ったペット？という言葉もそうだが、彼の顔に浮かぶ無垢ながらもはつきりとした狂気は明らかに自分達へ、向けられたものなのだから。

身構えるフォワード達に、少年はくすくすと笑いながら言った。

「昔はただ、蹂躪されるばかりだったっていうのに、ちよつとの間に進歩したよね。人間ってさ」

「何者かと訊いている」

饒舌に話し始める少年に、ビットが集中する。

その銃口は全て少年へ向いており、いつでも撃てるよう魔力が光を放っていた。

「れ、レヴィンさん！」

「その子、まだ子供ですよ！？」

キャロやスバルがそう抗議するが、当のレヴィンはそ知らぬ顔。

むしろ、

「関係ありません。このような辺鄙な場所に1人でいる……無関係とは、思えない」

というレヴィンの正論に押し黙った。

しかしやはり、黙ってはいられないと思ったか、スバルが再び抗議を口にしようとした、その時。

先に口を開いたのは、窮地に立たされている少年の方だった。

「僕が何者か、かい？ それは………そこのお兄さんが、一番よく知っているんじゃないかな？」

「「「え？」」」

少年の声に、スバル、エリオ、キャロの3人は声を上げて振り返る。

その先にいたのは、燃えるような跳ねた赤髪を揺らし、右手には銃を携えた黒コートの男。

彼女らの仲間、エルト・クリーバーの姿だった。

「やあ。遊びに来たよ、エルト」

「………懐かしい気配がするから、まさかと思い来てみれば……」

少年を見るエルトの表情は陰しく、それはいつも彼がその顔に浮かべる冷静沈着なものとも、優しく微笑む暖かいものでもない。

ただ純粹なる、敵意。それが、今の彼を表す言葉だった。

「陸と海の神、ポセイドン。やはり、この悪趣味な玩具は貴様の差し金だったか」

「酷いなあ。それでも、忠実に再現できるようになってきたんだよ？ 確かに、まだ造形としては不完全だけど………どうだい、結構可愛いだろ？」

「どこがっ！」

スバルは声を張り上げ、眼前の————おそらくは敵であろう、少年を睨み付ける。

「こんな……こんな、命を弄ぶような真似っ！」

「弄ぶ？ ような？ じゃないさ。………弄んでるんだよ♪」

「そんな……ふざけるなああああああつ！」

『Wing road.』

湧き上がる激情に任せ、スバルはマッハキャリバーを走らせる。

空色の道に導かれるように駆け抜けた白き影は、流れるような軌跡を描きながら、ニコリと屈託のない笑みを浮かべる少年———ポセイドンへと殴りかかった。

エリオとキャロの2人が止める間もなく、振り抜かれる機械的な拳。

しかし———。

「乱暴だなあ、お姉さん」

「……………えっ!？」

スバルの攻撃は、届いてはいなかった。

一体どれほどの密度と硬度を持ち合わせているのか、リボルバーナックルと鬨ぎ合う障壁は罅1つ入らない。

デイベイン・バスターやリボルバー・シュートほどでないとはいえ———当たれば、それなりに大きなダメージとなるはずの1撃にも関わらず。

これほどか弱い少年であれば、おそらく物理的ダメージだけで昏倒していたに違いない。

しかし、彼はぴんぴんしている。

それは、彼が外見に似合わぬほど強大な実力の持ち主である証であった。

攻撃が入らなかったことに対する驚愕の色を隠しきれないままバックステップで下がったスバルに、くすくすとポセイドンは無邪気にも笑いかける。

「凄かったねー。もし僕が普通の人間だったら危なかったかもねー!」

「まるで、自分は普通の人間ではない……とでも言いたげな口ぶりですね?」

彼の言葉に興味を持ったか、好奇心を露わにしたレヴィンはまずポセイドンを見、続けてエルトを見やった。

その視線に気付いてか気付かずか、エルトは溜め息をつく。

と。そこへ。

『ちょっと、皆聞こえる?』

「ティア?」

デバイス越しに、ティアナからの通信が響いた。

『サーチャーに反応があったわ。アンタ達がいる場所から南に700mの地点に、アルブを出し続けている魔力球体があった!』

『おそらくそこが、アルブの発生源』

ついに、発生源が特定できた。

そのことに歓喜を示すが――――。

『今アオイさんとソフィアさんが向かっているけど、彼女だけじゃ敵の数が多すぎる。誰か、そっちからフォロー出来ないかしら?』

「そ、そう言われても………」

目の前の状況は、決して無視して放り投げていけるようなものではない。

どうやら、この状況を作り出したらしい少年の出現。

エルトもそれに全くの無関係というわけではなさそうだが、そんなことは後回しでいい。

まずはこの少年を捕縛すること。

それが、今後の事件の収束にどれほど貢献するか知れないのだ。

「なら、僕が残ろう」

スバルが判断に困っていると、エルトがそう名乗り出た。

確かに、この状況でその申し出はありがたい。

しかし————果たしてこの男をそのまま残すというのは、それはそれで拙い気もする。

エルト自身は何も言おうとはしないが、目の前の少年とは少なからず因縁があるようだし、このまま置いていって方が一のことがあることは————。

そう考えるスバルだったが、すぐにその考えを振り払った。

自分が————機動六課が信じてやらねば、誰がこの男を信じてあげられるというのか。

信じてあげることの出来ない後悔。

それは、リオスの時に存分に味わったのではなかったか。

そう、心の内で決意していたスバルの元へ、爆風が届く。

「ぐっ!?!」

反射的にそちらを見れば、ポセイドンを取り囲んでいたレヴィンのビットの内数基が消し飛んでいた。

「人間も、面白い玩具を使うようになったみたいだね」

そう、無邪気な笑みを浮かべるポセイドンの姿に、スバルは言い知れぬ恐怖を感じながら、エルトへ叫ぶように言い放つ。

「エルト。ごめん、お願いっ! エリオ、キャロ、行こう!」

「は、はい!」

「解りました! フリード!」

「ギャオオオオオオオ!」

スバルの言葉に、キャロは上空でアルブを殲滅していたフリードを呼び戻すと、その背にエリオと共に乗り込む。

「では、行きましょうか」

言いながら、レヴィンは飛行魔法を発動させる。

彼の言葉に頷くと、一度だけエルトの方を振り返った後――――フォワード陣は、ティアナ達に指定されたポイントへ向けて駆けていった。

その後姿を見届け、エルトが真っ先に口を開く。

「…………貴様もやはり、ゼロに賛同したのか？」

「まあね。僕達は世界に絶望した。だからこそ、君も？あの時？は世界に敵対してまで、ゼロの…………僕達の側についたんだろう？」

「そうだな。だが……………」

言葉を切り、エルトはバレルの銃口を突きつける。

「今のゼロには、共感できない」

「……………？恋人？だとしても、かい？」

「……………」

ポセイドンの言葉に、エルトは沈黙し眉を顰める。

それに溜め息をついて、ポセイドンは苦笑する。

「まあ、いいさ。まだ決断を下すには早いしね。答えはまだ待ってあげる。…………でも」

薄く、好戦的な笑みを口元に浮かべ、ポセイドンは、槍を構えた。

臨戦態勢に入ったポセイドンに、エルトは一層警戒してバレルを握る手に力を込める。

「せっかく会えたんだ。久々に見せてもらうよ、その力！」

「……………望むところだ！」

変わらず無邪気に笑いながら、突撃してくるポセイドンに――――
――バレルの銃口が、紅蓮の炎を吐き出した。

Episode 7 ファーストミッション／中編（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい。ちょっと短いですが、最新話脱稿です！」

ソフィア「今日は私ですっ！」

神崎「いやあ、満を持しての新キャラ登場の他にはバトルばかりという、いかにもな駄文でしたが、楽しんでいただけましたでしょうか？」

ソフィア「何やら不穏な雰囲気ですよ。何者なのでしょう、エルトさんって？」

神崎「さあて、それをここで明かすわけにはいかないね。この先をお楽しみに」

ソフィア「むう、やっぱりですか……」

神崎「新キャラ、ポセイドンも漸く出すことが出来ましたね。これはなかなか嬉しい成果です」

ソフィア「敵キャラっぽいんですけど……エルトさんのこと知ってるみたいですょ？」

神崎「みたいです。まあ、これも今後に期待していただくことと致しましょうか。……さて、そんなわけで、そろそろ前回行ったアンケートの結果発表に参りたいと思います」

ソフィア「確か、この小説のOPとED……でしたっけ？」

神崎「そうそう。では……発表します！ 以下になりました！」

OP…JOINT 川田まみ マグネス先生提供

ED…クオリア UverWorld 早乙女伊織先生提供

挿入歌…Resolution ROMANTIC MODE

鮮血の刻印先生提供

神崎「と、なりましたー！」

ソフィア「うわー……豪華ですねー……」

神崎「鮮血の刻印先生が提供してくださいました曲は、挿入歌として使わせていただくことに致しましたw これからはこれらの曲も聞きつつ、作品も読んでいただけると嬉しいですww」

ソフィア「ではでは、この辺りで次回予告！ 作者さん、お願いしますっ！」

神崎「よしきた。次回、『ファーストミッション／後編』」

ソフィア「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 7 ファーストミッション／後編

「見えてきた！ あれっ！」

アルブの発生源へ向かっていた、フォワード陣。

その彼女らの目の前に今、目的の物体がついに姿を現した。

「あれが、アルブの発生源……」

呟くエリオの視線の先には、今も数秒おきにアルブを吐き出し続けている、藍色の球体。

こうやらあれが、ティアナとマリサが見つけた発生源に間違いなさそうである。

なんとおぞましいことか。

？それ？から生み出された白銀の液状体が、次々と動物の姿を模っていくその光景は、まるでゾンビの誕生のようだ。

そして、当然のことながら球体の周囲には、それを守護するかのようにはぐると取り囲んだ動物型アルブの群れが犇っていた。

「来ますよ、皆さん」

そうレヴィンが言うと、熊の姿をしたアルブが振り下ろす拳を跳んで避ける。

そうして空中へ逃げたレヴィンの腰にあるバインダーから、主の命

に従い、彼が何も声を口にせずともビットが射出されて、眼下より彼を見上げる異形達を撃ち滅ぼしていく。

「「「やあああああああつ！」「」」

負けじと、少女2人と少年1人が吼えた。

空色の砲撃が、黒の弾丸が、龍の咆哮が、紫電の閃光が、アルブ達を飲み込み粉々に吹き飛ばす。

死角からの攻撃は、キャロとソフィアがシールドで防いだ。

それでも――――。

「グルルル……………」

「ぜ、全然減りませんよっ!？」

「え、エリオ君……………」

「くっ……………」

まるで無限にも思えるほど、次々とアルブを産み落とす球体。

幸い減る速度は増える速度に勝ってはいるものの、非常に厳しい戦いとなることは間違いない。

疲れも溜まっているし、加えて長期戦ともなれば――――。

焦りを抱く彼女達へ――――異形は一斉に牙を剥いた。

○Episode 7 ファーストミッション／後編

「もうぞ、先攻！」

先に動いたのは、エルトだった。

ベーシックモードへ変形させたバレルで、複数の魔力光線を発射、ポセイドンを狙い撃つ。

「はっ！」

それをポセイドンは、藍色の魔力オーラを纏った槍の一振りで打ち

消す。

灼熱と水。相反する力のぶつかり合いに、魔力反発がスパークを撒き散らした。

「はあああああっ！」

当然、エルトとてこれだけで決められるとは到底思っていない。

初撃がかわされたと見るや、すぐさま次の行動に移った。

魔力弾を数個形成すると、その内の数個を周囲に滞空させ、後は残らず撃ち出した。

虚空を走る、真紅の光弾。

それと同時に、エルトはまるで月を従えた惑星が如く、不整な円の如く取り囲む魔力弾と共に飛んだ。

「へえ？」

エルト自ら突っ込んできたことに虚を突かれたか、ポセイドンは興味深げに笑うと、迎え撃つべく槍を手に跳んだ。

正面からぶつかり合うか、そう思われたが、エルトの放った魔力弾が彼自身を追い越して、先にポセイドン目掛けて襲い掛かる。

払い落とそうと、身構えるポセイドン。

槍を振るい、直線的な魔力光線と違って攪乱するような軌道を描くその1つ1つを、確実に叩き落としていった。

その乱舞に紛れるようにして、突撃してきたエルトが後ろへ回り込むと、今度は彼の周囲に滞空していた魔力球が火を噴いた。

まるで、針のような鋭い切っ先を持つ魔力弾。

フェイトの魔法、フォトン・ランサーにも似たその魔法による不意打ちにはさすがにポセイドンも驚いたのか、振り返ると同時に目を見はった。

「ちっ……………」

舌打ちする小さな身体へ向け、挟み込むように襲い来る2種類の魔力弾。

その2つを払いのけようと、ポセイドンは縦横無尽に槍を振るった。振るわれる槍から生まれる圧だけではなく、より大きく、猛々しくなった魔力オーラが、真紅の魔力弾を次々に蹴散らしていった。

「くっ……………」

それを見て今度はエルトが、着地と同時に小さく舌打ちする。

それに対し、少し離れたところで同様に地につけたポセイドンは、余裕の笑みを浮かべていた。

「さすがエルト。そんな玩具で、それほどの戦いが出来るなんてね」

「どんな得物だろうと、使いこなしてみせる。それが僕達、だろう」

「？」

「そうだね。けどやっぱり、君は特別なんだね。このX－フレームを使う僕と、こうまで互角に戦うなんて」

ハヴォックは暫く使えない。

新たな相棒となったバレルをけなされて、それでもエルトがそれに顔をしかめたのはごく僅かの間。

あくまでも冷静に、ポセイドンの挑発を受け流し、言い返すことすらしてみせた。

そんな彼へ、ポセイドンは槍を降ろす。

それにもエルトは油断なく身構えるが、少年から飛んできたのは、攻撃ではなく問いだった。

「だからこそ、解らない。君は知っているはずだね？ 人間が世界を支配することで生まれる、痛みと恐怖ってやつをさ。なら、どうして君は迷う？ どうして、君はそこまで人間に惑わされるんだ？」

「貴様らには解らないだろうな。……結局、僕は人間を捨てることが出来ていない。それだけの話だ」

真っ直ぐにバレルの銃口と共に向けられるのは、迷いと、まだ見ぬかつての同志への思い。

「全ての人間が愚かなのではない。自らの醜さを認めようとせず、ただ己の本能のまま、勘違いを繰り返す。そんな人間が愚かなんだ

！」

「けど、あの時は違ったじゃないか！ あの時……人間達があんな馬鹿なことを始めなければ、世界は死なずに済んだんだ！」

彼らにしか理解しえない会話。

しかしその実は、どちらもが正しく、また、どちらもが間違っている。

答の出ない論争。

結局のところ、彼ら1人1人が、それぞれの納得のいく答を導き出すしかない。

「少しまでの僕であれば、迷わずそちら側へついていたことだろうな。……だが、僕は知ってしまった。人間の可能性をな」

「可能性なんて……。ゼロが言っていたじゃないか。人間とは愚かで脆弱な生き物。それ以上でも、それ以下でもないってさ」

「可能性は時に、理論での予測を大きく上回るぞ」

ゼロの言葉にも、エルトは全く動じない。

予想以上のしぶとさに、ポセイドンが顔をしかめた————その時だった。

2人のいるところから少し離れたところで、爆炎が上がったのは。

「ほら、始まったぞ？ 可能性の爆発が」

はっとしてそちらを見遣るポセイドンの耳へ、エルトの嘲笑にも似た笑いが――響いた。

結論から言えば、アルブ達は段々とその姿を減らしつつあった。

砲撃が飲み込み、ビットが貫き、銃が撃ち抜く。

既に何十と繰り返された応酬は、その化け物が生み出されるよりさらに早く行われ、故に辺りには飛び散った白銀の結晶の欠片が散らばるのみ。

しかし――、

「はぁ、はぁ………」

「くうっ……きりが、ないっ！」

彼女らとて、消耗は激しい。

今現在こそ数を減らしてはいるが、無限に沸いて来るのではとかわれたほどの数を相手にするはめになった彼女らは心身ともに参ってしまったのだ。

思わず、頼れる2人の隊長の援護を求めたい衝動に駆られる。

しかし、空を、自らが帰る場所であるヘリを守ってくれているであろう2人に、余計な心配はかけられない。

結局は、フォワード陣のみで相手取るしか道はなかった。

スバルのウイングロードに乗って敵を双銃で狙撃していたアオイもまた、あまりの敵の数に辟易していた。

「く、う……なかなか、きついもう……」

言いながら、右の銃から発した漆黒の魔力弾が、鹿のような姿をしたアルブに直撃し無力化する。

空中にいる自分にはアルブの脅威はキャロの命でフリードが片付けてくれている鳥型タイプのみだが、それでも、最初は的が多くて狙い易くても、魔力の消費などもかさんで段々と疲労が溜まってくるのだった。

彼女でそれならば、眼下でウイングロードから降りて戦っているエリオやレヴィン、スバルの3人や、危ないところを幾度もシールド

で助けてくれたキャロやソフィアの消耗は如何ほどのものだろうか。

今も、球体の力は衰えてはいない。

少しでも手を緩めれば、すぐに均衡は崩れるであろうことは目に見えていた。

「くっ、このままではジリ貧だ……………」

苦い顔をしながらビットを操り、レヴィンが呻く。

これだけの戦闘をしておきながら息1つ乱していないのはさすがと言えようが、心なしかビットの操作も段々と精密性を失ってきているように感じられた。

早く球体を破壊せねばと思うのだが、皆今の体力では残ったアルブを相手にするので精一杯で、なかなか一気に球体を破壊に行ける余力は残っていなかった。

疲弊していく戦場。

そこへ、2つの声が突如響き渡る。

「皆!」

「よかった、まだ生きてたようね!」

声と共に、飛来する橙と金色の2色の魔力弾。

それらはスバルとエリオが対峙していたアルブを尽く吹き飛ばし、

球体までの道を作った。

「ティア！」

「マリサさん！」

「ぼさつとしない！ さっさと行くっ！」

ティアナの櫓に、おう、と最後に残った元気を振り絞り、ティアナとマリサが作ってくれた突破口を、スバルは一気に駆け抜けた。

舗装されていない地面は凸凹としていたが、ウイングロードを展開した彼女にそんなものは関係ない。

一気に突き抜け————狙うは、一撃粉碎！

「一撃………必倒！」

作り出すは、空色の魔力球。

彼女の本分は格闘戦だが、この砲撃は、彼女が努力でものにした憧れの人の秘技。

その名は————。

「デイバイン、バスタアアアアア————っ！」

殴りつけられた魔力球から、迸る空色の魔力の奔流。

砲撃は地を抉り、空を切り裂き————そして、球体を飲み込み、

天へ上る炎の柱の中へ消し飛ばしていった。

「終わった、か……………」

砲撃が止み、音という音が静まった頃。

マリサの眩きと同時に、フォワード陣は皆一様にその場にへたり込む。

緊張の糸が切れたフォワード達はその後、ヘリが迎えに来るまでそのまま動けなかった。

『A s i g n a l o f A b s o r b e r C o r e i s
l o s t . (アブソーバーコアのシグナル、消失)』

「馬鹿な……………!?!」

自身のデバイスである三叉の槍から受けた報告に、ポセイドンが驚愕の声を上げる。

彼にしてみれば、人間などという愚かな生き物などに、自分の生み出した可愛いペット達が簡単にやられるということ自体が信じられぬことなのだから、その反応も無理もないことではある。

だが、エルトはそれにさして驚いたふうもなく、彼が呆けた一瞬の隙を突き、ベーシックモードのバレルでポセイドンを狙った。

魔力光線は真っ直ぐに少年の肩へと吸い込まれていき————貫く。

「がっ、ああああああっ!?!」

突如走った鋭い痛みにも、ポセイドンが咆哮を上げた。

身体への直接的ダメージ。

殺傷設定で放たれたのであろうことは、想像に難くなかった。

「エ、ルト……………」

「ポセイドンよ。その痛みを感じるなら解るだろう？ 僕達は、人間とどこも変わりはない。ものを考え、痛みを感じ、誰かを労わることが出来る。そのどこに、人間との境界がある？」

先程の嘲笑から一転、エルトの声音には苦痛が見て取れた。

彼とて、本意ではないのだ。
嘗ての同志と戦い、こうして痛みを与えることは。

だが、彼にも譲れないものがある。

だからこそこうして危険を冒してまでエルトの前に現れ、説得には
せ参じたのだから。

だから。

「僕は……僕達の計画は、まだ始まったばかりだ。ここで死ぬわけにはいかない……」

そう呟きながら、ポセイDONは槍を虚空へと向け――――。

「じゃあね、エルト……」

唐突に、砲撃を放った。

「ポセイDON！ 貴様、何をっ！？」

『Master！ Ms. Fate is dangerous
！（マスター！ フェイト様が危険です！）』

「何だと！？」

エルトは、砲撃の放たれた角度と距離をモニターへ表示して計算する。

果たしてその先には、今も空で戦っているはずの女性、フェイトⅡ

TⅡハラウオンの反応があった。

今から全速でいけば、間に合うかもしれないが――――。

「……………ちいっ！」

ポセイドンの方を一瞥したエルトは、舌打ちした次の瞬間には勢いよく飛び立つ。

彼を捕らえなければという思いと、彼女を救わねばという心の葛藤が頭を過ぎったが、さすがの判断力といえよう。

瞬時に自らが優先すべきこと、後悔しないための方程式の答えを一瞬间にして導き出したエルトは、真っ直ぐにフェイトの下へと飛んでいく。

そんな彼の姿を、悪戯が成功した子供のような笑みで見送ると――
――ポセイドンの姿は、足元に現れた魔法陣の中に消えた。

「フェイトちゃん、アルブが………!」

「うん………」

時間は少し、フォワード達が魔力球体を破壊した頃にまで遡る。

突如、それまでの攻勢が嘘のようにその出現を止めたアルブに、なのはとフェイトは眼前のアルブを撃墜すると同時に会話を交わす。

「フォワードの皆が、やってくれたのかもしれないね」

「うん。皆へ通信入れて、状況が収束したようなら事後処理に移ろっか」

そうだね、となのはの言葉に返事を返し、行動に移ろうとモニターを開くフェイト。

しかし————

『Sir! I catch a signal of bombardment! (サー! 砲撃の反応を感知!)』

「えっ!?!」

バルディッシュの警告は、早くて確だったといえよう。

寸前でエルトは砲撃に追いつき、フェイトとの間に割り込んでシールドを展開させたのだ。

しかし、エルトとて追いつくことで必死だったのだろう。

構築の甘かったシールドは徐々に罅割れていき————やがて碎け散ると、防いだ砲撃の余波で、エルトは吹き飛ばされた。

「ぐあああああああつ!？」

「エルトッ!」

傷を負い、砲撃の勢いに飛ばされるエルトの身体を、フェイトが抱きとめる。

傷だらけの少年は気を失っていて————傷は、広範囲に達していた。

「エルト、しっかりして! エルトッ!」

フェイトが必死に呼びかける中、異形を蹴散らしたなのはと、異変を察知したヘリが集まってくる。

新生機動六課の最初の任務は、エルトの負傷、そして敵勢力と思われるポセイドンという存在を取り逃すという2つの遺恨を抱いたまま————こうして、幕を閉じた。

Episode 7 ファーストミッション／後編（後書き）

く神の黄昏く

神崎「はい、というわけでファーストミッション終了です！」

レヴィン「此度は私ですか。いやはや、お招きいただき光栄の極み」

神崎「うつ、今日に限ってアンタかい……………」

レヴィン「何かご不満でも？（ニヤ）」

神崎「……………いえ、何も。さて、今回のミッションですが。いろいろと、ぼかしながら出してみました」

レヴィン「嘗ての同志、ですか」

神崎「リオスにはそういうのがいても記憶喪失の状態でしたし、エルトの場合彼らを信じてあげたい気持ちも同時に持ち合わせていますので、前作での敵との関係以上に複雑になっていますね」

レヴィン「ポセイドンですか。他にも、神の名を冠する人物が現れるのでしょうか？」

神崎「それはまだ内緒です。負傷したエルト。次回はいよいよ、あの人の登場です」

レヴィン「あの人……………ああ、あの人ですか」

神崎「え？ 何、もしかして解っちゃってるわけ！？」

レヴィン「ええ。情報収集は得意ですから」

神崎「まだどこにも言っていないのに……。怖い……。なんか怖いよ、この人……」

レヴィン「では、そろそろ次回予告へいきましよう」

神崎「……………ですね。それでは次回、『再臨の天使／前編』へ、」

レヴィン「無限の力、その身に宿せ」

Episode 8 再臨の天使／前編

そこは、全くの闇だった。

全てを暗黒が支配する、闇の中。

そこに、青年の意識はあった。

身体感覚は、まるで夢現ゆめげんのようにはっきりとしない。

(どこ、ここ……………?)

青年がそう疑問を抱くと、闇の中に1握りの光が生まれた。

膨れたり萎んだりを繰り返すその光の球体をぼんやりと見つめてい
ると、不意に青年の耳に—————否、心に直接、声が届いた。

—————汝、神に触れることを望むか?

(か、み……………?)

唐突な問いかけに、靄がかかったかのようにはっきりしない思考で、
青年は問い返す。

だが、声は答えない。

—————時間が……………ない。汝、力を望むなら……………今、一度……………。

声と共に、光の球体が遠ざかっていく。

それに、青年は反射的に手を伸ばし――――。

「ふにゃっ!？」

「……………んん？」

ふによふによとした、夢とは違うはつきりと感じられる柔らかな感触と共に、青年は目を開けた。

まず目に飛び込んできたのは、金の綺麗な髪と、赤と緑のオッドアイが綺麗な少女の姿。

青年が伸ばした手は、その少女の頬に触れていて、それに驚いたらしい少女が顔を赤くして固まっていた。

「ええと……………おはよう」

「う、うん……………」

顔を赤くして千鳥足で部屋を出て行く愛娘に、青年は眠気眼を擦り

ながら、もぞもぞとベッドから這い出す。

視線の先には、眩しいくらいさんさんと降り注ぐ日の光を部屋に届ける、四角の窓。

今日も天気は、快晴である。

○Episode 8 再臨の天使／前編

喫茶ヴァルハラとは、ミッドチルダ首都クラナガンのとある通りに面する小洒落た喫茶店である。

丁度1年少し前に開店したばかりだが、コーヒーやその他料理のク

オリテイの高さからリピーターは着実に増え、今ではミッドチルダに知らぬ者はいないほどの名店となっていた。

だがそんな名店だからこそ、半端なものは客に出してはならない。故に、入念な仕込みを行う喫茶ヴァルハラ朝は早い。

店長である青年もまた、朝早く起きなくてはならないのだが、ここ最近とある理由から続いている夜更かしが祟ってか、寝坊しそうになることも少なからずあったのだ。

新生機動六課の初任務が済んだ翌日である今日も例に漏れず、仕方なくぎりぎりのところで青年は食卓についた。

腹が減っては、戦は出来ぬ。

どれだけ時間が迫っていようと、朝食を採らねば忙しい喫茶の業務をこなすことは不可能だろう。

「ご馳走様でしたー」

「はい、お粗末さまでした」

先に食べ始めていた愛娘の方が先に食べ終え、食器をキッチンへ運んでいく。

もう既に、学校へ行く準備も万端。

この分なら、遅刻もしないだろう。本当に、しっかりした娘である。

「ふふー、やっぱりパパの料理って美味しいね」

「そう言ってくれると僕も嬉しいよ。……あ、そうだ」

微笑み、そして何かを思い出した青年は、ぱたぱたと鞆のある方へ駆けていく娘の方を向いた。

「ねえ、今日はちょっとしたプレゼントがあるから、早く帰ってきてくれないかな？」

「プレゼント？ 何、何!？」

「それは、帰ってきてのお楽しみ♪」

ウィンクし、少女と共に裏口の自宅用玄関へ向かう。

すると、そこには既に準備を終えたもう1人の少女の姿があった。

「おはよう。今日も早いね」

「おはようっ」

返事をするなり、嬉しそうに抱きついてくる、長い黒髪の少女。

それを不服そうに頬を膨らませて見つめる娘の視線に気付くと、青年はなんとか彼女を引き剥がす。

なかなか親離れしない娘に再度苦笑しながら、青年は2人を見送った。

「じゃ、行ってらっしゃい」

「行ってきましたー♪」

「……………行って、くる」

2人揃って、手を繋いで学校へ向けて歩いていく。

それを見送った青年も、小さく伸びをして家の中へ戻った。

その後朝食を手早く済ませ、仕事着に着替えると、青年のヴァルハラでの一日が始まる。

先にも説明したとおり、既に有名店の仲間入りを果たした彼の店はかなりの盛況ぶりを見せる。

グルメ雑誌にも早くもその名を連ねたその店は、午前・午後の時間帯を問わず多くの客で賑わうのだ。

更に普通の職場であればお昼休憩などが入るのだが、喫茶店はそうもない。

お昼も店内は客でごった返しており、青年が休めるのはバイトの店員に店を任せる数十分の限られた時間しかなかった。

「ああ、今日も疲れたなあ……………」

そんなこんなで、今日の喫茶ヴァルハラ業務を漸く片付けた青年は、軋むように疲れた身体を叱咤して、町へ出ていた。

目的は、喫茶店で使う食材の買出し。

喫茶店の終わるこの頃でなければ買出しには行けないし、出来れば食材は自分で見ておきたい。

喫茶店店長という肩書きから、というだけではない。

喫茶店の経営は彼自身の趣味が高じたものであり、故に妥協したくはなかったのだ。

そんな事情から、店長である青年自ら、草臥れた身体を叱咤しながら食材を買い求める。

青果から、食肉まで。

喫茶と言えど幅広い料理を提供しているヴァルハラは、客の数もあって食材の消費が激しい。

その分売り上げもそれなりのものなので収支に差し支えてはいないが、この買い物だけで既にかんりの量であった。

「はい、これもよろしくね」

『All right.』

買った傍から、自らのデバイスに最近新たに搭載した収納機能で食材を収納してもらう。

基本は管理局の人間しか所持を許されていないデバイスだが、青年は囑託魔導師の資格も取得しているため、何の問題もなかった。

「うん、これくらいでいいかな」

全ての食材を買い終えたことを確認すると、青年は今度は自らの買い物へ向けて歩を進める。

既に夕焼けの赤が彩り始めている空を見上げ、そろそろ家に着いている頃だろうか、と娘2人に思いを馳せると、青年は足早に歩いていく。

向かった先は、ジャンクパーツ屋。

こじんまりとした、一見すると何があるのかすら判別できない古びた建物の中にあるその店は、彼の行きつけの店である。

ジャンクと化したデバイスのパーツから、まだ使えそうなものをどこからか手に入れてきて売っているのだ。

しかし、ジャンクといえど侮るなかれ。

時には正規品と寸分変わらぬものがお値打ち価格で売られている場合も多く、喫茶だけでなく機械弄りも趣味の1つである彼はよくここへ足を運んでいた。

まさに、知る人ぞ知る名店である。

青年がたてつけの悪いドアを開けると、薄暗い中に黄色の電灯をつけた店内が目飛び込んできた。

「いらっしゃ……………って、おお。お前さんか」

「こんにちはっ♪」

カウンターで背を向けて新聞を読んでいたこの店の主人であるごつい筋肉質の男が、振り返って青年を一瞥してニヤリと笑う。

それに屈託のない笑顔で返すと、青年は真っ直ぐにカウンターの前まで歩み寄った。

「レッガーさん、今日のオススメは？」

「今日は……………そうだな。これなんかどうだ？」

ごそごそと、カウンターの下から男————レッガーが取り出したのは、1枚のチップ。

「データチップだ。最近手に入れたジャンクの中ではかなり上物の方だな」

「へえ………こんないいもの、ジャンクに到底見えないけどなあ………」

「ああ、俺も同感だよ。ま、おかげでお前みたいなやつを相手に商売してる俺としちゃ、儲かっていいがな」

「あはは、違うないね」

たった数センチ四方程式しかないデータチップを前に、会話に花を咲かせる青年とレッガー。

こんなふうに、この豪快気さくな店主とお喋りも、青年の1日の楽しみの1つであった。

「しかし、まあ………なんだ」

「何？」

会話の途中でふと、じっとこちらを見つめるレッガーに、きょとんとした様子で青年は聞き返す。

すると、レッガーは言いづらそうに――――。

「いや………あれだ。そうやって髪が長えと、ますます女みてえだな。お前」

「ほ、ほっというてよっ！」

レッガーの言葉の意味を瞬時に理解して、青年は恥ずかしさのあま

り赤面する。

ここまで描写は避けていたが、青年の外見は簡単に言い表すならばプラチナブロンドのセミロングの？美少女？。そう、？美少年？ではなく？美少女？であつた。

着ている服が男物でなければ、誰も彼を男だと見抜くことは出来ないだろう。

「も、もう。からかわないでよっ！　じ、じゃあ、今日はもう帰るからねっ！！」

「はいはい、また来いよー」

帰り際に、べーっ、と舌を出して慌ただしく去っていく青年に、ひらひらと手を振るレッガー！。

やはりというか、全く悪びれた様子もない。

「そういう仕草が女みてえだってんだろ？……それにしても」

呆れたように苦笑するレッガー！。

全ての元凶はこの男の言動なのだが、そもそも青年自身の容姿にも大いに要因はあるため、この場合はどっちもどっちと言わざるを得ないだろう。

「律儀だねえ……………」

目を落としたのは、カウンターの上。

そこに置かれていたはずのデータチップの代わりに、数枚の硬貨が、電灯の光を反射して輝いていた。

「はああ……遅くなっちゃったなあ……」

もう暗くなり始めた空を仰ぎ、青年は一路帰り道を走る。

既に町には電灯が灯り始め、ネオンが眩しく感じ始める時刻である。夜間でも営業している店の電灯をぼんやりと眺めながら、青年は家で待っているであろう娘2人を思い、足を速めた。

「そうだ……」

ふと、目に入ったのは裏通り。

確かここからなら、このまま通りを走っていくより早く帰ることが出来たはずだと、青年は思い出す。

迷わず青年は、裏通りに飛び込んだ。

「うわ、暗いなあ………」

実際は、一定の距離ごとに置かれている街灯のおかげでそこまで暗くはないのだが、あまりにも眩いネオンの中に晒されていた青年の目からは暗く見えたのだろう。

既にピークは過ぎたのか、人っ子1人いない裏通りを、青年はただ家へ帰るべく走り抜けていく。

彼の頭の中には、早く家へ帰ることしかなかった。

ああ、きつと遅くなったことを怒られるのだろう。

早く帰るように言ったのはパパでしょ、と。

それでも、ごめん、と言って抱きしめてやれば、仕方なさに笑顔で許してくれるのだろうか。

決して、気を抜いていたわけではないのだ。

ただ、気が急いていたことは間違いない。

そうでなければ――――。

「――……っ!？」

背に炸裂した一発の弾丸に、気付けぬはずがないのだから。

「はっはあ、命・中！ てなあ！」

「さっすがアニキ！ 百発百中だぜ！」

うつ伏せに倒れ付した青年に向けて、チンピラらしき男数人が嬉々とした声を上げる。

そして、そのままの勢いで青年の下へ走り寄ると、満足げに見下ろした。

おそらく彼らの中では、既に青年は気絶したこととなっているのだろう。

決して、死んだとは思っていない。

それは、彼の放った魔力弾が非殺傷設定であったことから明らかなことだ。

「ははっ、こんなところを女1人で歩いてるから悪いんだ」

「で、どうします？」

「決まってるだろ。金は奪って女は売る！」

「ぎゃはははははっ！ マジ外道！」

「でもこいつ、どこかで見たことあるような……ま、いいか」

口々に、勝手なことを言って勝手に盛り上がっている男達は――
――1人は、何やら訝しげに青年をじろじろ見ているが――

気付いていない。

彼らが喧嘩を売ったのが、誰なのか。

それが、どれほど愚かしい行為であったのか、全く理解していなかったのだ。

故に、仲間の1人が突然魔力弾に撃たれたとしても、男達はすぐには反応できなかった。

「あーあ。せっかくの仕事着なのに、破いちゃって。どうしてくれるのさ、お兄さん達？」

「な……………」

「なあああああっ!？」

気絶していたと思った人間が突然起き上がれば、驚きに尻餅をついた男達の反応も当然のことか。

だが、男達にしてみれば完全なるイレギュラー。

完全に気絶していたと思っていた青年は、全くの無傷だったのだ。

「なっ、なななななな、なん、なんで……………なんでお、お前つ……………!!？」

「傷つくなあ、そのバケモノを見るような顔。まあ、でも当然か。完全に気絶してたと勘違いしてたもん、ねっ!」

言い終わるが早いかな、青年は手にいつの間やら展開した剣型のデバイスを振り、更に1人を昏倒させる。

鮮やかな手際。

全く無駄のないその動作は、長く戦ってきた歴戦の猛者を思わせる。

しかし、その実、それこそが真実。

青年は既に多くの戦いを経験した猛者であり、1つの戦いを終局へと導いた英雄なのだから。

「久しぶりだから、加減は出来ないかもしれないけど………許してね？ 後………僕は男なだけだな」

可愛らしく笑みを浮かべながら小首を傾げる青年の身体を、純白の光が覆い尽くしていく。

そして。徐々にその姿を現していく高貴なる姿の背後には、街灯や星々の光を反射して神秘的に輝く………1対の空色の翼。

「思い、出した………」

それに、男の1人が顔を真っ青にしてうわ言のように呟く。

漸く………少なくとも、この男は気付いてしまった。

自らの行動の愚かしさを。

目の前にいるのは見た目どおりのか弱き存在などではなく、自らに断罪の光を降らせる天使なのだ。

そう。彼の名は――――。

「氷翼の、天使っ……………！」

青年が、ニコリと微笑を浮かべる。

男がその夜意識を保っていたのは、その瞬間が最後だった――――。

「ふう。お終い」

剣を払うと、アウトフレームになるように命じた青年は、それがネックレスと化したのを認めると男達をバインドと呼ばれる円環の形をした捕縛魔法で近くの電灯へ縛り上げた。

もはや、彼の目の前に立っている男は1人とていはしない。

それこそが、彼が絶対的力の持ち主である証。

そんじょそこらのチンピラなど、彼をどうこうするレベルにはない
ことの証明である。

「ああ、どうしよう。またなのはに怒られちゃうなあ……………」

大事なかったとはいえ、おそらくバリアジャケットを解除すれば背部にぽっかりと開いているであろう穴に、少し前までは生活を共にしていた愛する女性のことを思うと、思わず溜め息が漏れる。

「もう、ここからはバリアジャケットで帰ろうか？」

『It's strange. (奇妙ですよ)』

「だよねえ……………」

デバイスから帰ってきた答えに、導きかけた答を振り払って、仕方なく青年はバリアジャケットをも解除しようとする。

その時だった。

誰もいないはずのこの場へ、更なる声が響いたのは。

「その貴方」

突如聞こえてきた声に、青年は振り向かずに返事を返す。

「どちら様？ 悪いけど、君みたいな人に会った記憶はないんだけど」

青年の言葉が終わらぬうちに、それまでは誰もいなかった暗闇から1人の人間が姿を現した。

何者だろうか。少なくとも男達の仲間ではないだろう。

それは、その姿からだけではない。

その雰囲気や纏う空気からも、その存在が、少し力を得ただけで粹がるチンピラのような下賤なものでないことは容易に理解できた。

「貴方になくとも、私にはあります。嘗てこのミッドチルダを襲った未曾有の危機。L・P事件と呼ばれたその危機を救った、英雄……」

青年が振り返る。

プラチナブロンドのセミロングが揺れ、その金の目が、語り手を真っ直ぐに見つめていた。

対し、語り手は女。

翡翠色の流れるような長い髪は束ねられており、顔はバイザーにより覆われていて伺い知ることは出来ない。

奇しくもこの出会いは、今後の物語を左右する重要なピースの1つとなるのだが、それを2人はまだ知らなかった。

「リオスⅡコーネルド。私と……戦っていただきます」

青年――――リオスが構えるのも待たず、女は弾丸の如く駆け出した。

Episode 8 再臨の天使／前編（後書き）

（神の黄昏）

神崎「というわけで皆様お待ちかね、リオスの登場でした！」

リオス「こちらでは初めまして。前作主人公、リオスです！」

神崎「いやー、漸く出れたね？w」

リオス「全くだよw もう、いつ出れるかってそわそわしてたんだから……………」

神崎「それはすまんかった。さて、そんなわけで喫茶ヴァルハラの日常とも言えるべき話を描いたわけですが」

リオス「向こうではアルブが何だのいろいろ言ってるけど、こっちは至って平和だよね」

神崎「そうそう最初からそんなハードにはしないよw まあ、後々はわからないけど……………ね」

リオス「望むところさ。伊達に主人公やってないもんね」

神崎「おお、これが前作主人公の貫禄ってやつですかw さて、今回は最後に出てきた謎（笑）の女性との戦いです」

リオス「正体……………たぶん、皆さん気付いてるよねw」

神崎「今回は、それほど本格的な邂逅とはなりませんが。いずれ彼女も、本編に大きく関わってくることとなりますので、お楽しみにw」

リオス「なるほどww」

神崎「それでは次回、『再臨の天使／中編』」

リオス「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 8 再臨の天使／後編

「うわっと!？」

いきなり殴りかかってきた女の拳を、リオスは咄嗟に受け止める。

反応は上々。

鍛錬は欠かしていないとはいえ、長らく前線から退いていた身としては充分すぎるほどの動きだ。

両者はそのまま膠着することはなく、女がリオスを蹴り飛ばすことで両者の間には相応の距離が出来た。

「ぐっ……くそっ。いきなり戦えて………血の気が多い子だなあ」

「何とでも。……さあ。武装してください」

「ああ、そのつもりさ。グロリアス？」

『All right.』

リオスの命に、ネックレスの形に戻っていた彼のデバイス、グロリアスが再度形を変えていく。

『Knuckle mode.』

模るのは、機械的なガントレット。

その形状はスバルのリボルバーナックルに酷似しているが、配色は

全体的に白で、それこそが、その拳がグロリアスより齎されたという証である。

「……………意外です」

「この得物が、かい？」

てっきり剣ではなく拳を使うことを選んだことに対し意外と評価されたのだと彼女の言葉を解釈したりオスに、いえ、とそれを否定して、女は構えた。

「貴方が、すんなりと勝負を受けてくださったことが、です」

「君からは、人殺しの臭いを感じない。なら、売られた喧嘩は買うのが礼儀なんじゃないかって思ったまでさ。……………不満かい？」

「いえ。むしろ……………」

自ら言葉を終えるのを待たずに、女は再び距離を詰める。

先程と同じ、正面からの襲撃。

しかし過去のそれと違うのは、リオスに受ける準備があったこと。

ナックルモードのグロリアスは彼女の拳を真っ向から受け止め、ギリギリと音を立てた。

「むしろ、好都合です」

「それはよかった」

不敵に笑う。

長らく相対してきた好敵手のように。

久しぶりに全力をぶつけ合える、そんな相手と見える^{まみ}ように。

やがて2人の闘士の拳は————再び衝突した。

○Episode 8 再臨の天使／後編

「はあああああああああつ！」

「あああああああああつ！」

撃ち合いは、もう何度目かも計り知れぬ領域にまで達していた。

既に両者に時間の感覚はなく、ただ彼らの内にあるのは、互いの力をぶつけ合うのだという闘争本能のみ。

撃ち合う拳は火花を上げ、蹴撃が描く弧は鮮やかに夜の闇を彩る。

そして。その中心にいる2人は、さながら舞いを踊っているような美しさすら感じられた。

「霸王、断空拳っ！」

もう、この技を放ったのも何度目になるだろうか。

女にしてみれば、その流派で得たものの中でも上位に位置する奥義であり、故に今までそれで何人もの闘士を地に沈めてきた。

だが、目の前の男は違う。

幾度放つても――――。

「……………無水」

まるで、流れ落ちる水を打つかのような動きで、全くその芯を捉えることが出来ない。

掠ることすらも、許されないのだ。

対し、リオスの側も女の実力には舌を巻いていた。

（へえ……スバル達にも負けず劣らずのこの動き。伊達に、こんな野良試合挑んでるわけじゃなさそうだね）

リオスが必殺の念を込めて放った一撃も、紙一重でただの有効打にランクダウンさせてくる。

それでも攻撃を当てられるのは偏にリオス自身の力の賜物なのだが、普通ならばとくに胴を強打され昏倒していてもおかしくないというのに、未だに意識を保っていられる女の戦闘力。それが、リオスには楽しいとすら感じられた。

拮抗する試合。

しかし、両者の間には決定的に違うものがあつた。

1つは、力量。

いかに女が強いとはいえ、それは単に一般人の尺度から見ての話である。

リオスがまだ1撃も喰らっていないのに対し、女は既に何発か叩き込まれていた。

そして、もう1つは————スタミナ。

「はあ、はあ………」

リオスは連日の喫茶店業務のおかげで体力がついている上に、緩やかに成長したおかげでそれ相応のスタミナが備わっていたが、やはりというか、女の方から先に息が切れ始めた。

「どうしたの、もう息が上がってるよっ！」

「しまっ……………がはっ!？」

足が纏れた隙に、リオスの掌底が女の胴を捉える。

予想以上に思い1撃に、意識をもっていかれるのは何とか回避したものの、痛みと1瞬だけ陥った呼吸困難に悶絶しその場に崩れ落ちる女。

「く、う……………ま、まだっ……………」

震える身体を叱咤して、なんとか身体を起こそうと女は上を向く。

しかしその鼻先には————真っ直ぐに、白い拳が突きつけられていた。

「チェックメイト。僕の勝ち、だね」

女は、動けなかった。

負けを宣告されて、悔しがる余裕すらなかった。

ただ、目の前の存在の圧倒的な力に、動くことも出来ずに固まっていた。

ニコリと微笑むその暖かな笑顔を見るまで、女は何も考えることが出来なかった。

「さて、と……………そんなわけで勝っちゃったんだけど……………君、案外可愛い顔してたんだね」

「え?……………あ、ああっ!？」

そう言って、手にいつの間にか持っていたバイザーを弄ぶりオスに、漸く自分がバイザーを奪われていたことに気付いた女は、慌てて手を出した。

「そ、それっ！ 返して下さいっ！」

「んー、どうしよっかなー……………」

考えるような仕草をしつつ、女が、リオスがバイザーを持っている右手の方へ手を伸ばせば、左手へパス。

左手へ伸ばせば、今度は右手へパス。

以下はもう——————エンドレスだった。

リオスの方が僅かに身長も手の長さも長い上、女の方はダメージを負っている所為かなかなかバイザーに触れることが出来ない。

「う、うううううう……………」

（やばい……………なんか可愛い）

先程までの凜とした戦いぶりがまるで嘘のように、小動物が如く弄ばれる女に、何だか突然勝負を挑まれた無礼も忘れてリオスは和んでしまう。

だが、涙が目に溜まってきた辺りでさすがに罪悪感が湧いてきて、はい、と声をかけながら頭にかぶせてやった。

「あ……………」

「大切なものか何かだったのかな？　だとしたらごめんね」

そう謝って、にっこりと笑うリオスに、女は紅潮する顔を隠すようにバイザーを下げる。

「あ……………ありがとうございます……………」

「うん、どういたしまし……………て？」

最後が疑問系になってしまったのは、仕方のないことだろう。

元はといえばリオスは襲い掛かれた側であり、言うなれば被害者だのにその犯人たる女に、自分は今感謝の言葉を受けている。これほど滑稽なことはあるうかと、可笑しく思ってしまうのも無理からぬことであった。

「あ、あははははははっ！」

「わ、笑わないで下さい……………」

「あはは、いや、ごめんごめん。でも、なんだか可笑しくて……………」

「もう……………」

そう不満げに声を漏らしながら、女もまた楽しそうに口元が緩んでいた。

「はい。コーヒーでよかった？」

「あ、その、お構いなく……………」

近くの公園のベンチに場所を移した2人。

ベンチに腰を降ろす女に、リオスは自販機で買ってきた缶コーヒーを手渡した。

その隣に、自分が購入したコーヒーを手にはリオスも腰掛け、プルタブを開けて口に運ぶ。

それを横目に、女もまた同様にしてコーヒーを口に運んだ。

しかし。

「う……………に、にぎやい……………」

「うん？ ブラックは苦手？ ごめんね、これしか売ってなくて………」

「あ、いえ……………き、気にしないで下さい……………」

言いながら、缶を横に置いて女は口の中から苦味が消えるのを待つ。

気にするなど本人が言っているが、目に涙まで浮かべているのを見て気にするなどという方が無理だ。

結局ある程度時間が経って落ち着いてくるのを待って、リオスは女へ訊ねた。

「さっきはどうして、突然襲いかかってきたりしたの？」

「……………私は……………私には、やらねばならないことがあるのです」

「やらなきゃ、いけないこと？」

リオスが聞き返すと、女は少しずつ話し始めた。

理由の多くは語ってくれなかったが、自分の使っている武術が覇王^{カイザー}流と呼ばれるもので、自分はその使い手に相応しい強さを手に入れねばならないこと。

そのために、強そうな人間を見つけては勝負を挑んでいたことを話してくれた。

そういえば、テレビでそのような事件が報道されていたことを、リ

オスは彼女の話聞きながら思い出していた。

「それで、僕を襲ってきたと。そういうことか」

「……………はい」

「そっか……………」

少しの間、2人の間を静寂が支配した。

女の側は、既に管理局へ突き出されることを覚悟しているのか、覚悟したようにじっと目を閉じたまま動かない。

それにリオスは、少しの間考えると――――。

「……………君、名前は？」

「え……………あ…アインハルト、です……………」

「そう。アインハルトっていうんだ。いい名前だね」

「そんなことは……………そ、そんなことより！ 突き出すなら、早くそうしてください」

「突き出すって……………どこに？」

きょとんとして聞き返すリオスに、女――――アインハルトは、この男は何を言っているのか、とても言いたげな、信じられないものを見るかのような目でリオスを見た。

だから、管理局に突き出さないのかと。

自分は貴方に襲い掛かったのだから、そうなって当然なのだと。

そうアインハルトは訴えたが、リオスはそれを聞くと声を上げて笑った。

「あははははっ。僕は全然気にしてないよ。むしろ……友達になりたいとすら思ってるしね。それに、娘の友達にもちょうどよさそうだし」

「娘の……？……まさか、気付いていたのですか！？」

驚愕するアインハルトに、まあね、と言ってリオスは目を閉じる。

そして再び目を開けると、その瞳は空色に光輝いていた。

「その目は………」

「そう。解っちゃうんだよ、いろいろとね」

そう微笑むと、俯くアインハルトを前にリオスは再び目を閉じ、それを元の金に戻した。

「なんでそんな大人の格好をしてまで強くなりたいたいのかは、今は聞かないけど。でも、時々でよければ僕がいつでもスパアの相手になってあげる。だから、もうストリートファイトなんてやめた方がいいよ。うん、それがいい」

「……………」

リオスの言葉に、アインハルトは答えない。

しかしその口元には、先程からの態度とは打って変わって、年相応の優しい微笑みが浮かんでいた。

「……………ありがとうございます」

「うん。……………って、ああっ!?!」

「ど、どうしたのですか?」

暖かな空気が漂い始めたその時、突如素っ頓狂な声を上げたリオスにアインハルトもまた驚いてしまう。

リオスが腕時計を見ると、時間は既に遅くを回っていた。

「ああ、かなり遅くなっちゃた……。そろそろ帰らないと……………!」

「あ……………」

もう、行ってしまう。

それを悟り寂しげな声を上げた彼女にリオスは気付いて、懐からメモ帳を取り出してさらさらと何かを書きとめた。

そしてそれを破くと、そのまま彼女へと手渡す。

「これは?」

「僕の家番号。また相手をしてほしくなったら、いつでも言って。」

相談とかも大歓迎だからね！」

「あ、はい……………」

「じゃあ、そういうことだからっ！　またねっ！」

言い終わるが早いか、呼び止める間もなく慌ただしく鞆とグロリアスをもって去っていくリオスの後姿を見つめて、アインハルトは可笑しくなって笑った。

「リオス、コーネルド……………」

大切な何かを抱きしめるように、アインハルトは腕を抱いてその名を呼ぶ。

「今度は、本当の私の姿で会いに行きますね。……………ふふっ」

楽しそうにそう微笑む彼女の表情は、まるで一輪の花の如く、明るく優しい。

その表情を隠してしまうバイザーは、既につける気にはなれなかった。

「あれが、リオスⅡコーネルド。天使の鍵か……………」

エンジェル・ス・キー

去っていくリオスをその双眸に捉え、赤の髪をした男がそう呟く。

男がいるのは、リオス達のいた公園からほんの少しばかり離れたビルの上。

それほどの距離から、遠視の魔法を用いて、モニター越しにリオスとアインハルトの戦いを見つめていた男の傍には、もう1人、銀の長髪を靡かせた妖艶な女の姿があった。

管理局基地が襲撃された際現場に現れ、エルトにアルテミスと呼ばれていた女性である。

「アルテミスよ。情報が確かなら、奴こそが我らの計画の一番の障害となることは確実。ここで潰しておいた方が、今後のためなのではないか？」

赤髪の男はそういいながら、駆けていくリオスの姿を見つめる。

彼の顔に浮かぶのは、好戦的且つ厳格な表情。

今すぐ彼の下へ飛んでいって、潰してやりたい。そう考えているのが狂おしいほどに理解できる表情である。

だが、そんな彼にアルテミスは首を振った。

「駄目よ。彼は最も厄介な障害ではあるけれど、同時に最も底の知れぬ存在でもあるわ。まだ時ではない。焦らずに待ちましよう」

「ふん、仕方がない。……まあいいさ。我が僕たちも、段々とその力を強めつつある。じっくりといくこととするか」

ふはは、と、上機嫌に笑う男とは対照的に、アルテミスの表情は晴れない。

男の背後からモニターに映るリオスを見つめる彼女の視線は、どこか憂いを含んでいるように見えた――――。

「ただいまー……………」

家に帰ったりリオスは、努めて小さな声で戸口の鍵を開けて中へと入った。

おそらく、既に娘達は寝静まっている頃だろうなと想像しつつ、リオスは抜き足差し足で部屋の中を進み……………。

パチッ。

「あっ」

不意に、部屋の明かりがついた。

驚いて、リオスは後ろへ転倒し、尻餅をついてしまう。

「あいたたた……………」

打った尻を擦っていると、目の前にはいつの間にもやら、腰に手を当ててこちらをじっと見ている愛娘、ヴィヴィオの姿があった。

その後ろには、ヴィヴィオより少し遅れて養子となった少女、エミリアの姿も見える。

異様な雰囲気仁王立ちするオッドアイの瞳に、リオスはおそるおそる言葉を発してみる。

「えと…………た、ただいま……」

「…………ふえ……パパー……」

「わわっ、ヴィヴィオ!?」

突然飛びつかれて、慌てて彼女の身体を受け止めるリオス。

それに成功して漸く姿勢を整えた彼の耳に入ってきたのは――
―彼の胸を借りて泣く、ヴィヴィオの声だった。

「パパ、全然帰ってこないからっ…………うわああああん、心配したよおおお…………」

突然泣き出したヴィヴィオに、リオスはどうしたらいいか解らず、その背中を擦り続けた。

後でエミリアから聞いた話だが、学校から帰ってもなかなか帰ってこないリオスが心配になり、ヴィヴィオは寝ないでずっと彼の帰りを待っていたのだという。

まあ、襲撃を受けていたのは本当なのだが――――本当のことを話せばまた泣き出してしまうのは必然。
遅くなってしまった理由を別に話すと、なんとかヴィヴィオも納得して許してくれた。

その後、なんやかんやで疲れて眠ってしまったヴィヴィオをベッドへ運び、リオスもまた2階の自室へ戻る。

するとふと、机の上に置いてあるラッピング済みの箱が目に入り、リオスは苦笑した。

「渡しそびれちゃったなあ……………」

箱を手に取り、リオスは済まなそうな表情でドアを見つめる。

約束を守れなかったことに、階下で眠っているであろうヴィヴィオへ心の内で謝罪の言葉を述べると、リオスはベッドへ突っ伏す。

今日はなんだか、いつもと違って様々なことがあったせいかな疲労が溜まっていたのだろう。

その後数分もしない内に室内には寝息が木霊し——————リオスは、深い眠りへと落ちていった。

Episode 8 再臨の天使／後編（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい、そんなわけで決着しましたー！」

アインハルト「なんという展開ですか。……この作品では初めましてですね、皆さん。ごきげんよう。アインハルトと申します」

神崎「喜べ、勇気を出してVividを買ったおかげで君を出すことが出来たんだぜ……！」

アインハルト「それについては感謝していますが」

神崎「で。どうだった？ リオスと戦った感想は」

アインハルト「並々ならぬ闘志と底力を感じました。彼を超えられたら、どれほどの高みへと辿り着くことが出来るのでしょうか」

神崎「彼を倒せるとしたら、そいつもそれ相応の力を持つてると同義だからね。きっと相当な力と精神力の持ち主だろうね」

アインハルト「早く、また会ってみたいです……」

神崎「それは、スパーのため？ それとも……（ニヤ）」

アインハルト「す、スパーのために決まっているじゃないですか！
しょ、しょれ以外に何があるとおっ！？」

Episode 9 遅れてきた男／前編

「う……………ん……………」

暖かなまどろみから、徐々に覚醒していく思考。

そんな暖かな倦怠感の中に、エルトⅡクリーバーの意識はあった。

そつと、重たい瞼を開ける。

まず目に入ってきたのは、白い天井。

この数週間の間に何度かお世話になった、機動六課の医務室の天井と理解する。

ならば、自分がそれを見ているということは、自分は医務室の中で横たわっているということだ。

そして、あの心優しい六課の面々が、床やソファに無造作に自分を寝かせるはずもないとも理解していた。

第一、記憶が正しければ自分は怪我人のはずだ。

怪我人を労わるのが医務室という場なのだから、そんなことは万が一にも有り得ない。

ならばと、エルトは軽く身を起こした。

倦怠感と共に、僅かに節々に走る痛み。

見れば、身体のアちこちを包帯やガーゼが覆っていた。ギプスなど

で固定されていないということは、骨折などの心配もなさそうだ。

我ながら、頑丈な身体に生まれたものだと思う。

あのポセイドンの攻撃を、直接ではないにせよ受けておいて、よくもこれだけの傷で済んだものだ、と。

ともかく、そうして完全に上半身だけ起こしてみようとしたところ
————そこでふと気付くのは、自分の膝の辺りに感じる僅かな
重量感。

そこへすかさず視線をやると————そこには、看病に疲れたらしい1人の女性の寝顔があった。

「全く……………」

溜め息をつきながら、しかしその寝顔を眺めるエルトは優しく微笑む。

その女性————フェイトⅡTⅡハラウオンを起こさぬよう気遣いながらそっとベッドから這い出すと、自分にかかっていた毛布をフェイトの背へかけてやり、エルトは医務室を後にした。

○Episode 9 遅れてきた男／前編

「やあ。今日も精が出るな」

「エルト君!?! もう動いて大丈夫なの!?!」

訓練場へと出向いたエルトがその入り口付近にいたのはへ話しかけると、当のなのは振り向いた途端に驚きの表情を見せ、エルトの身体を気遣う。

それは、当然の反応と言えるだろう。

何故なら――――。

「エルト君、1日中ずっと起きなかったんだよ? もうちょっと寝てた方が………」

「心配してくれるのは嬉しいが、僕はもう大丈夫だ。今から模擬戦しろと言われても全く問題もない」

「もう……………」

呆れたようにくすくすと笑うのは。

その後ろに見えるモニターの中で、個別特訓をしているらしいスバル達の様子が見える。

「今は……フォワードの訓練中か？」

「そうだね。皆気合入ってるよ」

「……………嬉しいか、教える側としては」

「え？」

「そんな顔をしている」

そう言って、ふっ、と微笑むエルト。

思えば、彼が笑うのを見るのは本当に珍しいことかもしれない。

彼は、多くを語らない。

フェイトを命がけで守ってくれたのを見れば、彼が敵意をもって機動六課に身を置いているわけでないことはなのにも解る。

しかし、どこか距離を置いているような節のある彼は、とかく笑うことはなかった。

まるで、一時期のリオスのように。

心を閉ざして、失った記憶に苦しんでいた頃の—————天使のよ

うに。

それを、その悲しさを身をもって体験したなのはには、そのままではないことは解っていた。

しかしそうはいっても、その距離を縮める方法はわからない。とにかく時が来て、彼が話してくれる日を待つ他にない。

そんな歯痒い思いを抱いていたところで、それでも時々見せてくれる笑顔は、彼女に安堵の感情を齎すのに充分だった。

そう？と笑って、なのは再びモニターに目を移した。

フォワードの皆も、エルトを信用してくれている。

ウイングの2人も彼を含めたフォーメーションに順応しつつあるし、いい具合のコンビネーションが生まれつつある。スターズやライトニングとの連携も見事だ。

それはエルト自身が他者に合わせることに長けているということもあるかもしれないが、やはりフォワードが皆、彼に順応し受け入れ始めている証拠であるようになのはには感じられたのだ。

信頼する相手でなければ、そもそも背中を合わせることすら出来ないだろうから。

「邪魔をしたな。僕はお言葉に甘えて、もう少し休ませてもらうでしょう」

「はい、お疲れ様」

去っていくエルトに微笑み返すと、なのはモニターを注意深く見つめる。

彼と話していると思ったことだが、確かに連携のいいフォワードに何か言い様のない違和感を感じる。

何故だろう。

何か、大事なことを忘れているような――――。

「……………あっ！」

口元に手を当てて、しまった、と自らが忘れていた？そのこと？を思いだしたなのは、フォワードを映し出すものとは別のモニターを表示し、回線を繋ぐ。

そうして画面に見慣れた部屋の壁と茶のショートカットが表示された頃には、既にエルトの姿は訓練場から消えた後であった。

訓練場を出たエルトは一路、自室を目指していた。

まだ節々は痛むが、生憎あの薬品臭い医務室に残る趣味はない。

中にはあの臭いに言い様のない懐かしさのようなものを感じる者もいるそうだが、少なくともエルトはその類にはいなかった。

自室のドアを開け、中へ滑り込む。

殺風景。それが、彼の部屋を形容するただ1つの言葉だ。

無駄なものは一切置かれていない。

あるのは、備え付けられたベッドと支給された目覚まし時計。

そして、彼が肌身離さず持っている――1つのロケット。

「バレル、現在の時刻は？」

『It's early morning yet. (まだ早朝ですよ)』

「何?.....そうか。では、先程のは早朝訓練か.....」

朝早くから結構なことだ、と、新たな相棒から返ってきた答に、自分も早起きであることは柵に上げて皮肉りながら、エルトはベッド

に仰向けに横になった。

いざなのはに休むといってはみたものの、機動六課へ来てからこの方、このように暇を持て余したことなどなかったように思う。

ともすれば、手持ち無沙汰になってしまふのは当然のことでは――

「……………暇、だな」

『……………Yes. (ですね)』

ついには相棒と共に、そんなふうに眩きを漏らす始末。

このまま無駄に時間が過ぎ去るか。

そう思われたが、生憎彼が惰眠を貪ることは許されなかった。

「エルト。いるんでしょう？ 開けてくれないかしら」

突如、ドアの向こう側から響き渡る声。

聞きなれた声に、エルトはベッドから起き上がってドアの傍まで行くど、ドアロックを解除した。

「ふふ、やっぱりここにいたわね」

「マリサ||ネティアス。貴方がこんなところに来るとは、珍しいな」
ドアを開けたエルトの前で腕を組んでこちらに微笑みかけているのは、ウイング分隊長を務める女性、マリサ||ネティアス。

階級は副隊長のアオイより下だが、その指揮能力の高さをはやてに買われたらしい。

その彼女はエルトの言葉に微笑みを崩すことなく、用件を告げる。

「ちょっと、八神部隊長から仕事を仰せつかってね。その件で話があるから、食堂にご一緒願えないかしら？」

「了解した」

頷き、エルトは備え付けのデスクの上に無造作に置いてあったロケットを首にかけると、マリサに連れられて食堂を目指した。

その道中で、マリサが悪戯っぽく笑いながら口にする。

「フェイトが泣いてたわよ。朝起きたら貴方がいなくなって、心臓が止まりそうだったって」

「そうか。彼女には何も告げずに部屋を出たからな。せめて、置手紙の1つでも残しておくべきだったか」

「愛されてるわね」

「からかっても無駄なことだ」

「あら、事実を言ったただけだけだ」

そう相変わらずの笑みを浮かべる彼女の横顔に、エルトは少なくとも口のうまさだけは彼女には敵わないことを感じ取った。

そのまま他愛のない話を続けていると、いつの間にか食堂についていた。

「そういえば、朝食がまだだったな」

「そんなことだろうと思って誘ったのよ。注文してから、席に座りましょう」

解った、というエルトの答も待たずに歩き出すマリサに、エルトもまた後に続く。

今日の朝食は、シンプルにジャムパンと目玉焼き。

簡素だが、病み上がりともいえる今のエルトにはその軽さがあるがたい。

マリサと共に席を探していると、ちょうど奥の丸テーブルにフェイトが1人で座っているのが見えて、2人はそこへ向けて歩いていく。

「お待たせ。連れてきたわよ」

「ありがとう、マリサ」

隊長同士、年も同じということで、階級が低くともマリサも他の隊長達同様普通の態度で接するようになっていた。

他の部隊にいた頃とは違う勝手に戸惑っていた時期もあったが、今ではそれなりに彼女も馴染んできたように思える。

示し合わせたようにそう言う2人に、エルトは苦笑した。

「何だ。今回のお誘いは、このためのブラフか？」

「あら、貴方に用があるのは本当よ？　まあ、その前に彼女の用が先だけど」

そう言って、エルトからはフェイトを挟んで反対側の席に座り、手を合わせて自分の分を朝食を早々に食べ始めるマリサを尻目に、フェイトは若干恨みの籠った視線をエルトへ向ける。

「酷いよエルト。起きたなら起こしてくれればいいのに……。すつごく心配したんだよ、私？」

「それはすまなかった。何しろ酷く心地よさに眠っていて、起こすのが忍びなかったのだな」

「もう………」

未だ声音は若干恨み混じりではあるが、表情には既にその色はない。少し困った人を見るような眼差しではあるけれど、口元には微笑みが浮かんでいた。

「………解った、許してあげる。でも、本当にどこも痛くないんだよね？」

「ああ、問題ない」

「どこか悪かったら言ってね？　すぐにシャル呼ぶから！　絶対に、無理はしないでよ！？」

「あ、ああ。ありがとう」

身を乗り出して、いつになく押しの強い彼女の言葉に若干気圧されながらエルトは答えると、その彼を傍から、顎に手をつけて楽しげに見つめる視線が1つ。

「ふふふふ……やっぱり貴方、愛されてるわよね」

「あ、愛っ………!?!」

「だから、そうからかうなど言っているだろうに………」

マリサの言葉と視線に、今自分がどんな状態でいるのかを理解したフェイトは顔を紅潮させて離れるが、エルトは至極冷静にそうつき返した。

「照れなくてもいいのに」

「照れてなどいない。………それで、君の用事とは何だ？ 八神部隊長直々の案件というのも気になるな」

はぐらかすような話の方向転換を、マリサはさして気にしたふうでもなく受け止めると、話を切り出す。

「別に、大した用でもないわ。救助隊の方にいる、機動六課入隊予定の最後の1人。手違いでいろいろと手続きが遅れていたそうなのだけど、諸々の準備が整ったということで今日、正式にここへ来ることが決まったの」

「話が見えたぞ。要はその遅れてくる隊員を、僕と貴女で迎えに行

ってこいと。そういうことか」

「ご明察。そのとおりよ」

頷き、ウインクするマリサ。

なるほど、と理解するエルト。

しかしながら、そうなるのと1つだけ疑問が生じた。

「待て。隊長である君は解るが、同行者がどうして僕だ？」

六課には他にも、副隊長であるアオイや、彼女でなくとも相応の人間が多くいる。

それで何故自分なのだと、ふと疑問に思ったのだ。

するとマリサは「なんだ、そんなこと」と言って、説明を始める。

「まあ、任命したのははやてなのだけど。アオイが私用でいなくつて。先方がウイング分隊に所属することになっているから、他の隊のメンバーが行くわけにもいなくてね」

「なるほど、了解した。時間は？　いつ出発する？」

「午前中のうちには出たいわね。フェイトの車を借りるから、行き来にそこまで時間はかからないはずよ」

「そうか」

そうと決まれば、まずは腹ごしらえだ。

話が終わったのを見計らい、漸く朝食にありつくエルト。

目玉焼きは若干冷めてしまっていたが、それはそれで美味かったという。

「さて、着いたわよ」

機動六課から、フェイトより拝借した黒塗りの車をマリサの運転で走らせること、1時間。

ようやく救助隊本部の建物までやってきたエルトは、車のドアを開けて敷地内のコンクリートを踏みしめた。

やはりというか、どこか年季の入った雰囲気漂う外観は、自分達の

いる新造のそれとは違う荘厳な雰囲気醸し出しているように感じられる。

「凄いな……………」

「それでも、救助の手を一手に担う場所だから当然よ。さ、行きましょう？ 待たせても先方に悪いわ」

「そうだな」

マリサの後に従うように、エルトは辺りを見回しながら隊舎の中へと入っていく。

中は思ったより小綺麗になっていた。きっと、まめに掃除がなされているのだろう。

そんな清潔感漂う廊下を先に歩いていくマリサの背に、エルトは問いかけた。

「以前から、気になっていたのだが」

「あら、何かしら」

「マリサⅡネティアス。貴女は何故、管理局に身を置いている？」

エルトの問いに、マリサは歩を止めて振り返らずに問い返す。

「何故、というのは？」

「恍けるな。履歴には、貴女は各地の部署を転々としていたとある

な」

「それがどうかした？」

未だ振り返りもせず、にべもなく言うマリサ。

質問の意図は理解しているのだろう。

だからこそ、ここまで落ち着き払っている。

「貴女は異常だ。他の誰から見ても羨ましがられるほどの実力と才を持ちながら、階級は高町なのはやフェイト、八神はやて部隊長といった面々より明らかに下。貴女の力があれば、相応の地位について、特定の部隊を率いていてもなんら不思議ではない。だが………実際にそんな事実はない。……何故だ？」

2度目の問い。

1度目と違うのは、問いの本質が明確にされているということと――――。

「いいわ。答えましょう」

彼女が、エルトの方を振り返ったということだ。

釣って鋭い印象を与える金の目が、真正面からエルトを射抜く。

「私は、私の信じる正義のために戦っているの」

「正義？」

「ええ」

マリサは頷く。

その目に、どこか遠くを見るような色を宿して。

「私はね、正直言う和管理局の正義には疑問を抱いているの」

「何故だ？」

「例えば、先のL・P事件1つとってみてもそう。表で善人面をした者達を祭り上げておいて、裏でやっていることはマフィア同然。こんな組織、誰が信用できると思う？」

「だから君は、管理局を信用しないと言いたいのか？　そのためになら、命令違反をしても構わないと？」

本来ならば、このような話は管理局施設の只中であるような内容とは言えない。

下手をすれば、すぐさま処分を受けても文句の言えぬ答が返ってくるかもしれない。

だが幸運なことに見回したところで人影は見当たらない。だからこそ、エルトも容赦なく質問をすることが出来た。

果たして、マリサの答とは――――。

「ええ、そうよ」

———肯定だった。

「私は、私の正義を貫く。管理局がくれたこの力は、あくまでもそれを成すための手段。今は、そう思っているわ」

言いながら、彼女のデバイスであるドラウプニルをそつと撫でる彼女の目は優しい。

だからだろうか。

エルトは彼女をそれ以上追及する気にもなれず、溜め息を1つつく。

「……………そうか。すまない、失礼なことを訊いたな」

「気にしていないわ。私の存在が他の局員と比べて異質に映るであろうことくらい、覚悟の上よ。……………でも、貴方はどうなのかしら？」

「何？」

唐突に自分の話を持ち出され、思わず訊き返す。

こちらを見る目は忌避すべきものを見る眼差しでもなければ、先程のように慈愛を込めて歓迎するものでもない。

まるでこちらを冷静に分析するかのようじっと見やるマリサの視線は、軍人のそれと重なって見えた。

「私から見れば、貴方も充分異質に見える。突然フェイトの前に現れ、いつの間にか溶け込んで、いつの間にか私達の仲間として衣食住を共にしている。でも、貴方は多くを語らない。そればかりか、

私達が戦う敵とはかつての同志の間柄であると思わせる会話があったことは、既にフォワードの証言で確認済みよ」

それだけ言われて、エルトは彼女の言い様に危機感を覚えた。

彼女は鋭い。

こちらの思惑を見透かし、あわよくば暴いてやろうと虎視眈々としているように思える。

もしかすると、彼女と一緒にになったのはただの偶然ではなく、彼女に自分の正体を暴かせるのが狙いだったのかもしれないとすら思えてくる。

考え過ぎかもしれないが、もしそれが確かだとするなら、八神はやてとはかなり食えない人物だとエルトは思う。
さすが、狸と呼ばれているだけのことはあった。

話さねばなるまいか。

そう、エルトが覚悟を決めかけた、その時――――。

「……………まあ、いいわ。そろそろ行きましようか」

「何……………?」

珍しく驚いた顔をして、エルトはくると踵を返すマリサに思わず間拔けな声を上げていた。

その声と、呆気にとられたエルトの視線に気付いたか、マリサは再びこちらに背を向けたまま、告げた。

「貴方が誰かなんて、私にはどうでもいいことよ。貴方が敵なら、容赦なく撃つ。でも、少なくとも今の貴方は違う。頼れる、同じウイング分隊の仲間だから」

さ、早く行くわよ。

暖かく微笑みつつそれだけ言い残し、どんどん歩いていくマリサの背中を我に返ったエルトがようやくと追うことが出来たのは、既に彼女が通路の角を曲がりかけた、その時だった――――。

Episode 9 遅れてきた男／前編（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい、どうもこんばんは。最新話、マリサの回でした」

マリサ「マリサ＝ネティアスです」

神崎「いやー、今回は最初から最後までマリサさんフィーバーだったような気がするw」

マリサ「私、なかなか弄るタイプのキャラなのね」

神崎「投稿者様でいらっしゃる秋風先生の元設定と、神崎自身のイメージを重ねたらいつの間にかこうなっていましたww でも、なかなかナイスキャラになったと思うんだ！」

マリサ「まあ、書いてくれることには感謝しているけど。でも、今回登場予定だったキャラが出てないじゃない。どうなってるの？」

神崎「すみません、今回はスペースがありませんでした……。区切りのいいところできったので」

マリサ「まあ、その分次回出るみたいだし。本人や、投稿してくださった作者様にはその時まで我慢していただくことにしましょう」

神崎「宜しく願いますw」

マリサ「さて。次回はどんなお話？」

神崎「次回は、いよいよウイング分隊最後のメンバーが登場。しかし、少しここで波乱の展開が！」

マリサ「ということは、また何か起きるのね……（溜め息）」

神崎「頑張ってください、隊長！ それでは次回、『遅れてきた男／中編』」

マリサ「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 9 遅れてきた男／中編

奥へと進むにつれ、局員の姿も段々と多くなってきた頃。

とある一室のドアの前で、マリサはぴたりとその歩みを止めた。

他の部屋よりも、幾分大きく作られているように見える扉。

おそらくここが、この基地の最高司令部なのだろうと、エルトはあたりをつけた。

こんこん、とノックをすると、中から男の声で何者か、と問う声が聞こえてくる。

「機動六課ウイング分隊所属、マリサⅡネティアス二等空尉です。新規入隊の隊員の件で伺いました」

「そうか。よろしい、入れ」

「はっ」

返事をし、ドアを開けるマリサ。

彼女に続いて、エルトもまた部屋の中へ入った。

中は思ったより、それほどでもなかった。

広くもなく、狭くもなく、物は左右に置かれた書棚と、中央正面に置かれたデスク、そして来客用に置かれているであろう一對のソファのみ。

非常に簡素で、豪奢に見えるものと言えば、壁に立てかけられた大きな紅の旗くらいのものだ。

そして。そんな質素な内装の部屋の奥、唯一のデスクには、まだ若いと見える男性が1人、腕を組んで座っていた。

「ようこそ、我が救助隊隊舎へ。統括顧問をしている、ラーズⅡクレイン一等空佐だ」

「マリサⅡネティアス二等空尉であります。こちらは、民間協力者の……」

「エルトⅡクリーバーといいます。宜しく願います」

腰を上げ、名乗りと共に敬礼するラーズ一等空佐に、マリサもまた敬礼と名乗りで応じる。

エルトも紹介しようとした彼女だが、さすがに自分の名は自分で名乗るべきと考えたエルとは彼女の言葉を遮り、同様に名乗りながら敬礼した。

「ああ、いい。民間の方が敬礼などではいかんよ。軍人が移ってしまうからな」

「あ………失礼しました」

「何、構わんさ」

苦笑しながらそうやんわりと言うラーズに、エルトは敬礼した自分

の右手を一瞥して、低頭しながら引っ込めた。

隣でマリサがくすりと笑うのを横目に睨みつけていると、「さあ、どうぞかけてくれ」というラーズの言葉におされ、2人はソファに腰掛ける。

「さて。わざわざ来てもらって大変申し訳ない。本当なら、こちらから送り届けるのが常識だというのにな」

「いえ。救助隊の多忙さは理解しているつもりですから、どうかお気になさらず」

「そう言ってもらえると、こちらとしてもありがたいよ」

そう微笑みながら、ラーズは2人と反対側のソファに対面するように腰掛ける。

その物腰は階級に似合わず柔らかく、軍人というよりは、出来た貴族を彷彿とさせる。

それも、嫌味など全く感じられない。この男が貴族なら、間違いなく民に好かれていたことであろう。

そんなことを考えていると、ラーズは溜め息を1つ漏らして、言いづらそうに告げた。

「いや、済まないな。せっかく来てもらったというのに、今はまだ彼を連れていってもらうことが出来ないのだよ」

「何か……………問題でも?」

エルトが問うと、ラーズはうむ、と頷く。

「詳しくは私の口から言うことは出来ないが、彼もいろいろなものを抱えていてね。少々、複雑な問題なのだよ。部下を御しきれない上司で、大変申し訳ない思いだ」

「そんなこと……。それで、その彼は今どこに？」

「不明だ」

「不明！？」

誰もが様々な思いを抱えており、それが時に様々な障害となることはエルトもマリサもよく理解している。

しかし、よりにもよって行方不明とは。あまりのことに、エルトは思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「そう遠くにはいけないはずだから、少なくともこの敷地の中にはいると思うが。今、任務に駆り出されていない基地の隊員達が必死になって行方を搜索中だ」

「なんということ……」

頭痛を感じそうな事態に、マリサは思わず頭を抱えた。

「そこで、お疲れのところ大変申し訳ないのは重々承知の上で頼みたい。君たちにも、彼の搜索に加わってはいただけないだろうか？」

「……………はあ。了解しました。エルト、それで構わない？」

「……………全く、仕方がないな」

溜め息をつき、依頼に応じる2人に、ありがとうと礼を述べるラース。

どうやら今日は、昼までには帰れそうになかった。

○Episode 9 遅れてきた男／中編

「全く。僕達はどうして、こんなことをしているのだ？」

「私に訊かないで」

基地の外を肩を並べて歩きながら、愚痴を言うエルトをマリサがぴしゃりと跳ね除ける。

中は、救助隊の隊員達のホームベース。おそらく、そこは彼らの方が詳しいに違いない。

そちらは彼らに任せ、自分達は建物の外を探すこととしたのだ。

しかし、救助を一手に担う救助隊隊舎の敷地は広い。

一言に探すといっても、なかなか骨の折れる作業であることは間違いないかった。

「手分けしましょう。私はこっちを捜すから、貴方はそっちを探してくれるかしら？」

「了解した」

頷き合うと、2人は次の角で左右に散った。

エルトは左、マリサは右へ向けて駆けていく。

「とんだお迎えになったものだな、バレル」

『Yes. (そうですね)』

自身のデバイスに愚痴を言いながら、注意深く周囲を捜すエルト。

だが、幾ら駆け回っても、人っ子1人見当たらない。

中を探してくれている隊員達は勿論、目的の青年らしき人物の影はどこにもなかった。

「一体……どこへ行っただ」

『Maybe, he has already returned. (もう、既に戻っているのかもしれませんがね)』

「……………あまり、考えたくはないがな」

実は戻っていましたが、などということになっていたら、今までの自分の苦勞は何だったのだろうと思えてしまう。なるべくならそんなことになってほしくはなかった。

溜め息をつきながら、エルトは通路の脇に植えられていた樹の根元に腰を下ろした。

緑化のためか、通路の邪魔にならないように整えられながら、枝は窮屈そうには見えず、日の光を遮ってエルトを影で被った。

「気持ちのいい風だな……………」

紅の髪を静かに揺らしながら吹き抜けていく風に身を任せ、エルトは自分の役目も忘れて大きく深呼吸し、目を閉じた。

趣が理解できるなどと、高尚なことは言うまい。

ただ、それでも今彼を包んでいる空気は心地よいもので、そのままつい眠りに落ちてしまいそうなほどであった。

—————頭上から、ガサリ、と不自然な音さえ聞こえてこなければ

ば。

「？ 今の音は……………」

「や、やばっ……………」

ぱっ、と目を開け、スリープモードから一転、警戒するように鋭く目を開くと、エルトは立ち上がり頭上を、樹の枝が大きく広がっている様子をじっと見つめた。

少し目を凝らしていると—————いた。

器用にも登ったらしく、枝の上に1人の青年が慌てたようにこちらを見ている。

しかし、仮にも枝の上に乗っているのだから、それなりのバランス維持は不可欠である。

焦った際にそれを忘れたのか、青年はずりと枝から足を滑らせて落下した。

「う、うわああああああああ—————
—————っ!？」

「ちっ!」

舌打ちするエルトの対応は、素早かった。

バリアジャケットを展開すると、即座に飛行魔法を発動させて、青年の落下地点へ飛ぶ。

そしてビットモードを起動して、それらを円状に展開すると、魔力の網を発生させた。

ホールディングネット。なのはも使用していた、魔力糸による網を発生させる魔法である。

まるでトランポリンかクッションか何かのように、網は青年の身体を柔らかく受け止める。

「間一髪、か……………」

ビットと青年の位置まで上昇してきたエルトが溜め息混じりにそう呟く視線の先で、青年はばつの悪そうに頭をかきながら苦笑した。

「すみません、助けていただいて……………」

「気にするな。僕も任務でやっているだけだ。気に病む必要はない」
ホールディングネットから降ろされた、名をハイド・クリューゲル
というらしい青年は、エルトと共に樹の根元に腰を降ろしていた。

年は、エルトの外見に比べると、若干上————20代前半ほど
だろうか。

黒くつんつんに跳ねた髪の下で、もう片方のブラウンと違い眼帯に
隠された片目が、異彩を放っている。

それにしても、見た目年上の男が、自分よりも年下の男に申し訳な
さげに頭を下げる様子は、些ちやうどか奇妙な光景であった。

「どうしてあんなところへ？ 六課の人員が迎えに来るとするのは、
今日より以前に報告があったはずだが」

いくらはやてが豆狸とはいえ、新しく迎える大事な隊員に、転属を
告げないなどという滅茶苦茶なことはあるはずもない。

ならば、何故この男はそれをも放り出してこんなところにいたのか。
エルトには解らなかった。

するとハイドは、少々不貞腐れた様子で答えた。

「本当は俺、もう管理局員じゃないんですよ」

「何？」

エルトは彼の答えに、怪訝な顔をする。

管理局員でもない人員を、はやては六課に入れようというのだろうか。いや、そんな滅茶苦茶な話はない。

民間協力者か。

それならば、自分のような例もあることだし、納得できる。

だがそれを訊くと、ハイドは首を横に振った。

「俺は、確かに以前は局員として管理局にいました。……とある理由から、途中で抜けたんです。でも、ここの基地のラース一佐は、俺を勝手に復隊させて、六課へ転属させようとしたんです」

なるほど、と、エルトは大まかな事情を理解した。

書類の上では、何の問題もない。はやてにこの事態が想定出来なかったのも、無理からぬことだろう。

要は手続きではなく、この男自身の問題なのだ。

おそらくラースは、それを多少強引にでも改善に向けるよう、彼を独断で復隊させたのだろう。

「俺はもう、戦いたくなんてないっていうのに……！」

俯き、そう打ち震える彼の様子から感じ取れるのは、放っておいて欲しいと願う拒絶と、自身では恐らくどうしようもないのであろう闇。

それを感じ取ったからこそ、エルトは何も言えず押し黙る。

——と、そこへ。

「はあああああああああつ！」

「っ!？」

突然響き渡るけたたましい掛け声。

それは急速に近づいてきて、エルトの背後で殺気となって膨れ上がる。

エルトは振り向き様にバレルを展開して、手元を覆うコンパクトシールドを向けた。

まるでそれを待っていたとばかりに、シールドへ叩きつけられる長剣。

せめぎ合い、ぎりぎりと言を立てるそれらの激突の合間から、エルトは襲撃者の姿を見た。

まるで雪のような銀の長髪を揺らせ、憎しみをその表情に含んで必死に剣をシールドへ押し付ける、その人物は——。

「……女？」

「シルクッ!？」

エルトは純粹に襲撃者が女であったことに対し怪訝そうに眉を顰め、ハイドの側は少女の登場自体に驚きを示す。

その2人の前で、少女だけが表情を険しくして、一層剣を握る手に力を込めた。

「ハイド！ この人は私が抑えておくから、早く逃げてっ！」

「ちょ、やめろシルク！ その人は敵じゃない！」

「嘘っ！ だって、この人管理局員でしょ！？」

どうやらハイドとは何らかの形で知り合いらしいが、その彼の呼びかけも全く信じようとはせず、少女は尚も剣をバレルのシールドへ押し付ける。

一応は盾として装備されているそれは、デバイスとはいえただ押し付けられているだけの剣に傷をつけられるほど柔には出来ていない。

しかし、さすがに武器を押し付けられたままのこの状況は、よいものとは決して言えないのもまた確か。

エルトとて、このまま、誤解されたまま斬られるつもりは欠片もない。

そうなれば、対応は1つだ。

「話を、聞けっ！」

「きゃっ!？」

バレルを握る右腕に一層の力を込め、エルトは少女の身体を得物ごと押し返す。

突然の対応に少女は驚いて小さく悲鳴を上げるが、すぐに空中で飛行魔法でも使用したか、体勢を立て直しそのまま滞空した。

「く……………このおおおおおおおつ！」

「はあっ！」

少女は再び、剣を手に突撃した。

エルトは少女の剣をシールドで受け流すと、離れていく彼女へ向けて追撃とばかりに魔力弾を放つ。

それを少女は身体を上手く捻ってかわし、かわしきれない軌道のものは剣で切り裂く。

「ほう……………」

なかなかの反応と体捌き。

エルトは少女の実力に舌を巻くと、地を大きく蹴って、バレルを構えながら突撃した。

少女もまたエルトをただの雑魚ではないと認識したのか、先程よりは慎重になりながら再び肉迫しようと突進する。

その傍で、ハイドだけが状況についていけずに固まっていた。

「ど、どうすりゃいいんだよこれ……………！ えSTL……………は、シルクが持ってるんだった！ と、とにかく2人とも止めてくれっ……………！！」

止めるための得物もなく、せっかく力を入れて叫んでも、それ以上の激突の最中にいる2人の耳には届かない。

闇雲に叫ぶしかないハイドの前で、戦いは唐突に傾いた。

少女に出来た一瞬の隙を狙い、エルトは素早く彼女の懷に潜り込むと、蹴りを彼女の腹に叩き込んだ。

「がっ…………あっ…………」

「シルク！」

「大丈夫だ、加減はしている」

仮にも女性だからな、とニヒルに笑うと、エルトはゆっくりと少女――ハイドがシルクと呼んでいた彼女へ近寄ろうとする。

しかし、突如バレルが彼へと呼びかけ、それがエルトの歩みを一旦止める。

『Master. Ms. Netias call you. (マスター。ミス・ネティアスが呼びです)』

「マリサが？ 繋げ」

『All right. (了解)』

バレルが返事をするのと入れ替わるように、エルトの目の前にモニターが映し出される。

そこに映っていたマリサの表情は、いつもの余裕のある大人の女性

のものではなく、どこか焦りを含んでいるように見えた。

「マリサか、ちょうどいい。目的の男を見つけたぞ」

『本当！？　よかったわ、ちょうどその件で伝えたいことがあったの！』

そう叫ぶ彼女の後ろからは、幾人もの人間の騒がしい声が聞こえてくる。よくよく聞けば、爆音も混じっていた。

「おい、何かあったのか？」

『アルブに襲われているの！　救助隊が対応しているけど、このままじゃ………』

「何だと！？」

「何だって！？」

自分と同時に声を上げたハイドに、エルトの視線が一瞬彼に向けられる。

しかしその視線に気付くと、すぐに勢いを失って俯いてしまった。どうやら、完全に無意識に叫んでいたらしい。

「解った、すぐに向かう」

『助かるわ。じゃあ、宜しくね！』

「了解」

マリサとの通信を切り、エルトは彼女の下へ向かおうと、ハイドの方を向こうとした。

今の状況を聞く限り、形勢は切迫していると思われる。

その只中に、彼らをこのまま野放しにしておくのは危険と判断した。

いつ襲われ、アルブに取り込まれてしまうか解らない。

——しかし。視界の隅、シルクと呼ばれた少女が横たわっていた場所に見えた異形の影に、表情を引き締めてそちらへ注意を向けざるを得なくなる。

しかし、動いていたのはそれだけではなかった。

未だ状況の掴めていないシルクは、剣を再び握り締めると、エルトへと突撃するべく立ち上がる。

その後ろには、異形。

説明している暇はなく、エルトは舌打ちしながらそのままバレルの銃口を向けた。

それを、自分へ向けられているのだと錯覚したシルクは、一層の敵意を以ってエルトを見据え、剣を構えた。

交錯する魔力弾と、剣が放つ銀の煌き。

次の瞬間。打撃音と銃声が、同時に天空へ駆け上った。

Episode 9 遅れてきた男／中編（後書き）

く神の黄昏く

神崎「なんだか最近、長く書けないなあ……………どうも。作者の神崎はやてです」

ハイド「どうも。今回初登場のハイドⅡクリューゲルです」

神崎「いやあ、漸く出てくれたね。遅れてきた男」

ハイド「はは、まあそうだな。でも……………なんだろう。俺よりも、ラース一佐とシルクの方が心なしが目立ってるような……………」

神崎「まあ、あの2人だしねw」

ハイド「いや、おかしくないか？シルクは俺に大きく関わってる娘だからともかく、ラース一佐は出落ちのキャラなんじゃないのか？」

神崎「まあ、そのはずんだけど……………。上司たるべき威厳を持たせようとして、台詞回しにシャアやフルⅡフロンタルを参考にしたらこんなことに……………」

ハイド「はあ！？おかしいだろ！？なんで出落ちキャラのモデルがそんな大物なんだよ！！！？」

神崎「いや……………だってカッコイイし、会話が高尚に感じられるし……………」

ハイド「解らなくは……ないんだけどさあ……」

神崎「まあそんなわけで、今回君が登場したわけだけど！」

ハイド（あ、誤魔化した）

神崎「一体君、何があったのさ？ 局をやめるなんて、よほどのことなんじゃない？」

ハイド「あ、ああ……まあ……な」

神崎「まあ、本編で明かされるので今は訊きませんが。しっかりやっつけて下さいよ？」

ハイド「ぜ、善処するよ」

神崎「……前途多難だなあ。さて、そんなわけで次回！ 教われる救助隊隊舎、応戦するエルト達と救助隊！ その中で、ハイドは何を思い、何を願うのか？」

ハイド「次回、」

神崎「『遅れてきた男／後編』」

ハイド「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 9 遅れてきた男／後編

———はあ、はあ……………」

赤く燃える炎の中を、男が1人駆け抜けていく。

その表情は引き締まっていながらも焦燥に満ち、故にその剣を握る手にも力が籠る。

男は駆けつけた。

ただひたすらに、守るべきものへ向けて疾走した。

そして。

「う、う……………」

男は見つけた。

自分が守るべき、かけがえのないものを。

「サラッ！」

瓦礫に挟まれ、身動きの取れないでいる緑の髪の女性へ向けて、男は叫ぶ。

間に合った。

その安堵が男に、一瞬の油断を齎した。

男は忘れていたのだ。

ここが――もはや死地と化していた事実を。

――ドガアアアアアアアアアアン！

「なっ、ぐうつ！？」

突如、辺りを襲う爆音と振動。

上階で爆発が起きたのだろう。

その床——つまり、今彼らがいる場にしてみれば天井が罅を
 広げていき、やがて——完全に崩れていく。

それが、女性の真上で起こったことだった。

男は駆ける。

しかし、無常にも瓦礫の一部が男にも降り注ぎ——男の左目を、拳大の瓦礫の破片が深々と抉った。

「が、あああああああああああああつ!？」

上がる絶叫。

しかし、彼は立ち止まってはならなかった。

いくら酷く熱く————体を蝕む痛みでも、それに一瞬でも歩みを止めてはならなかった。

もっと大切なものを————失うことになるのだから。

崩れていく瓦礫に、またたく間に埋もれていく女性の姿。

絶叫すら残せず、ただ飲まれていくだけの彼女を————男は、見ていることしか出来なかった。

「サアアアアアアアアアアアアアアアア————」

男の凄まじいまでの慟哭をも、爆音が遮り、爆風が男の体を吹き飛ばす。

紅の爆炎が————空の闇を、色濃く照らしていた。

○E p i s o d e 9 遅れてきた男／後編

打撃音と射撃音が、同時に天空へ木霊する。

一瞬の交錯。しかし、その一瞬こそが、全てが決する時間となった。

エルトの胴には、少女シルクの剣。

切り裂かれてはいない。非殺傷に設定された剣は、エルトのバリアジャケットを僅かに切り裂き、胴を打つ程度に留まっていた。

そして、煙を上げて光るバレルの銃口の先にいた異形————ア
ルブは、真紅の銃弾をそのど真ん中に受けて沈黙している。

やがてそれが結晶化し、バラバラと音を立てて崩れ去ると――
――エルトもまた、シルクの剣を受けた体制のまま片膝をついた。

「く、う……………間一髪か……………」

エルトのうめき声に、シルクは静かに後ろを振り返った。

そこにあるのは、銀の結晶と化したアルブの亡骸。

もし、あのまま自分があの場を離れなかったら。

否。それよりも、もしエルトがアレを撃ち抜いてくれなかったら――

――自分は、今頃どうなっていたことだろうか。

考えただけでもおぞましい。

「あ、貴方……………どうして……………」

どうして自分を助けてくれたのかと、シルクは自分の攻撃を受けたエルトへ問う。

本当に、シルクがその剣の真の持ち主でなくて幸いだった。

もし、真の持ち主である？彼？が本気でこの剣を使っていたら――
――確実に、腹を打つだけでは済まなかった。

問われた少年は、それでも魔力を込められた一撃にはさすがにダメージも少なくなかったのか、呻きを含みながら答を口にする。

「何。君は大層、あの男のことを想っているようだったからな。そんな子を彼の目の前でむざむざ見殺しにするなど、寝覚めが悪いこ

とだと思ったまでだ」

エルトの言葉に、おそらくは羞恥からシルクの頬にさつと赤みが差す。

彼への思いが、このような出会って間もない人間に悟られるほど前面に出ていた事実もそうだが、彼を助けるのに必死で、気持ちを抑えきれなかった自分も情けなかった。

もう少し冷静なら――――いつもの自分なら、少しくらい話を聞くらいいはしただろうにと。

思えばラースの勝手な行動に憤ってからというものの、どこか自分の行動は拙速だったように感じられた。

「あ、あの……………」

「うん？」

「さ、さっきはすみませんでした。その……………いきなり襲いかかったりして」

漸く硬直と痛みから解放され、立ち上がったエルトへ言いづらそうに謝るシルクの頭を、彼はくしゃくしゃと撫でる。

「解ってくれば、それでいい」

頭から手を離し、最後に肩をぽんと叩いて、エルトは今度は後ろでその様子を笑顔で見ていたハイドへ向き直った。

「突然だが一緒に来い。この基地が、敵に襲われている。すぐに、この周辺も戦場になるだろう」

「え……………」

エルトの言葉に、ハイドの表情が曇る。

戦場になる。

それが示すのは、自らが高確率でそれに巻き込まれるであろう不安。

戦わねば———ならぬかもしれないのだ。

「……………無理に戦えとは言わない」

目を伏せ、そう口にするエルトの言葉は重い。

戦いを知っている声。

半端な覚悟でこちらへ来てくれるなど、そう言外に告げられているような気がして、ハイドは俯いた。

そんな彼に、だが、と前置いて、エルトは更に続ける。

「このままでは、いつここにも敵が来るか解らない。貴方を死なせない為にも、僕には貴方を連れていく義務がある」

有無を言わせぬ口調に吞まれそうになりながら、ハイドは言葉を発することができない。

エルトの言葉が正論である、というだけではない。

解っている。自分が情けないことくらい。

戦う力を持っていながら、今の位置に安住し、嘗ては抱いていた皆を救いたいという願いも、恐怖に埋もれて掘り出すことすらできない自分を。

だからハイドは、それを軽々とやってのけようというエルトに、何も答えることが出来なかった。

———だから。

「……………一緒に来てくれるな、ハイドⅡクリューゲル？」

そう、差し伸べられた手と共に発せられた言葉にも———彼は、無言で頷くことしか出来なかった。

「ぐあああああああああああつ！」

上がる悲鳴。

すぐ隣で熱線に貫かれ絶命していく元同僚の屍を横目に、救助隊の隊員達は必死になって魔力弾を撃つ。

襲撃に気づいたのは、エルトとマリサが出ていってすぐの頃。

アラートが鳴らなかったことに浮き足立ちながら隊員達がそこへ向かうと、そこにあったのは兵器と見られる複数の物体。

そのような形状をしているのだし、ましてやまだまだ広く知られてもいないのだから、その正体が兵器に擬態したアルブであるのだということなど、気づくことが出来るはずもなかったのだ。

いつの間にか救助隊側は追い込まれ、今はバリケードの内側でアルブの放つ熱線を防ぎながら、隙を見て魔力弾で迎撃するのがやっとだった。

バリケードの外で戦えているのは、統括顧問のラースと、駆けつけたマリサくらいのものであろう。

「ドラウプニル！」

『Yes, mum. Spark shot.』

大きく跳躍したマリサの両手に握られた漆黒の双銃が主の命に答え、その銃口からスパークの走る青緑の砲撃を迸らせる。

紅いロングコートを模したバリアジャケットの裾が衝撃に翻り、砲

撃の威力と、舞いのような美しさを同時に演出する。

飲み込まれた数体のアルブが吹き飛び、壁をも吹き飛ばして爆発を引き起こした。

「やれやれ、豪気なお嬢さんだ。壁を直す手間というものを、考えてはいただけないのかな？」

そう軽口を叩きながら、着地したマリサと背中を合わせるようにして立つラースに、マリサもまた、不敵な笑いを浮かべながら答える。

「あら、それは失礼。でも、命という最大の財産を失うのに比べたら、これくらいの損失は目を瞑ってくれてもいいのではないかしら」

「はは、それは尤もだ」

マリサの冗談に笑い返すと、ラースは手に持った杖型のストレージデバイスの切っ先を目の前のアルブへ突きつけた。

ストレージデバイスとは、高度AIの備わったインテリジェントデバイスとは違い、最低限のAIのみが組み込まれた簡易式のこと、一般局員に支給されるデバイスの殆どがこのタイプである。

彼が使っているこの杖は、その一般仕様のストレージデバイスへ、彼独自のチューンアップによって改造を施した特殊性。とはいえ、その演算性能はエルトやマリサ、加えて機動六課の前線メンバーが使用しているインテリジェントタイプよりは圧倒的に性能が下がってしまう。

これを聞けば、いかに機動六課の魔導師達が優遇されているのかと

いうことと、いかに彼、ラース一佐の腕前が、一般局員のそれを凌駕しているのが理解できるだろう。

「では、これ以上傷を付けられない内に……早く終わらせるとしようか」

「ええ」

言い交わすと、2人は同時に跳んだ。

ラースの放つ針のような魔力弾が、ガジェットの姿をしたアルブを貫き、マリサの砲撃が杖を持った魔導師の姿をしたアルブを飲み込む。

「あら、中身がないのね」

倒す際にちらりと見えた魔導師型アルブのバリアジャケットの中身。

それは尽く空っぽで——まるで、バリアジャケットに怨霊が宿って動かしているかのように感じられた。

「全く……悪趣味！」

おそらく、デバイスへそのまま擬態したために中身である使用者には擬態出来なかったのだろう、と理解は出来ても、ホラー紛いの光景に思わずマリサの顔が引き攣る。

怖い——というよりは、気味が悪い。

「ちっ………」

1つ、また1つと、順調に敵を仕留めていたラーズの表情がふと舌打ちと共に強ばった。

2人は順調に敵を倒せてはいるが、それでも倒しきれなかったもの——つまり、撃ちもらしというものが数体は出てきてしまう。

それらが2人の後方のバリケードを強襲し、段々と突破されつつあった。

更にラーズが付いているインカムからも、決していいとは言えない報告や悲鳴がいくつも届きつつあった。

「く………やむを得んな。ネティアス二等空尉！ 我々はこの基地を放棄、撤退しようと思うが、どうだ？」

「よいご判断と思われます！ この敵の数はまずい………」

マリサとて、指揮官試験を受けて合格するほどの実力の持ち主と言われている。

その彼女が言うのだから、戦力的にも相当な窮地と判断してもよいだろう。

ラーズは頷くと、インカムを通じて各防衛地点の局員へ指示を出した。

「よし、これで少しは生き延びられるといいのだが………」

「問題は、あちらが我々が逃げる間を与えてくれるか否か、ですね」

2人は眼前のアルブを魔力弾を放って牽制しながら、バリケードのある位置まで下がる。

そして、ある程度数を減らすことに成功したと判断したマリサは、懐からあるものを取り出した。

ラグビーボールを小型化したような形状のその物体の安全ピンを抜き、蠢くアルブ達に向けて思い切り投げた！

「はっ！」

物体は地面へ落ちると途端に白い輝く粒子を放出し、アルブ達の周囲へ撒き散らした。

これは、地上本部のレジアスⅡゲイズ指導の下開発が進められている、魔力攪乱用の煙幕弾。

装置には魔力が使用されているため特定条件下によっては使用者の魔力で再利用することも出来き、さらに魔力以外は使用されていないため、局が使用を禁止している質量兵器にもカテゴライズされないという利点を併せ持っている。

機動六課にも幾つか支給されていたものを、持ち歩いていて幸いだった。

アルブ達が魔力煙にこちらを見失っている隙に、音も立てずにラスとマリサは生き残った隊員達を伴って退却していった。

「なんとか、上手くいったようですね……………」

「ああ、助かった。君がいなかったら、今頃どうなっていたことか……」

「いえ……………」

走りながらそう話すマリサに、ラースへの嫌悪感はない。

大抵の上司は権力を盾に好き勝手やっているような連中ばかりであったが、ラースは一味違うのだと見抜いたのだろう。

「裏口に抜けられれば、港へはすぐだ。そこまで走るぞ」

「はい」

言い交わし、2人は照明が落ちて暗くなった廊下を一気に駆け抜け、その後ろから救助隊員の生き残りが続く。

そうして走りに走り、やがて見えた裏口のドアを一気に蹴破り――

「なっ!？」

見えた光景に、マリサは瞠目した。

それもそのはず。

目の前に見えたのは活路などではなく、膨大な数のアルブが犇めき合う光景であったからだ。

すかさず後方に下がろうとする。

しかし――――。

「ちいつ、こちらもかっ……………！」

レースの毒づきのとおり、後方にもスモークでまいたはずのアルブの群れが迫る。

もはや、逃げ場はどこにもなかった。

完全に追い詰められた格好。

しかしながら、ここでそう簡単に諦められるような脆弱な思考は、2人共持ち合わせてなどいなかった。

「ほうら、ドラウプニル。獲物がいっぱいいるわよ？」

『T h e y c a t c h m y e y e . (目移りしてしまいますね)』

「活路を開くぞ。前面に攻撃を集中せよ！」

レースの命に応じると、隊員達が一斉に魔力弾を放つ。

その内の数発は兵器の形をしたアルブに命中し爆散させるが、逃れた数体がその隙にゆっくりと接近してくる。

速度は決して速くはない。

しかし、その恐れを知らぬ進軍は見る者に恐怖を植えつけた。

同じだ、動物型のアルブと。

形が生物でないだけ、まだ恐怖の度合いが低いのが不幸中の幸いと言えるだろうか。

しかしそうでなくても、ただでさえこの戦力差。

士気を削ぐには、十分すぎる要因と言えた。

「くっ、弾幕が足りない……………！」

「ええい、持ち堪えろ！」

正面のアルブへ向けて乱射するマリサと背を合わせるようにして、後方のアルブの進行を阻止するように魔力弾を放っていたラースが叫ぶ。

隊員達もそれに答え、限界まで力を振り絞って弾幕を張るが、それに爆散するアルブよりも、逃れて接近してくるものの方が多いのが現状であった。

と、その内の一体が突如速度を早め、最前線で魔力弾を放っていたマリサへ襲いかかる。

どうやら航空型ガジェットへ擬態したアルブのようだ。

色が違うのと、結晶体のような白銀の構造物が突出していなければ、本物と見分けることすら困難に思えるほど精巧な作りをしていた。

「くっ……………」

虚を突かれながら、それでもマリサはドラウプニルをアルブへと向ける。

突然の対応の為照準もへったくれもないが、仕方がない。

撃てなければやられる。

あちらは身体が触れるだけで目的を遂行できるが、こちらはその後
の対抗手段は持ち合わせていないのだから。

だが。

ドガアアアアアアアアアアアン！

「!？」

やるかやられるか。

まさしく紙一重の境地にいた彼女の下へ、突如真紅の光弾が飛来し
た。

光弾は彼女の目の前まで迫っていたアルブを捉え、粉々に爆散させ
る。

「……………全く、遅いわよ」

「相変わらず手厳しい。これでも、一応は急いで来たのだがな」

冷や汗を拭いながら、目線を目の前の敵達から外さぬまま言うマリ

サの隣へ肩を並べるようにして、エルトは不敵に笑いながら、彼女と同じ？敵？を見つめた。

「ほう。これはまた豪勢だな」

「お腹壊しそうなほどに、ね」

「それでも……これは食らうしかあるまいっ！」

軽口を叩きながら、エルトは既に展開したライフル型のバレルをアルブの群れへ向け、魔力弾を生成した。

銃口に1、頭上に15。

そのどれもが真紅の輝きを放ち、屠るべき相手を探してエネルギーを滾らせた。

「クリムゾンシューター・フルバースト！」

『Fire!』

一斉に走る十数もの真紅の流星。

描く軌道は流れるような弧で、炸裂したそれらが生み出すのは幾つもの光の花。

それはアルブ達にとって、全てが等しく死の光。

あるものはバリアジャケットのように擬態した空っぽの胴を貫かれ、またあるものは得物を弾かれその爆風に吹き飛ばされる。

「……………ふう」

華麗で、且つ激しい演舞が終わる。

しかしアルブ達はまだまだ健在で——どこからここまで沸いてくるのかというほどに溢れかえっていた。

「なあ。何か妙ではないか？」

「うむ、私も感じていた」

エルトの言葉に、ラースがすかさず同意する。

「確かに……………冷静になってみれば、この数は少し異常ね」

「倒しても減らん。その答が……………これだ」

言うど、エルトは不意に魔力弾を1つ発生させ、1体のアルブを狙う。

放たれた魔力弾はそれまでとどこも変わらず、寸分変わらずガジェット型の真芯を捉え、爆散させる。

ここまでは、何の異常もない。

変化は————唐突に起こった。

「何……………!？」

飛び散ったアルブ達の欠片が集まり、再び1つの形を成していく。

元通りの形へ蘇ったアルブは、何事もなかったかのように再び光線を発射し始めた。

「再生、能力だというのは………!?!」

「アルブ、そこまで………」

驚愕するマリサとラースの傍で、エルトは自らの示した答えに舌打ちする。

状況が悪すぎる。

こちらは既に疲弊している状況だというのに、敵の側はまだまだいくらかでも数がある。

唯一消耗らしい消耗がないのは自分くらいのもので———それでも、守りきるには1人の身体では限度があった。

「……………くっ!」

とにかく、少しでも手数を増やさなければ。

そう判断したエルトは、バレルをビットモードへ変形させる。

複数に分かれたビットが、アルブを四方八方から付け狙う。

その隙に、エルトはなんとかしてこの状況を打開する方法を考えようと、知恵を巡らせた———。

「くそっ……………」

一方で、戦場から少し離れた草むら。

そこに、ハイドとクリューゲルとシルクの2人の姿があった。
悪態をつくハイドの様子を、シルクという少女が憂いを含んだ眼差しで見つめている。

「ハイド……………やっぱり、まだあの時のこと……………」

「……………」

シルクの言葉に、ハイドは痛みを堪えるように胸へ手を当て、黙り込んでしまう。

今、彼の中にあるのは、大きな葛藤。

戦いたくない。しかし、今戦わなければ——大切な人が、沢
山死ぬ。

また。自分の、目の前で——。

「ぐ、う……………」

苦しげに、自分の心の中でぶつかりせめぎ合う2つの感情に押しつ
ぶされそうになる。

まだ、彼の中では拭いきれていないのだ。

彼の過去、おぞましき記憶。

その全てを払拭するには、まだ時間がかかるというのに——
事態は全く待ってなごくれなくて。

それが、余計に彼を苦しめる。

自分には、出来る。その可能性があるという事実が——。

——すると。

「ハイド……………」

「あ……………」

再び自分を呼ぶ声と共に、ハイドは暖かい感触に包まれた。

優しくて、どこか懐かしい——そんな、温もりに。

「ハイド。貴方なら出来る」

再度呼びかけられ、ようやくシルクが————ずっと共にいてくれたパートナーが、抱きしめてくれているのだと気づく。

彼女の声が、焦燥に駆られた己の心を鎮めていくことにも。

「貴方は本当は強い人。大丈夫。貴方なら、きっと出来る………」

「で、でも……俺は………」

「それに。今戦わなかったら、貴方は……きっと後悔する」

「!?!」

そう。

それこそ、ハイドが最も恐れていたことだ。

また、誰かを————目の前で失うことが、たまらなく怖かった。

過去になくした————自分のせいで亡くした、?あの人?と同じように。

しかし、それが嫌なら彼は戦わねばならない。

かけがえのない人を亡くしてから剣を捨てた彼にとって、それは苦しい選択だった。

「大丈夫」

再び、耳に届く力を纏った声。

シルクは抱きしめるのを止め、真正面からハイドを見つめた。

彼より小さな身体で、それでもしつかりと、目をそらさずに。

「大丈夫。貴方は、大切なもののためなら戦える。私に、そうしてくれよう」

そつと握らせられるのは、ずっと大切に使ってきた相棒——デバイス、STL。

Save The Life——命を救う、と名付けられたそれを握るのは、いつ以来のことだろうか。

不思議だ。

これを手にすると、まだ自分にも誰かを救えるのではないか——
——そう思えてしまう。

剣の根元の、コアが光る。

また————共に戦おう、と。

「俺は………」

未だ煮えきれない————そんな表情で、ハイドは踵を返し戦場を見据える。

その眼光は、未だ大きな恐怖に支配されながらも————それでも、確実に光を取り戻しつつあった————。

「く、うう……………」

「これまで、か……………」

膝をつき、肩で息をしながらマリサとラースが毒づく。

既に、マリサもラースも隊員達も、魔力は殆ど使いきり———抵抗する術は殆ど持ち合わせていない。

一方、前線でアルブを屠り続けるエルトは、あまりの数に退がるところすら叶わない。

完全に、万事休すの状態だ。

「くうっ、くそっ……………」

破壊されても、また次々に復活するアルブに舌打ちしながら、エルトはマリサとラースのいる方を見つめた。

彼らを取り囲むアルブが、獲物を前に舌なめずりをしているように見える。

やがて、1体のガジェット型のアルブがビームを溜め込んで――――。

「エクセキューションッ!!」

――――しかし、それが放たれることはなかった。

どこから発生した冷気がアルブを凍りつかせ、続いて加えられた砲撃に粉々に碎け散る。

「……………何っ!?!」

「今のは!?!」

突然の攻撃。

エルトとマリサがそれに虚を突かれる中――――ラースだけが、その正体に気づき歓喜する。

彼の記憶が正しければ、今の攻撃は――――。

「待っていたぞ、ハイド!」

ラースが向けた視線の先には、黒く跳ねた髪青年————ハイドの姿があった。

未だその表情を苦渋に歪めながらも、それでも彼は己が手に剣を携えて、戦場に帰ってきたのだ。

「別に、帰ってきたわけじゃありませんから。ただ、隊長達がやられるのを黙って見ていられなくなっただけです」

「うむ、何でもいい。とにかく私は、君のおかげで命拾いしたのだ。礼を言う」

微笑み、そう真っ直ぐに言うラースに、ハイドは居心地が悪いのか顔を背けた。

だがラースの言うとおり、ここに来ての彼の参戦は重要な意味を持つ。

それを理解したエルトは、人知れず歓喜した。

そう、乗り切れる。

彼はまだ全快。

加えて彼には、おそらく彼自身も気づいていないであろう切り札がある。

それこそが、今エルトが見ているもの。

凍りついたまま全く動かない、白銀の欠片であった。

「……………見えたぞ」

「え？」

突然の眩きに、隣にいたマリサが聞き返すのにも答えずに、エルトはハイドへと話しかけた。

「復活して早々申し訳ないが、1つ頼みたい」

ハイドの参戦に暖かになりつつあった空気の中で、真剣な表情と声音でそう提言したエルトに、ハイドもまた真剣に表情を引き締めて対応する。

「何でしょう？」

「敬語でなくてもいい。おそらく、貴方の方が僕よりも年上だ」

「……分かった。で、どうすればいい？」

「順応が早くて何より。では、時間がないので手短かに説明しよう」

ふっ、と一瞬だけ微笑むと、エルトは今も救助隊やラース達によってなんとか抑えられているアルブの方を向く。

それに倣うようにして、ハイドもまたそちらを向いた。

「彼らは今、無限の再生能力を持っている。………が、それにも弱点はあった」

「弱点？」

「そう。……………冷氣だ」

「冷氣……………まさか、俺のSTLが!？」

エルトの言葉に、ハイドははっとして自らの剣を見た。

確かに、元々は救助用として開発されたデバイスであるこのSTLには、簡易的ながら魔力を氷結魔法に変換するシステムが備わっている。

まだ試験段階であり、運用上の魔力生成などにおいて多くの欠陥を孕んだこのシステムは、一部の資質ある者のデバイスにしか搭載されていない現状があった。

ハイドが、氷結の魔力変換資質を持っていないにも関わらず先程氷結魔法を使えたのは、その事実起因していた。

「僕が陽動を買って出よう。貴方は連中の気が僕に向いている隙に、特大の一撃を食らわせてやれ」

「けど、それじゃ君が危険だ!」

「大丈夫だ。幸い、まだ僕にも余力がある。そう簡単にはやられないさ!」

言うが早いか、素早く銃口に魔力弾を発生させると、それをアルブ達へ向けて放つ。

そして。

「頼んだぞ！」

それだけを言い残すと、自らエルトは敵の下へ駆けていく。

その一言に、全てを託して。

「……………つたく。プレッシャーかけてくれるよな」

そう言いながら、自分の声が予想外に弾んでいることに気づき、ハイドは驚いて再度微笑んだ。

まだ、全く怖いわけではない。

だが、信頼されることの喜びを————長らく忘れていた、誰かを助けたいと願う心を僅かながらに取り戻すことが出来た彼の心は、確かな暖かさに包まれていた。

「仕方ない、少しだけ……………本当に少しだけ、やってみようか。なあ、STL？」

『Yes, boss.』

言うと、ハイドは精神の集中に入る。

せっかくだ。

今の自分が放てる、特大のをお見舞いしてやろうではないか。

ブランクなど知ったことか。

そんなもの、この一撃で全て吹き飛ばしてくれる。

そうほくそ笑み、ハイドはSTLに魔力を込めていく。

剣の切っ先に、少しずつ純白の魔力が膨れ上がっていった。

そして。好機はすぐに来た。

エルトが操るアサルトビットが包囲網を形成し、アルブを一箇所に纏めている。

この状況であれば、一撃でまとめて消し去ることが可能だろう。

それをエルトも解っていたのか、緻密なビットの制御の傍ら、ハイドの方を見ぬまま叫んだ。

「今だ、ハイドッ！」

「おうっ！ STLっ！」

『Full charge.』

剣を、まるでランチャーの如く構えるハイド。

その剣先に滾った純白の魔力エネルギーを、砲撃として一気に開放する！

「行けええええええっ！ アストラル、ブレイカアアアアアア
ーーーーーッ！」

純白の砲撃が放たれると同時に、エルトはビットと共に、その場から間一髪逃れる。

直後、彼の眼下を砲撃が通り過ぎ、アルブ達を飲み込み消し飛ばしていく。

さらにそれだけには留まらず、ハイドは砲撃を方向転換し、基地内部からの追手へ向けて薙ぎ払った！

「これで……漸く終わった、な……」

そう呟き武装を解除するエルトの言葉と共に砲撃が止むと、緊張の糸が切れた一同は揃ってその場にへたり込む。

久方振りに訪れた静寂と安寧を皆が噛み締めているのを、ハイドは安堵したような苦しいような、複雑な表情で見つめていた。

「ありがとう。君のおかげだ」

そんなハイドの下へ、エルトがそう声をかける。

その表情には邪気はなく、ただ純粋な微笑みが浮かんでいた。

それに、いや、と返すハイドを見、続いて既に凍りついた残骸と化したアルブを見、怪訝な表情をしたエルトは、暖かな雰囲気の中ただ1人悲しげに————人知れず呟いた。

「このタイプは………君なのか、ヘファイストス？」

「ふーん。なかなかやるみたいね」

とある王城の中、玉座の間。

嘗てここは、L・P事件の折、主犯であるルシアスIIコーネルド一派が拠点として使用していた古城である。

それ以来は放置され、誰も居ないはずの内部に今、人影があった。

1人は、女。

麗しいドレスに身を包み、流れるような長いライトグリーン髪をして、美しい顔立ちの中で遠視の魔法を発動させていた2つの翡翠色の眼が細められる。

その優雅な気品溢れる姿は、見る者全てを魅了した。

もう1人は、青年。

外見の上では彼も女に引けを取らない程に整った美しい顔立ちをしているが、彼の座る椅子には2つの大きな車輪や様々な器具が取り付けられており、見る者の目を引く。

俗に言う、車椅子という奴だ。

その青年が見つめる先で、女は尚も饒舌に口を開く。

「さすが、私と愛を誓った方。わたくし ああ、早く会える日が来ないかしら？
ねえ、エルト。私はこんなにも、貴方に会える日を待ち望んでいるというのに……」

そう恍惚と口にしながら、モニターに映るエルトを指でそつと撫でると、傍でそれを見ていた青年は不快そうに眉を顰めた。

「……………楽しそうだね。そんなに、恋人が傷ついていくのが嬉しい

のかい？」

「私は傷つけるのを楽しんでいるのではないわよ、ヘファイストス。私が嬉しいのは、こうして彼が凛々しく戦いに舞う姿を目にすること。恋人ですもの、当然でしょう？」

そう不気味に笑う女に、青年——ヘファイストスは、その鳶色の短髪の奥に見える丸く優しげな目を、ますます不快げに歪めて言った。

「そのためなら、君はエルトや他のこの世界の人々を犠牲にしてもいいって言うの？ そんなの……………」

「傲慢、と言いたいのか？」

続く言葉を言い当てられ、ヘファイストスは押し黙る。

凶星と見た女は彼の様子に無邪気に笑うと、再びモニターへと向き直った。

「ヘファイストス。私達のしようとしていることは、この世の全てを手に入れることよ？ 貴方も、それは一度は賛成したはずではなかったのかしら？ それに、貴方の親友を傷つけたアルブは、貴方の造ったもののはずだけだ？」

「それは…………。でも！ それでも、こんなやり方はやっぱり間違ってる！ 間違ってるんだ……………」

ヘファイストスの声が、段々と小さくなる。

それに対し、女はそれがさも滑稽かのように声を大にして言う。

「間違っている？ それなら、この世界はどうなの？ この、欺瞞と犠牲に満ち溢れた世界が、貴方は正しいと言うの？ 私はそうは思わない。だから、変える。？この世の全てを手に入れて？でも、私はこの世界を捻じ曲げてみせるわ！」

解っている。

いくら自分が叫んだところで、自分では————彼女にとって些末な存在でしかない自分がいくら論じたところで、彼女を止めることなどできないことくらい。

しかし、彼に出来ることはそれくらいしか思い至らなくて。

それが歯痒くて、ヘフアイスストスはぎり、と歯を噛み締める。

「所詮貴方は、自分1人の力では何も出来ない籠の鳥。この城で、精々私達のために踊り続けなさい。あはっ、あははははははははははははっ！」

狂ったように笑い、女は魔法陣を足元に展開し————消え失せた。

おそらく彼女の自室へ転移したのだろうと思考すると同時に、ヘフアイスストスは自らの無力を噛み締めるように、自分の足へ————既に動かないそれへ手を触れた。

彼女の言うとおり、自分はここから出られない。

それでも、いつかは彼女に自分の声が届くのだと————そう信

じて、彼は声を上げ続けた。

しかし、彼女にそれは届くことはなくて。

その度に、こうして無力感に苛まれてきたのだった。

「ごめん、エルト……………」

我が、友よ。

そう涙ながらに口にした言葉には————彼の無念が深く刻まれていたが、その言葉を受け取る者はなく。

それが一層の虚しさをもって、彼の胸を打つのだった。

Episode 9 遅れてきた男／後編（後書き）

く神の黄昏く

神崎「長っ！……！！」

シルク「わっ！？　び、吃驚しました……………（汗）」

神崎「おかしい……………予定では、今回はこの半分くらいの量になるはずだったのに……………どうしてこうなった？」

シルク「わ、私に訊かれましても……………。そ、そんなことよりっ！
これでいよいよ、ハイドが六課加入なわけですねっ♪」

神崎「そうですね。ハイド君、まさかのアストラル・ブレイカーをいきなり使ってしまうとは……………神崎自身も吃驚ですww」

シルク「ええー……………。アストラル・ブレイカーって、確かりオスさんの技でしたよね？」

神崎「まあ、その辺は隠すようなことでもないと言ってしまえますが、単に彼も懂れてたんですよ。リオスに。なのはさんに懂れるスバルみたいに、ね」

シルク「あー。そういえばハイド、リオスさんの戦闘映像をかなり楽しそうに見てました」

神崎「キャラ提供してくださった、黒衣を纏う執行者先生。勝手にこんな設定作ってしまったって申し訳ありませんでしたm（　　）m」

シルク「あはは……。……それで、最後は急展開でしたね！」

神崎「新たな神の登場。そして、謎の女も登場。……まあ、2人の会話からエルトとの関係と正体は丸解りでしょうがw」

シルク「この後、どうなっていくんでしょう？」

神崎「それはまだ具体的には解らないけど……。何だろう、とりあえず誰かが死にそうで怖い(汗)」

シルク「ええっ!？」

神崎「今構想している限りでは、皆様からすればかなり意外な人が死ぬことになるかもです。……。まあ、やるにしてもかなり先の話なので、どうなるかはまだまだ解りませんが」

シルク「ちょ、作者さんっ!？ それ、ハイドじゃないでしょうね
ーーーーーっ!!?」

神崎「ぎゃーーーーーっ、首絞めないで……。く、くるじい……」

シルク「おーしーえーてー!」

神崎「う……。も、もう駄目……。……がくっ」

次回、新魔法戦記リリカル Angels
f Gods
(The Rule o

ファンタジック・ガール
『夢の中の少女』

エルト 「無限の力、その身に宿せ！」

Episode 10 夢の中の少女（ファンタジック・ガール）／前編

———少女は、歌うのが大好きでした。

よく晴れた日に、大きく枝を広げた木の下で、小鳥たちと楽しくお喋りするのが大好きでした。

ある日、少女は夢を見ました。

暗く、紅い光に覆われたそれは、酷く不気味なものでした。

今も遠くで、愚かな大人達は少女へ罵声を投げかけます。

子供達は、それを我関せずと遠くから眺めているだけ。

少女は泣きました。

泣いて泣いて———涙も枯れ果てたと思われた頃、漸く目を覚ましました。

少女は目を擦ります。

次に見る世界が———夢から覚めた現実が、希望で満ち溢れているのを信じて。

——でも。

「……………あ」

残酷なことに、少女が見た景色とは——等しく、夢の世界と同じものでした。

○E p i s o d e 1 0 夢の中の少女
ファンタジック・ガール

「あう……………」

奇妙な声を上げながら、機動六課ライトニング分隊所属の空士――
――ソフィアⅡジュリーストンは、そろそろとベッドから這い出
た。

朝の目覚めを大きな伸びと共に噛み締めていると、ふと頬を伝う感
触に気付く。

触れれば、その手は濡れていた。

「あー……………またあの夢かあ……………」

目に溜まった涙を拭うと、ソフィアはまずは顔を洗おうと、洗面器
や歯ブラシなどの道具を携え洗面所へ向かう。

洗面所には、幸か不幸か誰もいなかった。

洗面台へ洗面器を置き、そのまま鏡を見————。

「うわー、我ながら酷い顔だなあ……………」

涙でくしゃくしゃになった顔を、これ以上見たくないとばかりに水道の蛇口をひねって一気に洗い流す。

そうしてタオルで顔を拭えば、漸くいつもの自分らしい顔が覗いた。

「ん、よしっ」

ぺち、と気合を入れるかのように頬を叩くと、ソフィアは歯ブラシを手にとった。

彼女がフェイトの補佐として、機動六課へ出向になってから既にそれなりの時間が経った。

なのは達隊長陣も、彼女をよきチームのムードメーカーと信じて疑おうともしないし、事実、憎めない癒しキャラとしての位置が定着しつつある。

しかし、この部隊の人々は誰も知らないのだ。

彼女の笑顔の裏に、悲しい歴史が隠されていたなどと————。

「はあっ！」

「でやあああああっ！」

一方で、こちらは数時間後の訓練場。

フォワードは各個、隊長陣の指導の下、個々の弱点を補う訓練に移っていた。

フロントアタッカーは、厚い弾幕に晒された際の突破法。

ガードウイングは、他の部隊員と離された際の効率のいい戻り方。

センターガードとフルバックは、敵方のフロントアタッカーやガードウイングタイプに接近された際の対処法、などという具合である。

ちなみに上記の掛け声は、エルトと、レヴィンとは違うスターズのもう1人の副隊長にして八神はやてを主と慕い、守護する守護騎士

が一、？鉄槌の騎士？ヴィータによるものであった。

ヴィータのハンマー型デバイス、グラーフアイゼンがエルトのシールドとせめぎ合う。

「てめえは銃だ、受け止めずに受け流せ！」

「解っているっ！」

実際、ヴィータのパワーは相当のものがある。

受け止めるのはなかなか厳しく、故に彼女の指摘は的を射たものであると言える。

そんな中、それを確かに受け止めることに成功したエルトは、やはり規格外と言えようか。

やがてエルト自身が爆散させたシールドに弾かれながら、ヴィータは怯まず次の攻撃に移った。

「アイゼン！」

グラーフアイゼンが彼女の命に答え、数個の鉄球を発生させる。

それをグラーフアイゼンの槌の部分で、まるで野球のノックの如く次々と打ち出していく。

彼女の得意技の1つにして唯一の中距離魔法、シュワルベフリーゲン。

魔力付加がなされているものの、その中には実弾が隠されていて、魔力を無効にされたとしても、物理的な本物の衝撃が襲ってくる。

それをエルトはあえて迎撃することはせず、かわして魔力光線を撃ち込んだ。

しかし。

「甘いぜっ！」

すかさず彼女のシールドが、その深紅の装束へ到達する前に魔力光線を防御し霧散させる。

エルトも無論、それだけで彼女を落とせるとは思っていない。舌打ちしつつもバレルへ、ビットモードへのモードチェンジを命じた。

「ちいっ！」

出現する8基ものの飛行砲台にヴィータも状況を悟ったのか、すぐさま回避行動を取ろうとする。

が、

「ファイアッ！」

一斉に放たれる真紅の熱線。

それをヴィータは必死に避けていくが、彼女の本分は力で薙ぎ、硬さで守ることにある。

次第に避けきれなくなったオールレンジの熱線を、仕方なくシールドを前面に展開して防御に入った。

シールドに衝突した魔力光線は弾かれ、虚空に魔力素となって飛び散っていく。

「ははっ、どうだ。これならそう簡単には……………」

あまりに意味をなさないその攻撃に、ヴィータの表情に笑みが浮かんだのは仕方のないことか。

当然だ。彼の攻撃は確かに避けるにいが、それならば全て弾いてしまえばいいだけの話。単純明快、誰にでもたどり着ける結論である。

無論、彼女程のシールドの硬度の持ち主であるからこそ可能な芸当である、というのはいうまでもないが。

が、だからこそ隙が生まれた。

ヴィータの目に飛び込んできたのは、エルトが2つのビットを手に見せる砲撃の構え。

よく見れば、今シールドを攻撃しているビットは6。2つ足りないことに、もう少し早く気付くべきだった。

リオスのそれと比べ、エルトのアサルトビットが優れている点はそこだ。

リオスのビットはただ敵をオールレンジから狙い打つことを主目的に考案されており、故にそのような戦法しか取ることには有り得ないが、エルトのものにはグリップとトリガーが付属されており、握れば自動的にそこから手を通してビットへ魔力が供給され、そのまま銃として使用することが出来る。

つまり、装備されたビットの数———8つ分、エルトには武装のストックがあることになる。

たとえば手持ちが破壊されようと、残ったビットですぐさま補給することが出来るのだ。

これの仕様は1対1の戦いの際は勿論のこと、様々な状況でアドバンテージを生み出すことが可能である。

ビットを両手に持ったエルトは、残りのビットを変わずヴィータへ向けながら、その銃口もまた彼女の赤目掛けて向けた。

今や彼女の表情から余裕は消え、浮かぶのは純粹な焦り。

一撃粉碎を狙おうか？

ダメだ。ハンマーが彼に届く前に、ビットに蜂の巣にされる。

避けながら接近してダメージを狙うか？

否。それは先ほど、自分の回避能力を以って不可能だと証明されている。

ならばいっそ、シュワルベフリーゲンで遠距離からじわじわと狙うか？

論外。エルトがそれに耐えられないとは思えない。それ以前に、遠距離の手数是他の方が圧倒的に上。やるだけ無駄というものだ。

「…………あー、やめやめ！」

突如そう呟いて頭を横に振る彼女に、エルトは怪訝な顔をする。

しかしそれが彼女なりの覚悟の表現だと理解すると、油断なく魔力チャージを続けた。

そう。手がないのなら、自分の最も得意とする領域で勝負すればいい。

つまりは――――。

「アイゼン！」

『Ja!』

一撃粉碎。

真紅のシールドの中で、それを選択したヴィータの手のグラーファイゼンがより一層大きく変形する。

ギガントシユラーク。彼女の持てる、最大の攻撃。

本来なら、たかが訓練でここまでの技は使わない。

だが、その？たかが訓練？を行っているという事実を忘れてしまうほど、ヴィータは熱くなっていた。

これでは、シグナムのことをバトルマニアと笑えない。

そう内心で自らを笑いながら、一方でこの状況を堪らなく楽しんでいる自分がいることにも、彼女は気付いていた。

エルトも、そんなヴィータの姿と、彼女の身の丈に合わぬほどの大

きさに膨れ上がったグラーフアイゼンを見比べながら、止めようなどと思わなかった。

全身全霊で、目の前の全力と相對することのみを考え、魔力やビットの制御に力をいれた。

———そして。

「でやああああああああああつ！」

「はああああああああああああつ！」

その時は、唐突に訪れた。

シールドを一瞬にして解除し、持てる限りのスピードで肉迫したヴィータは、ハンマーのスイングで周囲のビットの砲撃を蹴散らしながら———時にその身でそれを受けながら、それでも前へ、エルトの下へと飛ぶ。

エルトももはや、小細工などしない。

ビットの1つに滾らせたエネルギーを、一息に———解き放つ！

「クリムゾン・ブレイカー———ッ！」

「ギガント・シュラアアアアア———クッ！」

ぶつかり合う、真紅の砲撃と巨大な槌。

せめぎ合う2つの？力？は、やがて辺りに光を撒き散らし———

―そして、辺りの景色を塗りつぶすほどの極光に、やがて全てが見えなくなった。

「はい皆さん、お疲れ様でした♪」

「シャルカ。ザファイラも」

数十分後。

模擬戦の終わったエルト達フォワード陣を、訓練場の入口まで来ていたシャルと、狼の姿をした守護獣、ザファイラが出迎えた。

シャルの声に反応するエルトの腕には、気絶したヴィータの姿があった。

結論からいえば、模擬戦はエルトの勝利に終わった。

砲撃が彼女の身を飲み込んだ後、落下してきた彼女の体を、ハイドを救出した際と同じ手法で受け止めたのだ。

おかげで彼女を抱えてなのは達と合流した際、なのはより要らぬ説教を受ける羽目になってしまった。

フォワードは訓練の疲れもあるのか皆疲労の色が見えていたが、ザフィーラが背中に担いだ箱に入れて持ってきた清涼飲料水をシャルから手渡され、それを片手にほっと一息つく。

「シャル先生………これ、市販のだよね？」

「うう………シグナム！　なのはちゃんが酷い！」

「すまん、シャル………私ではフォローできん」

「うわーん！」

なのはの疑いの籠った言葉に、その意味を熟知しているフォワード達はぴくりと反応したが、シャルの反応に本当に市販品なのだと理解すると、ほっとしたように再び飲み物に口をつける。

それを見て、エルト達ウイングの面々は、はて、と首を傾げた。

「？　どうして皆、市販品と聞いた途端にあんなに嬉しそうなのじゃ？」

「さてな。大方、シャルの料理の腕が壊滅的だとか、そんなところ

ろだろう」

アオイの問いに答えつつ、ドリンクをごくごく喉に流し込んでいくエルトを横目にシャルはどきりとして肩を震わせると、ごほん、と気を取り直すように1つ咳払いをして、ここに来た要件を告げる。

「そ、それでー！ ここにいる全員にシャル先生よりお知らせがあります。八神部隊長が大事な用事があるとのことですので、シャワーを浴び終えたら部隊長室に集合してください！」

「重要なお知らせ？」

「何だろう？」

顔を見合わせるエリオとキャロの2人と同様、心当たりのない面々は一様に首を傾げる。

その一方で、事情を知っているエルトとマリサは漸くか、と溜め息をついた。

「漸く？」

「いや、こちらの話だ。それより、早くシャワーでも浴びに行った方がいいのではないのか？」

「ああ、そうだった！」

エルトの言葉に、呑気に質問などしてきたスバルがドリンクを一気に喉へ流し込む。

そしてすつくと立ち上がると、同様にボトルの中身を飲み干したティアナと連れ立ってシャワーへ向かう。

するとそれを契機に、フォワードと隊長を問わず女性陣が続々と立ち上がり、数分も経たない内に訓練場はエルトとレヴィン、エリオ、そしてエルトが抱えてきて、今は訓練場の地面にそっと寝かされているヴィータと、シグナム、そしてシャルとザフィーラのみとなった。

そして、そんな2人も、

「ヴィータちゃんは、私が医務室まで連れていきますね」

「任せておけ」

「ああ。頼むぞ、シャル、ザフィーラ」

ヴィータをザフィーラの背中へ乗せ、しっかりと落ちないようにすると、シャルはニコリと1度エルトへ向けて微笑んだ後、ザフィーラと共に医務室へ向けて歩いていった。

「じゃあ、僕達も行きましょうか」

「そうですね。早く浴びて、デスクワークを済ませてしまわねば」

エリオの言葉に賛同したレヴィンが、続いて立ち上がる。

3年前のL・P事件の最中に起こった、機動六課襲撃事件。

半ば地上本部を陽動とすることで行われたその作戦で、六課の隊舎

はかなりの被害を受けた。

ここ1年の間に修繕と改修が行われたが、中には以前六課にはなかった設備も幾つか増設されている。

その内の1つが、男性用浴場の設置である。

旧機動六課は圧倒的に女性が多く、男性はロングアーチのグリフィスにヘリパイロットのヴァイス陸曹、ヴォルケンリッターが1人、ザフィーラ。そして、民間協力者のリオスの4人のみ。

他にも数人の男性が事務で出入りしてはいたが、男性の数が圧倒的に少ないそんな隊舎では浴場は1つしかなく、彼らが入るには女性陣が入っていない時を狙うしかなかった。

しかし今回の改修において、新しく増えた男性隊員のために、はやての好意によって男性用浴場の増設が決定したおかげで、その状況は改善された。

今では男性陣も女性陣に気兼ねすることなく、浴場を思いのままに扱うことが出来る。

エリオとレヴィンに倣ってシャワーを浴びに行こうとするエルト。そんな彼を、呼び止める人物がいた。

「待て」

凜とした顔立ちに、見る者を射抜く眼光。

ヴォルケンリッター烈火の将こと、シグナムが真っ直ぐにエルトを

見ていた。

先に行っていて欲しい、と2人へ告げ、エルトはシグナムと対峙する。

「……………用向きは、分かっているな？」

「……………そんなに疑わしいか、僕が」

「他の誰がお前を認めようと、私はまだお前を認めたわけではない」
シグナムの有無を言わせぬ物言いに、エルトは溜め息をついた。

六課に来た当初から、彼女の疑念に満ちた視線には気付いていた。
それだけではなく、今回のように直接面と向かって言われたことも
幾度かある。

仕方ないと解ってはいる。

彼女にとって————否、この六課の人々にとって自分は最も得
体の知らない存在であるのだから、彼女が疑う理由もよく理解出来
る。

それでも、こうも一方的に疑いの眼差しを向けられるというのはや
はり居心地のいいものではなく、エルトも内心でうんざりしていた
ところだ。

「全く。どうすれば認めてもらえるのやら」

「全てを話せばいい」

「それはできぬ相談だな」

「……………何故だ？」

エルトの解答に、シグナムは怪訝な顔を見ると同時に、より一層大きな疑念を秘めた目で彼を見た。

しかしエルトは素知らぬ顔で、その問いに答えてみせる。

「まだ、話す時ではないからだ。君達は知らぬ方がいい。そうしなければ、きっと君達は後悔することになるだろう」

「真実を知らぬよりはましと思うが？」

「知らぬ方がいい真実もあるということだ、シグナム」

両者の主張は、平行線を辿ったまま決して交わることはないように思えた。

少しやりとりをしたただけだが、それに早くも気づいたらしいシグナムは、剣呑とした空気を鞘に収める。

疑いが消えたわけではない———が、このまま続けても、彼が決して口を割らぬであろうことは事実。

故に彼女も、今一時は言葉の剣を鞘に収めるしかなかったというだけのことだ。

「……………解った。だが、その時とやらが来た時には必ずや話してもらうぞ」

「安心するといい」

もう話は終わったとばかりに、エルトは踵を返し歩き出す。

「その時は……すぐに来る」

そう意味深な言葉を残し、エルトは訓練場を後にしていった。

「はい、そろそろ時間やな。皆、集まっとるかー？」

それから数時間後。

シャワーを終え、訓練の汗を洗い流した前線メンバーは、部隊長室に集結していた。

やはりというか、メンバーの増員のおかげで、この部屋にいる人数だけでもかなりの大所帯になりつつあった。

一通り見回して欠員がないのを確認すると、はやては満足げに頷いた。

「うん、皆いるね。さてそんなわけで、皆を呼んだのは他でもない。今日から新しく、皆の同僚になる隊員さんがやってきてくれましたー！」

「はやてちゃん、言い方が転校生を紹介する学校の先生みたいなノリになってる……」

「細かいことは気にせんとき、なのはちゃん。というわけで、早速出てきてやー」

なのはのツツコミを軽く一蹴したはやての声に推されるように、青年と少女が物陰から姿を現した。

「八神部隊長。これ、別にやらなくても普通に最初からいればよかったんじゃないですか？」

「出てきて早々何ツツコンでるんや、ハイド君。こういうのはノリやで、ノリ」

「はあ……」

そろそろと出てきた挙句、のっけからどうでもいいことを突っ込む青年————ハイド——クリューゲルは、溜め息を1つつくと、緊

張した様子もなく、沈黙する前線メンバー一同を見る。

早くも、はやての人となりを理解し、諦観に徹したようである。
なるほど、賢い選択だ。

すう、と1回息を吸うと、はきはきとした口調でハイドは自己紹介を始める。

「えーと……今日から一緒に働くことになりました、ハイド・クリューゲルと言います。隊はウイングに配属予定で、ポジションはフロントアタッカーをやらせていただくことになっています。宜しくお願い致します！」

「ハイドの融合騎の、シルクといいます！ 宜しくお願いします！」

努めて気さくに紹介を済ませようとする、ハイドとシルク。

一方で突然の新規入隊の知らせに、話を知っているエルトとマリサ、フェイトの3人以外の前線メンバーは皆、どう反応したらよいのか解らず茫然としている。

尤もやはり隊長という立場故か、なのはやヴォルケンリッターは事前に知らされていたらしく、特に驚いた様子もなかった。

新たな部隊の仲間、ハイド・クリューゲルをエルトが迎えに行つてから既に数日。

あのハードな戦いを終えた後、ハイドは正式に六課へ連れ帰ることになったのだが――1つだけ、問題が生じた。

元々彼はラースの処置に抗議をするべく救助隊へ向かっていたので、

六課へ向かうにあたっての荷物など諸々の準備を何も行なっていないのである。

そこで、仕方なく数日の準備期間が与えられた後、然るべき日に出向することで話が纏まったというわけだ。

今日は、彼が正式に六課へ出向となる日であった。

最初は困惑気味であったフォワード達も、ようやくと状況を理解したのか、2人の下へ群がり始めた。

「え、嘘、これから一緒に働けるんですか？　わー、宜しく願いますー！」

「融合騎………ということは、リイン曹長と同じ……！」

口々にそう言って詰め寄りつつあったフォワードの皆を、なのはが手を叩いて制する。

さすがに一度に來られたことでハイドとシルクの側もたじろいでいたので、彼女の助けはありがたかった。

「はいはい、聞きたいことがあるのなら1人ずつ順番にね。それと、配属はウイングだけど今後連携をとることも多くなると思うから、フォーメーションの確認はしっかりやっておいてね！」

はい、と皆が返事を返し、部隊長室の隅に移って早速質問タイムが始まった。

レヴィンは、もう用は住んだとばかりに踵を返すが、マリサとアオイはウイングの隊長・副隊長としてポジションを把握しておきたか

ったのか、意外にも自ら輪に加わっていた。

「あはは。大人気ですね、ハイドさんとシルクさん」

「……………そうだな」

早くも人の中に埋もれつつある2人を外野から見つめ、エルトと、その隣のソフィアはくすりと笑った。

「君はいいのか？ 君が一番、ああいったことに興味がありそうだったのが」

「ぶーっ、それってどういう意味ですかっ！……………そりゃまあ、確かに多少興味がないこともないですけどお」

「それみろ」

くくく、と笑うエルトについて言い返す材料が浮かばなかったのか、ソフィアは頬をハムスターのように膨らませながら押し黙る。

それが思った以上に面白かったのか、弄りにかかろうとするエルトと、今まさにその標的にされかけていたソフィアに、背後から声がかかった。

「あ、エルト君とソフィアは悪いんやけど、ちょお用事あるからこっち来てくれへん？」

「ああ」

「はい」

邪魔をされたことにエルトは別段腹を立てるでもなく、元氣よく返事をしたソフィアと共にはやてのデスクへ歩み寄る。

2人が来たのを見計らって、はやては用事とやらを口にした。

「えっと、2人に……というより、ソフィアに行ってもらいたい任務があるんやけど、ええかな？」

「はい、構いませんよー♪ エルトさんは？」

「僕も問題ない。それで、その任務というのは？」

「これや」

言い、はやては2人の目の前に1つずつモニターを表示される。

それを見たソフィアが明らかにはっとしたような表情になる中、はやては任務の説明を始めた。

「今回の任務は、とある管理世界の民族の救援や。第24管理世界、レーデリア。この世界に特有の、レジスっちゅう民族がおるらしいんやけど、そこから管理局に救援要請があつてな。管理世界やし、管理局としても見過ごすわけにはいかない。それに……」

「アルブ、か……」

エルトの呟いたその言葉に、はやては頷いた。

「なるほど。それが、この任務がわざわざ六課に回されてきた理由

というわけか」

「ま、そういうことやね。んで……………」

エルトの推測に微笑みつつはやてが頷くと、彼女は未だ俯いたままのソフィアへ向き直る。

「ソフィア……………行って、くれるか？」

はやての言葉にびくりと肩を震わせ、それでも――――。

「……………行き、ます」

それでも、精一杯の勇気を振り絞ったのだろう。それとも、彼女なりに立場を弁えた結果なのだろうか。

兎も角、彼女がぎこちなくも確かに頷いたのを認め、はやては「……………そか」とだけ口にした。

「じゃ2人共、今から2時間後に転送ポートへ集合。それでええな？」

「了解した」

「……………はい」

いつもどおりの口調で返事を返すエルトの横で、いつになく意気消沈とした様子で答えるソフィアを、エルトは横目に見る。

明らかに、何か事情がある様子。

だが、はやてが何も言わないところからも、それが彼女自身が克服すべき問題であり、エルトが簡単に立ち入っていい問題でないことくらい、エルトにも理解できる。

だから、あえて何も言わない。

彼女が自分から打ち明けてくれる——その時まで。

しかし、彼はすぐに知ることとなる。

彼女の過去を。その目で、心で——。

（神の黄昏）

神崎「はい、そんなわけでお待たせしました！ 読者の皆様のアイドル、ソフィアメインのお話の始まりです！」

ソフィア「はい、アイドルのソフィアちゃんでーす♪」

神崎「……………こういう時にノリいいなあ、君は（汗） でも、実際読者の皆様の中で君が好きだって方、多いよね。あれかな。荒んだ現代社会の風潮の中で、人々が無意識に癒やしを求めている証なのかな？」

ソフィア「いや、そこまでスケールの大きい問題じゃないと思いますけど……………（汗）」

神崎「まあでも、実際君って癒やし系だからね。好きって言うってくださった読者の皆様からも、一部でそんな声を拝聴しているし」

ソフィア「癒やし……………ですか。えへへ……………♪」

神崎「ご満悦ですなWW……………さて。そんな君にも、何か悲しい過去があるようで」

ソフィア「うう……………できれば、あんまり思い出したくなかったんですけどー……………」

神崎「まあ、これを機にそれを払拭してみるのもありなんじゃない

かな？　ていうか、今回の話できっちり解決していただく予定でいるし」

ソフィア「お、お手柔らかにお願いします……（汗）　それにしても、今回漸くヴォルケンリッターの方々が出てきましたねー」

神崎「さりげなく、今回の話は今まで出て来れなかったヴォルケンズの名誉挽回の回だったりもするのですよ。後、ハイドが正式に六課に入ったことを明示する目的もありましたね」

ソフィア「そうだったんですかぁー。それで……次回は任務で世界を移動、ですか？」

神崎「そうなりますね。そこでまあ……いろいろと事件が起こったりするわけですよ」

ソフィア「う………やっぱり、ただじゃ終わらないんですね……」

神崎「それはまあ……宿命ということでW　さて、そんなわけで次回！　『ファンタジック・ガール夢の中の少女／中編』」

ソフィア「無限の力、その身に宿せ！」

「へえー、ここがレーデリアかぁ……………」

青く晴れ渡った空を仰ぎ、同じく蒼い髪の少女の感嘆の声が蒼天に染み渡る。

数時間の後、転送ポートからここ、レーデリアにやってきたエルトとソフィア、そしてスバル。

ソフィアの様子が気になったエルトではあるが、任務は任務。

放っておくことなど出来ないし、何か彼女にこの世界との因縁があるのならば、此度の任務はそれを断ち切るための突破口となるかもしれない。

そう考え、彼女を連れて任務へと訪れたエルトだが、では何故2人とは違う第3者、スバルⅡナカジマの声がするのか。

その理由は簡単。

任務の条件には特に人数の制限は含まれておらず、ちょうど予定の空いていた彼女にアシストを要請したからである。

他にも行きたそうにしていた者は何人かいたが、L・P事件の際に前線メンバーのいない隙に六課を襲撃された際の教訓から、あまり戦力を裂きすぎないようにするべきという部隊長であるはやての判断により、却下された。

優秀なフロントアタッカーである彼女が消えるのは六課にとってもやや痛手となるため、彼女が不在の間は108部隊より、彼女の姉であるギンガナカジマが出向するとのことである。

「スバルさん、そんなにここの自然が珍しいですか？」

「うん、まあ。私のいた救助隊は市街地で、こんな澄んだ空気とは無縁だったからねー」

くすりと笑うソフィアにそう返事を返し、気持ちよさそうにスバルは大きく深呼吸した。

確かに彼女の言うとおり、ミッドチルダの市街地に比べれば格段に美味しい空気だ。

そう考えながら、エルトは現地住民との合流ポイントを確認する。予定では、まず現地住民と接触、状況を把握した後、彼らと協力し周辺のアルブを掃討、ということになっている。

そのため、まずは協力者との接触が必要不可欠のだが――――生憎エルトは、ここの住民のことに詳しくない。スバルもおそらく同様だろう。

だから結局のところ、ここの事情に精通しているらしいソフィアに訊ねるしか手段はなかった。

「ソフィア。報告書にあった、テレジス民族の集落はどこにある？」

「あ、はい。この森を抜けた先に、大きな山が見えますよね？ そ

の麓なんです」

エルト達が今いるのは、小高い丘の上。

そこからは一通り周囲の景色が見渡せるようになっていたが、眼下には広大な森林地帯が広がっており、その奥に彼女の言うとおりの茶色のごつごつとした山が見えた。

その麓に、よく目を凝らせば——なるほど、確かに集落らしきものが見える。

「なるほど。よし、では早速あの集落へ行くぞ。まずは現地住民と接触せねば」

「あ、うん。解った」

「うう………は、はい………」

2人が頷くのを見て、エルトは飛行魔法を発動する。

やはりというか、普段通りに返事をするスバルに対しソフィアはどこかぎくしゃくしている。

現地住民との間に、過去に何かあったのだろうか。

そう誰もが考えるが、そう簡単に訊くことの出来る問題でないのも事実。

その場は考えを振り切って、エルトは森林の上空を飛んだ。

後ろから同じく飛行魔法を発動したソフィアと、魔力により生成し

た人工の足場、ウイングロードの上をローラーで滑りながら移動するスバルが続く。

(テレ、ジス……………)

エルトの背中を追いながら、不安な心を封じ込めるように――――
――胸元でぎゅっと拳を握りしめ、ソフィアは蒼い空を飛んだ。

○E p i s o d e 10 ファンタジック・ガール 夢の中の少女／中編

「……か……………」

集落へは、見た目ほど大した距離もなく、それほどの時間をかけず

とも辿り着くことが出来た。

その場にゆっくりと着陸すると、入口らしきアーチへと向かう。

そこには、番兵らしき民族服の屈強な男2人が、槍型の簡易デバイスらしきものを掲げて立っていた。

「何者だ。ここはテレジスの集落ぞ」

「招かれざる客はここに入ることを叶わん。大人しく立ち去れ」

エルトが近づくと、2人の番兵はそう言って槍で入口を塞ぐ。

しかしそれも、スバルが管理局員であることを、証明書を提示して説明すると――――。

「申し訳ありませんでした。お話は聞いております。どうぞ、お入りください」

そう言って、槍をどけて左右によけた。

ありがとう、と礼を言って、スバルとソフィアを伴ってエルトは集落の中へと入っていく。

「……………なんだか、一気に態度が変わったね」

「それはそうだろう。この村はいわば、アルブと戦争をしている真っ最中だ。必要以上に警戒するのも、致し方のないことだろう。……それはそうと」

スバルと小声でそんなことを話していたエルトはふと立ち止まり、背後で縮こまっているポニーテールの少女へ話しかけた。

「……………いい加減、歩きづらいのだが」

「い、ごめんなさい……………」

背後でエルトにくつついて、まるで彼の影に隠れるようにびくびくしていたソフィアは、エルトの言葉に申し訳なさに謝りながら、それでも離れようとはせず————むしろ、一層強い力でエルトの服を掴んで離さない。

どうしたものか、とエルトが困り果てていると————。

「え、エルト……………」

「……………ああ」

彼の右方で並んで歩いていたスバルが小声で訊くのに、エルトは同じく小声で答えつつ頷く。

この集落に入ったその時から向けられていた、とある感情を存分に込めた視線。

それはピリピリと張り詰めた重い空気となって、周囲を包んでいる。

その異様な雰囲気の中、沈黙を破ったのは1つの怒声だった。

「おいっ、お前っ！」

エルト達の目の前に、少年が1人立ち塞がる。

手には木の棒が握られていて、怒りに歪んだ彼の表情は震えていた。

一見、エルトの方を睨んでいるようにも見えたが――――。

「ソフィア！　なんでお前がこんなところにいるんだよっ！」

「ひうつ！？」

少年の怒声に、エルトの背後で縮こまっていたソフィアが、びくり、と大きく震えた。

エルトとスバルが少年の声に訝しげな表情を浮かべるが、すぐに氣付いた。

彼だけではない。よく見れば集落の人間の殆どが、こちらへ恨みの籠った視線を投げかけている。

その対象は、言うまでもなく――――ソフィア只1人。

「お前、まさか追放されたことを根にもって、復讐しに来たんじゃねえだろうな！」

「ち、違うよっ！　私は……………」

「そんな制服なんて着やがって……………いっぱしのエリート様気取りかよ。そりゃそうだよなあ。お前みたいな化け物、いい武器になるだろうからなあっ！」

「ちよっと君！　言い過ぎだよっ！」

少年の剣幕に、ソフィアは涙を浮かべながらまともに言い返すことも出来ず、スバルは少年の態度が堪らなくなったのか、ソフィアを庇いつつそう叫んで睨み返した。

だが、それだけで少年の怒りは収まらなかったらしい。

「何だアンタ。そいつの……化け物の味方すんのかよっ!？」

「ソフィアのどこが化け物だって言うの!？ そんなのおかしいよ!」

「五月蠅い! アンタも化け物の仲間かっ!」

猛り狂ったように捲し立て、少年は木の棒をスバル諸共ソフィアへ向けて振った。ソフィアはそれに反応出来ず、ただ苦しげに自身を抱きしめるしかできなかったが、当然それをエルトが許すはずもない。

木の棒を左手で受け止める。

しかし――――。

「あああああああっ!」

「くっ………!？」

もう片方の手に握った少年の拳が、振り降ろされようとしていた。すかさずそれを、空いている右手で受け止めた。

組み合いになる2人。

スバルによってエルトの背中から離されたソフィアは、その光景に訳も解らず泣きじゃくるだけしか出来ない。

「そこをどけっ！」

「聞けないな。離せばソフィアが傷つく」

「あんな化け物、いくら傷ついたところでっ！」

拳を引き戻し、再び拳を放ってくる少年。

それが切欠か、瞬間————エルトの脳裏に過去の記憶が蘇った。

自分へ向けて涙を溜めて、目の前の少年と同じように木の棒を突きつけている少年。

『この化け物っ!!!』

侮蔑の台詞までもが、彼の脳内に音を伴ってリフレインする。

それにエルトは顔を顰め————ふと、目の前で拳を振りかぶっている？現実の？少年に対し、咄嗟に回避行動をとった。

そこへすかさず、もう片方の拳が飛んでくる。

そちらは避けきれず、やむを得ず掌で受け止めた。

それなりに、この集落の中では腕が立つのだろう。

拳の1つ1つに重みがあった。怒りからか軌道は滅茶苦茶だが――

だが、いかにエルトが中々遠距離を得意としているとはいえ、その程度であつさり伸されるほど彼も柔ではない。

むしろ、驚くべき身のこなしでその拳の1つ1つを避けると、カウンターで強力な1撃を叩き込んだ。

「ぐっ……………」

頬にまともに受け、派手に仰向けに倒れ込む少年。

それを見て、周囲で見ていた他の住民にどよめきが沸き起こる。

だがそれを、エルトは特に気にするふうでもない。

否―――――気にするまでもない。

既にエルトはこの住民を見下している。愚かだ。非常に愚かである。

たった1人の少女を言葉の暴力で嬲り物にするしかない、愚かな存在だと。

だからこそ彼は、躊躇いもなく言い放った。

「…………醜いな」

「何だっ……………」

先程蘇った、過去の記憶。

それもあったか、エルトの表情に浮かぶは、彼の怒りをも超える負を伴った、侮蔑のそれであった。

言葉は自然と、堰を切ったように口から溢れ出る。

「何があったかは知らないが、どこも君達と変わらない彼女を早々に化け物呼ばわりとは……。しかも貴様1人ではない。ここにいる民全員か？ テレジスとは、誇り高き民族などではなく、ただの愚か者の集団のようだ」

「この野郎、言わせておけばっ！」

エルトの言葉に完全に逆上した少年は、再び殴りかかろうとする。

だが。そこへ、不意に男の一喝が響いた。

「やめろ！」

直後、少年の拳が寸前で止まる。

顔面に当たる寸前。それでも、エルトは少しも臆することなく、鼻先に突きつけられた拳をただじっと見つめていた。

だが少しして、少年が漸くその拳をどけると、エルトは漸くその顔を動かして、男の方を見る。

長と見られる彼は、1本の木の杖を手に、更に周囲に2人の供を従えながら、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

「ラッツが失礼なことを……………どうか、お許しを」

「……………貴方は？」

少年が礼の格好をとったため、エルトもとりあえず警戒を解いて男へ訊ねる。

「私はこの族長を務めている者。私の家へ案内しましょう。ここは……………人目につきます故」

「……………そうしてもらおうか」

周囲を軽く見回しながら言う族長に、エルトは頷いた。

ここにるのが得策でないのは確かだし、この男は周囲を取り巻く民達の態度をよく思っていないように見える。信用しても大丈夫だろう。

何より、彼が現れてからソフィア表情が目に見えて柔らかくなった。彼女にとっても、心の許せる相手である証拠だ。

「では、こちらへ」

手招きする族長に、大人しくついていく3人。

その間でも————特にソフィアには、変わらぬ怒りと侮蔑の視線が降り注いでいた。

「先程は……あの若者が失礼致しました。民を代表して、お詫び申し上げますよ」

「いや、僕は気にしていない。こちらこそ、汚い言葉を吐いてしまつて申し訳なかった」

族長の家につくと、まずはそんなやり取りから話は始まつた。

通されたりビングらしき部屋で、テーブルをエルト、スバル、族長の3人で囲っていた。

護衛の兵士らしき男達は族長の意思で部屋の外へ出ており、先程の騒ぎですっかり精神をすり減らしたソフィアは、この家のベッドで涙を目に溜めながら眠っている。

とりあえずはアルブの攻撃もなく、ソフィアがあんな状態ある今、任務を強引に行うのは得策ではない。そんな結論から、一行はこの

族長の家に一晚泊めてもらえることになったのだ。

「それで…………ソフィアのことなんですけど」

「ふむ……………こうなってしまった以上、話さぬわけにはいきますまいな」

スバルの遠慮がちな申し出に、族長はやや考えた後、彼女の過去を語り始めた。

「彼女は、元々このテレジスに生まれた子ではなかったのです。捨て子でね、この村の近衛兵が発見しました。その後その近衛兵の家に引き取られた彼女は、それはもうすくすくと育ちました」

これがその当時の写真です、と言って、族長はアルバムらしきそれを近くの棚から取り出して、テーブルに広げた。

ソフィアらしき緑の髪の少女が、元気いっぱいに遊んでいる光景が写っている。

「この少女が、ソフィア……………」

「元気いっぱいに笑ってる……………。でも、それならどうしてあんなことに？」

「……………最初は、このようにいつも笑顔を絶やさぬような明るい子だったのですが。そのうち、どうも彼女には不思議な力があるらしいことが判明しましてね」

「不思議な…………力？」

族長は、少しの間考える素振りを見せる。

話しているものが迷っていたようだが、やはり話しておいた方がいいのかと判断したのか、口を開いた。

「彼女は……自然と、話をする事が出来るのです」

「は……………」

「自然、と……………」

族長の言葉が一瞬理解出来ず、エルトとスバルは揃って間抜けな声を上げて固まってしまう。

自然と、話を……………」

「信じられないかもしれませんが、本当のことです。彼女は、木々や動物の声を聞く事が出来るのだそうです」

「す、凄いですね……………」

「……………なるほど。村の奴らが彼女を化け物呼ばわりする原因はそれか」

単純に驚きを露にするスバルに対し、エルトは溜め息をつきつつそう言った。

その言葉に、族長は無言で頷くと、話を続ける。

「小鳥に一生懸命話しかける彼女に、村人達も最初は微笑ましい視線を向けていました。所詮は、子供の言うことだと。…………しかし、彼女が成長し、その範囲が植物や動物にまで範囲を広げると、段々とそれも奇異な視線に変わっていききました」

「自分と違う力を畏怖する…………。なんとも愚かなことだ」

「よ、容赦ないねエルト…………。でも、それがどうしてあそこまで嫌われることになるんですか？ それだけじゃ、その…………それほどの原因にはならないように思えるんですけど…………」

そう。確かにそれだけでは多少不思議がられたり気味悪がられる程度であって、あれ程までの殺気に向けられる理由にはならない。

それが気になったスバルが訊ねると、族長は更に重い口を開いた。

「彼女の相手はついに、魔物にまで及びました。そしてそんなある日、狼族の魔物が村に侵入してきたことがあったのです。その後、集落では警戒して、兵を警備に向かわせました。…………ですが、魔物の侵入を防ぐことは叶わなかった」

「どうして…………」

「警備の中にあつた、唯一の死角。そこから侵入されたのです。村人は疑いました…………彼女が、ソフィアが手引きしたのではないのかと」

「そんな！ そんなこと…………！」

「ええ、ありえないことです。ですがあの時、魔物に家族を殺され

た者達には、そんなことは関係なかった。理屈ではないのです。家族が殺された、それだけで彼らの思いは爆発し、その矛先は彼女へ向いてしまった……………」

ちよつとした意地悪がエスカレートして、虐め^{いじ}へつながるのと同じ。恐怖、憎悪。人の闇は際限がなく、それ故に1つの悲劇が、そのような結果を招いてしまった。

悲しい運命^{さだめ}。しかし、それがどれだけ過去の彼女を傷つけてしまったことだろうか。

彼女の受けた悲しみを思い……………エルトとスバルは、それ以上の言葉を紡ぐことは出来なかった。

その夜。

族長の家に泊まったエルトは、宛てがわれた部屋の椅子に座り、窓から夜空を眺めていた。

「いつの世も、人間の愚かさは同じか………」

呟いた言葉は、誰に向けて発せられたものか。

それは彼以外、誰にも計り知れぬこと。

脳裏に浮かぶのは、先日再会したポセイドンの言葉。そして、自らの記憶。

過去に一度、共に戦ったからこそ————同じ痛みを知るからこそ、ポセイドンはエルトを説得しようとしていた。

そして今回、この星へ来て、エルトは考えてしまった。

人間は、本当に自分が考えているように愚かな存在ではないのか。

力を恐れ、妬み、憎んで、滅ぼし合う弱い生き物。それが、人の本質なのではないか。そう考え始めている自分を否定しきれない。

「僕は、一体どうするべきなのだろうな………」

あれ程ポセイドンを説いておきながら、結局自分でもまだ決めきることは出来ない。

人間は、果たして自分が守るに値する存在か、それとも————。

思考の袋小路に迷い込みそうになって————そんな時、不意に

ドアをノックする音が聞こえた。

こんな夜分に誰だろうか。そう不思議に思うエルトだが、答えはすぐにドアの向こうから聞こえてきた。

「あの……エルトさん。夜遅くにすみません。起きてますか？」

「ソフィアか。どうした？」

「ちょっと、眠れなくて。お話したいんですけど、いいですか？」

「ああ。鍵は開いている。入ってきていいぞ」

そう返事をする、失礼します、という遠慮がちな声と共に、枕を抱えたソフィアが姿を現した。

ピンク色の寝巻き姿で、ポニーテールにされていた髪は解かれて、緑色の綺麗な長い髪は腰にまで届いていた。

「まあ、座れ。何もないが、飲み物くらいは出せるだろう」

「あの、どうかお構いなく……」

ソフィアが示された椅子へ座ると、エルトは携帯していたコップに水を注いで、ソフィアへ出してやる。

「さあ」

「あ、はい。いただきます……」

そう言って、水に口を付けるソフィア。

彼女が飲む間、エルトは黙って窓の外の景色を眺めるだけ。

そうして彼女が落ち着いた頃————先に口を開いたのは、エルトの方だった。

「君の……過去のことを、聞いた」

エルトの言葉に、ソフィアの肩が震える。

まだ、昼間のショックから脱していないのだろう。
揺れる瞳は悲しげで、「そうですか」と返す彼女の声には覇気がない。

「凄い力だな。木々や動物と話ができるとは」

「……………おかげで、気味悪がられちゃってますけどね」

「だが、それでも凄いことだ。誇ってもいいほどにな」

きっぱりと迷いなくそう言い切るエルトに、ソフィアはおずおずと訊ねる。

「あの……信じて、くれるんですか？」

「なんだ。嘘なのか？」

エルトが意地悪く笑いながらそう言うと、ソフィアは慌てて首を振る。

それに苦笑しながら、エルトは続けた。

「なら、いいじゃないか。嘘でないのなら、胸を張っていればいい。君は、何も悪いことはしていないのだろう?」

「……………はい」

「なら、それでいい。集落の他の連中が何を言おうが相手にするな。……………大義は、君にある」

そう言って、エルト自身もグラスに水を注ぎ、口にする。

冷たい液体が喉を潤し、流れていくのを感じ取ると、息をつきながらふと前を見ると――――。

「はっ!?!」

今にも泣き出しそうなまでに目に涙を溜めたソフィアの姿が、そこにあった。

「ば、馬鹿! 何故泣く!?!」

「だ、だってえ……………私、そんなこと言われたの、初めてで……………」

ついに、留めきれなくなった涙は溢れ、彼女の頬を伝っていく。

よほど嬉しかったのだろう。泣きながら、彼女の表情は綻んでいた。彼女の涙の意味を知ったエルトは、ほっと安堵の息を吐きながら、彼女の頭をそっと撫でてやった。

きつと、長く想いを溜め込んできたのだろう。

謂れもない悪評を口にされる度に、やがてやってもいないのに、自分のせいだと決めつけて。そうして、ずっと真の想いを封じ込めてきた。

それがどれだけ辛いことか、想像に余りある。

だから、今は――――。

「思いは、全て吐き出せ。大丈夫、今なら誰も見ていない」

「うう……うわあああああああ――――」

神秘的な青を湛える夜に、少女の泣き声が木霊した――――。

その後。

「もう、大丈夫です……………」

漸く泣き止んだソフィアに、エルトは安堵してベッドへ行こうとする。

そろそろいい時間だ。

寝ておかねば、明日の任務に支障が出ることにもなりかねない。

彼女にもそう言って、自分の部屋へ戻してもらおうと思ったのだが――。

「……………ソフィア？」

何故だろう。

自分の胸へ身を預けたソフィアは、自分の服を掴んだまま離れようとしな。

どうしたものか、と迷っている――。

「すう……………すう……………」

「寝てしまったか……………」

おそらくエルトと話し、想いを涙に、声にして吐き出したことで、安心したのだろう。

晴れやかに眠る彼女の寝顔は年相応にあどけなく、可憐なものだった。

「やれやれ……仕方ないな」

ぎゅっ、と掴んで離さない彼女をそのままに、エルトはベッドへ移動した。

起こしてしまうのも野暮だし、何よりこの手を引きはがすのは至難に思える。

頬と目元の涙を拭い、まるで父親のように彼女の頭を撫でると、心地よさそうにそれに応じるソフィアに、エルトの表情にも思わず微笑みが浮かんだ。

「御休み、ソフィア………」

そう、微かな寝息を立てて眠る彼女へ小声で囁き————目を閉じたエルトもやがて、深い眠りへ落ちていった————。

「神の黄昏」

神崎「はい、そんなわけで最新話脱稿ですよー」

スバル「今回は私です！」

神崎「さて、いよいよソフィアの過去が明らかになったわけですが」

スバル「育った村で、自分の生まれ持った力のせいで弾圧を受けるなんて……そんなのってないよ……」

神崎「ソフィアには何かしら彼女の能力について過去設定を作りたかったのですが、ちょうどいいのがこれしか浮かばず……何か、キャラと被っちゃった感が半端ないです（汗）」

スバル「民族から追放されて、のところは同じだもんね。でも、ソフィアの能力も凄いよね。木や動物と話が出来るなんて……」

神崎「まあ、その辺りも後々重要な意味を持ってくるのですが……今は、すごい能力だという感覚だけで大丈夫ですw」

スバル「今後、ソフィアと村の人達がどうなっていくのか……楽しみだね」

神崎「すぐには進展はしないかもしれませんが……次回、いよいよ任務です。+αで、ちょっとだけ別の方も進展するかもしれないです」

スバル「？ 別の方？」

神崎「そ、別の方」

スバル「何、それ？」

神崎「……………リオスと一週間同じ部屋で生活しても、彼のベッドに潜り込んで寝てても、何も感じなかった君にはおそらく解るまい」

スバル「えー、何それー！」

神崎「そんなわけで次回っ！
『ファンタジック・ガール 夢の中の少女／後編』」

スバル「無限の力、その身に宿せ！」

「にゅ……………うう……………」

カーテンの隙間から差す暖かな朝の木漏れ日に、ベッドの上で呻き声を上げながら、ソフィアはベッドの上でもぞもぞと身体を動かした。

起きたばかりのとろんとした目を擦りながら身を起こし、寝ぼけた頭で今の状況を考える。

辺りをきよきよろと見渡して、その視線が隣で眠る赤髪の青年へ向けられたところで————かぁと、ソフィアの頬に朱が差した。

（わ、わわわわ私……………なんてことを—————!?）

そうしようとしてそうだったわけではなく、結局は不可抗力の末こうなったのは理解出来るが、あまりのことにソフィアの顔はみるみるうちに真っ赤になっていった。

しかし。

「で、でも……………」

満更でもなかったのか、ただパニックな大きすぎただけなのか。

眠るエルトの寝顔を、真っ赤になった顔のままソフィアは横目に見る。

「でも……も、もうちょっとだけ……」

ここまで来れば、自分の思考が完全に暴走しているだろうことはソフィア自身にも理解は出来る。――――が、何故か止まらない。

再び横になり、エルトの寝顔を正面から眺める。

（わあ、意外と童顔なんですね。それでいて身体つきは細そうできてつくところについて、何だか淒く………）

そこまで考えたところで、ソフィアの顔は一層色濃く染まる。

熟れたトマトのような真っ赤な顔だけでなく、先程にも増して急上昇する胸の鼓動が、ソフィアをますますおかしくしていった。

（わ、私ったらなんてこと考えて………エルトさんが私なんか相手にしてくれるわけ………ってそうじゃなくて！………第一、エルトさんにはフェイト執務官が………ってそういうことでもなくてっ！！）

完全にパニックに陥りかけ、身悶えるソフィアの動きがふと、ある1点――――エルトを捉えたところで止まった。

自分でも、どうしてそんな思考に至ったのか、訳が解らない。

ただその時は何故か、そうしたいと思ったのだ。

「ちょっとだけ………」

そう、まるで自分に言い聞かせる免罪符のように呟きながら、ゆっ

くりとエルトの下に寄り添う。

そして、完全に2人の距離が0になりかけた、その時――――。

ズドオオオオオオン！

「何だ！？」

「ふわあああああつ！？」

突如伝わってきた衝撃に、エルトは飛び起き、ソフィアは弾かれるようにベッドの端にまで離れた。

「ぐ、ぐ、ぐごめんない、ごめんない、ごめんないいいー
ー！」

「…………何を謝っているんだ、君は？」

真っ赤な顔のまま何度も土下座するソフィアを訝しげに見つめながら、エルトは先程の衝撃の正体を考える。

が、考えるまでもなかった。

「敵襲ー！ 敵襲ー！」

外を慌ただしく走り回っているのであろう伝令の叫び声が、敵の襲

来を告げていた。

○E p i s o d e 1 0

ファンタジック・ガール
夢の中の少女／後編

「長！」

「おお、エルト殿！」

村の中央広場へ行くと、そこでは既に長が陣頭指揮をとっていた。

後ろに続くソフィアには相変わらず厳しい目が向けられていたが、固く手を握ってじっと耐えるソフィアの姿に、エルトは彼女の努力を無にしないよう、何より迅速に事態の確認をすべく、長に訊ねる。

「状況は？」

「集落の向かい側より、敵影を確認しました。いずれ、こちらに向かってくるものと思われます」

「規模はどれくらいだ」

「解りませんが、かなりの数が来ているものと」

「どうするの、エルト？」

スバルの問いに、エルトは「ふむ………」と考え込んだ。

この村の戦力では、おそらくアルブ相手に長くはもたない。
しかしだからといって攻勢に転じれば、多くの戦闘能力をもたない
民達を危険に晒すことになる。

どうしたものかと考えていると――――。

「あ、あの………」

「どうした？」

それまでエルトの背後に隠れていたソフィアが、おずおずと手を挙げたのを見て、お前になど用はない、とばかりの目を向ける民達を手で制して、長は訊ねた。

「私なら……私達なら、上手くやれるかもしれません」

「何？ 詳しく話してみろ、ソフィア」

エルトの言葉に、ソフィアは怯えた様子で周りを見た。

周りの目は相変わらず、ソフィアに対する忌避の色を浮かべていたが、エルトは努めて優しい口調で諭す。

「……………大丈夫だ。ゆっくりでいい、話してみろ」

「……………は、はい」

相変わらず怯えは拭えないものの、おそろおそろ話す彼女の策に、エルトと長の表情が変わっていく。

これならば、勝てるかもしれない。

ピンチをチャンスに変える秘策が、そこには隠されていた。

「そろそろ………かな」

一方、村から遠く離れたとある高台。

そこから、眼下に群がる多くの異形達を見下ろしながら、黒髪・碧眼の幼い外見の少女は無表情に言った。

真っ白な法衣のようなものを身に纏い、抱き寄せるようにしてその真っ白な手に持っているのは、1振りの杖。

先端にはクリスタル状の形をした宝石のようなコアが取り付けられ、まるで西洋の杖のような古風な雰囲気漂わせている。なのはのレイジングハートのような、機械的な機構は、その外観には見受けられなかった。

「えと……じゃあ、皆に伝えて。しゅつげき、お願いしますって」

「ピーーーーーー！」

少女が若干舌足らずにそう告げると、彼女の傍に控えていたワイバーンが高らかに咆哮を上げ、ゆっくりと飛翔する。

そしてそれと入れ替わるようにして魔法陣が開き、1人の男が姿を現した。

「よお、デメテル」

「アレス………」

現れたのは、血のように赤く、長い髪を揺らす男。

黒装束に身を包み、同様に黒き眼帯の隠す右目は何を見ているのだろうか。

アレスが現れた途端、デメテルと呼ばれた少女は怯えたように後ずさる。

それを見てアレスは苦笑しながら、やれやれと肩を竦めた。

「参ったな。そこまで脅かしたつもりはないんだが」

「……………」

おどけたようにそう言って見せるも、デメテルの怯えの表情は変わらない。

それにもう1度肩を竦めると、アレスはここへ来た本来の用件を切り出した。

「アルテミスが呼んでるぞ。戻ってこいとさ」

「アルテミス……が？ 本当に？」

「おう」

そう言うてにつ、と笑うと、デメテルは忽ち輝くような笑顔を浮かべて、転移の魔法陣を展開する。

やがてその姿が光に包まれ見えなくなると、アレスは村の方を見た。

アルテミスがデメテルを戻したのは、アレスの方が陣頭指揮にはうってつけと判断したためで、彼がデメテルと共に戻ることは叶わないのだが、余計なことは言わずにいた。

アレス自身、自分がデメテルに嫌われているであろうことは解っているし、そんなことを彼女に教えたところで、意味のないことは理解していたからだ。

「さあて。あちらはどう出るかな………?」

既にデメテルの指示で進軍を始めている魔物とアルブの群れを眼下に、アレスはそうほくそ笑んだ。

伊達に、戦神の名を冠されてはいない。

彼の挑んだ戦は常に彼に有利に働く。――――たった1人を、相手にした場合を除いては。

正直なところ、あの村程度の戦力であれば、物量で押しているだけでも勝てる。アレス程の将が出るほどの戦でもない。

では何故デメテルに落とせなかったかといえば、彼女が甘かったからに他ならない。

それは彼女の年齢と性格を鑑みれば無理もないことと言えようが、他に手が空いていなかったため、彼女に任せる他なかったのだ。

そして、此度自分の役割を終えたアレスが、こうして代役を買って出たのだった。

このまま順調に行けば、早くも魔物達は村をその視界に捉えるだろう。

そう考え、早くも勝ち戦を確信して溜め息をつくアレスの前で――

ドオオオオオオンッ！

「!? 何だ!?!」

突如、轟音が響いた。

見れば、魔物達の陣の中で、黒煙が上がっている。

何が起こったか、それを確かめる間も無く、今度は紅い光が目の前で爆ぜた。

その紅い閃光は次々に魔物とアルブの混成部隊を襲い、多くの魔物達がその体軀を灼熱の熱線に貫かれ絶命していく。

「何が……まさかっ!?!」

瞬間、アレスは悔しげに唇を咬む。

完全にしてやられた。

舐めてかかっていた、ということは言うまでもない。無理もない。

聞いていた戦力ではここまでのことは出来るはずがなく、完全に不測の事態であったからだ。

「狙撃かつ……………！」

熱線の出どころを探るアレスの目の前で、また紅い閃光が1つ、弾けた。

『エルトさん、伏角30です』

「了解」

アレスがいるのとは、少し離れた別の高台。

エルトはそこから、群れを成して襲い来る魔物とアルブを迎撃して

いた。
手に握られているのは、スナイパーライフルの形をしたメカニカルな銃。

バレル、スナイパーモード。

狙撃に特化した形態で、このように超遠距離から敵の戦力を削ることに長けている。

だが、たとえエルトとスナイパーモードの超射程をもってしても、これほど離れた的を正確に打ち抜くのは難しい。

そこで、ソフィアの出番だ。

幸いにもここは、自然の森のど真ん中。

自然物と会話が出来るソフィアが魔物やアルブ達の正確な位置を特定、エルトへ伝えることで、超高射程での狙撃を可能としていたのだった。

加えて、エルトの膨大な魔力。

無尽蔵とも思えるその力は、エネルギー切れを気にする心配もなく撃ちまくれることを示しており、片端から連射で沈めるその手際で、村への侵入を食い止めていた。

既に前線にいた魔物やアルブの殆どはエルトの魔力ビームに焼かれ、その動きを完全に止めていた。

「このまま僕だけで全滅させられればいいんだが……………」

『無茶しないでよ、エルト。何のために私達がいると思ってるの?』

「……………そうだった、なっ!」

新たに開いたモニタ越しのスバルの言葉に、エルトはまた1つトリガーを引きながら応じた。

目の前に開いたホロスコープ越しに、狙い通り獲物が倒れたことを確認すると、エルトは近くに見えた次の獲物へと照準を合わせ——ふと、敵の動きが変わったことに気付く。

そしてそれを裏付けるように、ソフィアのモニターから答が届いた。

『エルトさん! 敵の進行方向が変わりました! 真っ直ぐそちらへ向かっていきます!』

「……………敵が誘いに乗った! スバルッ!」

『了解っ!』

敵は、アルブと魔物の混成部隊。その中に、意思をもつ存在は1つも確認することが出来ない。

となれば、側面から狙撃された場合、強引にでも進軍してくるだろうとエルトは読んだ。所詮は、魔物の類。消耗など考えず、ただ脅威へ向かって突っ走ってくるものだとして予測した。

果たして、エルトのその読みは見事的中したのだが、スコープから他の獲物を狙い撃ちながら、言い知れぬ不安を感じる。

確かに、自分たちはベストの戦法をとっているはず。それなのに、心のどこかでそのことに引っかかりを感じていた。

まるで、この状況が？上手く出来すぎている？かのような。

「あちらも、上手くやってくれるといいのだが………」

余計な思考を振り払うべく、再び敵に目を向けるエルト。

こちらへ向きを変えて侵攻して来る敵を見据えて、漆黒に光るトリガーを引きながら、エルトは静かにそう呟いた。

「やっ………！」

いよいよ視界に入ってきた複数の異形の姿を捉え、スバルはリボルバーナックルを構えた。

側面——否、今やエルトにとっては正面——からは今もエルトの狙撃の光が絶えず降り注いでおり、爆炎が幾つも上がっている。

ここまで来れば理解出来ようが、エルトの役割は遠距離からの狙撃により魔物達をおびき寄せ、村からなるべく遠ざけること。

そしてその隙に、先行するスバルと村の戦士達が後方から強襲し、挟み撃ちにしようという作戦だ。

「エルト、大丈夫かな……ううん、絶対大丈夫。だって、エルトだもんね」

ふと、エルトの身を憂うスバルだが、目の前の敵に集中すべくすぐにそれを振り払う。

この作戦、最も危険に晒されるのは彼だ。超遠距離からの狙撃が成功すれば、魔物達の標的はエルトへと変化する。

その際、向かってくる魔物の大群を、エルトはたった1人で相手取らねばならないのだから。

そして、それを少しでも楽にするのは——自分達、防衛隊本隊の役目なのだ。

「さて。それじゃあ行きましょう！」

「おう！」

声を上げてマツハキヤリバーを唸らせ突撃していくスバルに後続の村の勇士達が応え、各々の武器を構え魔物とアルブ達に殺到した。

辺境の村とはいえ、管理局とコンタクト出来るだけの力があるのだ。デバイスの1つや2つは、あることはあった。

しかし、所詮は一般配備型————それも、一世代前の簡易ストレージタイプ。

スバル達の持っているような、特別製のインテリジェントタイプではない、あくまで簡易型。数体も魔物ならまだしも、その程度の装備でこれほどの大群を相手取るには役不足であった。

だが、今はスバルがおり、別働隊のエルトは早くもその力を存分に振るいつつある。

村人達の士気も、当然の如く鰻上りであった。

ウイングロードで魔物達の頭上へ回ったスバルは、リボルバーナツクルの先に空色の魔力球を形成し————。

「一中……………必倒おっ！」

『D i v i n e b u s t e r . 』

繰り出されるは、空色の砲撃。

彼女が憧れるなののようなエースや、エルトやリオスのような規格外と比べるのは烏滸がましいが、村人の放てる魔力弾に比べれば、十分にエースと呼ぶに相応しい威力で、魔物やそれに擬態したアル

ブを焼き尽くしていく。

そんな彼女の活躍に、一層士気を高めていく村人達の魔力弾が、少し遅れて雨のように降り注いだ。

その猛烈な攻撃の前には、魔物もアルブも関係ない。

全てが等しく、その光弾に貫かれ、動きを止めていくことに変わらない。ウインググロードの上————魔物達の上空からその様子を見ているスバルには、魔物の群れという直線の側面に、虫食いのようにぽっかりと穴が空いたように見えた。

後続の魔物達によって、瞬く間に塞がれていくかと思われるが————それを許さないとはかりに、忽ち砲撃と魔力弾が降り注ぎ、貫き、爆散させていく。

攻撃をくぐり抜けてエルトの側へ向かうものもいたが、スバル達の猛攻によって数を減らされた状態では、雪崩込むという表現には程遠い。

やがて魔物達が全て目の前を通り抜けると、スバル達は追撃に入った。

これで陣形としては、エルトとスバル、両者の間で魔物達を挟み撃ちにする形となる。

これこそが、この作戦の要。

エルトが安全圏へおびき寄せ、スバル達が側面から強襲することによって追い立て、挟撃の形を作って一気に殲滅する。

今頃エルトも、至近距離に捉えた魔物を迎撃している頃だろうか。それとも、ソフィアの補助による超高度狙撃によって未だ敵を寄せ付けていないのだろうか。

いずれにせよ、彼なら大丈夫だろう。

リオスと同じものを感じさせる、彼なら――――。

「はああああああっ！」

こと戦闘において絶対の信頼を彼に寄せ、スバルはまた1つ、魔力弾を放った。

「作戦、上手くいってる。よかったあ……………」

エルトとスバル、双方の様子を映し出す複数のモニターの映像を注意深く見つめながら、ソフィアは安堵の声を漏らした。

エルトもスバルも、大量の魔物を相手に奮戦している。

疲れも見えない、という程ではないが、このまま行けば魔物を全て殲滅し終えるのも時間の問題だろう。モニターの映像は、そんな確信を与えてくれる、味方の圧倒的優勢を映し出していた。

もはや、周囲から浴びている無言のプレッシャーも苦にならない。

自ら立案した作戦の成功への予感彼女へ自信を与え、ある種の高揚感すら覚えていた。

そんな状況だからこそ——彼女が気づけなかったのも、無理はなかったのかもしれない。

「な、何だ!？」

切羽詰った村人の声に、ソフィアが漸くその存在に気付いたのは、上空から暗い影が自分の頭上へ差した時だった。

「わ、ワイバーン!? どうして………!」

ソフィアが驚いているのは、それが何故ここにいるかということではない。

何故、ここまで接近されるまでその存在に気付かなかったのか——
——。

自然物の声を聞くことが出来る、天然のレーダーとでも呼ぶべきソ

ファイアがあれば、彼らが迫っていることも理解出来たはずなのに――――。

その答は至極簡単で、アレスが前もって光学迷彩を施した上で飛ばしていたからこそ、木も動物もその存在に気付かなかったのだが、そんなことをソフィアが知る由もない。

ここは本陣。こんな形での強襲を想定していない作戦であったため、戦える人員は全て前線へ駆り出されている。

つまり、今まさに咆哮を上げながら、その鋭い鉤爪で襲いかかってくるワイバーン迎撃出来るのは、ソフィアをおいて他にいない。

攻撃型ではないが、なりふり構っている余裕はない。

今も、ワイバーンは村人の1人に狙いを定め――――。

「わあああああああつ!？」

「っ!」

降りおろされようとしていた鉤爪と村人の青年との間に、ソフィアが素早く割り込み、シールドを発動させる。

発生した半ドーム状のシールドは、割り込んだ後碌な演算も行わないまま即席で作り出したものだったが、それでも強靱な振り下ろしをはじき返す程の出力を見せたのは、さすがというべきだろうか。

「あ、アンタ……………」

呆然とした青年の声に、様々な感情が入り乱れているのを感じ、ソ

フィアはびくりと肩を震わせるが———そんな彼女の脳裏に、赤髪の青年の言葉が過ぎった。

『嘘でないのなら、胸を張っていればいい』

「……………私は」

張っていたシールドを解除して、ソフィアは俯き、言葉を口にする。その手に、自らのデバイスを握って。

「私は、ずっと独りぼっちでした。友達も、家族も、何1つなくて……………。大好きだった歌も、いつの間にか歌わなくなった」

独白する彼女の手の中で、デバイスが形を変えていく。

彼女の想いを、そのまま体現するように。

そして。そんな彼女の思いを、村人達は黙って聞き入るしか出来なかった。

「運命を呪ったこともあった。不幸な自分を恨んだこともあった。けど……………それでも、誰かが傷ついていいなんて、思ったことなんてなかった!」

最後は、既に叫びと化していた。

自分の気持ちを、純粹に相手にぶつけるための手段。

そしてその相手は、目の前で再び襲いかかる体勢を整えている、ワ

イバーンだけではない。

村人達も、彼女に向けていたプレッシャーなどもはや影形もなく、ただ彼女の思いに圧倒される。

「だから……私は……私はっ……皆を、守りたいっ！」

光に包まれる、指輪型の彼女のデバイス。

新緑の暖かな光が溢れ————やがて指輪は、1振りの杖へとその姿を変えた。

一見、はやてのシュベルトクロイツにも見える形状の錫杖。

しかし先端には夜天の王の杖にはない、深緑の半透明な寶石状のコアが付属していて、彼女の思いに応えるかのように明滅を繰り返す。

「いくよ、ブルームスター！」

『Yes, sir.』

法衣のようなバリアジャケットは既に展開を完了していたが、デバイス、ブルームスター自体はこれまで、待機状態のまま使用されていた。

それは彼女が今まで覚悟が出来ていなかった故の決断だったが、今回の彼女の奮起は、彼女自身にその軛を解き放たせるまでに強いものだった。

再び襲いかかるワイバーン。

今度は、真っ赤な炎のような魔力砲撃を、その強靱な口から吐き出した。

一般に、龍族のブレス攻撃と呼ばれる一撃。ワイバーンは亜種であり、この攻撃も龍のそれに比べて遙かに劣る。だが、それでも人間を焼き払えるくらいの威力は、十分に持ち合わせた必殺の攻撃だった。

しかし。

「無駄です！」

『Forest shield.』

ライトグリーンの半透明な色をした強固な障壁が、ワイバーンのブレスを跳ね返し、まるで寄せ付けない。

最大の攻撃手段を軽々と防がれ、声の聞こえるソフィアでなくとも、傍目から焦っていると解るワイバーン。

だがしかし、彼の思考が整う前に、ソフィアの目の前で4つの深緑の色をした魔力球が瞬時に集束を完了した。

なのはどうも、これほどの集束速度は有り得ない。

当然だ。ソフィアはなのはですら持ち得ない、ある特殊な集束技術で、この早業を可能にしたのだから。

「まさか……………木から、魔力を吸い取ったのか……………!？」

呆然と見ているしか出来ない村人達の中で、唯一それを見抜いていた長がそう漠然と呟いた。

それに対し、ソフィアはふつと微笑んで、その言葉を否定する。

「ふふ、ちよつと違います。私のこの力は、木々達が分けてくれたもの。……私と、友達の力ですっ！」

『Charge, complete!』

ソフィアの言葉と共に、ブルームスターが集束の完了を告げる。

そして、深呼吸し、まだ混乱から回復していないワイバーンへ向けて――。

「ごめんね。……………いつけえええええええええつーーー」

Starlight
breaker.

謝罪の言葉と共に発せられた、深緑の極大砲撃が、真つ直ぐにワ
イバーンへ向かう。

唐突なことに、ワイバーンは成す術もなくそのまま飲み込まれ——
——そのまま、辺りは極光に包み込まれた。

あまりの眩さに、その場の誰もが目を閉じる。
そして、その光がピークを境にゆっくりと収まっていくと――

「お休みなさい……………」

魔力ダメージを受け、気絶したワイバーンを優しい視線で見つめながら、そっと撫でるソフィアの姿があった。

「あらら、参ったねこれは……………」

自ら飛ばした強襲用のワイバーンが倒されたのを遠視のモニター越しに見、アレスはそう呟いた。

見れば、丸々陽動に使った魔物の大部隊も、エルト達によって殲滅されつつある。

こうなっては喻え彼であっても、戦線の立て直しは不可能だ。

「あーあ、これだからノータリンの魔物部隊の指揮なんざ受けるの嫌だったんだ。後でオーディンにたっぷり文句言ってやらねえとな」

不満げに唇を尖らせながら、アレスは背後に転移魔法陣を展開させるべく、踵を返そうとして――――ふと、もう1度、負け戦の戦場を振り返った。

今度は――――不満ではなく、好戦的に口元を歪ませて。

「また……今度はこんなお遊戯じゃなく、もっと楽しく殺り合おうや。なあ、エルト？」

一陣の風が吹き、木々が騒めく。

その渦中にあったアレスの姿は、次の瞬間、既に転移魔法陣に消え、跡形もなかった。

「……………以上、報告を終わる」

「うん、お疲れ様」

機動六課、部隊長室のデスクに座ったはやての前で、任務の報告を終えたエルトがそう締めくくると、はやては微笑みながら労いの言葉をかけた。

あの任務は結果的に、管理局と村側の勝利という形で幕を閉じた。

しかし、本陣を強襲したワイバーンから、オプティックハイドに似た高度の光学迷彩の魔法を使用した形跡が見られたことから、何者かの手が働いていたという見方もあった。

しかしながら、当然と言うべきか、その何者かの手掛かりは何一つ見つからなかったため、この任務に関してはとりあえずは完了とし、先程3人揃って帰還してきたというわけだった。

「しかし、はやても人が悪い。あれで彼女が吹っ切れずに壊れてしまったら、どうするつもりだったのだ？」

「それに関しては、私もちょっと強引だったと反省しとるよ。実際ソフィアには、辛い思いさせてしもた」

「だが、彼女はそれに打ち勝った。トラウマに勝ち、自信を手に入れた。それは、仲間として誇らしく思うべきだろうな」

「……………せやな」

エルトの言葉に、はやては微笑みつつも頷く。

確かに多少荒療治ではあったが、彼女の中に確かな自信が芽生えたのもまた事実。

結果論ではあるが、今回のはやての作戦は大成功と言っていいだろう。

「さーて、じゃあそろそろ上がっていいよ。疲れたやろうし、デスクワークは免除するからゆっくり休んどきって、2人にも伝えたいな」

「了解した。ありがとう」

「はいはい、お疲れさん」

エルトは踵を返し、ひらひらと手を振るはやてに見送られながら部隊長室を後にした。

一方、エルトと別れたソフィアは、フェイトへ報告するべく彼女の部屋を訪れていた。

3年前の六課と同様、2人用の大きな部屋にフェイトはなのはと2人で住んでいて、初めて訪れた時はフォワード陣とのあまりの格差に辟易したものだ、さすがに副官ともなれば彼女の下を訪れる機会も多く、既に慣れ親しんだソフィアは、これからエリオ達と食事に行くのだと言うフェイトと共に、歩きながら報告を行っていた。

「よかったね、ソフィア。皆とも解り合えて」

「はいっ！」

フェイトの言葉に、満面の笑みで頷くソフィア。

その後、ソフィアと村人達は和解した。

彼女の、村人達を守りたいという強い思いが、村人達の気持ちを突き動かしたのだ。

無論、完全に蟠^{わだかま}りがなくなった訳ではない。

魔物に家族を殺された遺族達の傷はそう易々と消えるものではない。それはソフィアが、ゆっくりと向き合って、少しずつ埋めていくべき溝だ。

管理局員として。彼らを守りたいと願う、1人の人間として。

「それに、私嬉しいです。新しい友達も増えましたし。ねー、ピオニー？」

「ピー？」

そう、ソフィアは胸に抱く何かへと、その頭を撫でながら問いかけた。

彼女の腕には今、ミニサイズの褐色をした龍のような生き物が抱かれている。

この時点で気付く者が、どれだけいるだろうか。

そう、この生き物こそ、任務の際本陣を強襲してきたあのワイバーンであった。

任務が終了した後、どうしても彼の安否が気になったソフィアは、治癒魔法をかけて傷を癒した。

結果、ワイバーンは彼女にこれ以上ないまでに懐いてしまい、こうして彼女の使役する龍として六課に加わることが決定したのだ。

身体がフリードのように小さくなっているのは、キャロによってその力がソフィアのデバイス、ブルームスターに封印されているからで、ソフィアの意味さえあればいつでも元の雄々しきワイバーンの姿に戻すことが出来る。

キャロのフリードのような存在だと定義するのが、一番理解が早いかもしれない。

そのまま報告を続け、話すこともなくなってきた頃。

そろそろ食堂につくかというところで、前から歩いてきた赤髪の青年に、ソフィアは満天の笑顔を浮かべて、彼をこう呼んだ。

「あ、？エルト？！」

「……………え？」

その呼び名に違和感を覚え、フェイトは思わず硬直した。

確か、彼女が彼を呼ぶ時は、？さん？を付けていなかったか——
——？

「ああ、ソフィア。フェイトも一緒ということは、任務の報告をしていたところか？」

「うん、そうだよ！ 後、この子の紹介もっ！」

「ピー！」

これほど気兼ねなく笑えるようになってよかったとか、片翼を上げてまるで挨拶しているかのようなワイバーンのピオニーが可愛いだとか、その光景を見て思うことはいろいろあったはずだ。

しかし、今フェイトにはその内のどの感想も浮かんでこなかった——
——否、考えている心の余裕がなかった。

彼女の耳がおかしくなければ、ソフィアは今、エルトに敬語を使わずに——
——さも親しい間柄のように、話しかけていたのだ。

そんな、当人自身にも何故だか解らない、心の底から沸き上がる言い様もないもやもやとした感情を抱くフェイトを他所に、エルトはソフィアに微笑みかける。

「そうか。……ああ、そうそう。はやてから伝言だ。デスクワークは免除するから、とりあえずは休んでいいそうだ。スバルにもし会うことがあれば、ついでに伝えておいてくれ」

「ほんと？　わーい！　やったね、ピオニー♪」

「ピ。♪」

仲のいいのはいいことだ。

そう分かってはいるのだが、何故だか目の前の2人の様子には素直に笑うことができなくて。

フェイトはただ、困惑するしか出来なかった。

と、悶々としている内に会話は終わっていたのか、すれ違っていくエルトを横目に見ても動けないでいるフェイトの下へ、不敵に笑うソフィアが近づいてきて、耳打ちした。

「…………フェイト執務官。私、負けませんからね♪」

「え…………ええっ!？」

それだけ言い残すと、ソフィアは再び元の無邪気な表情に戻り、ピオニーを抱えて自室へと駆けていく。

「え……えと、その……ええ……?」

その様子を振り返って見送ることも出来ず——エリオやキャロの待つ食堂のドアを開けることが出来たのは、それからたっぷり15分経った後だったという。

く神の黄昏く

神崎「やっちゃったぜ☆」

フェイト「やっちゃったぜ、じゃないよ、もう……。お茶目さん
っぽく言っただけ、許してあげないんだからね？」

神崎「いやはや、なんだか勢いでフラグ作らせてしまった……。
これも、ソフィアの人気の高いのがいけないんだ」

フェイト「でも、本当に人気あったよねソフィア……」

神崎「読者様の反応を伺っていると、1位にソフィア、2位にレー
ネ、3位にマリサ辺り……。ってところかなあ」

フェイト「私……。メインヒロイン、なんだよね？（汗）」

神崎「まあ、あくまでオリキャラの中での人気ですからw きつと
読者様方皆、君がエルトとくつつくのを心待ちにしている……。は
ず。たぶん、きつと、おそろく」

フェイト「不安しか感じないよ……。特に最後の」

神崎「まあ、そんなわけで今回、ソフィアのトラウマが解消された
わけですが！」

フェイト「（話そらされた!？）う、うん、そうだね。これで漸く、

ソフィアも心から笑えるようになっただね」

神崎「おまけにワイバーンのピオニーも使えるようになって。本格的にキャラ化が進行してきたような気が否めないのですがww」

フェイト「ま、まあ。砲撃型とフルバック、龍とワイバーンっていう感じで住み分けも出来るし、いいんじゃないかな？」

神崎「なるほど。ではそのままエルトとくつつk……………」

フェイト「だから、メインヒロインは私でしょ……………!?!」

神崎「そんなわけで次回！ 再びリオスの側に視線を移してのお話！
『霸王／前編』！」

フェイト「無限の力、その身に宿せ！……………うう、また話逸らされた（涙）」

Episode 11 霸王／前編

「うにー」

「にー」

本日も晴天。

心地のいい朝には、身体を伸ばしてその清々しさを存分に満喫したくなるのは、人間の性だろうか。

少なくとも、揃って奇妙な声を上げ、玄関先で大きく伸びをしているこの父娘には、当然のこととして受け入れられていることは言うまでもないだろう。

ソフィアⅡジュリーストンが過去のトラウマを断ち切った、機動六課から所変わって、ここはミッドチルダ市街地、喫茶ヴァルハラ。

L・P事件の英雄にして？氷翼の天使？こと、リオスⅡコーネルドの経営する喫茶ヴァルハラも、本日は定休日。

同様に、娘のヴィヴィオ、エミリアが通っている学校、サンクトヒルデ魔法学校も休講日であるため、久々に一家揃って休日の朝を迎えていた。

「いやー、気持ちのいい朝だねえ」

「そうだね……」

「気分、爽快」

晴れやかに微笑みながら言うリオスを真似るかのようにヴィヴィオが応じると、エミリアの短い同意の言葉が締めくくった。

僅かに綻び、朱の差した表情に気付かなければ、本当に爽快に感じているのか判断に苦しむ程、未だ彼女の感情は起伏に乏しかった。

「今日はパパ、お仕事ないんだよね？」

「一応ね。今日はヴィヴィオの練習に、じっくり付き合っただけられるかな」

「ほんと!？」

「うん♪」

「…………エミリアも、手伝う」

輝かくような笑顔で駆けていくヴィヴィオの後を、ゆっくりとエミリアが追いかけていく。

なのはが新生機動六課に配属になり、3人で暮らし始めてから、エミリアは意識的にか無意識的にか、ヴィヴィオのお目つけ役のような立ち位置となりつつある。

おかげでヴィヴィオが休みの日でも、安心して店に出ることが出来ていた。

ヴィヴィオはヴィヴィオで、エミリアとの組み手は格闘技のいい訓練になっているようで、またリオスが喫茶店の経営に忙しいことは承知しているから、これまで特に不満も言わなかったが、あの嬉しそうな顔を見ると、やはり彼との訓練をとっても楽しみにしていたようだ。

今度からは、なるべく一緒の時間を持つことにしよう。

そう、娘の背中へ密かに誓い————ふと、今日のもう1つの予定を思い出した。

「そうだ。あっちの準備もしておこうっと」

そう1人呟くと、リオスはもう1度伸びをして、喫茶店の中へと戻っていった。

○Episode 11 覇王／前編

セイクリッド・ハート、愛称クリス。

それが、ヴィヴィオ専用によりオスがカスタマイズしたデバイスの名前だった。

なのはと相談し、魔法を責任もって扱えるだけの心と技量が伴ってから与えることにしていたこのデバイス。

なのはのレイジングハートを模したその名を通信モニター越しに彼女へ伝えると、感慨深げに目を細めていた。

ところでこのクリス、セットアップと同時にとある魔法が発動するようになっていいる。

それが――――。

「クリス、セットアップ！」

『Stand by ready, set up!』

――――大人の姿への変身魔法。

ヴィヴィオは本来なら幼い少女だが、クリスをセットアップした際は、高度防護服としてのバリアジャケットの展開の他に、大人の姿へ変身する魔法がオートで発動するようになっていいるのだ。

その際のヴィヴィオの容姿は、リオスやなのは達とほぼ同年代の少女である。初めてこの変身————ヴィヴィオ当人は、大人モードと呼称————を見た者は、差異はあれどほぼ例外なく驚嘆するものだ。

当然、開発者であるリオスや、訓練で見慣れているエミリアは彼女のその姿を見てもさして驚いた様子はないが、ついこの前フェイトが遊びに来て披露した際には、文字通り開いた口が塞がらない、大層珍しい表情を拝むことが出来たという。

そんな彼女だから、リオスも気兼ねなく組み手を行うことが出来た。

さすがに幼い少女を殴ったり蹴ったりというのは、たとえ本人がやる気でも気が引けるが、これなら構うこともない。

グロリアスをナックルモードでセットアップするリオスを前に、ヴィヴィオは構えをとった。

レイジングハートを模したとはいえ、戦闘形態は杖ではなく、彼女の得意な格闘戦に対応した、ナックルタイプ。戦闘スタイルもなのはともリオスとも似つかわず、近いとすればスバル辺りだろうか。

リオスがグロリアスに新たにナックルモードを追加したのも、元はといえば彼女の練習相手になるためだった。

両者が構えたのを確認すると、2人に挟まれるような位置に立っていたエミリアが徐に片手を上げた。

そして。

「…………レディ…………ゴー」

ゴー、の一言と共に上げていた手を振り下ろし、彼女が下がると同時に、リオスとヴィヴィオは駆け出した。

先手をとったのはヴィヴィオ。ナックルを嵌めた右拳から放たれるストレートが、胸甲に覆われたリオスの胸を真っ直ぐ狙う。

リオスはそれを左手の平で受け止めると軌道を逸らしていなし、素早く懐に潜り込んで、空いている右手でアッパーを放った。

「うっ……………」

それを咄嗟のバックステップでかわしたヴィヴィオは、冷や汗が流れるのを感じながらそのまま距離をとった。

ここで追撃し畳み掛けることも出来たが、リオスはその機会をあえて放棄する。

これはあくまでヴィヴィオの訓練であり、自分は動くサンドバックに過ぎないことを、リオス自身よく解っているからだ。

少し離れた位置で、ヴィヴィオはリオスの隙を伺う。

「さすがパパ。今のは上手く入ったって思ったのになぁ」

「初速は速くなってきてるよ。練習の成果が出てるね、ヴィヴィオ！」

実際、前回の組み手と比べ予想以上に成長した速さに、リオスは舌を巻いていた。

「ヴィヴィオも成長してるんだよっ！」

「そうだね。これは……気を抜いたらやられちゃうかな」

あくまで魔法戦闘というならリオスにもいろいろとやりようはあるが、これは単純な格闘対決。

スバルと似た固有武装と戦闘スタイルを持つノーヴェを師匠に持つヴィヴィオは、こと格闘技に関しては既にその才を発揮しつつある。如何にリオスといえど、油断すれば足元を掬われてしまうであろうことは、想像に難くなかった。

「もう1度いくよ、パパ！」

「うん！ 何度でも来い！」

頷くと、再び突進してくるヴィヴィオにリオスは身構えた。

時折蹴りを織り交ぜた、不規則な連打。

それをリオスは、最小限の動きでかわしつつ、時に直撃コースに飛んできた一撃は手で触れて軌道を逸らした。

（やっぱりヴィヴィオ、筋がいいなあ）

親バカと思われても構わない。

しかし、彼女にそれだけの才があるのは事実。やはり、彼女がかの聖王のクローンであることが関係しているのだろうか。

オリヴィエールゼーゲプレヒト。かつて隆盛を極めた古代ベルカにおいて、その頂点に君臨した女王にして、聖王と呼ばれる存在。

ヴィヴィオは、とある事情からその聖王の聖骸布に付着していた遺伝子から生まれたクローンであった。

（いや……………）

だが、そこまで考えた上でリオスは、改めてそれを否定した。

何故なら———。

（彼女はヴィヴィオだ。オリヴィエじゃない……………！）

元がどうであれ、今のヴィヴィオの実力は、彼女自身が努力で勝ち取ったもの。

そしてそれは、オリヴィエでも他の誰でもない、ヴィヴィオだけのものだ。

そんなことを考え、ふと思考を現実に戻すと———。

「はあああああっ！」

（あ、やばっ……………！）

ヴィヴィオの拳が、目の前まで迫ってきていた。思考に没頭しすぎて、間合いを見誤ったらしい。

このままいけば、顔面に直撃する。

ここで軽く触れておくと、リオスもまたヴィヴィオと同様に、生い立ちに関しては特殊な事情がある。

それは、彼自身の身体能力にも関係していて――――。

「はっ！」

「にゃっ!？」

流れるような動作で、無意識的にリオスの身体がダメージから逃れようとヴィヴィオの腕を絡めとって投げ飛ばした。

投げられた方向には、今彼らがいるヴァルハラの裏庭に入る入口。

喫茶店の表口には『CLOSED』の札を下げて来ており、エミリアを含めたヴァルハラに住人は全てここにいる。

故に、普段ならそこを誰かが通ることなど有り得ないのだが――――。

「にゃあああっ!？」

「え……きゃあああっ!？」

何事も、例外はあるようだ。

投げ飛ばした先には、まさに今この裏庭へ入ってきていた少女がいて、ヴィヴィオと纏れるようにして倒れ込んでしまった。

「うあ……………」

「きゅう……………」

ドシャ、と揃って倒れ込む2人。

慌てて駆け寄ってみれば、どちらも目を回して気絶していた。

とりあえず揺すってみたが、起きる気配はない。

「あー…………え、えーと…………とりあえず、運ぼうか」

「…………うん」

頷くエミリアが、大人モードが解けて元の姿に戻ったヴィヴィオに駆け寄るのを横目に見ながら、リオスは翡翠色の透き通るような髪をしたもう1人の少女————アインハルトⅡストラトスを前に、苦笑しながら気まづく頬を掻いた。

「ごめん！　ほんとうにごめんっ！」

訓練場として使用している裏庭にも、休憩に利用出来る程度のスペースがある。

その一画で現在、18にもなる青年が、10前後の少女に土下座するという、シュールな光景が展開されていた。

尤も少女の側は、そんな彼の行動にあたふたと狼狽えるばかりであったが。

「も、もういいですから。どうか顔を上げて下さい」

「いや、でも……………」

子供形態のヴィヴィオならいざしらず、大人モードの彼女が直撃したのだ。

リオスとしては心配せずにはいらなかったのだが、少女————
——アインハルトⅡストラトスとしては、特に深刻な怪我があったわけでもなく、既に十分過ぎる程の謝罪を受け取っていたため、そろそろ逆に気まづくなってきたところだった。

「私なら大丈夫です。それより、ヴィヴィオさんにお怪我がなかったかと……………」

「あ、はい。私も大丈夫です！」

心配した様子で問うアインハルトに、ヴィヴィオは彼女と話が出来るのが嬉しいのか、元気をアピールするように、元気いっぱい返

事を返した。

2人が目を覚ましてから解ったことだが、どうやらこの2人、知り合いのようなのだ。

アインハルトが落としたものを偶然拾ったヴィヴィオが、直接届けにあがったことが切っ掛けらしい。

偶然とは、面白いものである。

「アインハルトさん、今日はどうしたんですか？」

「リオスさんにお誘いを受けたんです。久々の休みだから、一緒に訓練をしないか、と」

「……………パパ？」

「あはは、ごめん。びっくりさせようと思って……………」

ヴィヴィオに内緒にしていたのは、同じ格闘技の高みを目指す同年代の友達を呼ぶことで、サプライズを狙ったのだが……………上手いかなかった。ある意味では、大成功と言えるが。

そこへ。

「……………粗茶」

「あ…………ど、どうも」

トレイに茶と茶菓子に乗せたエミリアが、言葉少なくアインハルト

に茶を差し出した。

マグカップの中から上がる白い湯気を興味深げに眺めていたアインハルトだったが、ややあつて口をつける。

「……美味しい……！」

途端に綻ぶ彼女の表情に、安心した様子でリオスは笑った。

「そう言ってくれると嬉しいな。店で余っちゃった茶葉だし」

「お店、ですか……？」

「あ、言ってませんでしたっけ。私のパパ、この表の喫茶店の店長さんなんです！」

リオスの言葉に、アインハルトがきょとんと首を傾げると、早速ヴィオが、まるで自分のことのように自慢げに説明した。

すると、目に見えて変わる、アインハルトの目。

「まさかとは思っていましたが……本当に、ヴァルハラのお店さんだったんですね」

「うん、まあね」

言いながら、茶と一緒に出された茶菓子を1つ口に入れる。

瞬間、無表情だった彼女の表情は綻び、柔らかくなった。

そして、

「美味しい……………」

そう言葉を発する頃には、どこか緊張していた節のあった彼女の纏う雰囲気も、ぎくしゃくとした硬いものがとれ、落ち着いた、おそらくはいつもの彼女のものであるうそれを取り戻していた。

そんな彼女の横から、ヴィヴィオも1つ茶菓子をつまむ。

「美味しい……………！　　パパのお菓子ってやっぱり最高っ♪」

「ヴィヴィオさん、いつもこんなに美味しいお菓子を食べてるんですね。何だか羨ましいです……………」

「ふふ。まだまだあるから、アインハルトも遠慮しなくていいよ」

「あ……………え、えっと……………そう、ですね……………」

と、今になって自分がどんな何を言っていたかを思い出したのか、はっとして、赤くなった頬を押さえて恥じらい始めるアインハルト。

食い意地の張った女に思われなかっただろうか。

無論リオスがそんなことを考えるはずもないが、そんな思い込みからくる羞恥にもたついている自分の横から、気兼ねなくまた1つ茶菓子を持っていくヴィヴィオが、アインハルトにはとても羨ましく思えたのだった。

「さて、食べたらもう1度訓練の仕切り直しだ。どうする、アイン

ハルト？　まずは僕とやってみる？　それとも、やっぱり同年代だしヴィヴィオとやってみたいかな？」

「そうですね……………」

リオスの言葉に、アインハルトはふと考えた。

リオスと組み手をするのは大いにアリだ。元々そのつもりで誘いを受けたのだし、強者との手合わせはいろいろと学ぶことも多い。

一方で、ヴィヴィオとの組み手も彼女にとっては意義のあるものとなろう。

彼女もストライクアーツを扱うと聞かし、もしストリートファイトの相手を探すとするなら、例外なく彼女もそのターゲットに入っていただろう。

無論、リオスに止められて以降はそんなこともしてはいないし、もう彼女自身する気にもなれなかったが。

以上のことを踏まえると、どちらを相手にしたとしても、アインハルトにとっては益になる。

どうしたものか。そう考えていると————。

「……………天使っ」

「ん、エミリア？　どうかしたの？」

くいくい、と袖を引く感触にリオスがそちらを向くと、円な瞳でじっと見上げるエミリアの姿があった。

何事か言いたげな視線に、リオスもそちらへ向き直る。

「どうしたの？」

「……………私が、やる」

「エミリアが？……………アインハルトと？」

「……………ん」

こくん、と無表情にエミリアは頷いた。

しかし、無表情ながらも、どこか強い思いの宿った視線に、リオスはふむ、と考え込んだ。

エミリアは、魔法に関しては超常的能力の持ち主だ。魔法の威力だけならリオスにも匹敵するし、単純な魔力量ならその彼をも凌駕する。

しかし、これは魔法戦ではなく、純粋な身体と身体のおつかり合い、格闘技だ。

正直彼女がアインハルトに勝てるとは思えないが、エミリアの思いもおそらく本物だろう。微弱ながら意思を感じさせるその目が、それを物語っていた。

どうしたものか、そう言外に問う意味を込めて、リオスはアインハルトを見た。

すると、彼女もまたこくり、と頷く。

それを見て、リオスも「仕方ないな」といった様子で苦笑しつつ、溜め息をついた。

「解った。じゃあ、アインハルトとエミリアで模擬戦。それでいい?」

「はい、構いません」

「……………ありがとう」

「……………そういうわけだからヴィヴィオ、悪いけど見学ってことでいいかな?」

「うん、いいよ。私もアインハルトさんの試合、見てみたいもん!」

ヴィヴィオが快くそう頷いたところで、4人は席を立った。

以前リオスが会った、大人モード（アインハルトは武装形態と呼んでいるようだ）に変身したアインハルトと、未だ何も展開していないエミリアが向き合う。

そして。

「……………起きて、ファウエル」

『All right, stand by ready.』

胸元に下げたペンダントの紅いコアが光り、エミリアの体躯へバリアジャケットを構築する。

どこかドレスのような作りのそれはワインレッドと黒の2色をメインカラーとしていて、L・P事件の際彼女が使用していたデバイス、ヴィシアスのものとよく似ていた。

バリアジャケットの構築が終わり、次いで彼女の手に収まったのは、1振りの細身の剣。

刀身は血を吸っているかのように紅く、禍々しいながら妖艶な雰囲気醸し出していた。

「ファウエル。ナックルモード」

『All right, my master.』

更に、エミリアの命と共にデバイス、ファウエルは形を変えていく。

右手を囲うようにして現れたのは、剣の時と全く同じ配色の手甲。

格闘戦に対応出来るよう、リオスがグロリアスに搭載したシステムを、そのままファウエルに転用したものだ。

油断なく構えるアインハルトに、エミリアもファイティングポーズをとり————そして、唐突に呟いた。

「……………天使は、私のだから」

「ふえっ!?!」

予想外の不意打ちに、アインハルトは一瞬にして耳まで真っ赤にして問い返す。

どうやら観客席にまでは聞こえなかったようで、リオスは変わらぬ微笑みを浮かべたまま、ウサギのぬいぐるみを外装としたクリスを抱くヴィヴィオと共に、こちらを見ていた。

否————それともリオスのことだから、子供の言うことだと別段気にしていないだけか。

「…………行く」

『Gear explosion.』

「はっ……………！」

呆然としている間に、一気に眼前まで肉薄してきたエミリアの拳を、アインハルトは寸前で受け止める。

（お、重い……………！）

武装形態となったアインハルトとの体格差を考えれば、臂力の面でエミリアが圧倒的不利のはずだった。

しかし、いざこうして拳を交えてみれば、その先入観は全くの見当違いであったと気付く。

想像以上の一撃の重さに苦しげな表情を浮かべるアインハルト。その一方でエミリアは、変わらぬ無表情で、唸りを上げて回るギアの速度を上げたファウエルを、強引に押し込んでくる。

アインハルト VS エミリア。

覇王と悪魔、勝利の女神は、どちらに微笑みかけるのだろうか。
その答を未だ知らぬ2つの拳は、虚空にて再び火花を散らした。

Episode 11 覇王／前編（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい、そんなわけで、アインハルト VS エミリアでしたー」

アインハルト「あの……どうして、私がさもリオスさんにフラグが立ったような描写がなされているのでしょうか？」

神崎「……………え？」

アインハルト「いや、そんな『違うの！？』という顔をされましても……………」

神崎「冗談です。まあ、フラグが立ってるのは本当だからね。恋愛じゃなくて、憧れみたいなものだけど。小さい頃、若い担任の先生好きになる子とかいるでしょ。そういう類」

アインハルト「……………まあ、そうですね。リオスさんにはなのはおさんがいますし」

神崎「……………何だか残念そうだね？」

アインハルト「ふえっ！？　そ、そんなこと、な、ななないでございますですよ！？」

神崎「落ち着け（苦笑）　さあ、そんなわけで次回はアインハルト VS エミリアの戦いの模様をお送りします。そしてその後、ち

よこつと＋αをば」

アインハルト「……………その＋αに、そこはかたなく不安を煽られるのですが」

神崎「気のせいです。……………たぶん」

アインハルト「どっちなんですか!?!」

神崎「それは次回! 『霸王／後編』へ!」

アインハルト「無限の力、その身に宿せ!……………うう、次回が不安です……………」

Episode 11 霸王／後編

アインハルトとエミリアの試合は、拮抗した状態が続いていた。

体格差と臂力で勝るアインハルトに、エミリアは小柄な身体を活かし、のらりくらりと攻撃をかわす。

「……………そこっ」

「くっ……………」

そして、無表情に放たれる拳が始点を見極める目を見誤らせ、タイミングを掴みきれなかったアインハルトは両腕を交差させてガードした。

痺れるような鋭い痛みがアインハルトを襲うが……………しかし、彼女もまた負けていない。

足でしっかりと大地を踏み締め、臂力を上げてエミリアを弾き返す。

小柄な身体が宙を舞う。

アインハルトは踏み締めた姿勢のまま思い切り大地を蹴り、エミリアへ肉迫すると、空中で回避不可能のエミリアへ向けて拳を放った。

魔力を使えば、飛行魔法という手段がある。しかしながらこれは格

闘戦であり、あからさまに魔力を使う飛行魔法は使用出来ない。

結局、エミリアはアインハルトの拳を、甘んじて受けるしか手は残されていないのだ。

「霸王……断空拳！」

「くうっ………！？」

練り上げた力が、拳に到達して一気に爆発する。

アインハルトがやったように、受け身の取れない空中で必死に交差させた華奢な両腕へ、アインハルトの必殺の一撃が突き刺さる！

「あああっ！？」

ガードには成功したものの、踏ん張りのきかない空中で技を受けたエミリアは、大きく吹き飛ばされた。

しかし苦渋の表情を浮かべていたのもつかの間、空中で綺麗に体勢を整えたエミリアは、周囲に影響を及ぼさぬようにリオスが張った特殊なシールドに両足をつけ、蹴りつけて一気に反転し、アインハルトへ突撃する。

「なっ！？………くっ、烈波衝っ！」

「……………っ！？」

虚を突かれたアインハルトは、しかしあくまでも冷静にエミリアを迎撃すべく、技を放つ。

霸王流、烈波衝。

格闘技には珍しく、中距離を主眼に置いた技だ。

魔力弾と比べても大きいが、単発で飛んでいく衝撃波の弾を発射する技である。

エミリアもまさかその位置から攻撃してくるとは予想していなかったのか、なんとか身を捻って躲し、アインハルトより少し手前の位置に着地すると、崩れかけた体勢を大急ぎで整え、拳に意識を集中した。

「……………フィストバレット」

『Fire.』

突き出された拳から放たれたのは、エミリアの小さな拳を模した、魔力弾にも似た弾丸。

魔法攻撃にも見えるが、実際には魔力は衝撃波に形を持たせるために使用しているに過ぎず、魔法攻撃のカテゴリーには当て嵌まらない。

不意打ちで放たれた拳の弾丸は、技を放ったばかりで対応の難しい状態のアインハルトへ容赦なく襲い掛かった。

「こんな……………ものっ！」

横っ跳びに回避したアインハルト。だが、跳んだ先にも連続でフィストバレットが飛来し、やむを得ずアインハルトは拳での迎撃にかかった。

「せ、旋衝破っ！」

手の平で敵の中距離技を受け、そのまま相手に反射する高等技術。
それを観客席で一瞬にして見抜いたリオスも舌を巻く。おそらく習得するまで、かなりの修練を積んだのだろう。

だが――――。

「……………っ!？」

直後、受け止めたかに見えたフィストバレットが、アインハルトの身体を弾き飛ばし、姿勢を大きく崩した。

小さな拳と油断していた。

しかし、内包していた力の大きさはそう小さなものではなかった。

事実アインハルトは今、その拳の威力に圧倒されたのだ。

「……………今っ！」

静かながら力強く言葉を発したエミリアは、体勢の崩れたアインハルトを見、好機を逃さんとばかりに強く大地を蹴った。

一気に眼前に踊り出る、小柄な身体。

唸りを上げるナックルが振り下ろされるのを、アインハルトはただ見ているしか出来ない。

が、まだ彼女は諦めなかった。

「くっ、まだまだっ！」

半ば意地になったアインハルトは、せめて一撃叩き込んでやろうと、まともに踏ん張りのきかない体勢から拳を振るう。

無論、力を練り上げて放つ霸王断空拳の威力の足元にも及ばない、苦し紛れの一撃。

しかし幸運にも、彼女の拳はエミリアの胴を真芯に捉え、決して小さくないダメージを叩き込んでいた。

そして少し遅れて、エミリアの拳がアインハルトの胴に減り込む。

そのタイミングは、リーチの差でエミリアの側が若干遅かったものの、ほぼ同時。

大きなダメージを負った2人は、纏れ合うようにして倒れ込んだ。

「あうっ……………」

「くあっ……………」

呻き声を上げながら、重なり合うようにして倒れ込む。

予想以上に、腹に受けたダメージは大きいらしい。なかなか立ち上がることが出来ず、ただもがくようになるだけだ。

エミリアはアインハルトの胸に顔を埋めたまま起き上がることが出来ず、アインハルトはアインハルトで、エミリアを退かすことも出来ない。

そんな光景が続いて1分が経過するかしらないかという時、見るに見兼ねたりオスが2人の救出へ向かった。

「やれやれ。大丈夫、エミリア？」

「ぶう………勝てなかった」

アインハルトの身体から引きはがすと頬を膨らませてそう唇を尖らせるエミリアに苦笑し、リオスは続いてアインハルトへ向き直る。

「アインハルトも。怪我はない？」

「は、はい、大丈夫です。エミリアさんが、まさかここまで強かったなんて………！」

事実、エミリアは強いはずだった。

3年前、ミッドチルダを襲った未曾有の次元犯罪事件、L・P（Lost Paradise）事件。

広域次元犯罪者にしてアルハザードの知識を持つと言われる科学者スカリエツティと手を組んだ首謀者のルシアスⅡコーネルドは、天使エンジェルス・キーの鍵と悪魔の鍵を用いて、失われた都と称された幻の古代超文明世界、アルハザードへと渡ろうとした。天使の鍵エンジェルス・キー、悪魔の鍵サタンズ・キーとは、アルハザードをその負の遺産もろとも封印するべく、人をベースに造られた番いのロストロギア。

リオスはその内の天使の鍵であり、エミリアは悪魔の鍵サタンズ・キーであった。リオスは機動六課の、世界のために命を賭けて戦う責を負い、エミリアもまたルシアスの、そして彼の部下であったシャドーという男の思惑に翻弄され———両者は戦い、傷ついた。

しかしリオスは生きていて、エミリアも元の心を取り戻し帰ってきた。

それがL・P事件の大まかな顛末。結果的には開いてしまったアルハザードへ繋がる次元の扉、神門（フレンズ・ゲート）を閉じる際に天に開いた神秘の翼の輝きから、人々は彼を氷翼の天使と呼んだ。

故に、エミリアはロストログアだ。だからこそ、常人には到達し得ない高みへと足を踏み入れることも出来るのだ。

油断していたわけではない。相手に無礼のなきよう努めるアインハルトの対応は、間違いなく全力だった。

だが、結果はほぼ引き分け。相手がエミリアであることを考えれば、納得のいくというものだ。むしろ格闘戦のみという条件付きとはいえ、こうして引き分けという形に持ち込むことの出来たということが、アインハルトの人としての実力の高さを証明していると言えた。

「えっ へん」

称賛するアインハルトに、腰に手を当て、胸を張って威張るエミリアは、先程まで自分と激しく互角の戦いを繰り広げていた少女とは思えないほど可憐で、可愛らしい少女そのものだった。

「さてと。じゃあ次は、ヴィヴィオとの試合いってみようか。それとも、ちよつと休憩入れる？」

「いえ、私なら大丈夫です。やりましょう、ヴィヴィオさん」

「は、はい！ 行くよ、クリス！」

ヴィヴィオの呼びかけに、ウサギのぬいぐるみの外装のクリスが
頷き、瞬く間にヴィヴィオを大人モードに変身させる。

駆けていく彼女と入れ替わるようにして、引いてある線の外へ出た
リオスは、抱えていたエミリアをそっと地に降ろし、その傍に座っ
た。

「惜しかった…ね？」

向き合うヴィヴィオとアインハルトへの視線を外さぬまま、リオス
はエミリアへそう問い掛ける。

リオスとしては、アインハルトに勝てなかったが故にふて腐れてい
るものばかり思っていたのだが――。

「天使は……私のだもん」

「え？」

本当は、違った。

なのはやヴィヴィオは家族だ。だから仕方ないと、ある程度は妥協
している。

しかし、アインハルトは違う。いつの間にやら仲良くなっていた彼
女に――――早い話が、妬いていたのだ。

それは、感情に乏しかったエミリアにとってみれば大きな前進であ
り、子供らしく微笑ましいヤキモチだった。

「…………抱っこ」

「ふふ…………はいはい」

言いながら両手を差し出してくる彼女の姿に苦笑しつつ、リオスはエミリアの華奢な身体を抱え上げ、膝上に乗せた。

ヴィヴィオよりは大きいとはいえ、小さなエミリアの身体は軽く、ちょこん、とりオスを椅子にして座る様子は、仲睦まじい親子そのものだった。

その後、数回のスパーリングを経て、リオスとアインハルト達はヴァルハラの中へと戻ってきていた。

先程のささやかなティータイムは、残り物の有り合わせでしかない。リオスとしては、やはり出来たてを味わってほしいと願っていたのだ。

現在リオスはキッチンにおり、ヴィヴィオやアインハルト達子供組は、リビングで仲良く談笑中である。

「では、ヴィヴィオさんはリオスさんからストライクアーツを………?」

「はい。あ、でも正確に言えばストライクアーツそのものというより、格闘技全体としての基本と応用、って感じですけど」

3年前に目覚めたばかりのリオスは、スバルやヴィヴィオの使うストライクアーツを習得していない。

故にそんな彼がヴィヴィオに授けるのは古代ベルカ———彼が造られた時代に生きた先人達の、高度な武術だ。

古い技術と侮るなかれ。洗練された武術は、現代のそれに決して劣ることのない鋭さを誇っている。

「アインハルトさんの………カイザーアーツ覇王流、でしたっけ。パパから聞きました」

「はい」

アインハルトのカイザーアーツ覇王流、その動きもまたリオスによって一定のアレンジが加えられつつあった。

カイザーアーツ覇王流の力を証明する、アインハルトの願いをリオスはよく理解し

ているから、カイザーアーツ覇王流のコンセプトを極力崩さないように配慮した上で、改善プランを提案していた。

元の技を残した上での、更なる技術向上。

それが、今後実戦を通して到達すべき当面の目標だ。

そして、その上————。

「でも、本当に宜しかったのでしょうか……喫茶店でお忙しいのに、私のデバイスまで……」

「大丈夫だと思います。パパってデバイス好きですから……一晩中見ていても飽きないくらいに」

一晩中、夢中になって機械を弄るリオスの姿が何だか容易に想像出来る気がして、アインハルトはくすりと笑った。

そんな彼女に釣られてニコリと笑うヴィヴィオのクリスや、無表情に茶を啜っているエミリアのファウエルファウエルの製作過程においてもリオスの夜なべの存在があるのだが、そんなことを彼女が知る由もなかった。

「さあ、出来たよ。どんどん食べてくれていいからね♪」

と、そんなことを話している間にお茶請けが完成したらしく、トレイに皿を乗せたりオスがキッチンから姿を現した。

皿の上ではこんがりと焼かれたケーキが、綺麗な円形を描いている。

「はい、うち特製のパウンドケーキ」

「わぁ……………」

「こんなに大きいもの、初めて見ました……………！」

見るからに大きなケーキの登場にヴィヴィオは目を輝かせ、アインハルトは、店の紹介に載っていた写真とのサイズ差に驚嘆の声を上げた。

それもそのはず、このパウンドケーキは、女の子3人が揃うであろう今日を想定して用意しておいた、特別製なのである。

テーブルの真ん中に置かれたケーキをリオスがナイフで丁寧に切り分け、真のティータイムが始まった。

「すっかり遅くなっちゃったね」

「はい」

数時間後。楽しいティータイムを終えたりオスとアインハルトは、夜道を歩いていた。

楽しい時間とは早く過ぎるもので、気付いた時には空は夕焼け。結局、完全にお開きになった頃には日は傾いてしまっていた。

「すみません。遅くまでお世話になった上に、お見送りまでしていただいて……………」

「はは、気にしないでいいよ。君みたいな子を夜分に1人で帰らせたなんて知られたら、名折れだしね」

実際、既に辺りを覆う夜の闇は濃くなってきていて、アインハルトのような歳頃の少女が出歩くのに、心許ない時間であるのは間違いない。

—————まあ、あんな時分にストリートファイトを挑むような彼女であるから心配はないのかもしれないが。

「ねえ、アインハルト。ちょっときいてもいいかな？」

「何でしょう？」

「霸王って……………もしかして、古代ベルカの霸王、イングヴァルトのこと？」

「……………！」

リオスの問いに微かに息を吞むと、アインハルトは立ち止まった。それに倣うようにして同様に立ち止まるリオスの方を向かぬまま、アインハルトは押し黙る。

言葉を発することはなかったが、それは無言の肯定と受け取っても問題のない反応。

「やっぱりね。覇王断空拳を見た時から、もしかしてという気はしてたんだ」

「どうして……解ったんですか？」

話を切り出してから初めて、アインハルトはリオスを見上げた。

不安に驚き、様々な感情が混ざった表情をした彼女を安心させるように優しく微笑みかけると、リオスは唐突に言った。

「……………アインハルト。ちょっと武装形態になってみようか」

「……………え？」

何故？ どうしてこんなところで？

脳裏に疑問符が浮かぶアインハルトの前で、リオスは「いいからいいから」と言って微笑むだけ。

仕方なく、アインハルトは武装形態になった。

それを確認すると、リオスは唐突に拳を構えた。

アインハルトも反射的に構え————不意に、リオスは拳を振るった。

流れるような動作で練り上げられた力が、拳に到達すると同時に爆発する！

「ぐっ、あぁっ！」

ヒットした拳は、アインハルトの防御ごと彼女の身体を弾き飛ばす。衝撃に呻きながらなんとか体勢を整え、受け身をとるアインハルトの表情に浮かぶ苦渋は、ダメージによる痛みではなく————驚愕。

「今の……………まさか……………!？」

「そ。霸王断空拳」

もういいよ、と言って武装形態を解除させると、リオスは再びアインハルトへ向き直った。

「どういう、ことですか……………!？ どうして、リオスさんが霸王流を……………!？」
カイ

霸王流は、唯一自分だけが扱うことを許された武術。そう思っていた。

だがそれは間違いだ。

彼女すら知る由のない、たった1つ、彼女以外にカイザーアーツ覇王流を受け継がせるものがあつた。

それが――――。

「僕……ロストログアなんだよね」

「え………ええっ!？」

突然のカミングアウトに、アインハルトは呆然としたのも一瞬のこと、すぐさま驚きの声と共に目を見開いた。

「で、でも、どこからどう見ても………」

「人間、かい？」

リオスの問いに無言で頷くアインハルトに、リオスは当然だよ、と言つて空を見上げた。

「僕はね、古代ベルカの時代に、人をベースに造られたロストログア。世界を滅ぼす存在を、ある世界ごと封じるために」

様々な感情が入り混じった目。アインハルトから見た、リオスの目の印象はまさしくそんなところだった。

その先にある夜空には都会のネオンの光より星は疎らにしか見ることが出来ず、まるで何を思っているのか計り知れない彼の心を投影しているようだった。

「…………僕の身体には、その世界を封じる鍵がある。その鍵を守るため、古の時代には様々な達人の技が、僕の身体にプログラムされていった。……………勿論、覇王流も例外じゃなかった」

「そんな……………！」

エンジェル・キ 天使の鍵を守るために、エンジェル・キ 天使の鍵自身にプログラムされた、様々な達人の技術。

その中には、かつて覇王と呼ばれた人間のそれもあった。

故にリオスは、カイザーアーツ 覇王流の技を扱える。

しかもその技の鋭さは、アインハルトの放つそれを大きく上回っている。当然だ。リオスの使うのは、全盛期と言ってもいい時代の、洗練されたものなのだから。

そして、たとえまだ年端がいかに少女であるとはいえ、その理屈が理解出来ぬアインハルトではない。

今、目の前にいるのは覇王。

自らがその力を証明しようとしている、覇王の技を持った存在だ。

もし今、彼にカイザーアーツ 覇王流同士での勝負を挑んだとしても、おそらく自分は敗北するだろう。少なくとも、戦力の差は圧倒的だ。

アルハザードの覇王は、今ここに蘇った。

なら、今自分がその力を証明しようなどと、おこがましい行いではなかろうか。

聡いアインハルトは、僅かな間にリオスの言わんとすることに気付いてしまった。

「……………僕は、覇王イングヴァルトの技と力を持っている。だから、

君が僕に任せてくれるのであれば、僕が代わりにカイザーアーツ霸王流の強さを証明してあげることできる」

「っ!？」

リオスの言葉に、アインハルトは思わずリオスを睨みつけるが、自分を見つめる彼の瞳に俯く。

霸王が、霸王の力を証明する。

自分のような仮初のものではない。正しく本物が、自身の強さを証明する。

それなら、その方がいいじゃないか。

そんな考えが、アインハルトの脳裏を過ぎって、アインハルトはそれを必死に振り払おうと頭を振り——そして、凜とした表情で顔を上げた。

「…………申し訳ありませんが、お断りさせていただきます」

「へえ。どうして？」

「私は、私の力で望みを果たさねば意味がないんです。そうしないと、イングヴァルトも…………いいえ、私自身がそうしたいから!」

決意をもって自らの心の内を明かしたアインハルトとリオスは睨み合う。

そして、どれほどその状態が続いただろうか。

ややあって、不意に表情を崩したリオスはくすくすと笑った。

「……………り、リオスさん？」

「ふふ……………いや、ごめんごめん。嬉しいよ、その言葉を聞けて」

突然笑い出したリオスにアインハルトが呆然としていると、リオスは嬉しそうに微笑んで言う。

その言葉に、アインハルトは漸くリオスに意図に気づき、じとつとした視線で彼を睨んだ。

「……………試したんですね？」

「あはは、だからごめんってば。でも……………よかった。ちゃんと、自分でやり遂げる意思を持っていることが解って。そういうことなら……………僕の知る覇王流、君に教えてあげてもいいよ」

「ほ、本当ですか？」

「うん。そのためにも、今まで以上に頑張らないとね」

リオスはそう言って、右手を差し出した。

その手の平とリオスの顔を、最初は目をぱちくりさせて見比べていたアインハルトだったが、ややあって、微笑みながらその手を取った。

「これから、宜しくお願いします！」

「こちらこそ。頑張ろうね」

月下、リオスと握手を交わすアインハルトは、満天の笑顔で頷いた。

「さてと……………」

アインハルトを見送り、1人路地に佇むリオスは、小さな溜め息と共にそう呟きを漏らすと、不意にグロリアスを手に取った。

「…………セットアップ」

『All right.』

一瞬にしてバリアジャケットが構築され、1対の双剣が両手に収まる。

そして————振り向き様に、その銀に輝く刀身を背後へ向けて振るった。

「はぁっ！」

流れるような剣閃は、リオスへ背後から襲いかかろうとしていた異形の体軀を捉え、切り裂く。

うなる液状の銀の身体は、グロリアスに真つ二つに切り裂かれると、結晶体となり辺りに飛び散った。

降り注ぐ銀の欠片の雨の中、リオスは眼前の異形をその双眸に捉えた。

残るは後2————否、3体。

「フリーズシューター！」

『Shooting ready.』

空色の魔力球がびったり3つ、リオスの頭上に形成される。

全てを凍てつかせ、塵と化すリオスの力。その一端を秘めた魔力球が、魔力弾となって銀の液状金属体————アルブへ向けて解き放たれる。

『Fire.』

弾かれるように猛スピードで飛んでいく魔力弾に、3体のアルブは成す術なく貫かれ、1体目と同様に爆散し、粉々に吹き飛んだ。

目の前のアルブの掃討は完了した。

しかし、それでもリオスは構えを解くことはない。

彼には解っているのだ。まだこれで————全てではないことが。

「…………上っ！」

上から、リオスを丸々覆い隠せる程の大きさのアルブが、その巨体を活かしリオスを丸々飲み込もうとする。

「カートリッジ！」

『Explosion.』

今では近代ベルカ式として、エース級の魔導師のデバイスには標準的に装備されるようになった、カートリッジシステム。

魔力カートリッジに注入された魔力により、単発の威力を爆発的に向上させる機構である。

それはリオスのグロリアスにも例外なく搭載されていて————柄の部分から葉莖が排出され、刀身に空色の魔力が宿った。

「氷牙……一閃っ！」

アルブは、物質を吸収することは出来るが、単純なエネルギーである魔力の類は吸収することは出来ない。

故に、刃を魔力でコーティングする形となる氷牙一閃は、アルブに

触れたとしてもグロリアス本体を一切傷つけることなく、アルブの体躯のみを真つ二つに両断することが出来る。

頭上への切り上げにアルブは当然対応することが出来ず、成す術なく切り裂かれ、まるでリオスを避けるように彼の周囲に落下し――結晶化して、動かなくなった。

「…………ふう、吃驚した」

『Nice fight.』

「ありがとう」

グロリアスの賛辞に礼を述べ、リオスは動かなくなったアルブの残骸の傍に跪き、観察した。

「これが、この前なのはが言ってた、アルブ……………」

アルブのことは、毎日1回は交わしている、六課のなのはとの通信の際に彼女から聞いて知っていた。

だからこそ、外見的特徴や物質を溶解し吸収し、吸収した相手に擬態するという特性、魔力攻撃が有効なことなど、を前もってしっていたからこそ、初見にも関わらず一切の問題なく対処することが出来たのだが……………。

（何だろう、この感じ……………）

アルブに間近に接してみて、先程から感じている言いようなない感覚。

まるで、自分の中の何かと共鳴しているような――――妙な親近感と、懐かしさのようなものを感じる。

その正体は何なのか。それはまだ到底推測し得ない。

が――――リオスには、何かとてつもなく恐ろしいことの前兆に思えてならなかった。

「……………調べてみる必要、あるかもね」

『I h e l p y o u . (お手伝いします)』

「宜しく」

立ち上がり、もう1度ただの結晶体と成り果てたアルブの残骸を見つめながら、リオスは踵を返す。

後に残されたアルブの欠片が、風に吹かれてカタカタと不穏な音を立てながら揺れた。

Episode 11 覇王／後編（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい。そんなわけでリオスルート第2話、ここに完結です」

ヴィヴィオ「今回は私がお相手を務めます！」

神崎「アインハルト VS エミリア。アインハルトの覚悟と決意。そしてアルブとの初接触。今回、本編とのコネクションに際して必要な伏線は粗方貼り終えた感じかな」

ヴィヴィオ「勘のいい方なら、気づいてしまうかもしれませんけどねw」

神崎「むう、言うねえ（汗） まあ、事実であるのが心苦しいのですが……」

ヴィヴィオ「で、作者さん。アインハルトさんのフラグ、これって立ってるんですか？」

神崎「気になるかね？」

ヴィヴィオ「まあ、それは娘としては……」

神崎「この前も書いたけど、憧れみたいなものかな。あ、エミリアも違いますよ？ 彼女はどっちかっていうと甘える対象みたいな捉え方なので」

ヴィヴィオ「つまりロリコンじゃないってことです！ わかりましたか、感想板でパパをロリコン扱いしていた作者さん達っ！（ずびしいっ）」

神崎「ああ、気にしてたのそっちだったのね（汗）……さて、そんなわけで次回は再び舞台を機動六課に戻して、描いていきます！」

ヴィヴィオ「オリキャラのエピソードでしたね。今回は誰なんですか？」

神崎「それはまあ……タイトルで想像していただきますようw そして次回……1人だけ、準レギュラー採用のオリキャラが登場するかもです」

ヴィヴィオ「だ、誰ですか!？」

神崎「それも次回のお楽しみ！ さて、そんなわけで次回、リリカルAngels!『貴方の心、私の正義』」

ヴィヴィオ「無限の力、その身に宿せ！」

神崎「……次回は少し、シリアスから離れた話になるかもですね（ぼそっ）」

ヴィヴィオ「ええ!？」

Episode Extra 1 小さな妖精（前書き）

今回の話は本編を一旦離れ、リリカルAngels人気投票で見事一位を獲得した、ソフィアⅡジュリーストンの特別番外編となります。

尚、神崎なりに自重しない内容になっていますので、読む際にはお覚悟を。特にはやてファンの皆様、はやコンの皆様には大変申し訳ないオチになっております、すみません（え）

それでは、どうぞお楽しみください。

Episode Extra 1 小さな妖精

それは、とある日の機動六課。

いつものようにアルブ掃討の任務を終えたエルトは、帰還して早々にシャマルによって呼び出された。

さして用事もなかったエルトは、はやてへの報告を済ませたその足で医務室へ向かった。

「どこも異常はないぞ？」と冗談めかしく言ったエルトへ、シャマルはにっこりと笑いながら、こう告げた。

「暫く、この子の面倒を見ていただけませんか？」

「…………ソフィアの、妹か何かか？」

シャマルに押され、おずおずとエルトの前に出る少女の容貌は、彼もよく知る少女にあまりに酷似していたから、そう彼が疑うのも無理はなかった。

だが、事態は彼の予想を大きく超える。

「あ、あの…………エルト」

「うん？　　どうして僕の名を知っている？」

少女の前では、まだ名乗ってはいないはずだが。シャルから聞いている可能性も考えられるが、それにしても、初対面の相手をいきなり呼び捨てで呼ぶ程、生意気にも見えない。

となれば、少女は一体何者だろうか――――。

そんなことを考えていたエルトへ、答は唐突に、少女の方から放たれた。

「エルト……………わたし、ソフィアほんになんだよね……………」

「……………は？」

困ったように舌をペロツと出して舌足らずに言う少女――――否、ソフィアの言葉に、固まってしまったエルトを笑える者は、この場に誰もいなかった。

○Episode Extra 1 小さな妖精

「全く………」

ルンルンとご満悦なソフィアとは対照的に、彼女と手を繋いで歩くエルトは深く溜め息をついた。

ソフィアがこんな状態になった理由は、発起人であるシャマルの口から語られた。

以前にもここ、機動六課に存在した謎の液体。

リオスⅡコーネルドを幼児化した、ある意味で奇跡、だが実際には怪しさ満点のその薬品は、とっくの昔に処分されたものだど、誰もが思っていた。そう、他ならぬ医務室の住人である、シャマルその人ですらも。

しかし何の因果かその薬品は処分されることなくしつかりと保管されていたらしく、またしても消毒薬の棚に紛れていたそれを、訓練で擦りむいた傷口を消毒しようとしたソフィアが誤って塗布。結果、今に至る————らしい。

シャマルですらその存在を知らなかったのだから、彼女のせいでも塗ってしまったソフィア本人のせいでもない。しかし縮んでしまった身体の不便は、リオスの時に十分な教訓があった。

その内の1つが、効果が切れるまでの世話係。成長した身体からいきなり縮んだとあっては、それまで日常的に当たり前のように出ていたことすらままならないことも多い。

そこで誰かに世話係を頼もうと、ソフィアとシャルの2人で考えた末、白羽の矢が立ったのがエルトだった。

本来なら性別の同じで———且つ、世話好きなフェイトに頼むのがベストなのだろうが、生憎彼女は本局に出張中で、ここにはいなかった。

そして何より———。

「えへへー♪」

ソフィア本人もそれを希望していたとあっては、エルトに断る理由も見当たらない。

今もまたとても嬉しそうに手を繋いで廊下を闊歩する姿は、仲睦まじい親子にも見えた。

今はエルトの部屋に向かっている真っ最中。面倒なことが起こらぬ前に、さっさと部屋へ押し込んでしまおうという無責任な魂胆が見え隠れしていたが、そんなことを知る由もないソフィアはただ嬉しそうに廊下を歩く。

———と。そんな時だった。

「あ、エルトだ。おはよー！」

「スバルか。おはよう」

廊下の向こう側から濃い青のボーイッシュな髪を揺らし、書類を抱えながら登場したスバルにエルトは挨拶を返す。

すると早速、スバルがエルトの隣にいるソフィアに気がついた。

正確にはソフィアではなく————あくまで彼女に似た少女、という認識だが。

「あれ？ その子誰？」

「ああ、これはだな……うむ、何と説明すればいいのやら……」

スバルに問われ、何と説明すべきか迷うエルト。

その間にソフィアが一步前に出て、右手を大きく振り上げて元気よくこう言った。

「スバルさん、わたしです！ ソフィアですっ♪」

「へえー、そうなんだあ、ソフィアかあ………って、ええええええええっ！？」

しゃがみこんで、彼女に笑顔でそう答えかけたスバルは、エルトの予想通り驚愕に絶叫する。

ぱくぱくと口を動かすだけで何も言えない彼女に、エルトは「ああ、やってしまった」というような疲れた表情を浮かべながら、なんと

か解ってもらおうと説明を始めようと口を開いた。

「ああ、スバル。これにはちょっとした訳があつてだな……………」

「し、知らなかった……………2人はもう、既にそんな関係に……………」

「は？ す、スバル。一体何を……………」

どうやら彼女の中で至った見解は、よほど彼女にとってショックな
グなものだったらしい。

エルトの少し……………否、かなり困惑した問いにも応じることな
く、しかしそれによって漸く我に返ることの出来たスバルは、今度
はあろうことかもじもと恥じらいながら頬を染めて、エルトから
数歩距離を取る。

「あ、あの……………ソフィアはまだ16歳だけど、根はいい子だし……
…そ、その……………お、お子さん共々末永くお幸せに……………
……………」

「ちょ、ちょっと待てスバル！ 何だか解らんが、今君が何かとん
でもない誤解をしているであろうことだけは解るぞ！ おいこら、
戻ってこおおおおお……………い！」

エルトは叫ぶが、顔を真っ赤にしてとんでもない速度で去っていつ
たスバルは既にそこにはおらず、彼の叫びは虚しく廊下に反響する
だけ。

その中で。

「エルトとのあかちゃん……きゃーっ！　そんな、わたしにはまだはやいよう……♪」

頬を紅くしながらも、困るどころかきゃっきゃと嬉しそうにはしゃぐソフィアの声に、エルトは大きく溜め息をついた。

その後、スバルを探すことも特にしないまま、とりあえずエルトはソフィアを自室へ招き入れた。

生活感のないことが幸いしたか、散らかる心配のない部屋は少女であるソフィアを迎えても、全く問題のない程に綺麗に片付いている。

「何もない部屋で済まないな。その分退屈だろうが……まあ、シャルによれば、それも明日の朝までの辛抱だ。ここで我慢してくれ」

「あ、うん。それはもんだいないんだけど……………」

「けど、何だ？」

珍しく歯切れの悪いソフィアにエルトが問うと、ソフィアはおずおずと申し出る。

「あの……………さっきのスバルさん、とめなくていいのかなー……………つて」

「……………ああ」

確かにあの時の彼女は、とんでもない勘違いをしていたに違いない。

あのままにしておいて、あらぬことを吹聴されてはかなわない。

早急に手を打つ必要があるだろう。

「探しに行くべきだろうな……………。だが、それではその間君が手持ち無沙汰だろう」

「ううん、わたしもいく。もとはといえばわたしがげんいんだし……………」

そんなことを、少々目線をエルトから逸らしつつ、ソフィアはやや発の悪そうに言う。

どうやら、自分が何も言わなかったことで彼女の誤解を加速させたであろうことの自覚はあるらしい。

が、それだけ分かっていたら彼女を連れ出すことを拒否する理由もなく、エルトは「……そうか」とだけ返し、左手を差し出した。

その手を訳の解らぬ様子で見つめているソフィアに、エルトは口元に微笑みを浮かべながら言った。

「……………それでは、行こうか」

「うんっ♪」

まるで騎士にエスコートされる姫君のように、ソフィアはそつとその手を取った。

「スバル？」

さあ、見てないけど？」

「そうか……………」

早朝訓練が始まる前にと、2人はスバルとティアナの部屋を訪れていた。

彼女が戻ってくるとしたらここかと、ある程度の期待をもって訪問してみたものの、彼女から返ってきた答は上記のとおり。更に言えば、朝食を済ませる前に用事があるとかで部屋を出て以来、未だ帰ってきていないとのことだった。

「全く。あいつ、自分の食べる量忘れてるんじゃないでしょうね……………。このままじゃ、早朝訓練に間に合わないじゃない」

「おそらく遅刻……………だな」

「むしろかくじつだね」

そう口々に言うと、続いて揃って溜め息をつく3人。特にティアナの様子など、完全に人事のようだ。

置いていく気満々である。

「……………で、エルト？」

「何だ？」

「さっきから気になってたんだけど……………その子、誰？」

「いまさらですか!？」

最初からあまりにも自然体で話していたため、てっきりティアナは状況を察してくれていたのかと思っていたが、そうでもなかったらしい。

ティアナとしては行方不明の相棒を嘆いていて尋ねる余裕がなかっただけなのだが、2人してみれば最初に時点で訊ねられていてもおかしくない問いであり、その思いが、ソフィアが舌足らずにも思わず叫んだ言葉に表れていた。

結局その後、事態を説明しティアナの理解を要するまで暫しの時間をかけたのは言うまでもない。

「ね、ねえ。エルト……………」

「ああ。何だか……凄く見られているな」

ティアナの部屋を出てまたややあって、エルトとソフィアはスバルを探して隊舎の中を歩いていた。

しかし何故だか、自分達の姿を認めた際の局員達の目がかなり異質であることに気づいており、思わず2人は身を固めた。

「やっぱり、スバルさんがなにかふれまわったんじゃないや……」

「可能性は大いにあるが、とりあえずは我慢しろ。もどに戻ったら、如何ようにも誤解の解き方はあるだろうからな」

うん、と頷いてはみるものの、やはり視線が気になるのかキョロキョロと自らの視線をさ迷わせるソフィア。

そんな彼女の様子を見て、未だ奇異な視線を向けてくる局員達に嘆息するエルトの前に、見知った顔が近づいてきた。

「あ、エルト君」

「なのはか」

訓練に向かう前なのだろう。それに使うらしい何か機材を持って、なのはは柔らかな笑顔を浮かべてかけよってくる。

「これから訓練か？」

「うん。最近皆気合入ってるし、教えがいがあるよ♪」

にやはは、といつもどおり笑いながら言ってくるなのは、ソフィアの方を一瞥しながらも調子を崩すことなく、また彼女について訊ねるでもなく、普段通りの会話を交わしている。

『よかった、なのはさんは普通みたい』

『……………だといいがな』

その様子にソフィアは安堵の念話をエルトへ送るが、エルトはまだどこか安心していない様子。

普段と何も違和感のないことがかえって違和感のあるように感じたエルトの様子は、警戒し過ぎのようにも感じられる。

—————が。今回ばかりは、彼の勘は的中してしまったらしい。

「あ、エルト君。これ」

「？ 何だ、これは？」

思い出したようになのはが手渡したのは、機材を持っていたのとは逆の手に持っていた買い物袋。

その中に入っていたものを見て、まずエルトが—————少し遅れてどれどれとのぞき込んだソフィアが、怪訝な表情を浮かべる。

「玩具セットに菓子類……………なのは、誰か子供でも出来たのか？」

「もう、何言ってるの？ 今のエルト君には必要なものでしょ？」

「いや、全く訳が解らないんだが……」

呆れたような表情を浮かべるのはだが、エルトには全く見当のつかない品々に、エルトの頭には疑問符が浮かぶばかりだったが――
――ややあって漸く、どうして彼女がこんなものを自分に渡そうとしているのか、その理由に思い当たった。

「………なのは。もしやスバルから、僕に子供が出来たなどと聞いてはいまいな？」

「うん、そうだよ。よく解ったね」

この子がそうじゃないの？と、きょとんとして答えるのはに、エルトとソフィアは大きく溜め息をついた。

「まさかここまでしんしょくされてるなんて………！」

「まあ、予想の範囲内ではあったが………」

「え？ え？ 私、何かまずいことした？」

2人して纏う草臥れた空気に、何かしてはいけないことをしてしまったのかと焦るなのはに、2人は事情を説明した。

「そう、スバルの勘違いだったんだ……」

「ああ。すまないな。なんだか気まで遣わせてしまったようだ」

「ううん、気にしないで。それにしてもスバル、早とちり過ぎだね」

「はやくみつけないと、たいへんなことになりそうなきがしますう
……………」

納得したように頷くなのはに、さすがに事を理解したか、青い顔を
するソフィア。

彼女の言うように、一刻も早くスバルを見つけねばならなければ大
変なことになる予感がして、エルトは逸る気持ちを抑えてなのはへ
言った。

「手間をかけたな。訓練、頑張ってくれ」

「うん、ありがとう。あ、スバルが見つかったら、訓練場に連れて
きてね」

「了解した。ではな」

じゃあ、と手を振るなのはに見送られ、2人は再び手を繋いで歩き
出した。

「やれやれ、ここまで誤解が広がっているとは、恐れ入る………!」

数分後。なのはと別れたエルトとソフィアの二人は、未だスバルを探して廊下を歩いていた。

2人とも、度重なる誤解とそれを解くための説明ラッシュに辟易し、すっかり草臥れた様子で廊下を歩いていた。

思えばシグナムには危うく「不埒な!」と斬られそうになり、真っ赤になったヴィータには出会い頭にアイゼンで殴られそうになり、ザフィーラと、何故か一緒にいたハイドには微笑ましげな生暖かい視線を送られるなど、勘違いの洗礼をこれでもかと受けたのだから、仕方ないとも言えよう。

最も反応に困ったのは、エリオとキャロだ。
澄んだ瞳で純粹に祝ってくれるものだから、さすがにどう説明すればいいのか、非常に悩んだ2人であった。

「スバル………一体どこへ消えた………?」

「あんがい、ふりまくだけふりまいておいてくんれんじょうにもどつてたりして」

「やめろ、洒落にならん」

これほどまでに騒動を大きくしてくれたのだ。灯台もと暗しなオチだけは勘弁してほしいとエルトが脱力する中、前から歩いていく人影が1つ。

「お、エルトじゃねえか。どした、そんな草臥れた顔してよ」

「いろいろあってな……」

につ、と爽やかな笑顔を浮かべながら手など挙げてそう話しかけてくるのは、機動六課ヘリパイロットのヴァイスⅡグランセニック陸曹。

六課が再建されるにあたって狙撃係の銘も与えられたのだが、今のところ前時代の六課の時と仕事はあまり変わっていない。

「ああ、そうそう。聞いたぜ？」

『この切り口は……』

『またかんちがいしてるひと……ああもう、いやになっちゃうよう……』

ヴァイスの会話の切り口に、エルトとソフィアはまた子供がどうだのという、既に何回にも渡って耳にしてきた勘違いを聞かされるのだと悟り、念話の中で溜め息をつく。

ああ、また説明せねばならないと、脱力しかけた2人へ――――。

「ソフィアと婚約したんだって？ 式には俺も呼んでくれよ♪」

『『順調にランクアップしてる!!?』』

予想外の切り出し方に、エルトとソフィアは念話の中ながら思わず揃ってツツコミを入れた。

噂に尾ひれがついて、子供から結婚へとランクアップしたのだろうが、そんな事実もない（ソフィアにとっては今のところは）2人にとって、是が非にも修正したいところであった。

「あ、あのなヴァイス。誰から聞いたか知らんが、それは全くの誤報であってだな？」

「え？ そうなのか？ 八神部隊長が言うから、もしかして思ってたんだが」

「ぶ、ぶたいちよおー………」

エルトが言うと、ヴァイスは意外だとしても言わんばかりの感情を含んだ表情で答える。情報の元が？あの？はやてである事実、隣にいたソフィアはがっくりと肩を落としていた。

「……エルト。なんだか、しょあくのこんげんがわかったきがするんだけど」

「奇遇だな、ソフィア。僕も、ちょうど同じことを考えていたところだ」

はやて、このようなことにかけては何と信頼無き女だろうか。

がっくりと脱力したかと思えば今度は黒いオーラを立ち上らせる2

人に、ヴァイスは苦笑いしながら早々に立ち去った。

と、そんな時だった。

「あれ？　どうしたの、エルト？」

ヴァイスと入れ替わるようにして現れた人物の声に、エルトとソフ
ィアは揃って振り向いた。

「ふう、ここらで休憩しよか」

「はいですー」

一方そんなことになっているとは露とも知らない当のはやては、部
隊長室にていつもどおり仕事をしていた。

どうやらたった今一段落したらしく、傍で小さなモニターに目を配っていたリインフォース？へそう語りかける。

しかし、この時はやてには想像も出来なかっただろう。

次の瞬間、休憩などと口にしていられる状況ではなくなってしまうなどと。

ドガン、と大きな音と共に部隊長室のドアが蹴破られる。

あまりの衝撃と音に、はやてはそちらを見て————そして固まった。

「え、エルト君にフェイトちゃん……そ、そないな怖い顔して、ど、どうしたん？」

彼女の視線の先にいたのは、バリアジャケットを展開したエルトとフェイト、そして小さいままのソフィアの姿だった。

但し前半の2人は、悪鬼の如き怒りにその表情を染めての登場。彼らの側にいるはずのソフィアですら、あまりの迫力にカタカタと震えている。

午前中は早くから本局へ行っていて、先程帰ってきたばかりのフェイトだったが、エルトから事情を聞いて、悪乗りが過ぎると思ったのと、エルト自身の怒りも伝染してか、その迫力はエルトに勝るとも劣らない。

「どうした……か。はやて、それは君が一番解っているのではないのか？」

「な、何のことだか私にはさっぱり……………」

「とぼけなくていいんだよ、はやて？　悪乗りにしても度がすぎてるって…………わからないかなあ？」

言いながら、エルトとフェイトはデバイスを手にじりじりと寄り寄る。

「ほ、ほんまに悪かったて！　ただ、最近エルト君ソフィアと仲良かったから、つい出来心で……………！」

「出来心で済めば管理局はいらん！」

「はやて……………」

「「少し頭、冷やそうか？」」

身の凍るような台詞と共に、エルトはバレルを、フェイトはバルデイッシュを真っ直ぐはやてへ向ける。

「バレル。構わん、フルパワーでやれ」

『All right. (了解です)』

「バルデイッシュ。隊舎が壊れるのとか気にしないでいいよ。はやての給料から差っ引いておくから」

『Yes, sir.』

「ちょ、洒落にならんでっ!？」

もはや涙目になるはやての目の前で、2つのデバイスの切っ先に魔力球が集束していく。

そして。

「あーーーーーーーーッ!？」

次の瞬間、断末魔がよく晴れた青空に響き渡った。

ちなみにはやての隣にいたはずのリインフォース?は、そそくさと避難していて無事だったそう。

「この、裏切り者………がくっ」

「ふう……………全く、散々な目に遭ったな」

「ほんとですう……………」

「あはは、2人共お疲れ様」

はやての制裁を終え、ところ変わってここはエルトの部屋。

あの後3人は散々の思いで、行方不明のスバルを探した。

結局どこを探しても見つからず、疲れきった様子で訓練場に行くと、何事もなかったかのように訓練を受けている彼女の姿があった。

思わずその場でアイアンクローをキメてしまったエルトだが、明らかにスバルが悪いことをその場の誰もが理解していたため、いつになく怒りを露にするエルトに若干引きながらも、誰も止めには入らなかったという。

そして今は、夜。

3人と、エリオとキャロも交えての5人で夕食を食べ終え、今ちようど部屋に戻ってきたところだった。

エリオとキャロの2人は先に自室へ戻っていきっており、この場には

いない。

「今日はすまなかったな、ソフィア。変なことで連れ回してしまった」

「あ、いえいえ。わたしも、あれはあれでけっこうたのしかったし、きにしないで」

「でも、これで今夜一晚寝れば元の姿に戻るんだね。よかったね、ソフィア」

「はいですー♪…………でも、このからだもちよっとおもしろかった
ので、もったいないきもしますけど……」

「なら、戻らなくて済む薬をシャルマルに調合してもらったらどうだ
？ 但し、僕はもう面倒は見ないがな」

「うう…………エルト、いじわるだよ…………」

フェイトの言葉にソフィアが悪戯っぽく舌を出しながら言うと、エルトが澄ました様子で冗談を言う。

ひとしきり3人で笑った後、さてと、とフェイトは椅子から立ち上がった。

「そろそろ私は部屋に戻るね。ソフィア、あまり遅くならないようにするんだよ？」

「はーい！」

元気よく手を挙げて返事をするソフィアの姿を見、満足そうに微笑むと、フェイトは部屋から出ていった。

「ソフィア、君もそろそろ……」

夜も、もういい時間である。

そろそろ寝なければ翌日の訓練に差し支えたと、エルトがソフィアへ告げようとした、その時だった。

くい、と袖を弱く引かれるのを感じてエルトが眼下を見やると、顔を紅くして俯くソフィアの姿。

どうしたのか、とエルトが問う前に、ソフィアの方から先に口を開く。

「あの、エルト……その……こ、こんやだけでいいんだけど……いっしょに、ねてくれないかな？」

「……………は？」

上目遣いに恥じらいながら口にした彼女の言葉に、一瞬思考が停止するも、続く彼女の言葉にすぐに要領を得た。

「えっとね、わたし、ちいさくなっちゃって……その、はずかしながらくらいところがこわくって……ちいさいからこころぼそいっていうか、なんていうか……」

「……………はぁ」

顔を紅くしながら必死に口にするソフィアに、仕方ないなどでも言いたげな様子で溜め息をつく、エルトはソフィアの身体を抱えてベッドまで連れていく。

小さくなって軽くなった彼女をエルトがあっさりと抱える様は、ひよい、という擬音が最も相応しく見えた。

「ひゃわわっ!？」

「仕方ない。面倒を見ることになっているのは僕だ。付き合うよ、ソフィア」

言って、ベッドにソフィアを降ろすと、自分もベッドに腰掛ける。

エルトは寝巻きを持っていない。寝る時もそうでない時も、常に訓練着で生活している。

さすがに外出時などはちゃんとした服装をしているが、そうでない時、生活感のない彼の身だしなみなどそれくらいのもだった。

電気を消し、横になったソフィアへ布団をかけてやる。

「御休み、ソフィア」

「うん、おやすみっ♪」

満天の笑顔で答えるソフィアに、ふっと微笑みかけるエルト。

その光景は、さながら仲睦まじい親子のように見えたのだという。

その翌朝、もとに戻ったソフィアと並んで寝ている光景を、部屋を訪ねてきたマリサに発見され、ものの見事にからかわれたのだが――それはまた、別のお話。

Episode 12 私の正義、貴方の思い／前編

「非常に不愉快だわ」

早朝。

まだ日の光すら差し込まなず、包む光は電灯の光のみというエルトⅡクリーバーの部屋に、言葉どおり不愉快な色を含んだ女性の声が響いた。

女性は、マリサⅡネティアス。エルトの所属するウィング分隊隊長である彼女の突然の登場にも気後れすることなく——むしろ、自分こそが不機嫌だとも言わんばかりに表情を歪めながら、エルトは戸口に立つマリサを睨みつけた。

「……………何だ、こんな朝っぱらから」

時計の短針は、まだ6以前を指している。まだ、フォワードの早朝訓練すら始まらない時間帯だ。

いかにクールなエルトとはいえ、朝は出来る限り惰眠を貪っていたもののらしく、故にこの突然の来訪は、彼の機嫌を損ねるのに十分と言えるだろう。

しかしマリサとて、それを知って何の意味もなくこのようなことをするほど無神経な女性ではない。知った上で、時々愚痴や世間話に花を咲かせるエルトに、今最も彼女を苛立たせている悩み事を聞いてもらおうと、こうして彼の部屋に足を運んだというわけだ。

「一体何があったというのだ……生憎だが、用がないのならもう少し寝かせてほしいのだが」

「あら、つれない」

「僕とて、睡眠時間は惜しい」

もう用は済んだ、とでも言外に言うかのように、エルトは布団を被る。

だが、マリサもそれくらいで引き下がるならば、こんな早朝にわざわざ訪ねてなどくるわけもない。

無然とした態度で腕など組みながら、とんでもないことを口にする。

「話くらい聞きなさい。さもないと……次の訓練で流れ弾が貴方に降り注ぐわよ」

「おいおい……ああ、解った解った。聞けばいいんだろう」

あまりの彼女の言いように――――何より、背中にこれでもかと浴びせられる無言のプレッシャーに、ついに観念したエルトはむくりと起き上がった。

「ふふ、いい子ね」

一転、にこりと笑ってそう言うマリサにエルトは、朝起きたばかりだというのに早くも脱力感に襲われるのだった。

○E p i s o d e 12 私の正義、貴方の思い

エルトがマリサの急襲を受けていた頃から数時間後。

フォワードも訓練で扱かれていて、隊長陣も教官としてそれに参加しているこの時間帯、部隊長であるはやては、部隊長室で自分のデスクワークを片付けるのが常である。

出張や出動がない限り何も変わらない、彼女の仕事。しかし今日は、そんな部隊長室の光景は一変していた。

「ん、了解。さすが本局の執務官様やね。仕事が早いわ」

「……光栄だな」

書類に目を通しながらのはやての賛辞に、1人の青年が言葉少なく答えた。

彼の名は、イディアールファルス。歳はやてより2つ上で、前髪に金のメッシュが入った銀髪のショートヘアがさらりと揺れる美男子である。

血のように赤く鋭い目は、クールな彼の雰囲気によくマッチしていて、刃のような鋭い空気を漂わせていた。

「アルブは危険だ。早急な殲滅を推奨するが」

「私もそうしたいんやけど……でも仕方ないんよ。アルブがどういうメカニズムで発生するのか。何のために生み出されているのか。まだまだ解ってないことも多い。ごめんな、イディア君にもまた迷惑をかけてまう」

「気にするな。私はただ、与えられた任務を遂行するだけだ。本局の命がある限り、どこまでもお前達機動六課に付き従うと誓おう」

「……ありがとう」

独断専行など一切しない。与えられた任務をただ忠実にこなす彼に、魔導師達が付けた異名が『シルバー・マッドドッグ白銀の狂犬』。

よく言えば忠実、悪く言えば融通の利かない石頭というのが、大多数の局員が彼に抱くイメージだ。

はやても、ついこの間まではそう思っていた。だが――――。

（何や、それだけに思えないんやなあ、彼………）

本人が気付いていたかは知らないが、これまで何度か仕事を共にする中、はやては気付いていた。

任務に忠実な一方、仲間にはさりげない優しさを見せることができる。それが彼、イディアーフアルスであると。

はやては、彼がただの頭でっかちではないと理解している数少ない人間だった。

「………八神？」

「………へ？ あ………ああ、ごめん！」

彼の声に、いつの間にか、ぼうっと彼の顔を見つめていた自分に気づき、慌ててはやては両手を振って謝罪を述べた。

「疲れているのか？ 無理はしない方がいい。任務の遂行に支障が出る」

「あ、え……べ、別にそんなやないよ。心配してくれてありがたいな。あ、あはは」

「そうか、ならばいい。では、任務は引き続き継続することでもいいな？」

「あ……うん。宜しく」

「了解。また何かあれば報告に来る」

終始言葉少ないまま、イディアは部隊長室のドアの向こうへ早々に消えていく。

「………全く。任務以外にも何かないんかい、アホ」

元々、あまり感情を表へ出さない彼である。先程のようにはっきりと他人への気遣いを口にするのはとても珍しく、それをはやて自身も解っていた。

だからこそ、1人毒づくはやての表情は負のそれではなく、むしろ嬉しそうに微笑みながら、頬はほんのりと赤らんでいた。

3年前、とうに捨てたと思っていた感情が、僅かながら蘇ってくるのにはやて自身、気付いていた。

「さて、仕事の続き続き！」

いいことがあった直後ともなれば、自然とやる気も出るというもの。はやてもその例に漏れず、意気揚々とモニターを開き————そ

して、気付いた。

「……………ん？　何や、メール？」

どうやら、彼と話している間に来ていたらしいメールの着信を示す封筒のマークが、モニターには表示されていた。

誰からやろ、と呟いきながら、差出人にマリサの名を認めると、それを開く。

そこに書かれていたことは、ただ1つ。

『エルトを借りてくわね。後宜しく。　　マリサ』

簡潔にして難解。

文そのものの意味を読み取るには易いが、事情が全く解らないはやてにはマリサが何故エルトを連れ出したのか、その理由が全く解らない。

1つだけ確かなことは、文面から想像するに、彼女は既にエルトを連れて出ていった後であろう、ということ——ただ、その1点のみ。

「……………ええー……」

言わば、後のことは完全にこちら任せ。

あまりに奔放な新たな分隊長の姿に、はやては人知れず溜め息をつく。

イディアに指摘された疲労。一度は否定したそれが急に押し寄せてくれるのを感じながら、はやてはモニターに映し出したメールを消した。

一方、六課を離れたエルトとマリサは、車で一路、クラナガン市内を目指していた。

車は先日送られてきたマリサ個人の私物を、彼女自身の運転で走らせている。

「嫌がらせ文、か……僕には、どうしてもそのように生易しいものには見えないのだがな」

そううんざりとした様子で言うと、エルトはゴムで留められた便箋の束を無造作に座席の傍らへ放った。

それこそ、今回マリサがエルトを連れ出した理由^{わけ}。

そこには『管理局の屑』だの何だの、汚い言葉で手紙の送付先の人物に対する罵倒がこれでもかと書き連ねられていた。

中には、口にするにはとても憚られるような下品な言葉が書き連ねられたものまであり、エルトが言うのはそういった類のものだろう。

もはや、嫌がらせのレベルを軽く超え、脅迫に近い。

「全くよ」

「いつからだ？」

「数週間前、ちょうど六課に赴任した頃ね。L・P事件のおかげで六課は今や管理局の花形だし、そこへ私が行ったことを不満に思う輩は多いんじゃないかしら」

「………そうか」

つまり、ある個人を特定出来る程はつきりとした心当たりは、彼女にもないということ。

だが、今はまだそれでも仕方がない。

今向かっている場所こそ、それを解決するための場所なのだから。

「さあ、もうすぐ着くわよ」

「ああ」

――2人の向かう先には、専門家が住んでいる。

「ふむ………」

とある、クラナガン市内の一軒家。

その中、2つしかない部屋の中の1室で、1人の男性が、自分で淹れたコーヒーの香りを楽しんでいた。

やや古びて趣の出てきた白い壁には彼自慢の黒いサングラスが掛けられており、彼の座るデスクにはタイピングがアルファベットを描いている。

彼の名はカガミチーセントラル。とある理由からクラナガン、とりわけ彼の家兼仕事の事務所のあるこの一帯では、知らぬ者はいな

い存在になっていた。

「今日は特に、仕事の依頼はなかったはずだな……タラゲディア？」

『そうじゃな』

『まあ、ゆっくりしているとよかる。またいつ依頼が舞い込んでくるか、解らぬからのう』

「……そうさせてもらおうでしょうか」

彼の傍ら、デスクの上に無造作に置かれた2枚のカードから聞こえてくる声に、カガミチは表情を変えずにそう答え、椅子に深く身を預けた。

その2枚のカードは、彼の所有するインテリジェントデバイス。名を、双銃のタラゲディア、バズーカのボーイ。

2つ共、カガミチが長い間仕事を続けてくるにあたって何度も助けられてきた心強い相棒であった。

デバイスとのやり取りどおり、以降は何事も言葉を発することなく、静かにコーヒーを啜るカガミチ。

彼にとってはそれはまさに至高とも呼べる時間だったが――――不意に、玄関の呼び鈴の音がそれを遮った。

「客か……それとも依頼人か」

この時間を潰されたことは痛い、依頼人を第一に、をモットーと

しているカガミチはそれに腹を立てることなく——ただ、溜め息だけはしっかりとついて、部屋の入口兼玄関となっている扉を開けた。

すると——。

「はあい、カガミチ。邪魔するわよ」

「……………はあ。またお前か、マリサ」

戸口に立っていたのは、大層美人な金髪の女性だった。

マリサ＝ネティアス。数年前、ある事件の際に仕事で知り合った仲である。

彼女はカガミチの仕事の依頼人であったが、それ以来は彼女の忙しさもあってか音信不通となっていたはずだった。

「来るならそうと、連絡くらいしたらどうだ」

「仕方ないでしょう、今朝思い立ったことだったんだから」

「……………そうだ。お前はそういう女だったな」

さすがに、知り合いともなれば扱いにも慣れたものだ。

これ以上理屈をこねたところで彼女相手にはどうしようもないことを知っているカガミチは、ついで後ろに控えている青年に気付く。

「マリサ、後ろにいるのはボーイフレンドか何かか？」

「ぼっ……………!?!」

「ええ、まあ。そのようなものよ」

カガミチの言葉に、後ろにいた赤髪の青年は口ごもるが、マリサはしれっとした様子で微笑んでみせた。

それにはカガミチも、思わず「ほう」と声を漏らしてしまう程だった。

未だかつて、彼女がここまで心を開いた男など存在しなかった。否、異性でなくとも同じだろう。

ある事件があつてからこれまで、彼女は己の正義だけを信じて今日までを生きてきた。それは、今も昔も変わらない。

ただ—————今の彼女は、どこか以前とは雰囲気違っていた。

柔らかくなった、と言ふべきだろうか。

氷のように冷たかった彼女の態度は、以前最後にカガミチが会った時とは、まるで別人のように暖かくなっていたのだ。

「入ってもいいかしら。依頼を持ってきたのだけれど」

「ああ。あまり上手くはないが、コーヒーも淹れよう」

「ありがとう」

ともかく、今は仕事だ。

彼女が持ってくるものだ。きっとまた碌でもない人間が何かやらかしたのだろうと考えると、今から面倒なことになるであろうことが容易に推測出来て、カガミチは目を伏せた。

彼は知る人ぞ知るハードボイルド。その感情を、表に出すことなど滅多にしない。

それに気づいてか否か、マリサの後ろに控えていた赤髪の青年が、カガミチの思いを肩代わりするかのように大きく溜め息をつくのだった。

「なるほど。事情は解った」

部屋の中へ通されたエルトとマリサは、男性に事情を説明した。

彼の名は、カガミチⅡジェントラル。

マリサの古い知り合いで、元管理局員ということらしい。

今ではとあることを切欠に退役し、このボロい一軒家で私立探偵を営んでいるらしい。

その彼にマリサは無造作に送られてきた脅迫文を放り、それを読んだ上での彼の返事がこれだった。

「差出人。なんとか突き止められないかしら？」

「やってみよう」

「…………随分早い決断だな」

「男がこれくらい、すぐに決断できなくてどうする」

さも当然のように言うカガミチ。

だが、その咄嗟の決断が出来る男が、実際この世にどれ程いるだろうか。

それを理解しているエルトは、彼の言葉に舌を巻いた。

「話はそれだけか？」

「後、もう1つ」

ぴん、と指を立てて、マリサはここへ来たもう1つの用件を告げた。

「エリーは今いるかしら？」

「あいつは今地下室だ。また新しい発明に没頭してる。……ドラ
ウプニルの整備か？」

「ええ。お願いできるかしら？」

「それは………奴のご機嫌次第だな」

「………気分屋ですものね、彼女」

はああ、と深く溜め息をつく2人に、予めマリサの話でしかエリー
なる人物の素性を知らないエルトは、訝しげに眉を顰めるのみ。

しかし彼が疑問の言葉を口にする前に、件の人物が玄関口とは別の
ドアから現れた。

「どーーーーー！！！！！！！！！！ん！」

「ぐふっ!？」

———何故か盛大に吹き飛んだ上で、エルトの腹に頭からタッ
クルしながら。

「………げほっ、ごほっ………い、一体何なんだ、お前はっ!？」

「おろ？ そっちこそどちらさん？ 確かにマリっちに突っ込んだ
つもりだったんだけどなー」

「………そう何度も食らって堪えるものですか」

咳き込みながら額に青筋を浮かべるエルトを見上げ、きょとんとして問いかける1人の少女。

ピンクのボブカットにまだあどけない童顔をした少女は、エルトの膝の上で、そのエメラルドのような緑色の瞳で真っ直ぐに彼を見つめていた。

マリサはといえば、その様子もまるで構うことなく、暢気にカガミチが淹れてくれたコーヒーなど啜ってすまし顔である。

「マリサ……まさかこれがあると知っていて、僕を連れてきたのではあるまいな？」

「さあ、どうかしらね？」

少女を膝からどかし、若干恨みの籠った視線をマリサへ向けるエルトだが、当のマリサは含みのある言い様をしてニヤリと笑う。

本当にそんな理由と解釈することも出来る態度。しかし彼女にこれ以上言っても柳に風であることは、エルト自身これまでの付き合いで十分に解っているし、それ以上抗議することもなかった。

カガミチなど、最初から悟っているのか、我関せずといった様子でコーヒーを啜っている。

その様子も、大人の男の落ち着いた雰囲気が滲み出っていて、まさしくハードボイルドと称するに相応しい。

「エリー。また実験に失敗したのかしら？」

「あ、マリっち。やっほー♪」

「エリー………だと？ おいマリサ、エリーは優秀な発明家と聞いていたが、まさかこの少女が………？」

マリサから聞いていた情報から想像していた人物像に、あまりにもかけ離れていて、目の前の少女と噛み合わない。

故に問いを口にしたエルトだったが、マリサはそれに大きく溜め息をつきながら肯定した。

「………信じられないのはよく解るけど、そうよ。彼女がエリー。カガミチや私のデバイスの調整や、チューンをしてきている天才発明家よ」

「えっへん！」

マリサの紹介に、エリーは無邪気に胸を逸らせる。

先程まで機械の作業をしていたとは思えない、ひらひらと袖のたっぷりとした服が彼女の動きに従ってはためき、揺れた。

「だが、デバイスの調整なら管理局でも出来るだろう？」

「カガミチはもう管理局を引退しているし、私は管理局というものを信用していないから。信頼できる相棒は、信頼できる相手に預けたいの」

「そーゆーこと！ エルっちのデバイスも、ついでに見てあげよっ

か？」

「遠慮しておく。それとエルっちはやめろ」

「えー、可愛いのにー。ね、カガミチ？」

唇を尖らせるエリーに、草臥れたように溜め息をつくエルト。

そんな彼へ、エリーの言葉を受けたカガミチはただ一言、こう告げた。

「諦めろ」

その後、より一層の脱力感にエルトはついにつくりと俯いてしまったが、彼をフォローする声はなく、部屋にはただコーヒーを啜る音のみが木霊するのだった。

Episode 12 私の正義、貴方の思い／前編（後書き）

く神の黄昏く

神崎「どうも、毎度お馴染み神の黄昏です」

エルト「エルトだ」

神崎「さて、今回はいいよマリサさんの出番です」

エルト「彼女については、以前にもやらなかったか？」

神崎「アレはあくまでもついて行っただけであって、マリサ本人のエピソードじゃないから」

エルト「なるほど。だが……エリー、だったか？　彼女は一体何なのだ……」

神崎「リリカルAngels史上最も破天荒なキャラだね、間違いないw」

エルト「というより、確実に『仮面ライダーディケイド After the Movie War』の色　彩香のコピーだろう（呆）」

神崎「……なんでだろうね。複数作品書いてると、いつの間にかキャラの性質が似通ってることが多いんだ。ソフィアとガンダムのナナオ然り、今回のエリーと彩香然り」

エルト「作者にとって、キャラの好みにも偏りがあるということだろう」

神崎「まあ、ああいうキャラ好きですけどね、確かにw さて、そんなわけで今回からマリサの話に移ったわけですが、言ったとおり今回のエピソードはシリアスな話にはなりませんw いや、ところどころで真面目な話は挟みますが、シリアスにはなりません。読者の皆様、どうか肩の力を抜いてお読みくださいませw」

エルト「まあ、たまにはそういった趣向も悪くないだろう」

神崎「そんなノリで続く次回は、『貴方の心、私の正義／中編』」

エルト「無限の力、その身に宿せ!」

E p i s o d e N e w Y e a r お正月だよ！ 全員集合！ ーリアル人生

※ギャグ番外編のため、今回のみ台詞の前にキャラクターの名前をつけさせていただきます。ご了承くださいませ。

―――1月某日、機動六課隊舎。

はやて「明けましておめでとー！………というわけで、人生ゲームやろうや」

エルト「いや待て。何が？というわけ？なのか全く理解出来ないのだが」

リオス「そうそう。僕なんかクリスマスと大晦日のヴァルハラ営業でそんなに寝てないっていうのにさあ………ふわあ………」

はやて「まあまあ、そう言うなや。ただの人生ゲームちゃうで。その名も、リアル人生ゲームや！」

スバル「それって確か、シミュレーター式の魔法を使った疑似体験人生ゲームですよね？ 今クラナガンで話題になってるっていう」

はやて「さすがスバル、そのとおりや。プレイヤー自身が駒になって、ゴールを目指すゲームっちゅうわけやな。どや、なんやおもしろそうやろ？」

フェイト「そう言われると………確かにちょっと面白そうだね」

なのは「ちょっとやってみない、リオス君？」

リオス「う、うん……………なのはがそう言うなら……」

エルト「やむを得んな。いいだろう、たまにはそういった趣向も悪くない」

はやて「よっしゃ、決まりやな。さて、じゃあ早速起動させよか」

ブウン————と音を立て、シミュレーターが起動する。

訓練場の開けた空間に、双六風の異空間が展開した。

『これより、ゲームを始めます。参加されるプレイヤーの皆様は、プレイヤー名を登録してください』

スバル「あ、モニターが……………」

ティアナ「妙に本格的ね……………」

リオス「えーと……………リオス、と」

はやて「皆名前打ったな？　じゃあ、始めるで」

シミュレーターのランダムな選別により、順番が決まった。

なのは↓スバル↓リオス↓ティアナ↓フェイト↓はやて↓エルト

なのは「サイコロ、結構おっきいんだね……………！」

ティアナ「……………お昼にやってるテレビとかで見た覚えがあるのは、私の気のせいかしら？」

スバル「て、ティア……………メタ発言はやめどこ？」

はやて「じゃあなのはちゃん、サイコロをどうぞ！」

なのは「う、うん。じゃあ、行くね！ えいっ！」

出た目—————5

なのは「えっと……………1、2、3、4、5、と」

サイコロの出た目に従って、なのははサイコロのマス目を自ら進む。こういった、自分がゲームの中に入り込んだような体験が出来ることも、このゲームの醍醐味だろう。

そして人生ゲームの最初とは、今後の人生を左右する、職業を決める機会でもあるのだ。ここはぜひ、少しでもいい職業について優位

に立っておきたい。

そんな想いを抱きつつ、なのはが5マス目へ進むと、そのマスに止まったプレイヤーへの指令がモニターで表示された。

『公務員になる。収入30万』

全員「おおー……………」

なのは「よかったあー……………まずまずのところで止まれたよ」

リオス「よかった……………普通の人生ゲームなんだね」

ティアナ「アンタ、人生ゲームに何警戒してんのよ（汗）」

エルト「気持ちは解らなくはないがな。何せ、あのはやてが用意した代物だ」

スバル「あ……………うん。ちよっと納得」

はやて「……………うん、普段私がどういう目で見られてるのか、よう解ったわ（泣）」

皆からくだされた評価に、はやては思わず涙ぐんでしまう。

少なくとも、部隊長としての威厳の程度は今のやり取りで粗方解っ

てしまった。

はやて「さて、じゃあ次はスバルやな」

スバル「あ、はい。よし、いい目出すぞー！」

気を取り直して涙を拭うはやてに、スバルは元気よくサイコロを投げた。

出た目————3

スバル「いち、にい、さーんと！ さあ、私の職業は何かなー？」

『前日の食べ過ぎが祟り、試験に遅刻して第一志望に就職出来ず。特に入りたくもなかった会社へ就職。収入10万』

スバル「酷いっ!？」

ティアナ「アンタなら実際にやりそうよね……………」

リオス「うん……………申し訳ないけど、あながち間違っていないかも」

エルト「むしろ次に試験があればやるな」

スバル「3人まで酷いっ!？」

はやて「ていうか、遅刻の理由がリアル過ぎて怖いな……………」

フェイト「あ、あはは……………さ、さあ！ 気分を入れ替えてリオス、お願いっ!」

リオス「なんだか雲行きが変わり始めてすつごく怖いんだけど……………ええい、ままよ!」

出た目—————4

リオス「1、2、3、4…………と。さて、僕の職業は……………」

『コスプレイヤーになる。収入は毎回のサイコロで出た目×10万』

リオス「……………ねえ、帰っていいかな?」

はやて「却下」

エルト「却下だ」

リオス「やだっ！　だってこれ、辿る結末が目に見えてるんだもんっ！！（涙目）」

ティアナ「……………まあ、アリなんじゃない？／／／／／」

なのは「なんていうか、うん。続けよ、リオス君？／／／／／」

リオス「で、そのお2人は一体何を想像したのさっ！……………いや、やっぱりいいや。聞くのが怖いから（汗）」

エルト「不憫な……………。さて、次はティアナ、君だったな」

ティアナ「あ……………ああ、そうだったわね。でもここまでの流れからして……………嫌な予感しかしないけ、どっ！」

出た目—————2

ティアナ「むう、あまり進まなかったわね……………1、2と」

『新聞記者。収入20万』

はやて「おお！　ここへ来て普通の職業登場やな！」

ティアナ「ええ、確かに普通なんですが………何でしょう、このとてつもない嫌な予感」

スバル「この後の展開に何か用意されてそうだね（汗）」

フェイト「うう、次は私かあ………」

エルト「そこまで肩を落とすことなかりうに……」

フェイト「だ、だってえ………」

リオス「まあ、気持ちは解らなくはないけどね。僕なんか、開始早々絶望しかけてるし……（死んだ魚の目）」

ティアナ「リオスは大袈裟だと思いますけど、普通のゲームっぽいのに何だか凄く安心出来ないのはよく解ります」

はやて「けどまあ、何にせよフェイトちゃん。サイコロ振らんとゲームが進まないで？」

フェイト「う………解ったよ。それっ！」

フェイト「1、2、3、4、5、6……す、進んだよ？」

なのは「いったいどんな職業に………？」

『歌手となって紅白に出る。収入50万』

フェイト「や、やったよエルト！ 紅白だってっ！」

エルト「あ、ああ………というか、確実に中の人ネタだろう、これは」

リオス「お約束だね………いいなあ」

ティアナ「メタるのはやめなさい」

エルト「いや、だが………解った、黙っておこう」

ティアナ「解ればよろしい」

はやて「さあゝて、次は私やなあ………一体どんな職業になるか………
…そおらっ！」

出た目————1

はやて「なんや、しけてるなあ」

エルト「チンピラか、君は……」

はやて「いーち、と。さて、職業は何や？」

『好機を逃して就職を逃す。ついでに婚期も逃す。収入なし』

はやて「絶望したっ！ 新年早々絶望したっ！！ ていうか婚期とか余計なお世話やっちゅーねんっ！」

エルト「そのネタは僕がやるべきなのだろうがな。中の人としては」
リオス「……うん、解らなくはないけど黙っところねエルト。そろそろメタすぎるから」

なのは「あ、あはは……」

フェイト「が、頑張っ……ね？（汗）」

はやて「くうう、2人共余裕かましおっ……あれか、やっぱり相手がいるヒロインの格ってやつなんかあああっ!？」

エルト「そうは言うが、君にも昨年度は相手が出来ただろう」

はやて「あれほどの堅物どうやって落とせっちゅうんや!? 何かあれば任務任務って……どこぞやの自爆狂かつ!」

スバル「あ、ぶっちゃけた」

ティアナ「ぶっちゃけたわね」

エルト「まあ、確かに彼に対する作者のCVイメージは緑川光様のようだがな。……さて、ラストは僕か」

はやて「1こい、1こい!」

リオス（外れろ、外れろ!）

エルト「………何だか一部から露骨に黒いオーラを感じるが。そんなものに僕は屈しない! そおれえっ!」

出た目————5

リオス「5………!」

はやて「ということは……」

スバル「つまり………!」

『公務員になる。収入30万』

全員「ふ……………」

エルト「ふ？」

全員「普通だっ!？」

エルト「君達はいったい僕に何を求めているのだ!？」

普通が一番いいとは言っても、こんな場合の普通はただつまらないだけだ——が、これから彼らが辿る人生が、決して普通とまらないことは明白だろう。

ある者は絶望―――ある者は純粹にゲームを楽しむ想いを抱きながら、リアル人生ゲームはこうして幕を開けたのだった。

なのは「1、2、3……と」

その後も順調に進み、ゲームは中盤戦を迎えていた。

スキップの如くなのはがサイコロの目である3つのマスを進むと、モニターにそのマスの指令が表示された。

『宝くじを買うが当たらず。10万失う』

なのは「うーん、ついてないなあ……」

エルト「しかし……宝くじ10万分といえば、現実的に考えると随分な量ではないか？」

フェイト「え、エルト……ほら、一応これってゲームだから……」

洩々、出現したタキシード風の男へペナルティの10万を渡すのはに、エルトの冷静なツツコミが続く。

確かに彼の言うとおりなのだが、このゲームの金額推移の最低水準が10万なのだから仕方がない。

さて、そんななのはの番が終わったところで、盤上を見てみよう。

一位はフェイト。財産も彼女の職業、人気歌手のおかげで、7人中でも上位に位置する。このままいけば、かなりいい成績を収められることはほぼ間違いないだろう。

そしてそれに続くように、エルトとティアナが続く。

エルトは可も無く不可も無くといった様子で、着実に財産を伸ばしている。このままいけば、フェイトを抜くことも不可能ではないかもしれない。

そしてティアナは財産だけならフェイトにも匹敵しかねないレベルだが、どこか疲れきった顔をしていた。

ティアナ「ああ、もう………どうして私、こんなマスばかりなのよ………」

ティアナが毎回とまるマスでは、彼女の現在の職にちなんでか記者に関連するものが多く出るのだが、その内容がまずエグかった。

曰く、『大臣の不倫現場を激写』、『裏献金の謎を暴く』等々、社会の暗部を見せつけるようなものばかり。

収入はよかったが、これなら多少収入が下がっても他の職に転職したいティアナであった。このままでは、彼女の胃に穴が開きかねない。

そして、全く別の意味で転職したいと心より願っている者が、ここにも1人。

リオス「しくしくしく………」

人生ゲームの青いマスの上に座り込んで、しくしくと泣き続ける少女――もとい、青年。名を、リース＝マースフェ――。

リオス「こんなところでまでその設定引っ張るなああああつ！／＼／＼／＼／」

なのは「だ、誰に叫んでるのリオス君！？」

エルト「訊いてやるな、なのは。奴にもいろいろと思うところがあるんだ」

エルトの少々ベクトルの違う哀れみの視線はともかく、リオスの外見はこの数ターンの間かなりの確率で変動していた。

メイド服から始まり、セーラー服、ナースと変遷して、今は巫女服に姿を変えているところだった。

普通なら悲劇以外の何物でもないだろうが、この青年がそれらを纏うとなかなかどうして、似合ってしまうのだから困ったものである。

リオス「ううう………こういうことになるから嫌だったのに……／＼／＼／＼／／」

なのは「はうっ！？／＼／＼／＼／／／／／／／／」

フェイト「な、なのはの顔が真っ赤に！？」

ティアナ「す、すみませんフェイトさん……私も、もう喉元まできてます……／＼／＼／＼／／／／／／／／」

スバル「わからなくはないけどねー。今のリオス、とっても可愛いし♪」

リオス「がふっ!?!」

フェイト「り、リオスー!?! す、スバル。あんまり言わないであげて(汗)」

スバル「えー、いいじゃないですかー。可愛いことは事実ですし」

リオス「ぐはっ!?!」

フェイト「ホントに、ホントにやめてあげて! もうリオスのライフは0だからっ!! (泣)」

エルト「ツツコミがいると楽だな……………」

ティアナ「ホントねー……………」

フェイト「そこっ! 黄昏てないで手伝って!」

エルト「いや、手伝えも何も事実だろうに」

ティアナ「宇宙の心理です、諦めてください。ていうか手伝うにしても、何を手伝えばいいんですか?」

フェイト「そ、それはそうなんだけど……………」

ただでさえ度重なる女装で息も絶え絶えなりオスにスバルの無自覚

コスチュームチェンジ

な悪意が突き刺さり、涙目なりオスを必死に庇おうとするフェイト。揃ってその様子を傍から眺めていたエルトとティアナにも応援を求めたが、容赦なく正論を叩きつけられ再び勢いを失ってしまった。

思わず自分のフォローを自分で崩してしまったことには、あくまでも気づいていない。

さて、ここで、今回1度も喋っていない人物が1人いることに皆様お気づきだろうか。

そう、我らが部隊長、八神はやてである。

本来喋り好きである彼女の台詞やツツコミが何故一度もないのか。それは、彼女の位置に関係している。

はやて「いやー……皆、楽しそうやなあ……（遠い目）」

はやてのいる場所は、最前線から遙か離れた後方。

最前列メンバーの最後尾であるスバルにすら、3回連続で4〜6の目が出る程の奇跡が起こらなければ、まず挽回は不可能な位置だ。

加えて止まるマスの指令もろくなものがなく、これまで獲得した財産も微々たるものだった。

はやて「うう、言い出しっぺやのに……なんで私だけこんな目に……」

リイン? 「普段の行いのせいだと思うのですよ、はやてちゃん」

はやて「やかましいわ」

小さくなっではやてのポケットに潜っていたリインフォース？が顔を出し、開口一番に口にした言葉をぴしゃりと跳ね除けて、聞こえないと思ったか声を張り上げて、何やら混乱している様子の前線メンバーへ向かって叫んだ。

はやて「ほらー、早くせんと先進まんてー！」

スバル「あ、そうだった！　じゃあ、私いきますねー！」

はやての言葉に思い出したようにスバルがサイコロを振った。

出た目は5。3マス前にいたリオスを追い越して、その2マス前で止まる。

スバル「さーて、今回の指令は……………」

『外食するが食べ過ぎで腹を壊し、加えてその店が破産する。50万失い、3回休み』

スバル「さつきより酷いっ!？」

ティアナ「……………ていうか実話じゃない、これ」

フェイト「ええっ!?!」

リオス「僕らはむしろ、そっちの方に吃驚なんだけど!?!」

エルト「まあ……スバルならやりそうではあるがな」

リオス「うん、むしろ余裕でやるよね」

ティアナ「次はどこを潰すのかしら……」

スバル「また3人が酷いっ!?!?……って、ううっ……お、お腹が
っ………!」

リアル人生ゲームの怖いところはここだ。

リオスのコスプレで既にお気づきのことと思うが、プレイヤーが止
まったマスの指令は、そのままプレイヤーの五感に訴えかけて現実
化する。

このゲームが、?リアル?人生ゲームと呼ばれる由縁である。

先程スタートで設定された腹痛が漸く回復したばかりだというのに、
早くも次のマスで追い打ちをかけられる。

リオスやはやてとは別の意味で、不憫な子であった。

エルト「自業自得だ、諦めろ」

スバル「ううー、私まだ今日は何もしてないのに『ぐぎゅるるー
……』はううっ!?!」

リオス「スバル……………可哀想に」

はやて「何言ってるんや、リオス君。次はアンタの番やでー！」

なのは「こ、今回はどんな服なのかな？（わくわく）」

リオス「うう、なるべく考えないようにしてたのに……………えいつ」

その場に座り込んだままで、力なくリオスはサイコロを投げた。コロコロと、スピード感なく転がっていったサイコロは、4を上にして止まる。

前でうんうん唸っているスバルに一瞬憐憫の視線を送ると、次は我が身と確信しているリオスは、激しく踏みたくない感情を必死に押さえ込みながら、4マス目のマスを踏んだ。

『収入とコスチュームを決めるサイコロを振ってください』

リオスの職業であるコスプレイヤーは、毎度のサイコロで収入が決まる特殊なもの。そのサイコロの各目にはコスプレ衣装の内容も同時に記されていて、収入が入ると同時にその衣装へ勝手にチェンジされるのだった。

もう諦めかけているリオスは、何も言わずに手元へ現れたサイコロを投げる。

出た目は――――。

『収入10×3万。衣装をスクール水着へチェンジ』

リオス「そろそろ来ると思ってたさちくしょー！　うわああーん
！（泣）」

フェイト「り、リオスが壊れた！？　どうしよう、なのh……………」

ティアナ「う、うん……………結構ありかも、ですね……………／／／／／／／／／／」
なの「だ、だね……………／／／／／／／／／／」

エルト「……………使い物になりそうもないな」

フェイト「な、なの……………orz」

巫女服が消え、その代わりに一瞬にしてスクール水着を装着するリオスは既に涙目で、「もうどうにでもなれ」といった心境になりつつあった。

一方それを傍で見ていたフェイトは、友であるなのには何とかならないかと問いかけようとするが、肝心の親友は彼の姿へ顔を紅くしながらちらちらと視線を送るだけで、使い物になりそうもない。エルトの隣にいるティアナも同様だ。

ついでに言えばこの時、なののが胸元に忍ばせていたレイジングハートが、主に命じられるままにこっそりとその姿を激写していたり

したのだが、割愛しておく。

面倒なのではない。リオスの名誉のためである。

エルト「さて、それでは次はティアナ、君だな」

ティアナ「ああ、そうだったわね……もう、今度こそまともなマスに止まってくれるんでしょうね……？」

エルト「そればかりは僕に訊かれても解らないが……さあ、早く始めろ」

ティアナ「うう……分かったわよ。そおれっ！」

うんざりした様子でサイコロを投げるティアナ。こちらも、リオスとある意味同種の諦観が滲んでいるように見えるが、そんな彼女の気も知らずにサイコロは地面へ転がる。

上を向いたのは、6。先頭のフェイトがいるのは4マス前であるため、マスだけならトップに躍り出た。

「……5、6、と。さて、今度は何が出るのかしら……？」

ある程度のことは覚悟の上で、ティアナは指令の表示されたモニターへ目を向けるが――――。

『上司のセクハラで心身共に疲れ果てる。1回休み』

ティアナ「記者関係ないでしょこれっ!？」

自らの職と全く関係のない――――どちらかといえばどんな職でも起こりうるマスにティアナは頭を抱えて絶叫する。

ここまで毎度のことだったが、彼女のマスだけ妙に現実的で、生々しいものが多過ぎるのは決して気のせいではないだろう。

リオス「ていうか……よく考えてみるとこれって、現実のことじゃない?」

「「「「あゝ……………」」」」

はやて「……………って、何で皆『あゝ、納得』とでも言いたそうにこっち見るん!？」

リイン?「だから、普段の行いのせいだと思うです」

リオスの言葉に心底納得した形で頷きながら、全員一斉にはやての方を見た。

なのはとフェイトも思わずそれに追従してしまうのを見ると、彼女らも被害者なのだろう。本来はやての味方であるはずのリインにすら自業自得と評されている辺り、もはや弁護の余地はないと見える。

ティアナ「あ、あの……ちょっと私疲れたので、次フェイトさん、お願いします」

フェイト「う、うん。なんていうか……………お疲れ様」

疲れきった様子のティアナに気遣わしげに話しかけながら、出現したサイコロを手にとったフェイトは、そのままそれを早々に放り投げた。

彼女としても今回のゲームでは殆どの場合でツツコミやフォローに回っているため、早々に終わらせてしまいたいというのが本音なのだろう。彼女のゲーム運びであれば気疲れすることもないだろうに、悲しいかな、これも彼女の性格故の結果だった。

転がったサイコロが指し示した目は、3。ちょうど、座り込んで項垂れているティアナの目の前のマスだ。

フェイト「1、2、3……お願い、いい指令出て……!」

祈りを込めて、フェイトは指令の映し出されるモニターが出るのを待つ。

ここまでの彼女の指令はまさに順風満帆な歌手の人生そのものだったが、ここまでの他のメンバーの有様に、自分まで不安になってしまったらしい。

果たして、そんな祈りをもって出た指令とは――――。

『プレイヤーの中に異性がいれば、結婚する。以後のゲームはそのプレイヤーと共に進行し、収入は2人の分を合計した数値となる』

フエイト（この場にいる男の人は、リオスカエルト………だけど…
…）

この2人の中でまず、リオスカエルトから消えるのは間違いない。

リオスにはなのはがいる。それに今も背中から、「リオスを選んだら承知しない」とでも言わんばかりの殺気にも似た気配が飛んでくるのだ。彼を選んだ瞬間、間違いなくフエイトは吹き飛ぶだろう。

となれば、エルトしか選択肢はないのだが———それこそ、フエイトには躊躇われることであつた。

それは決して彼のことが嫌というわけではなく、もっと別の感情から来る羞恥なのだが、彼女がそれに気付くのはいつになることだろうか。

エルト「どうした、フエイト。早く選べ」

そうとも知らないエルトは、早く選べと催促してくる。

一瞬それに涙目で睨み返しながら、フエイトは意を決した。

フエイト「え、えっと………エルト、その………お願い、出来るかな………？／／／／／／／／／／／／／／／／」

エルト「ああ、了解した」

フエイトの要請に快く答え、エルトはフエイトのマスへ向けて歩いていく。

もはや耳まで真っ赤なフェイトに対し、エルトはどこか上機嫌に笑う。

やはりというか、彼女程の美人とゲームの上とはいえ結婚出来るというのは、彼でも嬉しいのだろう。こちらも、本気で彼女を愛する日が、果たして訪れるのだろうか。今後に期待である。

いずれにせよその一部始終を、その周囲にいた面々が大層ニヤニヤと生暖かい視線を送っていたことは言うまでもないことだった。

はやて「さて、じゃあ次は私の番やな。いいもん見れたし、ここで目もいいのが……出ろっ！」

どこかほくほくとした様子で、はやては続けて自分の下へ出現したサイコロを振った。

それが吉と出たか————はやてとしては初めてのまともな当たりとなる、6の目が覗いた。

「おおお！ ついに私の時代到来かっ！？　いくで！　いち、にい、さーん……」

6の目が出たことで、若干傍観モードに入りかけていたはやてのモチベーションが若干の回復を見た。軽快にステップを踏んで、マスを移動していく。

漸く先頭集団が見えてきたところで6マス目となり、そこでの指令をはやては読み上げる。

はやて「さあさあ、私はどんな……………」

『尻に痛恨のタイキックを受ける。痛みに悶絶し2回休み』

はやて「ちょっと待て！ タイキック人生に何の関係があるん！？
アレか、一生お笑いで過ごせて、そういうオチかつ！！？」

そんなふうには儀にツッコミを入れている間にも、はやての下へ屈強な男性が現れて、早々に脚を振りかぶる。

完全に、本人の心の準備などどこ吹く風である。

はやて「ちょ、待っ……………」

そして無論、単純な機械がはやての制止など聞くはずもなく。

絶叫がゲーム空間に響いたのは、そのすぐ数瞬後のことであつたという。

Episode 12 私の正義、貴方の思い／後編

その日の内に、エルトとマリサの2人はカガミチに連れられ、事務所に程近い酒場へ向かった。

どうやらそこは、最近彼が見つけたい情報屋が常連としてよく訪れているらしく、彼ならば、差出人の手がかりにしろそれを突き止める方法にしろ、何かしら知っているのではないかという判断だ。

ちなみにエリーは、カガミチの事務所にてドラウプニルの整備中である。

「その情報屋。信用出来るの、カガミチ？」

「飲んだくれたが、持っている情報は確かだ。信用してくれて構わない」

カガミチの言葉に、「本当に大丈夫かしら……」などと小声で不信感を言葉にするマリサの横で、エルトはどこか懐かしげに眉を顰めた。

「飲んだくれな情報通、か……」

「あら、どうかした？」

「いや。ただ……昔、似たような男と会ったことがあってね」

今、あの男は何をしているだろうか。

掴み所のない彼のことから、これから会う情報屋のように、またどこかで暢気に酒でも飲んでいるかもしれない。

それとも、或いはその情報屋が――――。

「……………まさか、な」

ありもしないことだと、エルトは思考を切り替える。

が、エルトはすぐに思い知るだろう。

一見広く思える世間の、意外な程の狭さを。

カランカラン、と音を立て、酒場の扉が開かれる。

カウンターで客の食べた料理の皿を拭いていたマスターがそれに気づき、ほう、と呟きを漏らした。

「ジェントラルの旦那、いつもご贔屓に」

「ディオはいるか？」

「ああ、奴ですかい。奴なら、いつものところで飲んでますよ」

マスターがそう言って酒場の一角を指差すと、ぼさぼさの黒髪を後頭部で結った男が、ウィスキーらしき酒の入ったグラスを傾けていた。

その姿を見て、カガミチが返事もそこそこにそこへ向かおうとして――。

「エルト？」

不意に、彼へつかつかと歩み寄っていくエルトに、マリサは訝しげな声を上げる。

だが彼はそれにも構わず、男の目の前まで歩いていくと、盛大な溜め息と共に言葉を発した。

「…………ディオニユス。まさかと思えば、やはり貴方か」

「おお、そういうお前さんはエイトじゃないの。生きてて何よりだなあ、うん」

「……………知り合いかしら？」

既に少し酔っているのだろう。

微かに赤くなった顔を笑顔に歪ませて言うディオニュソスの前で腕など組んでいるエルトにマリサが問うと、不本意ながらも、とエルトは再び溜め息をついた。

「ポセイドンやアルテミスと同類だ。……………ああ、安心してくれていい。彼は昔から中立だからな」

「……………解ったわ」

エルトの言葉に、マリサはそれ以上何も言わずに大人しく引き下がる。

するとそれにディオニュソスは、くくく、と声を殺して笑った。

「化け物同士のいざござなんかに、俺様は興味ないからねえ。俺様が興味あるのは、美味しい酒と……………その肴になるような笑い話だけさね」

「変わってないな、貴方は」

「そういう青年は、暫く見ない内にまた随分雰囲気変わったじゃない。あれか？ やっぱりゼロの嬢ちゃんが関係してるわけ？」

「まあな。……つと、その話は後だ。情報を買いたい」

「それはまた急なこと。で、どんなのをご所望？」

「この手紙の差出人を知りたい」

ディオニュソスの問いに答えたのはエルトではなく、カガミチだった。

彼の差し出した封筒を手になるほど、とディオニュソスは相槌を打った。

「その程度のことならお安いご用。ちよつと時間はかかるけど、何とか追ってやるよ」

「そうか」

言葉少なく、報酬の札束をテーブルへ放り、カガミチはその場を後にする。

これ以上ここにいても仕方がないか。そう考え、エルトとマリサもまた踵を返そうとした——その時だ。

「なあ、エイト。アンタ……まだ続けるつもり？」

不意に発せられた問いに、エルトは立ち止まる。

それにマリサも同様に歩みを止めたが、彼女に聞かれても問題ないという判断からか、エルトはその問いに答えた。

「それが僕の……責任、だからな」

「けど、あれは仕方なかったんでないの？ 青年はよくやったと思うよ。だからこそ、アダムだって……」

「僕はっ!!」

突如、ディオニュソスの言葉を遮られるように放たれた絶叫に、マリサはびくりと身を震わせた。

それに気づき、エルトは苦しみと申し訳なさから顔をしかめ——
——そして、声を落として言った。

「僕は……守れなかった」

「………そうかい」

エルトの漸く絞り出したような答に、ディオニュソスはそれ以上の言葉をついぞ発することなく沈黙する。

2人が去った後の店内。

ディオニュソスの手に握られたグラスの中の氷が解け、カランと音を立てた。

事務所に帰ってきた一行は、持て余した時間をそれぞれ自由に充てた。

カガミチは、過去の資料の整理。マリサのような事例は他にも何件か扱ったことがあるらしく、相関性から犯人像を特定出来ないか調べてみるのだそうだ。マリサ本人は、エリーのドラウプニル整備を手伝っている。

そして、エルトは――――。

「暇だ………」

『そうですね』

事務所のソファで、カガミチがいれてくれたコーヒーを飲みながら暇を持て余していた。

本来であれば彼もカガミチの仕事を手伝うべきなのだろうが、不思議と何をする気も起きなかった。

暇だ、と口にしておきながら、結局はこうして黄昏れるしか、選択肢はなかったのである。

『マスター、お聞きしても宜しいでしょうか？』

「何だ？ 言ってみろ」

と、沈黙に耐え切れなくなるということがデバイスにあるのかは解らないが、不意にバレルがそう切り出す。

『Mr. ディオニュソスは、マスターをエイトと呼称していました。私に登録されている管理者名称はエルトです。変更した方が宜しいでしょうか？』

どうやらこの優秀な相棒は、ディオニュソスが彼をエイトと呼んでいたことが気になったらしい。

エルトはそれに対しふっと笑うと、明滅する愛機のコアをそつと撫でる。

「……いや。お前の主はこれまでもこれからも、エルトⅡクリーバーで間違いないさ」

『そう……なのですか？』

「そうだ。だからお前は、そんなことを気にする必要などない。いいな？」

『……………解りました』

愛機のコアが点滅をやめる。まるで自身を撫でるエルトの手にまどろむように光を失うのと同時に、すぐ横から声がかかった。

「さっきの話の続き……私は、詳しく聞きたいのだけれど？」

「……エリーのところにいたのではなかったのか？」

声の方を向かぬまま、エルトはコーヒーカップを傾ける。

その非礼を意に介すことなく、声の主——マリサは、彼の隣に腰掛けた。

「エイト。彼の言い間違いではないわよね？」

「……昔の呼び名さ」

「あら、否定しないの？」

「しても仕方ないだろう。確信した、という顔をしているぞ？」

悪戯っぽく笑うマリサに苦笑して、エルトは彼女の言葉を認めた。

もう半ば悟っているような気配を纏っていた彼女には、隠しても無駄と早々に理解したのだ。

「それで？ エイトって、一体何のことなのかしら？」

まだエルトの分をいれてからまだ残っていたコーヒーを適当に選別したカップへ注ぎながら、マリサは問う。

エルトはそちらを見ることなく、己のカップから立ち上る湯気が天井近くへ消えていくのを見つめながら、答えた。

「だから言っただろう。昔の呼び名だと」

「本当にそれだけ？」

「……それだけだ」

済まし顔で言うエルトだが、その横顔をじっと見つめるマリサはどこか疑わしげだ。

そして、そのまま数秒経過した後、ただ一言。

「……………嘘ね」

これに驚いたのは、何を隠そうエルトその人だ。

気取られない確かな自信があった。全く、感情を表に出した気などなかったのだ。

それでも、彼女は見抜いた。

それとも自分が余程解りやすかったのかと不安に思案中、マリサはコーヒーを口にして、はぁ、と溜め息を漏らした。

「私、昔から嘘には敏感なのよ。両親が死んでからは特に……………ね」

「君の両親の死？　それが、君のその勘の強さとう関係している？」

マリサの両親が既にこの世にいないのだということにも驚いたが、その話が彼女の勘のよさにどう結び付くのか解らない。

そんな思いで問うた彼の言葉に、マリサの口から語られたことは、この世界の歪みを如実に表していた。

「私の父と母は、管理局員だったわ。所属は武装隊。いつ死んでもおかしくない部署だったけれど、笑いの絶えない円満な家庭だった」話しながら、マリサの表情は綻ぶ。

これまで見たことのない、年相応な彼女の素顔に、エルトは目を奪われていた。

だが――――。

「父と母が生きていた頃は、毎日が楽しかった。……けれど、そんな時も長くは続かなかった」

「……………何があった？」

「ある日突然、父と母は死んだ。死因は、武装隊の任務で犯罪者を追い詰めた際、犯罪者が撃った質量兵器による銃殺よ」

「そんな馬鹿な……………！」

魔導師のバリアジャケットとは、フィールド式の防御魔法である。

展開には当然魔力を使用するため、ただの銃弾で貫通出来る程柔な

つくりはしていない。

防御を得手としない魔導師のそれですら、である。

武装隊の任務の際————それも、敵が武器を持ち出しかねない緊張の中にあるのであれば、当然バリアジャケットは展開しているはず。故に、ただの銃弾一発で魔導師が倒れるなど有り得ない。

「幼かった私には、すぐにはそれが解らなかった。でも、大きくなって、訓練校に入って……私は、その異常性に気付いたの」

「それで……それを理解して、君はどうした？」

「当時現役の執務官として活躍していたカガミチの力を借りて、真実を突き止めようと足掻いたわ。そしてある日、銃殺は犯罪者が放った質量兵器ではなく、他の局員が誤って放った殺傷設定の魔力弾に因るものであったことを突き止めたのよ」

「……揉み消されたのだな。事実を」

管理局員が管理局員を射殺。

そのような事実が社会に知れば、管理局の権威が堕ちることは確実。

大方、そう考えた管理局上層部の中で事情を知る一部の人間が、『ネティアス夫妻は犯罪者に撃たれ殉職した』と、事実を振曲げたのだろう。

正しく、自らにとって臭いものに、蓋をして見えなくしてしまった

のである。

「それが、君が管理局を信用しない理由か」

「最初は私も、管理局から離れようとした。でも……私の正義を貫くには、力が要る。情報もね。訓練校を出た私はドラウプニルを得、己の正義に従って行動を続けたわ。……傍目には、命令に背き続けるじゃじゃ馬にしか見えていなかったでしょうけど、私は後悔していない」

はっきりと言い切るマリサの目には、彼女自身の言葉どおり、迷いの色はない。

そんな真剣な眼差しを不意に崩したマリサは、目を伏せてふっと笑った。

「ごめんなさい。余計な話をしてしまったわね」

「いや……」

「私は私の正義を貫くことに決めた。だから、誰かが嘘をついているとすぐに解ってしまうの。嘘は、相手を欺くだけじゃない。時には己すら……偽ってしまうものだから」

だから、と言葉を切って、マリサはエルトへ向き直った。

真っ直ぐな双眸が、エルトを正面から射抜く。

「だから、貴方の嘘も解った。でも、貴方の想いまでは解らない。嘘をつくな、とは言わないけれど、貴方の想いを偽ることだけはし

ないで」

「僕の想い、か……………」

マリサの言葉が、確かにエルトの中へ染み渡っていく。

ゼロの思想と己の想いとの間で揺れていたエルト。

そう簡単に片付けられる問題でないことは、変わらない事実。

しかしその一言が、エルトの中へ小さくも波紋を生み出したことは間違いないだろう。

少し気が楽になったことに内心でエルトが彼女へ感謝していると、不意に部屋のドアが開いた。

「ディオから連絡があった。犯人が特定出来たそうだ」

「こっちも終わったよー♪」

資料室のドアから姿を現したカガミチに続いて、デバイスルームから顔を出したエリーの手には、整備が完了し————心なしかどこことなく輝いて見えるドラウプニルが握られている。

「行きましようか」

「……………ああ」

もうすっかりいつもの調子に戻り、立ち上がったマリサに、エルトはしっかりと頷いた。

女は、決して凡才ではなかった。

ただ、運が悪かったという他にない。不運にも八神はやての目に留まったのが『彼女』であり、不運にも女が選ばれなかった。

全く、不運であったという他なかったのだ。

「彼女さえ、いなければっ………！」

表情を憎悪に歪めた女が身に纏うは、ブラウンの色をした制服。

管理局女性局員が纏う、本来なら正義を求める者の証であるべきそれは、彼女には酷く不釣り合いに見えた。

「私は認めない。あんな女が……任務を任務とも思っていないあんな女が、私の道を……!」

憎しみを隠そうともせず、管理局員が利用する寮の一室で、女は金髪の美しい美人が写った写真へアイスピックを突き立て――。

『へえ……それが、貴女が私を憎む理由かしら。ねえ、ストーカーさん?』

「……ッ!? ど、どこから……!!?」

――不意に聞こえてきた声に部屋を見回し、漸く、窓から入って天井近くからじつとこちらを見下ろす、1つのサーチャーに気が付いた。

「貴女……もうここが!?!」

『優秀な情報屋を知っていたのよ』

ぐっ、と言葉に詰まった女は、傍にあった時計を投げつけ、部屋のドアを勢いよく開け放つ。

時計はサーチャーに当たって互いに大破したが、そんなことも構わずに女は寮の外へ出た。

そこには――。

「あら。漸く顔を見れたわね。お会い出来て嬉しいわ」

「マリサ……!!」

ぴらぴらと、おそらく自分が送りつけたものの1つである便箋を揺らしながら、憎たらしい程不敵な笑みを浮かべたマリサが、真っ直ぐこちらを見上げている。

その周りには見慣れぬ赤髪の青年や初老の男性の姿もあったが、彼女の目に彼らは映っていなかった。

ただ、目の前の憎い女の存在に、目を奪われていたのである。

「どうして……………!？」

「『ここが解ったか』？ その言葉、これを送りつけてきたのが、貴女の仕業という自供ととっても構わないかしら？ ねえ、ラミス？」

言って、マリサは一瞬にして黒衣のバリアジャケットを展開し、ドラウプニルの銃口を女————己の訓練校時代の友へ向けて突き付ける。

エリーの整備によってこれまで以上の輝きを放つ漆黒の銃口が、光の銃弾が放たれるのを今か今かと待ちわびる中、彼女の問いに女が答える前に、マリサの傍らにいたエルトが問いを発した。

「脅迫とは、愚かな真似をする。そんなに憎いか、彼女のことを？」

「……………ええ、憎いわ」

エルトの問いに、ラミスはさして間も置かず、迷わず答を口にした。

「私は、将来を管理局に捧げるために、全力で力を、知識を身に付けた。そのおかげか、訓練校での成績もいいものだった。そして……同じように成績優秀だったマリサとは、友人でもあり……ライバルだったわ」

「そんなお前が何故、こんなものを送り付ける？」

「私は、彼女の力を信頼していたの。これから管理局の正義のために、共に戦っていくものだと思っていた。でも、あろうことかその女は、局の命令に尽く背き始めた！」

彼女の言葉に、その場の誰もが彼女の怒りの訳を理解した。

彼女は、許せなかったのだろう。

己が信奉する管理局。自分と切磋琢磨し、力を、技を磨きあげてきた、ライバルと信じていた友が、何があったか急にその命に背き始めたことが。

「そしてあろうことか、そんなアンタが、今度は機動六課に転属になった。私は耳を疑ったわ。そして憎んだ。どうして貴女なのよ！私は、あんなに局に尽くしてきたのに！貴女とは違うのに！答えてみなさいよマリサ。どうして私じゃなくて、アンタなのっ！？」

まるで癩癩を起こした子供のように、怒りが言葉となって堰きを切る。

しかしマリサはそれに一切取り乱すでもなく――――。

「……………はあ」

呆れたような溜め息だけが、彼女の口から漏れた。

「ラミス。貴女、なんだかいろいろと誤解しているようね？」

「誤解……ですって……？」

「まず、私が機動六課へ選ばれたのは、八神部隊長に実力を買われたから。偶々任務にご一緒する機会があつて、偶々知り合ったから。そうでなければ、書類上は魔導師ランクAであるはずの私が、あの機動六課へ行けるわけがないでしょう？」

確かにそうだ。

本当の実力はともかく、彼女の書類上のランクは、六課へ来るまではAのままだった。

その時々のような脅威に対抗するための部署、それが機動六課である。半端な者を呼ぶような愚を犯すはずもない。

「つまり、貴女が呼ばれなかったのは、貴女の実力が私より劣っていたというわけではない。ただ、運が悪かった……それだけのことよ」

そう、運が悪かった。

マリサがはやと出会っていないければ、もしかすると彼女が呼ばれていた可能性もあった。

しかし————あくまでもそれは、？かもしれない？という仮定

の話だ。

彼女がいかに優秀とはいえ、彼女程の実力の人間が他に全くいないわけではない。いかに万年人手不足の管理局にも、それくらいの人材は多数くいるのだから。

もしはやてがマリサを選ぶことがなかったとしても、彼女が必ず選ばれる保証はどこにもなかったのである。

だがラミスの思考は、そんな単純なことにすら気付かない程に沸騰しかけていた。

「五月蠅い五月蠅い五月蠅いっ！ もういい。どうせ誰も解つてくれない……なら、私が直接、アンタを踏み潰してあげるっ！」

そう激昂し、ラミスは懷から何かを取り出した。

何も描かれていない、白銀の色をした石。

一見なんの変哲もない石のように見えるが、それを見たエルトの表情が変わった。

「まさか、それは………!?!」

「エルト？」

エルトの焦りに感じたマリサが、石の正体を問おうとして――

――答は、実際にラミスがその力を解放することによって示された。

彼女の胸元へ、石が光を発しながら消えていく。

そして——その全てが彼女の身体の中へ消えると、光に包まれていく彼女の姿が、みるみる内に醜い巨軀へ変貌していった。

小さな寮の建物など、丸々覆い尽くしてしまう程の怪物。背中からはコウモリのような翼が生え、堅い純白の鱗が体表を覆い隠す。

異形の姿への変身を遂げたラミスの腕が降りおろされ、エルト達は後方へ跳躍してそれを躲した。

「何が起こっている………!?!」

「エルト。何か知っているの?」

怪訝そうに巨軀を見上げるカガミチの隣で問うマリサに、エルトは苦々しい想いを感じながら答えた。

「あれは、先程彼女が持っていた石の力によるものだ。人の願いを歪んだ形へ増幅し、それを叶えさせようとする」

「それって………!」

「………以前管理外世界であった、ジュエルシード事件に似ているな」

人の心の闇を暴走させる、という点では、ジュエルシードよりも質が悪い。

歪んだ形で願いを叶える、というわけではなく、使用者を歪んだ感情へ導くのだ。どのような人間であれ、必ず負の感情というものは持っている。

それが増幅されれば――――最終的に待ち受けているのは、破滅。

「何としても止めねばならない。このままでは、彼女も危険だ!」

「どうすればいいの?」

「何、簡単なことだ。石の許容量以上の魔力ダメージを与え、ノックアウトしてやればいい」

「……………解り易くていいことね」

つまり、結局は力づく。

予想していたよりあまりに短絡的な解決方法に、マリサは思わず頭を抱えてしまったが、再び振り降ろされた異形の腕に、思考を中断して跳び退った。

「……………要は、倒せばいいんでしょう?」

「そのとおりだ。……………起きろ、バレル!」

『了解、セットアップ』

一瞬にして、マリサとは幾分造形の違う黒衣を身に纏うと、エルトはバレルでラミスを狙った。

紅蓮の魔力弾がラミスの体軀へ着弾するが、彼女が見るからにダメージを負った形跡はない。

お返しに振るわれた尾が鞭のようにしなりエルトを襲い、それをド

ーム状のフィールドバリアで防ぎつつ、エルトは舌打ちした。

「硬いな……………」

「なら……………これでどうだ？」

エルトが声の方を振り向くと、同時に彼の鼻先を巨大な魔力弾が駆け抜けていく。

それは真っ直ぐにラミスの巨軀へ直撃し————直後、黒煙が吹き上げた。

エルトが改めて声と魔力弾の主を振り返ると、バリアジャケットを展開したカガミチが、大きな黒塗りのバズーカを軽々と左手1つで肩に担ぎながら、油断なくラミスへ視線を送っていた。

「何て滅茶苦茶な威力だ……………」

「けど、確実に効いてはいるみたいね」

エルトはボーイの驚異的威力に思わず目を瞠るが、マリサの言うとおり、魔力弾に被弾した部分が焼け焦げ、鱗の一部が吹き飛んでいた。

これならばいけるかもしれない。そう考えていた一同の前で、ラミスが大きく咆哮する。

もはや、人間だった頃の美しい容貌は見ると影もない。

吼え猛る姿はまさしく魔獣のもので、エルトには、彼女の醜い憎悪と怒りを体現しているように見えた。

「哀れな……………」

その姿を見て、カガミチはただそれだけを呟いた。

表情に浮かぶは、悲哀。

一体この娘はどれほどの闇を抱えてここまで来たのだろう。そんな哀れみの視線をもって、カガミチはボーイを構えた。

バズーカを発射する。

通常よりも一回りも二回りも大きな魔力弾が、今度は彼女の腹で爆発を起こす。

そこは、他の部分より若干鱗が少ない部位だった。

迅速に、彼女への負担や周りへの被害が大きくなる前に終わらせる、そのための策。

余計な壁を排除したカガミチは、役目は終えたとばかりに道を譲った。

その後方にいるのは————マリサ。

隣ではエルトがビットを飛ばし、ホールディングネットでラミスの身体を拘束する。

瞬間、ラミスが大きく暴れて、ホールディングネットがみしみしと悲鳴を上げた。

「ぐっ、なんという力だ……………！」

ビットを制御しているエルトが、衝撃のフィードバックに呻く。

おそらく並の魔導師では、到底抑えきれない程の膂力。それほどの力が、異形と化した今の彼女には宿っていたのだ。

魔力の網の中を必死に藻掻く変わり果てた友の姿を見つめ、マリサはドラウプニルを構えた。

急速に集束していく魔力。力の副作用か、ラミスから駄々漏れになっていた魔力の欠片を残らず吸い上げ、漆黒の双銃の銃口へ魔力球が形作られていく。

「これが私の切り札、集束砲。まさかこれを貴方に撃ち込むことになるとは思わなかったけれど……」

言いながらも、尚も集束を続けるドラウプニルの銃口には、大きな魔力球が1つ、着実に魔力を吸収して大きくなっていく。

マリサが現行で使える最強の攻撃魔法、ブラスト・スパーク。

見てのとおり集束にはそれなりの時間を要するためタイマンには不向きだが、なのはのスターライト・ブレイカーと同等の威力を持っているながら、マリサの意思によって敵をどこまでも追尾し続ける。

そろそろエルトのホールディングネットが、暴れるラミスの力に耐え切れなくなってきた頃、漸くその凶悪な砲撃の集束が完了した。

「ドラウプニル、衝撃緩和」

『了解。加えて射角補正10°、ターゲット……ロックオン!』

マリサの眼前にスコープが出現して、ラミスの腹部、ちょうど先程カガミチが作った鱗の鎧の穴に、ターゲットサイトが重なった。

準備は整った。

後は――――。

「ファイア!」

『ファイア!』

――――引き金を引くだけ!

解き放たれた集束砲は、寸分変わらずラミスの腹部に直撃し、魔力のダメージが彼女の体躯を貫く。

凄まじき紫電の嵐に、彼女の体内にあった白銀の結晶体は、粉々に砕け散っていった――――。

「ここ、は……………」

何人もの人間が走り回る喧騒の最中、ラミスは静かに目を覚ました。身を起そうとするが、身体中に激痛が走る。その痛みに顔を顰めていると、彼女の傍に座っていた女が、目を瞑ったまま問いかけた。

「……………起きた？」

「ま、マリサ……………どうしてここに？」

「貴女、何も覚えていないの？」

驚いた様子のラミスへ問うマリサの言葉に、ラミスは無言で首を横へ振る。

その後、彼女は話した。

怪しげな男に、不思議な石を渡されたこと。そして、その後数日間の記憶がないことを。

「じゃあ貴女、何も覚えていないの？ 私に脅迫文を送ったことも……………化け物に変身して、私に襲いかかったことも」

「わ、私がそんなことを!?!」

「残念だけど、事実よ」

言って、マリサは脅迫文をラミスへ手渡した。

それを見た彼女の表情が、さっと青ざめていく。

「ご、ごめんなさいマリサ! 私、私………!」

「いいのよ。きっと貴女、悪い夢を見ていたんだわ」

「私、確かにマリサが羨ましかった! ずっと、貴女のように強い人になりたいくて……。機動六課に転属が決まった時だって……。私、こんなことしたいなんて……。!」

「解ってる。解ってるから……。!」

「う……。うわあああああー……。!」

マリサの胸の中で幾度も幾度も謝りながら、ラミスは尚も大声で泣き続ける。

その光景を目の当たりにしていたエルトは、複雑な表情でそれを見ていた。

とても、喜ぶ気になどなれない。

彼女へ深い傷を負わせた、あの銀の色をした石。

あれは、紛れも無く……。!。

「ゼロ…………やはり、君は……」

己の無力を嘆くかのように、エルトは拳を強く握り締めた。

「そか。うん…………うん、了解や。じゃあ残りの後処理は現地の局員に引き継いでもろて。うん、うん……………気を付けてな。それじゃ」

一方、六課の部隊長室で相変わらず事務仕事に追われていたはやては、夕焼けに包まれる部屋の中で、マリサの報告を受けていた。

背後のエルトへ振り返る彼女の姿を最後にモニターは消え、代わりにオレンジ色に染められた、元は白いはずの天井が姿を現す。

「……………人を襲う化けもんの次は、今度は人を化けもんに変える不

思議な石……。一体このミッドチルダで、何が起こってるんや……！？」

やるべきことは減るばかりか、次々と厄介なことが六課の前に立ちふさがる。

一体、どうすることが一番ベストな方法なのか。

それも解らず、ただ闇雲に走り続けるしかないこの状況がどうしようもなく歯痒く思えて————はやては1人、目を伏せた。

Episode 12 私の正義、貴方の思い／後編（後書き）

く神の黄昏く

神崎「どうも、読者の皆様、明けましておめでとうございます。神崎です」

マリサ「マリサよ」

神崎「まずは、前回最後にちょこつと言った予告どおりにならなかったことをお詫び申し上げます」

マリサ「ああ、あの『シリアスにはならない』っていう、アレね」

神崎「思いつきりシリアスじゃないか、これ……………どうしよう、何より一番神崎自身が予想外な事態なんだけど（汗）」

マリサ「そんなの知らないわよ……………（溜め息）」

神崎「最初は、コメディ一色になる予定だったんですけどね……………。どうにも君が絡むとコメディにしづらくて」

マリサ「あら、私のせいかしら？」

神崎「そんなこんなで、入れたいシーンを入れていたらいつの間にかそれだけで綺麗に纏まってしまって崩すに崩せなくなってしまったので、今回はこんな感じに纏まりました。コメディというか、ギャグを期待されていた皆様、ごめんなさい」

マリサ「もうどうでもいいでしょう、そんなの……。で、次回はどんな話になるのかしら？」

神崎「今回は、再びリオスに視点を戻してのほのぼの、時々シリアスな回の予定です。皆大好き、霸王っ娘も出たり、Vividのキヤラも出たりする予定なので、どうかお楽しみに。もしかしたらその前にコラボを挟むかもしれませんが、その時はそちらも宜しくお願い致します」

マリサ「なるほどね」

神崎「そんなわけで次回は！ 『ビジーバケーション／前編』」

マリサ「無限の力、その身に宿せ」

あ

中盤戦にて早くも泥沼の様相を呈し始めていたリアル人生ゲームも、いよいよ終盤戦に突入しようとしていた。

順位は、フェイト&エルトチームが1位。あれほど優遇されれば、やはりというか、当然の結果と言えよう。

まだゴールはしていないが、それでもこのままいけば順当に一位に名前を刻むことは間違いないだろう。

2位はティアナ。生々しい社会の暗黒面を見せつけられながら、さすがそこはルーキーとはいえ執務官といったところか、耐えきった上で着々と財産を稼ぎながら順当に進んでいた。

さて、ここまではいい。前回までも、彼女らは順調にゲームを進めていた面々だからだ。

リオス「えーい……………」

すっかり戦意を喪失した力ない掛け声で、リオスはサイコロを振った。

格好は、1回目のメイド服に戻っている。どうやら、サイコロの各面に書かれている数字とコスチュームに変化はないらしい。

出た目は5。2位のティアナとは1マス差で、財産もそれなりには

ある。まだまだ十分、上位を狙える位置だろうが、彼の戦意自体がそもそも限界だった。

とぼとぼと5マス前に進み、諦観を含んだ目で、収入と次のコスプレを決めるサイコロを振る。

『10×6万。バニーガールヘチエンジ』

「ガールじゃないもん、ボーイだもん………！。(。Д。)」。

「「「「うわぁ………」」」」」

普段の明るい様子はどこへやら、ついに涙腺が決壊してしまったリオス。

これにはなのはとティアナも何だか気の毒に思えてきて、他の4人と共に思わず声を漏らしてしまった。

エルトだけは、やれやれ、という様子で溜め息などついていたが。

エルト「ほら、早く進めるぞ。早く終わらせたいなら、早く振ってしまえばいいだ」

リオス「そ、そうだよね！　じゃあティアナ、次宜しくっ！」

ティアナ「一気に元気になったわね……。まあ、いいか。じゃあ

「ご要望どおり、さっさと振るとしましょうか」

現れたサイコロを、何の躊躇いもなく振るティアナ。彼女もリオスの様子には若干の罪悪感を感じていたため、彼のことを汲み取った故の行動だろう。

出た目は3。先頭に行くフェイトとエルトには追いつかないが、これで彼女もゴールが眼前にまで迫ってきた。

「さて、指令は——」

ゴールが見えたことで若干余裕が出てきたのか、意気揚々としたティアナへ、指令の表示されたモニターが映し出され——

「……………うゝっ」

瞬間、ティアナはまるで金縛りに遭ったかのように硬直した。

「何々、何が……………って、うわぁ……………」

興味津々にモニターを覗き込んだリオスが、思わず固まってしまう、その指令の内容とは——。

『3分間、4位のプレイヤーの攻撃に耐える。出来ればゴール、出来なければ3マス戻り、60万没収』

ここへ来て、人生とは全く関係ないマスの登場に全員の顔が引き攣った。

しかも攻撃とは——このゲーム、一般向けにも発売されていたはずだが、その場合は一体どうやって処理するつもりなのだろうか。

しかも最悪なことに、この時リオスの後ろで4位につけているのが——。

なのは「……………あ、4位って私だ」

——この方だったのだから、ティアナの心境は語るに及ばないだろう。

ティアナ「あ、あの……………なのはさん？　どうしてデバイスをセットアップされているのでしょうか？」

なのは「え、だってこうしないと攻撃できないでしょ？」

ティアナ「だ、だとしても、その魔力球の数は明らかに多過ぎというか、なんというか……………」

一瞬にしてレイジングハートをセットアップしたなのはに、ティアナは引き攣った顔のまま数歩後ずさった。

それに対して、なのははレイジングハートを構えながらじりじりと前身する。

なのは「大丈夫大丈夫。痛いことなんて何もないから、安心してい

いよ？」

ティアナ「ちっとも安心できないですってば！」

フェイト「な、なのは……もしかして、怒ってる？」

なのは「えー、そんなことないよー？ さっきからティアナばかりリオス君の近くで羨ましいとか、最近はティアナルートなんていうものも始まって、私との絡みもなくなってきて内心妬ましいなんて、これっぽっちも思っていないよー♪（ニッコリ）」

一同（思ってるんだ……）

なんとも解りやすいなのはの怒りように、震えているティアナ以外の一同の思考が偶然にもシンクロした瞬間だった。

不遇な扱いを受けていたリオスはやてでさえ、その時ばかりはそれをも忘れて心の中でツツコミを入れる。

が、ティアナは到底それどころではなかった。

なのは「さあ、ティアナ……ちよつと頭、冷やそうか？（ニコッ）」

ティアナ「い、いやああああー……！？」

はやて「あ、哀れな……」

少し遠くの方から聞こえてきた爆音に、思わずはやてですらも合掌してしまう。

次々と降り注ぐピンクの球体なるべく見ないようにしながら、ティアナの次、フェイトはサイコロを振った。

もうフェイトと、結婚イベントで共にマスを進んでいるエルトの2人はゴールを目前に捉えている。

財産も潤沢。これならば、順当に一位になれるだろう。

出現したサイコロを、真っ赤になりながらエルトと共に投げる。

出た目は6。ゴールだ。

フェイト「やった、エルト！　ゴールだよ、ゴール！」

エルト「ああ、やったな」

はやて「そういう調子で、本編でもゴールインできればええなあ（ニヤニヤ）」

フェイト「は、はやては黙ってて！」

もはやいい成績を残すことは諦めて、弄りに入ろうということなのか、ニヤニヤと笑いかけながら言うはやてに、フェイトは焦りを隠そうともしないでそう返す。

フェイトのヒロインの座も、今やソフィアというたった1人の決して無視できない人気によって、徐々に危うくなりつつある。彼女自身、若干の危機感を感じているのだろう。

なのは「でも、フェイトちゃんもエルト君も、ここまで殆ど順調に
来たよね」

はやて「せやなあ。ここまで優遇されとると、いつそ清々しく思え
てくるわ」

リオス「はやての不遇も納得だよね」

スバル「ねー」

リイン「ですです」

はやて「ちょ、それはちょっと認めるわけにはいかへんのやけど！
？」

エルトとフェイトの優遇されぶりに納得する一方で、自身の不遇ま
で納得されては立場がない。

しかし、自らの相棒は元より、誰もこの場に彼女をフォローする役
目の人物が1人もいないという事実が何よりも彼女の涙を誘う。

リオス「で、でもでも！ 次ははやての番だよ。まだゴールしてい
ない人はたくさんいるんだし、ここから挽回すればいいじゃない！」

はやて「せ、せやな！ よし、ここで1発、ドカーンとやったるで
！」

リオスの言葉に、未だに涙目ながら意気込みを露にしたはやては、
半ばやけくそになりながらサイコロを振った。

出た目は————6。

はやて「6か……いち、にい……」

先程6が出てもマスが必ずしもいいとは限らないことを思い知った
はやては、6といういい目が出たにも関わらず一喜一憂はしない。
否、むしろ前回のトラウマがあつてか、「またどうせ」という諦観
が強くて出ていた。

はやて「ろーく、と。さて、それじゃあ指令は……」

『下克上マス』

フェイト「下克上マス？」

エルト「何だ、それは？」

リオス「えーと……『このマスに止まったプレイヤーは、サイコロ
を1度振ってもよい。そうした場合、6が出ればトップとステータ
スを入れ替える。それ以外が出たら最初に戻り、財産を全て没収す
る』……だって」

はやて「おおおおお！」

つまり、6が出れば、今ゴールしているフェイト&エルトの2人と、
位置も財産も全て入れ替わり、一発逆転。しかしそれ以外なら、こ

これまでの苦勞が一発で全て水の泡となってしまう。

当たれば天国、外れれば地獄。なんとも解りやすい大博打だ。

はやて「これや……人生、こんな大一番があつてこそその人生や！
私はやるで！」

そう言つてはやては、迷わずにサイコロを手にとつた。

一方のエルトとフェイトは、その様子を固唾を吞んで見守っていた。
何せ、自分達のゲームにも関わってくる大事な一発だ。だがこれまでははやての境遇が境遇なため、勝たせてあげたい気にならないこともない。

そんな複雑な心境の中、はやての手がついにサイコロを放った。

「でえりやあああああああつ！」

———そんな、奇妙な掛け声と共に。

サイコロは宙に綺麗な放物線を描きながら、ゲーム空間の地面を転がる。

そして、上を向いた目は———6！

はやて「いよっしやあああああああ！」

傍目からも、たかが人生ゲーム如きでそこまで———と若干引いてしまふような程豪快なガッツポーズをするはやて。

しかし――――。

はやて以外の一同「あ」

はやて「ふふふ………フェイトちゃん、エルト君。その1位の座、今こそ明け渡してもらおうで！」

エルト「………あー………」

フェイト「はやて………あの、すっごく言いづらいんだけど………」

はやて「え？」

勝ち誇ったようなはやてとは対照的に、自分と立ち位置が完全に入れ替わるはずのエルトとフェイトはどこか別の意味で居心地悪そうな態度。

予想外の反応をする2人が指し示した方を、はやては恐る恐る目で追った。

その先にあったのは、先程はやてが振ったサイコロ。それはいい。問題はそれが指し示す目だ。

上を向いている目。それは――――。

はやて「5………やと………!?!」

そう、6ではなく、5だったのである。

だが、当然そこで、全てを見ていなかったはやての頭には疑問符が浮かぶ。

しかし彼女が問おうとする前に、言いづらそうにしていた中からリオスがそれを答えた。

リオス「えっとね、さっきはやてが叫んだ時、まだサイコロがフラフラしてたんだ。で、はやてが叫んだ拍子に転んで、6から5になったわけ」

はやて「なん……………やと……………!?!」

つまり、完全に自業自得である。

しかし、ここまで運に見放された彼女を笑える者は、もはや誰もいない。

ただ、なんとも言えない気まずさだけが、その場の空気を支配していた。

そして……………?その時?は訪れる。

はやての足元に魔法陣が展開される。それが何を表しているのか————解らない者はこの場にいなかった。

はやて「ちょ、待っ……………」

バシユンッ!

一同「……………」

一言も発することすら許されず、スタート地点へ送られたはやての姿を見送った一同を、何とも気まずい沈黙が支配する。

なんというか、最後まで哀れ過ぎる顛末に、それぞれが出した答えは――――。

リオス「……………さて、次は誰だったっけ？」

ティアナ「次はなのはさんね」

スバル「あ、ティア無事だったんだ」

ティアナ「死ぬかと思ったけど、おかげさまでね……………」

なのは「じゃあ、次私振るね。よし、頑張ってゴールするよー！」

フェイト「頑張って、なのは！」

エルト「リオスもな」

リオス「うう……………ハヤクモトニモドリターイ」

―――無視だった。

まるで何事もなかったかのようにプレイを続けた彼らの後に、はやてがゴールすることが出来たのは、それからたっぷり3時間も後だったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0688p/>

新魔法戦記リリカルAngels ～The Rule of Gods～

2012年1月9日19時50分発行